静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第143集

吉峠遺跡
水掛渡D古墳群
坂口千頭ヶ谷古墳
御陣場古墳
権現様御陣場遺跡

（静岡空港関連遺跡　A・B・D地点）

平成11～13年度　静岡空港県単独空港整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００３

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第143集

吉峠遺跡
水掛渡D古墳群
坂口千頭ヶ谷古墳
御陣場古墳
権現様御陣場遺跡

（静岡空港関連遺跡　A・B・D地点）

平成11～13年度　静岡空港県単独空港整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

南アルプスに源を発した大井川は、駿河湾を目指して静岡県の中央を南流する。峻険な山峡で気ままに蛇行をくりかえした大井川は、その沖積平野に至って、大きく向きを東に変える。流路を変えさせたのは右岸に広がる緑なす牧ノ原台地である。牧ノ原台地は幾筋もの支脈に分岐し、その一つに島田市と榛原郡榛原町の境となる丘陵がある。ここに、吉峠遺跡・水掛渡D古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・権現様御陣場遺跡・御陣場古墳が所在する。これらの遺跡は四周を眺望でき、時代の移り変わりを静かに見続けてきたのであろう。

このたび、この地に静岡空港の建設が予定され、その周辺整備事業の一環として平成９年度から埋蔵文化財の調査が行われることになった。上記の５遺跡は平成11年度から平成13年度に調査を実施し、その眠りから目覚めることになった。

調査の結果、縄文時代早期から中世に至るまでの遺構や遺物の存在が明らかとなり、この地が古くから人々の生活の場であったことがうかがえる。中でも、目を引くのは、14基の古墳を検出した水掛渡D古墳群である。水掛渡古墳群では1960年代にA群とB群が調査され、静岡県における群集墳研究の契機となった古墳群である。

今回の調査では、周溝と墓道によって各古墳が有機的に結びつけられることが判明した。古墳群の構成を考えさせる資料であるとともに、結びつけられる古墳間の被葬者の関係が想起される。また、この古墳群からは当地域の古代史解明に欠くことができない竹林寺廃寺を眼下に垣間見ることができる。古墳からのびる墓道は、あたかもこの寺院へと続くがごとく斜面を下り、古墳の被葬者集団と竹林寺廃寺には関係があったのではないかと偲ばれる。一連の調査で得たこれらの成果が、当地の歴史像解明の大きな手がかりとなることを切望する次第である。

終わりに、調査並びに資料整理に御援助、御協力下さった静岡空港建設事務所をはじめとする関係諸機関に感謝申し上げるとともに、現地調査と整理作業に従事した作業員の労をねぎらいたい。

平成15年12月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1　本書は島田市船木字吉峠3526-13他・榛原郡榛原町坂口字千頭ヶ谷212-1他に所在する吉峠遺跡、島田市船木字吉峠3536-13他に所在する水掛渡Ｄ古墳群、榛原郡榛原町坂口字千頭ヶ谷3656他に所在する坂口千頭ヶ谷古墳、榛原郡榛原町坂口字ケカヤ3330に所在する御陣場古墳、島田市湯日字陣屋山119-1他・榛原郡榛原町坂口字ケカヤ785-2他に所在する権現様御陣場遺跡に関する発掘調査報告書である。

2　本書は、静岡空港県単独空港整備に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡空港建設事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成11年７月から平成14年３月まで現地調査を実施し、平成14年４月から平成15年９月まで資料整理を行った。

3　本書で扱う遺跡は静岡空港建設予定地内の遺跡である。建設予定地内の遺跡にはそれぞれ地点名がつけられている。吉峠遺跡はＡ地点、水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳はＢ地点、権現様御陣場遺跡と御陣場古墳はＤ地点にあたる。

なお、静岡空港関連遺跡に関する発掘調査報告書は本書が第３冊目である。第１冊目が平成10年度に刊行した『水掛渡Ｃ古墳群（空港関連遺跡Ｃ地点）』、第２冊目が平成14年度に刊行した『星久保古墳群（静岡空港横断道路榛原地区）』である。

4　調査体制は次のとおりである。

平成11年度

所長　斎藤　忠　　副所長　山下　晃　　常務理事兼総務部長　伊藤友雄
総務課長　杉木敏雄　　総務係長　田中雅代
調査研究部長　佐藤達雄　　調査研究部次長　佐野五十三　　調査研究二課長　遠藤喜和
調査研究員　稲垣聖二（12月まで）、菊池吉修

平成12年度

所長　斎藤　忠　　副所長　山下　晃　　常務理事兼総務部長　伊藤友雄
総務課長　杉木敏雄　　総務係長　田中雅代
調査研究部長　佐藤達雄　　調査研究部次長　及川　司　　調査研究二課長　篠原修二
調査研究員　稲垣聖二、勝又直人（６月まで）、菊池吉修

平成13年度

所長　斎藤　忠　　副所長　山下　晃　　常務理事兼総務部長　粂田徳幸
総務課長　本杉昭一　　総務係長　山本広子
調査研究部長　佐藤達雄　　調査研究部次長　栗野克巳、及川　司　　調査研究二課長　篠原修二
調査研究員　児玉　卓（６月まで）、山本剛史、勝又直人（６月まで）、菊池吉修

平成14年度

所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫　　常務理事兼総務部長　粂田徳幸
総務課長　本杉昭一　　副主任　鈴木訓生
調査研究部長　山本昇平　　調査研究部次長　栗野克巳、佐野五十三
調査研究三課長　篠原修二　　調査研究員　菊池吉修

平成15年度

所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫　　常務理事兼総務部長　粂田徳幸

総務部次長兼総務課長　鎌田英巳　　会計係長　野島尚紀

調査研究部長　山本昇平　　調査研究部次長兼資料課長　栗野克巳　　調査研究員　菊池吉修

5　本書は調査にあたった職員の所見をもとに、調査研究員　菊池吉修が執筆した。

6　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構実測図作成の一部は株式会社フジヤマに委託した。なお、平成11年度の調査補助業務、平成12年度の調査補助業務およびトレンチ配置図作成も併せて委託した。

7　現地測量では日本測地系（旧測地系）を使用した。本書の実測図もこれに基づく。

8　整理作業における石器実測の一部は株式会社フジヤマに委託した。

9　遺物写真撮影は当研究所写真室担当職員が行った。金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室長西尾太加二が実施した。

10　現地調査では加藤芳朗氏に御教授いただいた。

11　遺物実測図、遺構図の縮尺はそれぞれの図に明記した。

12　本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

ＳＢ　竪穴住居跡　　ＳＤ　溝　　ＳＦ　土坑　　ＳＰ　小穴

13　本書で扱う遺物に関しては、遺跡や種別にかかわりなく連番を付した。また、挿図における番号と図版に示した番号は同一である。

14　土層及び土器の色調は、新版『標準土色帳』農林水産技術会議事務局監修1992に準拠した。

15　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

16　発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

目　次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法 …… 2
第３節　調査の経過 …… 4

第２章　遺跡の環境
第１節　地理的・歴史的環境 …… 8
第２節　基本層序 …… 13

第３章　吉峠遺跡
第１節　調査の概要 …… 14
第２節　調査の成果 …… 15
第３節　吉峠遺跡のまとめ …… 30

第４章　水掛渡Ｄ古墳群
第１節　調査の概要 …… 32
第２節　古墳時代 …… 34
第３節　その他の遺構・遺物 …… 99
第４節　水掛渡Ｄ古墳群のまとめ …… 106

第５章　坂口千頭ヶ谷古墳
第１節　概要 …… 107
第２節　調査の成果 …… 108
第３節　坂口千頭ヶ谷古墳のまとめ …… 111

第６章　御陣場古墳・権現様御陣場遺跡
第１節　概要 …… 112
第２節　御陣場古墳 …… 114
第３節　権現様御陣場遺跡 …… 124
第４節　御陣場古墳・
権現様御陣場遺跡のまとめ …… 128

第７章　まとめ …… 129

挿図目次

図１　静岡空港関連遺跡群位置図 …… 1
図２　Ａ・Ｂ・Ｄ地点位置図 …… 2
図３　遺跡と周辺の地形 …… 8
図４　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 …… 10
図５　基本土層柱状図 …… 13
図６　Ａ地点確認調査トレンチ設定図 …… 14
図７　吉峠遺跡　本調査対象地 …… 15
図８　吉峠遺跡１区全体図 …… 16
図９　１区の出土遺物 …… 16
図10　吉峠遺跡２区全体図 …… 17
図11　２区　ＳＦ－１実測図 …… 18
図12　３区　ＳＦ－１実測図 …… 18
図13　吉峠遺跡３区全体図 …… 19
図14　吉峠遺跡４区全体図 …… 20
図15　吉峠遺跡５区全体図 …… 21
図16　吉峠遺跡６区全体図 …… 22
図17　７区　ＳＦ－１実測図 …… 23
図18　７区　ＳＦ－２実測図 …… 23
図19　吉峠遺跡７区全体図 …… 24
図20　７区　ＳＢ－１実測図 …… 25
図21　７区　ＳＤ－１断面図 …… 25
図22　吉峠遺跡８区全体図 …… 26
図23　吉峠遺跡９区全体図 …… 27
図24　８区　ＳＦ－１実測図 …… 28
図25　９区　ＳＦ－１実測図 …… 28
図26　確認調査時の遺物出土地点 …… 28
図27　吉峠遺跡出土遺物１ …… 29
図28　吉峠遺跡出土遺物２ …… 29
図29　Ｂ地点確認トレンチの設定状況と水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳の位置 …… 32
図30　水掛渡Ｄ古墳群全体図 …… 33
図31　水掛渡Ｄ１号墳墳丘図 …… 35
図32　水掛渡Ｄ１号墳石室展開図 …… 36
図33　１号墳の遺物出土状況と掘り方 …… 37
図34　水掛渡Ｄ１号墳出土遺物 …… 37
図35　水掛渡Ｄ２号墳墳丘図 …… 38
図36　水掛渡Ｄ２号墳石室展開図 …… 39
図37　２号墳の遺物出土状況 …… 40
図38　２号墳の出土遺物 …… 40
図39　水掛渡Ｄ３号墳墳丘図 …… 41
図40　水掛渡Ｄ３号墳石室展開図 …… 42
図41　水掛渡Ｄ３号墳の墓道実測図 …… 42
図42　３号墳石室横断面図 …… 43
図43　３号墳の遺物出土状況 …… 43
図44　３号墳出土の須恵器 …… 44
図45　３号墳出土の鉄器 …… 44
図46　水掛渡Ｄ４号墳墳丘図 …… 46
図47　水掛渡Ｄ４号墳石室掘り方 …… 47
図48　４号墳周溝の遺物出土状況 …… 48
図49　４号墳の出土遺物 …… 49
図50　水掛渡Ｄ５号墳墳丘図 …… 51
図51　水掛渡Ｄ５号墳石室展開図 …… 52
図52　５号墳の出土遺物 …… 53
図53　水掛渡Ｄ６号墳墳丘図 …… 55
図54　水掛渡Ｄ６号墳石室展開図 …… 56
図55　６号墳閉塞石の状況 …… 57
図56　６号墳石室の遺物出土状況 …… 57
図57　６号墳周溝の遺物出土状況 …… 57
図58　６号墳の出土遺物 …… 58
図59　水掛渡Ｄ７号墳墳丘図 …… 61
図60　水掛渡Ｄ７号墳石室展開図（閉塞石除去前） …… 62
図61　水掛渡Ｄ７号墳石室展開図（閉塞石除去後） …… 63
図62　７号墳石室の掘り方 …… 64
図63　７号墳の出土遺物 …… 65
図64　水掛渡Ｄ８号墳墳丘図 …… 66
図65　水掛渡Ｄ８号墳石室展開図 …… 67
図66　８号墳の遺物出土状況 …… 68
図67　８号墳の出土遺物 …… 69
図68　水掛渡Ｄ９号墳墳丘図 …… 71
図69　水掛渡Ｄ９号墳石室展開図 …… 72
図70　９号墳石室床面（第２面・第３面） …… 73

図71　９号墳の遺物出土状況と
石室の掘り方 …… 74
図72　９号墳石室内の出土遺物 …… 74
図73　９号墳周溝の出土遺物 …… 75
図74　水掛渡Ｄ10号墳墳丘図 …… 76
図75　10号墳石室の掘り方 …… 76
図76　水掛渡Ｄ10号墳石室展開図 …… 77
図77　水掛渡Ｄ11号墳墳丘図 …… 78
図78　水掛渡Ｄ11号墳石室展開図 …… 79
図79　11号墳石室の掘り方 …… 80
図80　11号墳の出土遺物 …… 80
図81　水掛渡Ｄ12号墳墳丘図 …… 80
図82　水掛渡Ｄ12号墳石室展開図 …… 81
図83　12号墳石室閉塞状況と
遺物出土状況、掘り方 …… 82
図84　12号墳の出土遺物 …… 83
図85　水掛渡Ｄ13号墳墳丘図 …… 84
図86　水掛渡Ｄ13号墳石室展開図 …… 85
図87　13号墳石室の基底石と掘り方 …… 86
図88　13号墳の出土遺物 …… 86
図89　水掛渡Ｄ14号墳墳丘図 …… 87
図90　水掛渡Ｄ14号墳石室展開図 …… 88
図91　14号墳の遺物出土状況 …… 89
図92　14号墳の出土遺物１ …… 90
図93　14号墳の出土遺物２ …… 91
図94　14号墳の出土遺物３ …… 92
図95　ＳＢ－１実測図 …… 99
図96　ＳＦ－１実測図 …… 100
図97　ＳＦ－２・ＳＦ－３実測図 …… 100
図98　ＳＦ－４・ＳＦ－５実測図 …… 101
図99　水掛渡Ｄ古墳群出土の縄文土器 …… 102
図100　水掛渡Ｄ古墳群出土の石器１ …… 103
図101　水掛渡Ｄ古墳群出土の石器２ …… 104
図102　ＳＦ－６実測図 …… 105
図103　ＳＦ－７実測図 …… 105
図104　坂口千頭ヶ谷古墳位置図 …… 107
図105　坂口千頭ヶ谷古墳地形図 …… 108
図106　坂口千頭ヶ谷古墳石室展開図 …… 109
図107　坂口千頭ヶ谷古墳石室
基底石と掘り方 …… 110
図108　坂口千頭ヶ谷古墳出土遺物 …… 110
図109　Ｄ地点確認トレンチ配置図 …… 112
図110　御陣場古墳・
権現様御陣場遺跡地形図 …… 113
図111　御陣場古墳墳丘図 …… 115
図112　御陣場古墳石室展開図 …… 116
図113　御陣場古墳石室掘り方 …… 117
図114　御陣場古墳石室内遺物出土状況 …… 117
図115　御陣場古墳出土遺物１ …… 119
図116　御陣場古墳出土遺物２ …… 120
図117　ＳＦ－１～５実測図 …… 125
図118　ＳＦ－６～８実測図 …… 126
図119　ＳＦ－９実測図 …… 127
図120　御陣場古墳出土遺物 …… 127
図121　主な炉穴検出遺跡分布図 …… 129
図122　水掛渡古墳群　古墳分布図 …… 130
図123　Ａ群とＤ群の群構成 …… 132
図124　盤・皿出土古墳分布図 …… 133

挿表目次

表１　調査区と面積 …… 3
表２　全体の経過 …… 5
表３　平成13年度本調査工程表 …… 6
表４　周辺遺跡の地名表 …… 11
表５　吉峠遺跡出土遺物観察表 …… 29
表６　吉峠遺跡遺構計測表 …… 30～31
表７　水掛渡Ｄ古墳群古墳計測表 …… 93
表８　古墳出土土器観察表 …… 94～95
表９　古墳出土鉄器観察表 …… 96
表10　古墳出土玉類観察表 …… 97～98
表11　石鏃観察表 …… 106
表12　坂口千頭ヶ谷古墳計測表 …… 111
表13　坂口千頭ヶ谷古墳遺物観察表 …… 111
表14　御陣場古墳古墳計測表 …… 122
表15　御陣場古墳出土鉄器観察表 …… 122
表16　御陣場古墳出土土器観察表 …… 123

図版目次

カラー図版１　水掛渡Ｄ古墳群の主な出土遺物
カラー図版２　１．水掛渡Ｄ古墳群の立地状況
　　２．御陣場古墳の遺物出土状況

図版１　遺跡の遠景
　１．水掛渡Ｄ古墳群と吉峠遺跡遠景（北西から）
　２．吉峠遺跡遠景（南から）
図版２　吉峠遺跡
　１．１区　全景（北から）
　２．２区　全景（南から）
図版３　吉峠遺跡
　１．３区　全景（西から）
　２．２区　ＳＦ－１（北から）
図版４　吉峠遺跡
　１．４区　全景（北から）
　２．５区　全景（北から）
図版５　吉峠遺跡
　１．６区　全景（北から）
　２．７区　全景（南から）
図版６　吉峠遺跡
　１．７区　ＳＢ－１（北から）
　２．８区　全景（西から）
図版７　吉峠遺跡
　１．９区　全景（北から）
　２．５区　ＳＦ－１（北から）
　３．５区　ＳＦ－３（北から）
　４．７区　ＳＢ－１内Ｐ－１（北から）
　５．９区　ＳＦ－１（北から）
図版８　水掛渡Ｄ古墳群
　１．遺跡の遠景（西から）
　２．調査区全景（南から）
図版９　水掛渡Ｄ古墳群
　古墳群全景（俯瞰）
図版10　水掛渡Ｄ１号墳
　１．１号墳　全景（南から）
　２．石室閉塞石除去前（北から）
　３．１号墳　全景（北から）
図版11　水掛渡Ｄ１号墳
　１．石室全景（南から）
　２．石室基底石（南から）
　３．石室掘り方（南から）
　４．閉塞石の状況（北から）
　５．石室内遺物出土状況（北東から）

図版12　水掛渡Ｄ２・３号墳
　１．３号墳　全景（北から）
　２．２号墳　石室全景（北から）
　３．３号墳　石室全景（南から）
図版13　水掛渡Ｄ３・４号墳
　１．３号墳　石室内遺物出土状況（西から）
　２．４号墳　全景（北西から）
図版14　水掛渡Ｄ４・５号墳
　１．４号墳　周溝遺物出土状況（南東から）
　２．５号墳　全景（北から）
図版15　水掛渡Ｄ５・６号墳
　１．５号墳　石室全景（南から）
　２．５号墳　掘り方（南から）
　３．６号墳　石室全景（南から）
　４．６号墳　石室基底石（南から）
図版16　水掛渡Ｄ６号墳
　１．６号墳　全景（北から）
　２．石室内遺物出土状況（南東から）
　３．周溝遺物出土状況（南東から）
図版17　水掛渡Ｄ７号墳
　１．７号墳　全景（北から）
　２．石室閉塞石除去前（南から）
　３．石室閉塞石除去後（南から）
図版18　水掛渡Ｄ７号墳
　１．東側壁の状況（南西から）
　２．石室全景（南から）
　３．石室基底石（南から）
図版19　水掛渡Ｄ７・８号墳
　１．７号墳　西側壁の状況（南東から）
　２．７号墳　閉塞石（北から）
　３．８号墳　鉄器出土状況（南から）
　４．８号墳　石室全景（南から）
図版20　水掛渡Ｄ８・９号墳
　１．８号墳　全景（北から）
　２．９号墳　全景（北から）
　３．９号墳　石室全景　第１床面（南から）
図版21　水掛渡Ｄ９号墳
　１．石室全景　第２床面（南から）
　２．石室全景　第３床面（南から）
　３．石室基底石（南から）
　４．石室内須恵器出土状況（北西から）
　５．石室内鉄器出土状況（南西から）
図版22　水掛渡Ｄ10・11号墳
　１．10号墳　石室全景（南から）
　２．10号墳　石室基底石（南から）
　３．11号墳　全景（北から）
　４．11号墳　石室閉塞石除去前（南から）
図版23　水掛渡Ｄ11・12号墳
　１．11号墳　石室閉塞石除去後（南から）
　２．11号墳　石室基底石（南から）
　３．12号墳　石室閉塞石除去前（南から）
　４．12号墳　石室閉塞石除去後（南から）
図版24　水掛渡Ｄ12・14号墳
　１．12号墳　玉類の出土状況１（東から）
　２．12号墳　西側壁の状況（東から）
　３．12号墳　玉類の出土状況２（東から）
　４．12号墳　閉塞部の遺物出土状況（南から）
　５．14号墳　玉類の出土状況（北から）
図版25　水掛渡Ｄ12・13号墳
　１．13号墳　石室全景（南から）
　２．12号墳　石室基底石（南から）
　３．13号墳　石室基底石（南から）
図版26　水掛渡Ｄ14号墳
　１．鉄器の出土状況（東から）
　２．石室全景（南から）
　３．石室基底石（南から）
図版27　水掛渡Ｄ古墳群　ＳＢ－１・ＳＦ－１～７
　１．ＳＦ－５（北から）
　２．ＳＦ－４（北から）
　３．ＳＦ－２・３（北から）
　４．ＳＦ－７（北から）
　５．ＳＦ－６（西から）
　６．ＳＦ－１（南から）
　７．ＳＢ－１（西から）

図版28　坂口千頭ヶ谷古墳
　　１．遺跡の遠景（南西から）
　　２．石室全景（南から）
図版29　坂口千頭ヶ谷古墳
　　１．東側壁の状況（南西から）
　　２．西側壁の状況（南東から）
図版30　坂口千頭ヶ谷古墳
　　１．石室基底石（南から）
　　２．石室掘り方（南から）
図版31　御陣場古墳・権現様御陣場遺跡
　　１．遺跡の遠景（南東から）
　　２．ＳＦ－６（南から）
　　３．ＳＦ－７（南から）
　　４．ＳＦ－８（南から）
　　５．ＳＦ－９（南から）
図版32　御陣場古墳
　　１．古墳全景（北西から）
　　２．石室全景（南から）
　　３．石室基底石（南から）
図版33　御陣場古墳
　　１．石室内の遺物出土状況（北から）
　　２．石室開口部の遺物出土状況(北から)
　　３．周溝北側の土層断面（西から）
　　４．周溝西側の土層断面（南から）
図版34　吉峠遺跡の出土遺物
図版35　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物１
　　１号墳・２号墳の出土遺物
図版36　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物２
　　２号墳・３号墳の出土遺物
図版37　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物３
　　３号墳の出土遺物
図版38　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物４
　　４号墳の出土遺物
図版39　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物５
　　４号墳・５号墳の出土遺物
図版40　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物６
　　６号墳の主な出土遺物
図版41　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物７
　　２・３・５・６・９・11号墳出土の鉄器
　　６号墳の出土遺物
図版42　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物８
　　８号墳出土の鉄器
　　７号墳・９号墳・12号墳の出土遺物
図版43　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物９
　　１．９号墳の主な出土遺物
　　２．12号墳出土の玉類
図版44　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物10
　　13号墳・14号墳の出土遺物
図版45　水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物11
　　１．14号墳出土の玉類
　　２．14号墳出土の鉄器
図版46　縄文時代の遺物１
　　１．石鏃（吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・
　　権現様御陣場遺跡）
　　２．縄文土器（水掛渡Ｄ古墳群）
図版47　縄文時代の遺物２
　　石器（吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群）
　　水掛渡Ｄ古墳群の出土石器
図版48　御陣場古墳の出土遺物１
図版49　御陣場古墳の出土遺物２
図版50　御陣場古墳の出土遺物３

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

静岡県のほぼ中央を流れる大井川下流右岸には通称「牧ノ原台地」が広がっている。牧ノ原台地は解析谷と河川により、いくつかの支脈に分岐する。牧ノ原台地の東部で、榛原郡榛原町と島田市の境をなす丘陵もその一支脈である。この丘陵上に静岡空港が建設されることになった。静岡空港建設予定地内には埋蔵文化財が存在することが周知されている。事前に行われた現地踏査でも新たな調査必要範囲が指摘された。これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、静岡県静岡空港建設事務所と静岡県教育委員会が協議を重ねた。その結果、静岡空港県単独空港整備事業の一環として平成９年度から県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行うことが決定した。建設予定地内の遺跡群については便宜上、それぞれ地点名が附されている。今回報告するのは、この内のＡ地点・Ｂ地点・Ｄ地点である。これら３地点は先行する発掘調査事例を欠いていたため、まず確認調査を実施した。確認調査は平成11年度から13年度まで230,478㎡を対象面積として行った。

確認調査の結果、遺跡の広がる範囲が明らかとなった。これらの取り扱いについて、静岡県教育委員会文化課と静岡空港建設事務所が改めて協議を行い、その結果これらについて平成13年度に本調査を実施することが決定した。なお、本調査の必要が生じた範囲の中でＤ地点は御陣場古墳・権現様御陣場遺跡として周知されている遺跡であったが、Ａ地点とＢ地点は新たに確認された埋蔵文化財包蔵地であった。これらは榛原町教育委員会、島田市教育委員会によりＡ地点を吉峠遺跡、Ｂ地点の島田市側は水掛渡Ｄ古墳群、榛原町側は坂口千頭ヶ谷古墳として登録された。

本調査は空港関連の他地点との調査の関連から、平成13年度９月から着手することになった。はじめに、平成13年９月からＤ地点の御陣場古墳・権現様御陣場遺跡の400㎡を対象として11月まで調査を実施した。次に、Ｂ地点の坂口千頭ヶ谷古墳の150㎡と水掛渡Ｄ古墳群の5,606㎡を平成13年10月から平成14年３月まで調査を行い、平成14年１月から３月まではＢ地点の調査と併行して、Ａ地点の吉峠遺跡1,000㎡の調査を行った。なお、資料整理と報告書作成は平成14年４月から15年10月まで財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所本部で実施した。

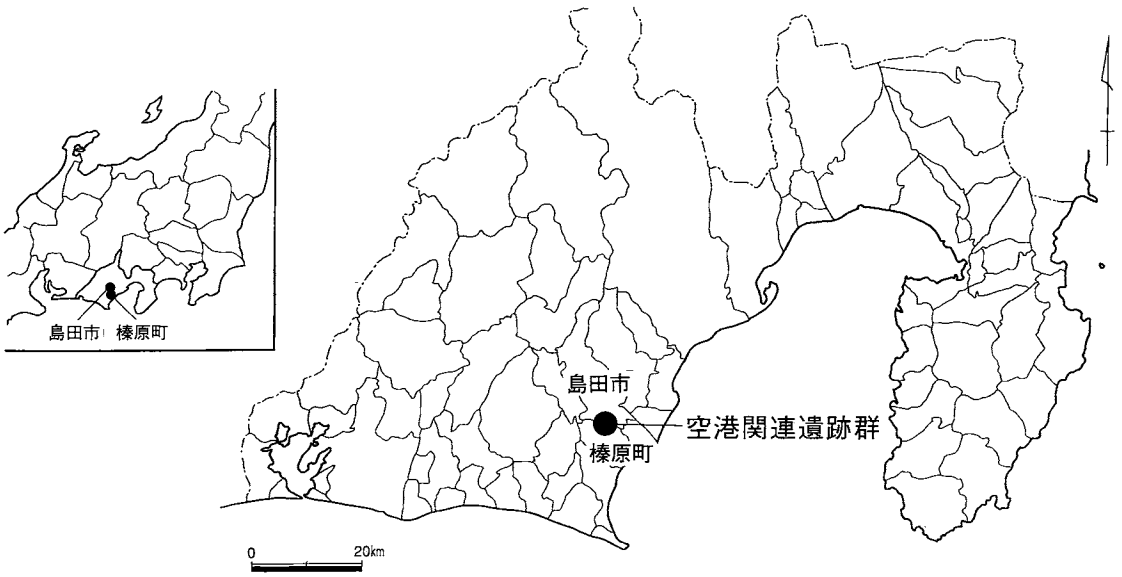


図１　静岡空港関連遺跡群位置図

第２節　調査の方法

１．確認調査

空港建設予定地内の遺跡は現地踏査の結果と遺跡地図に基づき、それぞれ地点名が附されている。確認調査は地点単位で調査を実施した。本報告書に関わるのはこの内のＡ・Ｂ・Ｄ地点である。Ａ地点は平成11年度に5,133㎡、平成13年度に80,996㎡の合計86,129㎡を対象面積として確認調査を実施した。Ｂ地点は平成11年度に86,525㎡、平成12年度に10,094㎡、平成13年度に2,611㎡の合計99,230㎡を対象として確認調査を実施した。Ｄ地点は平成11年度に18,077㎡、平成12年度に22,586㎡、平成13年度に4,456㎡を対象として確認調査を実施した。

Ａ・Ｂ・Ｄ地点の各地点における確認調査は、トレンチ掘削により調査を実施した。各調査地点共に、尾根と谷が入り組んだ地形のため、調査対象範囲である台地平坦部は寸断されていた。そこで、確認トレンチは地形に即して、幅１ｍのトレンチを設定し調査を行った。いずれの地点も調査以前は茶畑あるいは、山林となっていた。そのため、茶樹・山林の伐採を実施した後、重機による掘削を開始した。重機は搬入路が狭小であったため、主に0.25㎡のバックフォーを使用した。重機で表土と耕作土を除去した後、終了箇所から人力によりトレンチ内の精査を実施した。

調査の記録は掘削作業と併行し随時、実測と撮影を行った。実測に当たっては、トータルステーションを主に用い、確認トレンチの設定図は１/1,000、遺構検出状況図並びに土層断面図は１/20を基本として図化した。写真撮影は35㎜判（カラーネガ）を使用した。

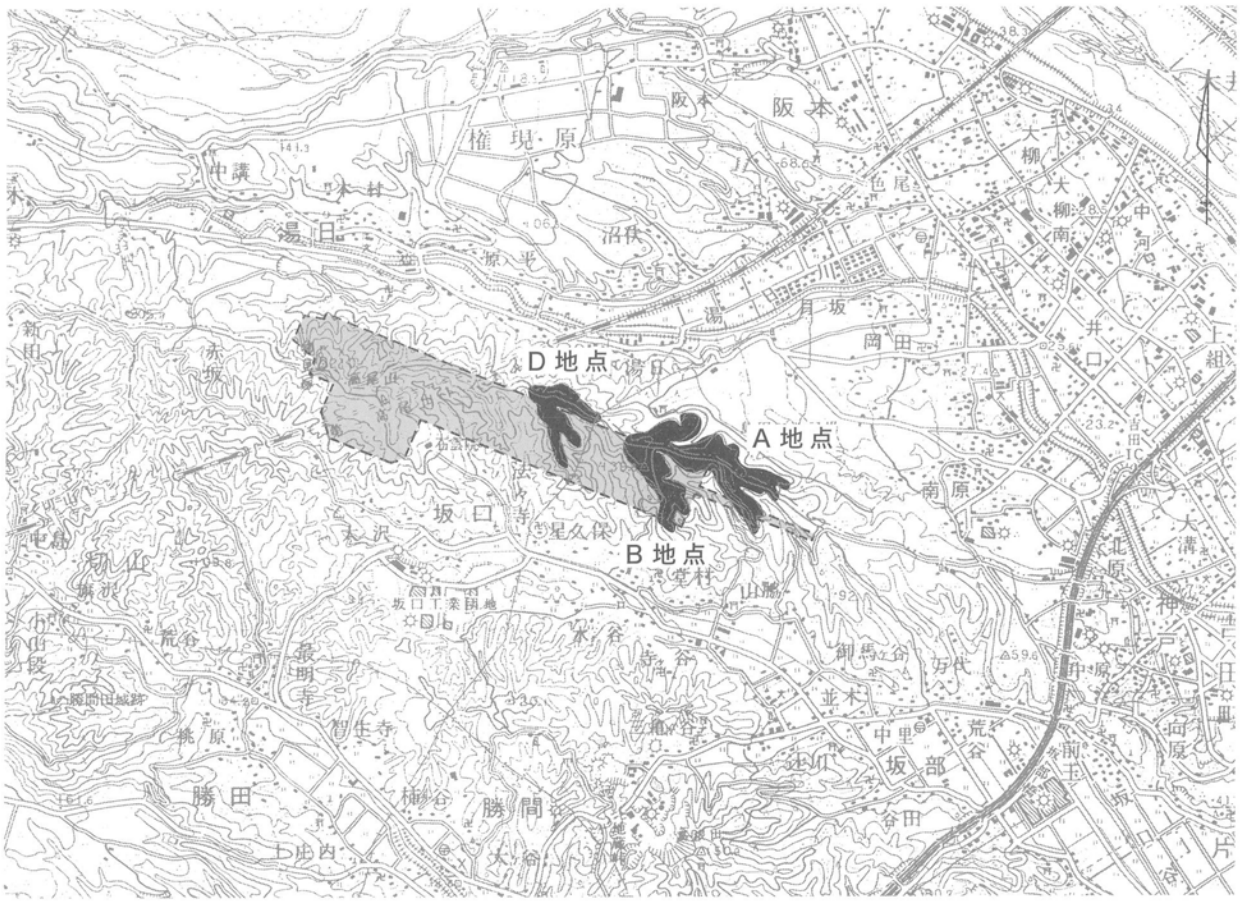


図２　Ａ・Ｂ・Ｄ地点位置図

2．本調査

本調査を実施したのは吉峠遺跡、水掛渡Ｄ古墳群、坂口千頭ヶ谷古墳、御陣場古墳、権現様御陣場遺跡の５遺跡である。調査対象面積はそれぞれ、吉峠遺跡が1,000㎡、水掛渡Ｄ古墳群が5,606㎡、坂口千頭ヶ谷古墳が150㎡、御陣場古墳・権現様御陣場遺跡が400㎡である。

本調査では、重機を用いて表土を除去した後、人力掘削にて遺構の検出および掘削を実施した。掘削によって生じた廃土はそれぞれの遺跡の場内で処理を行った。その際、水掛渡Ｄ古墳群では廃土の運搬にクローラーダンプも併用し、調査終了後は重機により埋め戻しを実施した。また、水掛渡Ｄ古墳群、坂口千頭ヶ谷古墳、御陣場古墳の調査においては、古墳主体部の覆土を篩にかけ微細な遺物の発見に努めた。

本調査においては測量基準杭を平面直角座標第Ⅷ系に基づき設定したが、古墳の調査においては各古墳の主軸にあわせて基準杭を別個に設定した。また、水掛渡Ｄ古墳群の調査では10m間隔でグリッドを設置した。グリッド番号については、南北方向は北からアルファベットを用い、東西方向は西からアラビア数字を用いた。測量はトータルステーション・平板を用いて実施した。遺構・遺物出土状況は１/20を基本として実測を行ったが、必要に応じ１/10の実測図も作成した。なお、吉峠遺跡では上記に加えてトータルステーションを用いて１/20で地形測量図を作成した。また、水掛渡Ｄ古墳群並びに坂口千頭ヶ谷古墳の地形測量は空中写真撮影により図化した。

写真撮影は現地調査では４×５判・６×７判（モノクロ・カラーリバーサル）と35㎜判（白黒・カラーネガ・カラーリバーサル）、空中写真撮影は６×4.5判（モノクロ・カラーリバーサル）を使用した。遺物撮影には４×５判（モノクロ・カラーリバーサル）と６×７判（モノクロ）、35㎜判（カラーリバーサル）を使用した。

表１　調査区と面積

確認調査

地点名		平成11年度	平成12年度	平成13年度	合　計（㎡）
Ａ地点	調査対象面積（㎡）	5,133	0	80,996	86,129
	実掘面積（㎡）	280	0	4,392	4,672
Ｂ地点	調査対象面積（㎡）	86,525	10,094	2,611	99,230
	実掘面積（㎡）	4,652	946	60	5,658
Ｄ地点	調査対象面積（㎡）	18,077	22,586	4,456	45,119
	実掘面積（㎡）	1,053	1,511	223	2,787
合　計	調査対象面積（㎡）	109,735	32,680	88,063	230,478
	実掘面積（㎡）	5,985	2,457	4,675	13,117

本調査

遺跡名	吉峠遺跡	水掛渡Ｄ古墳群	坂口千頭ヶ谷古墳	御陣場古墳 権現様御陣場遺跡
本調査面積（㎡）	1,000	5,606	150	400

第３節　調査の経過

Ａ地点・Ｂ地点・Ｄ地点の確認調査は平成11年から実施し、断続的に平成13年度まで行った。確認調査の結果から、吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡の本調査を行うことが決定し、この４遺跡の本調査を平成13年度に実施した。一連の調査に関わる資料整理は平成14年４月～平成15年９月に他の空港関連遺跡の資料整理と併せて実施した。以下、年度別に調査の経過を記す。

１．平成11年度の調査

平成11年度はＡ地点5,133㎡とＢ地点86,525㎡の確認調査を６～８･10～１月、Ｄ地点18,077㎡の確認調査を９月に調査した。調査に先立ち、６月後半から現地詰め所の設置や茶樹の伐採・防塵ネットの設置等を行った。Ｂ地点は７月初旬から重機による表土除去を開始し、中旬には人力掘削に着手した。静岡空港建設事務所の指示により空港整備事業全体工程の都合上、Ｂ地点の調査は８月末で一端切り上げ、９月はＤ地点の調査に集中することになった。

Ｄ地点は７月下旬に茶樹の伐採を行い、９月初頭から重機による表土除去と人力掘削を開始し、９月末まで掘削作業を行った。10月上旬には調査状況の記録を取り、調査を終了した。Ｄ地点の調査終了に伴い、Ａ地点とＢ地点の調査を10月初頭から再開した。

Ｂ地点では11月になり、確認トレンチで石列を検出した箇所が存在したため、この付近の調査に重点を置いた。その結果、この石列は古墳の主体部であることが判明し、検出状況を記録に取った。12月下旬には人力掘削が終了したので、撤収作業を行った。また、撤収作業と併行し、調査によって生じた廃土の流出を防ぐための処理を重機を用いて実施した。平成12年１月上旬には撤収等の作業を終え、平成11年度の確認調査を完了した。なお、調査の結果、Ｂ地点では横穴式石室を１基、Ｄ地点では土坑を１基確認するに至った。

２．平成12年度の調査

平成12年度はＤ地点22,586㎡の確認調査を８月～12月、Ｂ地点10,094㎡の確認調査を10～12月に実施した。調査は８月末から現地詰所の設営や資材の搬入などの準備を開始し、９月中旬からＤ地点の重機掘削と人力掘削を行った。10月中旬からはＢ地点の作業も併行して実施することになり、Ｂ地点の重機掘削と人力掘削を開始した。10月下旬にはＢ地点で古墳と考えられる遺構を検出し、先行調査の事例から群集墳になる可能性があったので、この付近を重点的に調査した。その結果、３基の古墳が確認できた。これらの、検出状況や位置を記録に取り、11月上旬にはＢ地点の調査を終了した。なお、両調査地点共に随時、実測図の作成と記録写真の撮影を行った。

Ｄ地点では縄文時代のものと考えられる土坑を検出したので、その状況を記録に残し、11月中旬まで作業を行った。これら一連の調査が終了した11月下旬には資材の撤収を行った。撤収作業と併行して重機を用いて埋め戻しを実施した。埋め戻しは12月初頭には終了し、平成12年度の確認調査を完了した。なお、調査の結果、Ｂ地点においては古墳群を、Ｄ地点では土坑を発見した。

表２　全体の経過

	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
Ａ地点 （吉峠遺跡）					
Ｂ地点 （水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳）					
Ｄ地点 （御陣場古墳・権現様御陣場遺跡）					

確認調査　　本調査　　資料整理

３．平成13年度の調査

平成13年度は確認調査と本調査を実施した。確認調査は４～６月にＡ地点の80,996㎡とＢ地点の2,611㎡を、７月～８月にＤ地点の4,456㎡を対象として行った。本調査は９月～11月に御陣場古墳・権現様御陣場遺跡の400㎡を、10月～平成14年３月に水掛渡Ｄ古墳群の2,606㎡と坂口千頭ヶ谷古墳の150㎡を、平成14年１月～３月に吉峠遺跡の1,000㎡を対象として行った。

(1)　確認調査

平成13年度の確認調査はＡ地点とＢ地点から着手した。Ａ地点とＢ地点は４月初頭から現地詰め所の設営や資材の搬入等の準備を行い、中旬から重機による表土除去と人力掘削を開始した。４月下旬以降、焼土跡や集石土坑等を検出したので、掘削作業と併行してトレンチ設定図や遺構検出状況の実測を行った。掘削作業と実測作業は６月下旬には終了した。６月末には資材の撤収を終え、Ａ地点とＢ地点の確認調査を完了した。調査の結果、Ａ地点では土坑群を検出するに至った。

確認調査は次に、Ｄ地点に着手した。７月中旬に茶樹の伐採や資材の搬入等の準備を行い、下旬から重機掘削と人力掘削を開始した。掘削作業を開始したところ、連日遺物が出土する範囲が存在した。この付近を重点的に調査するために、確認トレンチの一部拡幅を８月初頭に行った。その結果、石列が検出され、これが古墳の主体部であることが明らかになった。掘削作業と併行して、これらの遺物・遺構の検出状況とトレンチの設定状況を記録に残した。掘削作業と実測作業の終了後、資材の撤収を８月上旬に行い、確認調査を終了した。

(2)　本調査

平成11年度から13年度まで実施した以上の確認調査の結果から、吉峠遺跡、水掛渡Ｄ古墳群、坂口千頭ヶ谷古墳、御陣場古墳並びに権現様御陣場遺跡の本調査を実施した。

御陣場古墳・権現様御陣場遺跡

本調査は御陣場古墳・権現様御陣場遺跡から着手した。９月下旬から資材の搬入を行い、続けて掘削作業を開始した。９月末には主体部の輪郭が鮮明に現れ、横穴式石室を主体部として持つ古墳であることが判明した。10月中に主体部の掘削と実測を行い、遺物は出土状況を記録した上で取り上げた。主体部の調査と併行し周溝の掘削も行った。調査区内には古墳の他に縄文時代の遺構が存在したため、その調査も併行して行った。一連の作業は10月末には終了し、11月１日に遺跡の全景写真を撮影した。撮影終了後、古墳の解体に着手した。解体と併行して、調査区全体図の作成も行った。11月７日には実測を終え、９日に撤収作業を完了させて御陣場古墳・権現様御陣場遺跡の現地調査を終了した。

水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳

御陣場古墳の調査と併行して10月22日から水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳も調査に着手した。10月中は御陣場古墳の調査を優先させていたため、資材の搬入や進入路の整備などを行い、10月31日から水掛渡Ｄ古墳群の重機掘削を開始した。水掛渡Ｄ古墳群の重機掘削は11月28日まで実施し、11月28日と29日に坂口千頭ヶ谷古墳の重機掘削を行った。水掛渡Ｄ古墳群の人力掘削は11月13日から着手した。調査区の北東部から精査を開始し、11月26日には古墳を検出した。この古墳を１号墳とし、以後、12月末までに２～６号墳と８号墳の合計７基の古墳を検出した。古墳は検出状況を記録に取った後、主体部の掘削を行った。また、周溝が残存する古墳は主体部の掘削と併行して、周溝の掘削を実施した。なお、11月26・27日と12月３日には水掛渡Ｄ古墳群、12月７日には坂口千頭ヶ谷古墳の基準杭設置を行った。水掛渡Ｄ古墳群では古墳以外に縄文時代の遺構を検出し、この調査も併行して実施した。

12月末～１月初頭は現地調査を一時中断し、平成14年は１月８日から作業を開始した。１月には７号墳と９～13号墳を検出し、これらの古墳の調査を併行して実施した。１月18日～22日には未掘削部分について重機による表土除去を実施した。また、１月11日からは坂口千頭ヶ谷古墳の人力掘削も水掛渡Ｄ古墳群の調査と併行して実施した。

２月６日には水掛渡Ｄ古墳群の１～13号墳と坂口千頭ヶ谷古墳の主体部と周溝の掘削をほぼ終えた。そこで、８日に遺跡全体の状況を空中写真撮影にて記録に取った。空中写真撮影終了後、遺構個別写真の撮影を12日まで実施した。撮影を終えたものから順に主体部の実測と解体に着手し、２月中には１号墳、２号墳、４号墳、10号墳の調査を終了した。

２月下旬の人力掘削は調査区西半の縄文時代遺物の集中箇所を重点的に実施した。その結果、調査区の南西部で２基の縄文時代の土坑を検出し、検出状況を記録した上で掘削を行った。また、３月４日には12号墳の南西で新たに14号墳を検出し、直ちに掘削と実測に取りかかった。３月13日には14号墳石室埋土の掘削が終了したので、空中写真撮影で14号墳全景を撮影した。撮影終了後は石室の解体に着手した。３月19日までには３号墳、５～９号墳、11～14号墳と坂口千頭ヶ谷古墳の調査を全て終了した。なお、水掛渡Ｄ古墳群においては重機による調査区の埋め戻しを19日から22日まで実施した。埋め戻し作業と併行して撤収作業を行い、３月22日をもって現地調査を終了した。また、平成13年度の調査における現地資料整理を３月末日まで現地詰め所にて実施した。

表３　平成13年度本調査工程表

遺　跡　名	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
御陣場古墳							
水掛渡Ｄ古墳群							
坂口千頭ヶ谷古墳							
吉峠遺跡							

吉峠遺跡

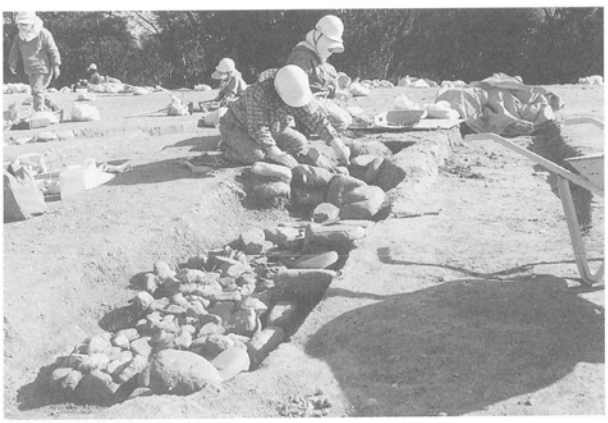
水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳の調査と併行して、吉峠遺跡の調査を１月22日から開始した。まず、重機を用いて表土の除去を１区から開始し、調査区順に９区まで実施した。重機掘削は１月28日には終了した。２月初頭は併行して調査を実施していた水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳の調査を優先させるため、吉峠遺跡の調査は一時中断した。２月上旬には水掛渡Ｄ古墳群と坂口千頭ヶ谷古墳の調査が遺構個別の作業を残すのみとなったので、２月８日から吉峠遺跡の人力掘削を開始した。人力掘削は１区と２区から着手した。次いで、12日には６区、15日には５区、18日には３区と４区、19日には７区、20日には８区、26日には９区の調査に着手した。

掘削が終了した時点で写真撮影を行い、その後、実測作業に取りかかった。１区と４区～６区については２月中に実測作業まで終えた。３月に入り、11日には３区と８区、９区の調査が終了した。２区と７区については12日に実測と写真撮影を行い、調査を終了させた。調査の結果、１区と３～６区、８区、９区では土坑等、２区では集石土坑、７区では竪穴住居跡を検出した。３月12日には撤収作業も併せて行い、吉峠遺跡の現地調査を完了した。

なお、吉峠遺跡・水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡の各遺跡の資料整理と報告書作成は平成14年４月から平成15年９月まで当研究所本部にて実施した。

Ａ地点確認調査状況

吉峠遺跡調査状況



水掛渡Ｄ古墳群調査状況

整理作業の状況

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的・歴史的環境

１．地理的環境

静岡県は東西約150km、南北約115kmに渡る広さを持ち、南に駿河湾を抱き太平洋に面し、北は南アルプスに代表される山岳地帯となっている。静岡県のほぼ中央には赤石山脈を源とする大井川が流れる。大井川は上流から中流にかけては北から南へ蛇行を繰り返しながら海を目指し、その沖積平野である志太平野の西側に達すると流れを東に向け駿河湾に注ぐ。この向きを変えた大井川の右岸には通称「牧ノ原台地」が広がる。「牧ノ原台地」の北東部では北から順に湯日川、坂口谷川、勝間田川が東流している。三河川とも流域に開析谷と沖積平野を形成し駿河湾に至る。

今回調査を実施した空港関連遺跡は湯日川と坂口谷川で挟まれ、榛原郡榛原町と島田市の境をなす丘

図３　遺跡と周辺の地形

陵上に存在する。この丘陵は標高約210mの物見塚を最高地点として東西に連なる稜線を持つ丘陵である。今回調査を行った遺跡は物見塚の東南東約1.5km～3.5kmの距離にある標高約140m前後の丘陵尾根上に広がっている。現在、遺跡の周囲は近現代の開墾等による影響もあり、平坦面が広がっている。この平坦面の西からD地点の御陣場古墳・権現様御陣場遺跡、B地点の水掛渡D古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳、A地点の吉峠遺跡の順で今回調査を実施した遺跡が存在する。なお、最も東に位置する吉峠遺跡の位置は、JR島田駅より南東に約5km、東名吉田インターチェンジより西に約2.5kmの距離である。吉峠遺跡の約0.7km北西に水掛渡D古墳群、この0.3km南に坂口千頭ヶ谷古墳、坂口千頭ヶ谷古墳の60m西北西に御陣場古墳と権現様御陣場遺跡が存在する。

静岡空港関連遺跡が立地する「牧ノ原台地」一帯は大井川の堆積物が長い年月をかけて隆起した地形であり隆起扇状地と呼ばれている。「牧ノ原台地」は掛川層群・相良層群を基盤に小笠・坂部原礫層、古谷泥層、牧の原礫層、色尾・長者原段丘群礫層の順で層位が形成されている。今回調査を行った地点は約30万年前に堆積した坂部原礫層により構成される段丘上にある。大井川の堆積層であるため地山には大小様々な円礫が混ざる。この隆起扇状地は風雨の浸食により、至る所に開析谷が形成されている。空港関連遺跡が立地する坂部層群は比較的古く位置づけられる堆積層であるため、浸食が進み特に発達した開析谷が存在している。このような地形であるため、現在は丘陵平坦部には茶畑が広がる一方で、谷部と斜面には自然林が多く残されており、一部に杉や檜等が植林される程度である。

遺跡が立地するのは丘陵の平坦部である。現在の行政区分では、東西に列なる丘陵の概ね北半が島田市、南半が榛原郡榛原町となっている。水掛渡D古墳群は丘陵の主稜から北に派生する尾根先端部に位置し、行政上では島田市に含まれる。この遺跡からは大井川の流れと志太平野を見下ろし、東には駿河湾と遠く伊豆半島を望み、北東に富士山、北西に南アルプスを仰ぎ見ることができる。吉峠遺跡と権現様御陣場遺跡は丘陵主稜のほぼ中央部に位置し、島田市と榛原町にまたがる遺跡である。この2遺跡からも水掛渡D古墳群と同様に四周を眺望することができる。坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳は南に派生する尾根の先端部に位置し、行政上は榛原町に所属する。坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳から急峻な谷を下ると、坂口谷川の沖積平野に至るが、沖積平野と遺跡の間には同一丘陵の別尾根が横たわっている。そのため、遺跡からは直接平野を望むことはできない。先にも述べたが、調査以前の景観としては、平坦面は一面に広がる茶畑であり、斜面地には森林が広がっていた。

2．歴史的環境

(1) 旧石器時代

旧石器時代については青木原遺跡（63）、原ノ平遺跡（54）、宮裏遺跡（72）等の湯日川と大井川に挟まれた「谷口原」・「権現原」と呼ばれる丘陵平坦部に所在する遺跡で、この時期の遺物が出土している。一方、空港関連遺跡が所在する丘陵を含めて坂口谷川・勝間田川流域ではこの時期の遺跡はこれまで確認されていなかった。しかし、空港関連遺跡の一つとして調査を実施したミョウガ原遺跡（44）ではナイフ形石器が出土し、この丘陵においても旧石器時代に人々が活動していたことが明らかになった。もっとも、現段階では限られた資料であり、牧ノ原台地東縁部における旧石器時代の実体が解明されるのはこれからであろう。

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は湯日川両岸の丘陵平坦部に多くの遺跡が確認されている。湯日川北岸一帯では調査が進展し実態が明らかになっている遺跡も多い。東鎌塚原遺跡（50）は当地における縄文時代中期の代表的な遺跡である。この遺跡を代表として中期の遺跡が大勢を占める状況にあるが、中原遺跡（67）や青木原遺跡（63）のように草創期に遡る遺物を出土した遺跡が存在することも注目できる。

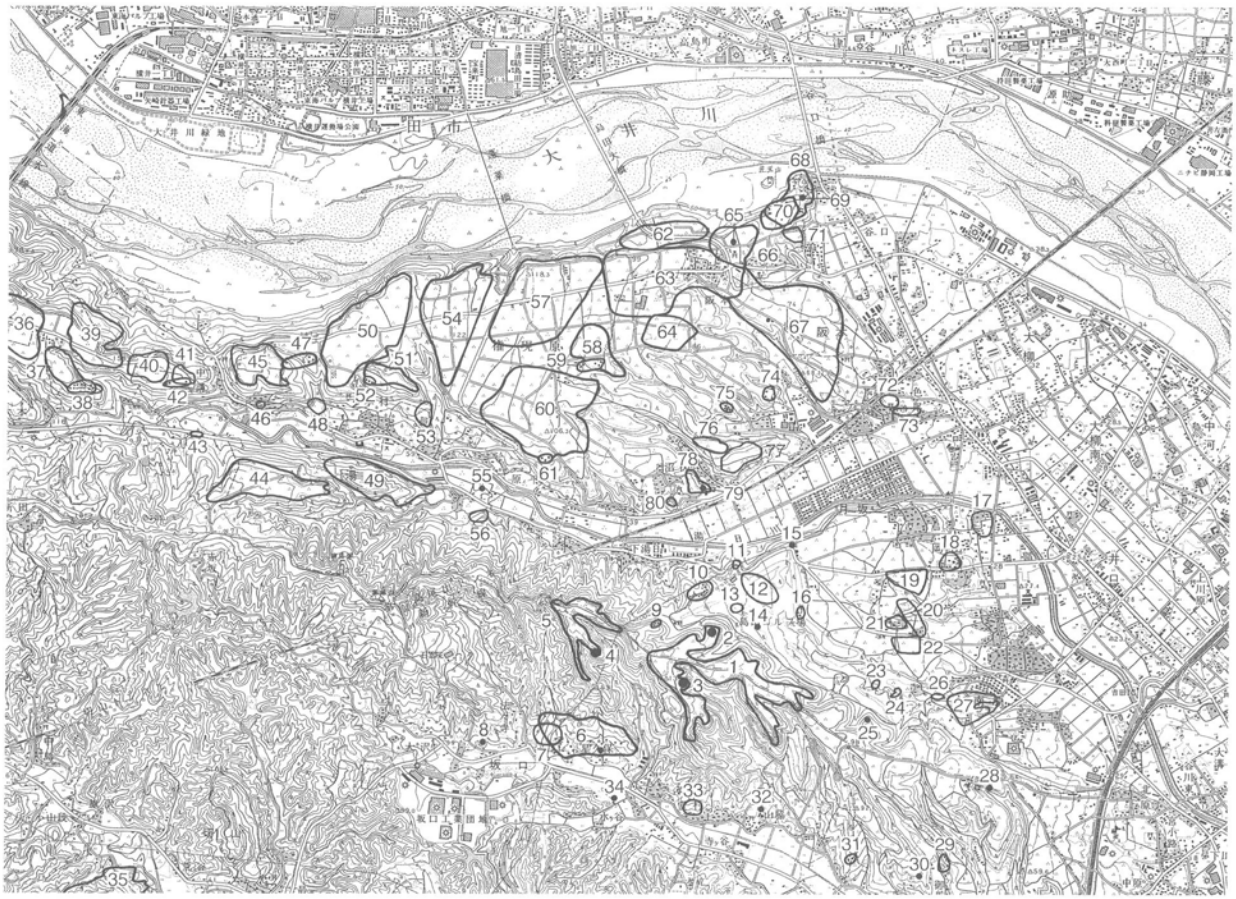


図４　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

今回調査を実施した吉峠遺跡（１）、水掛渡Ｄ古墳群（２）、権現様御陣場遺跡（５）でも縄文時代の遺構・遺物が出土した。吉峠遺跡と権現様御陣場遺跡では縄文時代早期の遺構が検出され、水掛渡Ｄ古墳群では早期と中期、晩期の遺物が出土した。断片的な資料であり歴史像を総括的に復原することはできないが、この丘陵上において人々が活動していた様子をうかがうことはできよう。なお、ミョウガ原遺跡（44）でも縄文時代中期の遺構・遺物が発見されている。更に、水掛渡Ｄ古墳群の眼下に広がる通称「岡田原」でも岡田原Ⅱ遺跡（21）等の縄文時代の遺跡が知られている。ただし、谷口原・権現原に比べると岡田原は調査例に乏しい状況にある。縄文時代の遺跡は坂口谷川流域でも海戸遺跡（33）等が存在するが、現状では坂口川流域は湯日川流域に比べると確認されている遺跡は少ない。

⑶　弥生時代

弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ数は少ない。湯日川北岸台地の宮上遺跡（66）で中期の土器が出土している程度である。なお、図示した範囲外であるが、坂口谷川流域では宮下遺跡、辻川遺跡がこの時期の遺跡として知られ、勝間田川下流の西川遺跡では中期中葉～後期の遺物が出土している。今後、平野部の調査により、資料が増加することを期待したい。

⑷　古墳時代

古墳時代の遺跡は非常に多く、その大半が後期から終末期に急増する群集墳である。本書で報告する水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳もこの時期のものである。水掛渡古墳群は今回調査を実施したＤ群以外にもＡ～Ｃの３支群が存在する。古墳の存在は古くから知られており（静岡県　1930）、東遠江東縁部の代表的な古墳群の一つと言えよう。水掛渡古墳群のＡ群（10）は25基が、Ｂ群（11）は４基が確認されており、1964年にＡ群の15基とＢ群の４基が調査されている（静岡県文化財保存協会 1965）。この時に９ＴＥＥ古墳(14)も併せて調査が実施された。また、３基の古墳が存在するＣ群（９）

表４　周辺遺跡の地名表

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	吉峠遺跡	21	岡田原Ⅱ遺跡	41	御小屋原Ⅱ遺跡	61	原ノ平古墳群
2	水掛渡Ｄ古墳群	22	竹林寺	42	御小屋原古墳群	62	尼沢遺跡
3	坂口千頭ヶ谷古墳	23	六千ヶ谷瓦窯	43	丸山Ⅰ古窯	63	青木原遺跡
4	御陣場古墳	24	南原古窯	44	ミョウガ原遺跡	64	色尾原遺跡
5	権現様御陣場	25	稲荷山古墳	45	屋敷原遺跡	65	敬満神社経塚
6	星久保古墳群	26	南原瓦窯	46	丸山古窯	66	宮上遺跡
7	王屋敷寺院	27	南原遺跡・向山遺跡	47	奥ノ沢古墳群	67	中原遺跡
8	作寺古墳	28	遠原古墳	48	風西遺跡	68	谷口原古墳群
9	水掛渡Ｃ古墳群	29	御馬ヶ谷古墳群	49	湯日城	69	愛宕塚古墳
10	水掛渡Ａ古墳群	30	入道ヶ谷古墳	50	東鎌塚原遺跡	70	谷口原遺跡
11	水掛渡Ｂ古墳群	31	浄雲尊古墳群	51	本村原遺跡	71	五輪塔遺跡
12	岡田原Ⅰ遺跡	32	神ノ郷古墳	52	本村原古墳群	72	宮裏遺跡
13	水掛渡遺跡	33	海戸遺跡	53	半段遺跡	73	高根森古墳群
14	９ＴＥＥ古墳	34	水ヶ谷経塚	54	原ノ平遺跡	74	鶴ヶ谷古墳群
15	庚申塚古墳	35	勝間田城	55	船山古墳	75	鶴ヶ谷南古墳群
16	六ッ塚古墳群	36	吹木原遺跡	56	長軒屋遺跡	76	地蔵原遺跡
17	岡田城	37	双川遺跡	57	東照宮遺跡	77	沼伏神社遺跡
18	医王寺南遺跡	38	叶釘山古墳群	58	大原遺跡	78	松ノ木原遺跡
19	岡田原Ⅲ遺跡	39	西原遺跡	59	沼伏原古墳群	79	沼伏古墳
20	宮裏中原古墳群	40	御小屋原Ⅰ遺跡	60	えびす森遺跡	80	沼伏遺跡

は３基とも1999年に空港関連遺跡として調査を行っている。造営の時期を見ると、Ｂ群がやや古く６世紀後半代、Ａ群が７世紀前半～８世紀前半、Ｃ群が７世紀中葉である。今回報告するＤ群は７世紀中葉～８世紀前半に造営されるので、水掛渡古墳群の中では若干後出する支群と言える。主な副葬品は須恵器に加え刀子や鉄鏃、装身具類であるが、Ａ２号墳では銀象眼を持つ鍔、Ｃ１号墳では鐶付足金物も出土している。なお、Ａ群の一部は株式会社静岡カントリー島田ゴルフコース内に現存する[1]。

坂口谷川流域にも多くの古墳群が存在し、御陣場古墳（４）や坂口千頭ヶ谷古墳（３）もその中の一つである。ただし、調査が進展している湯日川側斜面に比べ坂口谷川流域は未調査の古墳が多いのが現状である。御陣場古墳・坂口千頭ヶ谷古墳の周辺で、発掘調査に基づく報告が行われているのは星久保古墳群（６）の20号墳のみである。なお、図示した範囲外ではあるが、坂口谷川右岸の中ノ沢１号墳から出土した装飾付須恵器は県内でも類例が少ない遺物である。

さて、後期古墳は大井川と湯日川で挟まれた丘陵上にも密集している。高根森古墳群（73）は古く江戸時代から存在を知られ、豊富な出土遺物が注目をされている。御小屋原古墳群（42）では金銅装の馬具が出土し有力な被葬者がうかがえる古墳である。また、谷口原古墳群（68）は、かつては「初倉千塚」とも称され、相当数の古墳が存在していたようである。ただし、その大半は既に消滅し、調査が行われたのは一部に留まる。愛宕塚古墳（69）は谷口原古墳群に属し、数少ない現存する古墳の一つである。この古墳は当地では希有な前方後円墳で横穴式石室を主体部とする後期古墳である。ところで、後期古墳における主たる埋葬施設としてあげられるものの一つには横穴墓があり、東遠江は横穴墓が盛行する地域の一つである。ただし、東遠江の中でも東端一帯は横穴ではなく横穴式石室が席巻する様子がうかがえる。勝田川左岸の大ヶ谷横穴は横穴分布の東限に当たるもので、現状では坂口谷川流域以東の東遠江には横穴墓は確認されていない。なお、大井川右岸の西駿河では横穴式石室によって後期古墳の主体部は占められる状況にあり、東遠江東部は墓制の上では駿河西部との関連をうかがうことができる。

このように多数存在し、実体が解明されつつある後期～終末期の古墳に比べ、前期～中期の古墳は非常に少なく、現状で確実視できるものは坂口谷川下流の倉見原２号墳程度である。この古墳は前期に属する古墳として知られている。

また、集落についてもあまり確認されていないのが現状である。湯日川北岸では青木原遺跡（63)、中原遺跡（67)、宮上遺跡（66）で古墳時代後期の集落が調査されている。坂口谷川流域では星久保古墳群（６）内で調査された古墳時代後期の集落が唯一の調査例である。なお、沼伏遺跡（80）は古墳時代中期における祭祀関連の遺跡として、向山遺跡（27）は古墳時代後期の窯跡としてそれぞれ注目される遺跡である。

(5) 奈良・平安時代

空港関連遺跡周辺は律令期には遠江国榛原郡に含まれる。『倭名類聚鈔』には榛原郡内に存在した９つの郷が記されているが、円面硯を出土した青木原遺跡（63）の付近は「初倉驛家」推定地とされる。また、水掛渡Ｄ古墳群からは古代寺院の竹林寺（22）跡を望むことができる。これらの遺跡の存在から、この地は古代の榛原郡の中でも中心的な場所の一つであったことがうかがえよう。なお、平安時代末から鎌倉時代にかけては湯日川流域では丸山古窯（46）等の窯業遺跡の存在も知られている。

(6) 中世以降

おおよその区分ではあるが湯日川上流域は質戸呂荘、湯日川下流と坂口谷川流域は初倉荘、勝田川流域は勝間田荘に比定されている。空港関連遺跡が所在する丘陵は質戸呂荘と初倉荘の境を成す地であったと考えられている。空港建設予定地においては荘園に関すると断定できる遺跡は確認されていないが、ミョウガ原遺跡（44）は平安時代末～鎌倉時代初頭の集落跡である。目を広げると、湯日川と大井川で挟まれた丘陵平坦部では青木原遺跡（63）に代表されるようにこの時期の遺跡が多く存在する。一方、坂口谷川流域では星久保古墳群（６）内でこの時期の遺構が調査されている程度である。ただし、布目瓦などが表採されている王屋敷寺院（７）は古代～中世の遺跡である可能性がある。

南北朝～室町時代になると勝間田氏が付近一帯に勢力を伸ばす。御陣場古墳の南西に所在する石雲院は1455年の創建で、勝間田氏と縁が深いことが伝えられている。

1471年には勝間田氏をうち破り今川氏がこの地域勢力を広げる。今川氏滅亡後は、武田氏と徳川氏が覇を競い徳川氏の勢力下におかれる。徳川氏が江戸に移ると山内氏の勢力下におかれ、江戸時代になると掛川・相良藩領、島田代官所領、旗本所領が地域と時期を混在して見られる。現在、牧ノ原台地一帯は至る所に緑なす茶畑が広がるが、この景観につながるのは近代以降に行われた開墾によるものである。

註

1　静岡県1990ではＡ群10基の残存が記されている。遺物の一部は株式会社静岡カントリー島田ゴルフコースのクラブハウス内に展示保管されている。

第２節　基本層序

本書で扱うＡ地点（吉峠遺跡）、Ｂ地点（水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳）、Ｄ地点（御陣場古墳・権現様御陣場遺跡）の基本層序は地点・遺跡によって若干の差異があるが、おおよその一致を見る。そのため、ここではまとめて記載することにする。

Ａ地点、Ｂ地点、Ｄ地点は丘陵平坦部に広がる調査区であるが、茶畑等による開墾が進んでいる。そのため、表土となるのは耕作土である。耕作土の厚さは地形等によって、差異が見られるが、概ね30～70cm程度である。ただし、所によっては100cm以上に達することもある。

表土である耕作土の直下は地山となっており、堆積層は見られなかった。元来は、存在したと考えられるが、開墾時に削平あるいは撹乱されてしまったのであろう[1]。そのため、地山の上面が遺構検出面となる。地山となるのは、坂部原層群と呼ばれるものである[2]。

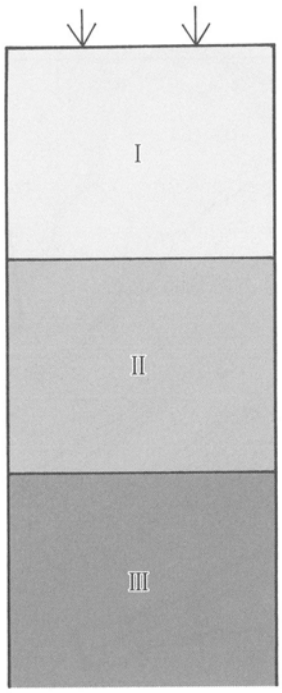


図５　基本土層柱状図

第Ⅰ層　表土

耕作土であり、場所によりに差があるが、概ね30～80cm程度の厚さである。遺物が出土するのはこの層である。場所によっては開墾が深くまで達するため、100cm程度の厚さになることもある。なお、吉峠遺跡では50～80cm程度、水掛渡Ｄ古墳群では30～50cm程度、坂口千頭ヶ谷古墳では50cm前後、権現様御陣場遺跡では30～80cm程度、御陣場古墳では50cm前後の厚さである。

第Ⅱ層　地山

褐色粘土または赤褐色粘土が基調となる層位である。場所により、色調に若干の差異が見られる。調査ではこの上面が遺構検出面となった。砂礫が多く混ざるが、その程度や大きさも場所により異なる。礫の大きさは10～30cm程度のものが多い。なお、インブリケート構造と呼ばれる堆積状況のため、礫が直線的に並ぶ箇所も存在する。

第Ⅲ層　地山

黄褐色シルトあるいは褐色シルトが主体であるが、１～50cm程度の礫が非常に多く混ざる。なお、Ｄ地点の一部では耕作時の撹乱が深くまで達し、第Ⅰ層の直下が第Ⅲ層となる場所もみられる。

註

1　空港関連遺跡Ｃ地点の調査では、表土と地山の中間に遺物包含層が確認されている。Ａ地点、Ｂ地点、Ｄ地点においても本来的には同様の層が存在した可能性が高い。

2　加藤芳朗氏の御教示による。

第３章　吉峠遺跡

第１節　　調査の概要

吉峠遺跡は空港関連遺跡Ａ地点として平成11年度と平成13年度に確認調査を実施した（図６）。平成11年度の確認調査では、遺構・遺物の発見には至らなかったが、平成13年度の確認調査では遺構と遺物を検出した。このうち遺構・遺物の広がりから、県教育委員会文化課と榛原町教育委員会、島田市教育委員会が協議を行い、本調査範囲を決定した。

本調査は平成14年１月から３月まで、合計1,000㎡を対象として実施した。本調査は確認調査の成果を踏まえて、９箇所の調査区を設定して実施した（図７）。本調査では、各調査において縄文時代に位置づけられる遺構を調査した。検出された遺構は主に小穴であったが、２区では集石土坑、３区・５区・７区・８区・９区では炉穴も検出した。更に、７区では竪穴住居跡を１軒検出した。しかし、遺物は１区で石鏃が出土したに留まった。調査成果の詳細は次節に調査区ごとに記す。

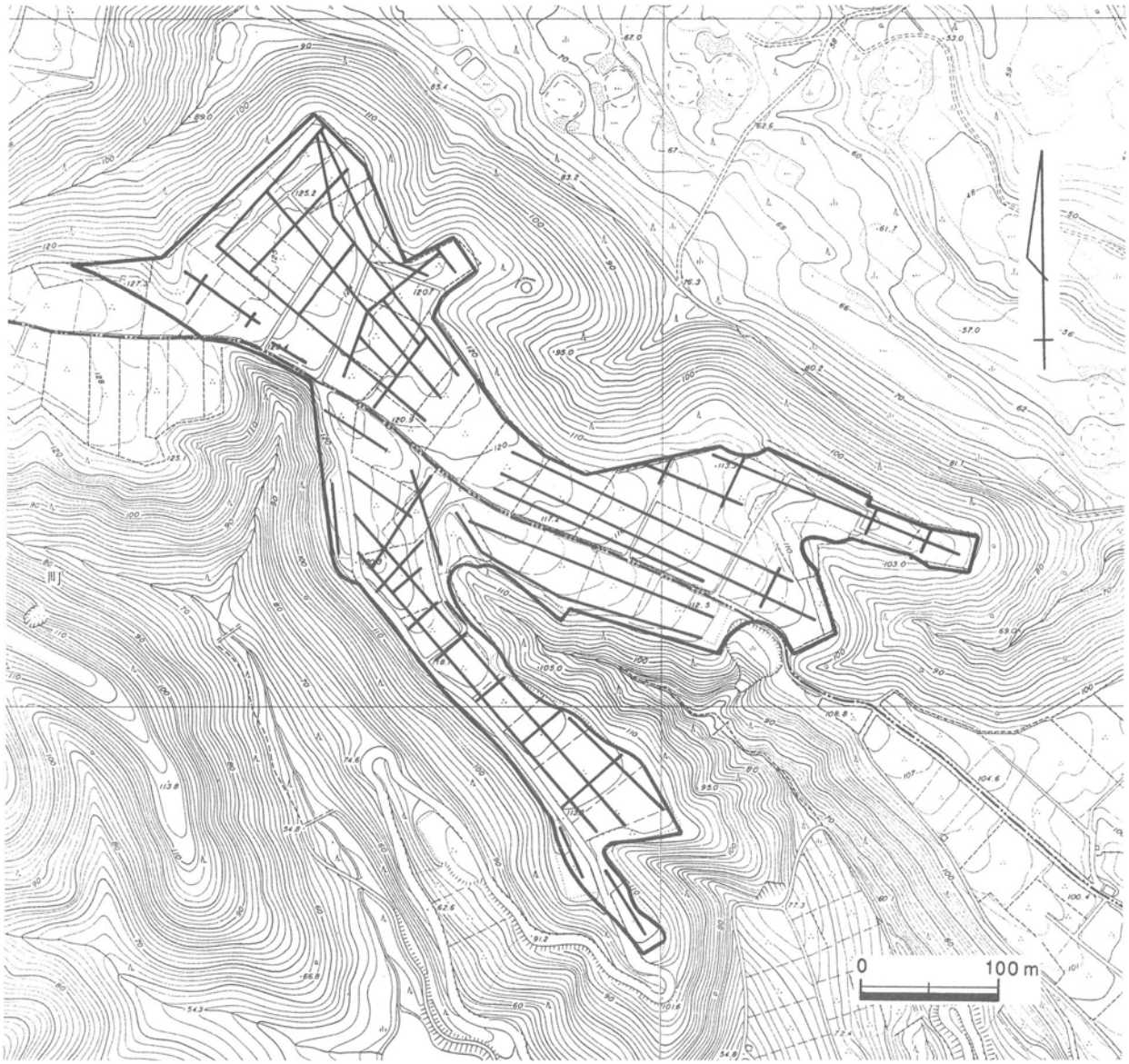


図６　Ａ地点確認調査トレンチ設定図

第２節　調査の成果

１．１区

(1)　遺構

１区は、今回調査を実施した調査区では最も西に位置する。調査区のほぼ中央で10基のピットを検出した（図８）。ＳＰ－３が最大で、直径30cm、深さ20cmである。最小のものはＳＰ－５で直径20cm、深さ15cmである。その他のものは直径25cm前後の規模で、10～20cm程度の深さである。土坑の覆土は褐色あるいは明褐色の粘土で、いずれも少量ではあるが炭化物が含まれていた。

遺物は撹乱土中から石鏃の破片１点と剥片１点が出土したのみであり、遺構からは遺物が出土しなかった。そのため、時期を確定する手がかりに乏しく断定はできないが、空港関連遺跡のこれまでの調査の成果を踏まえると、遺構の覆土の様子から縄文時代以前の可能性が指摘できる。

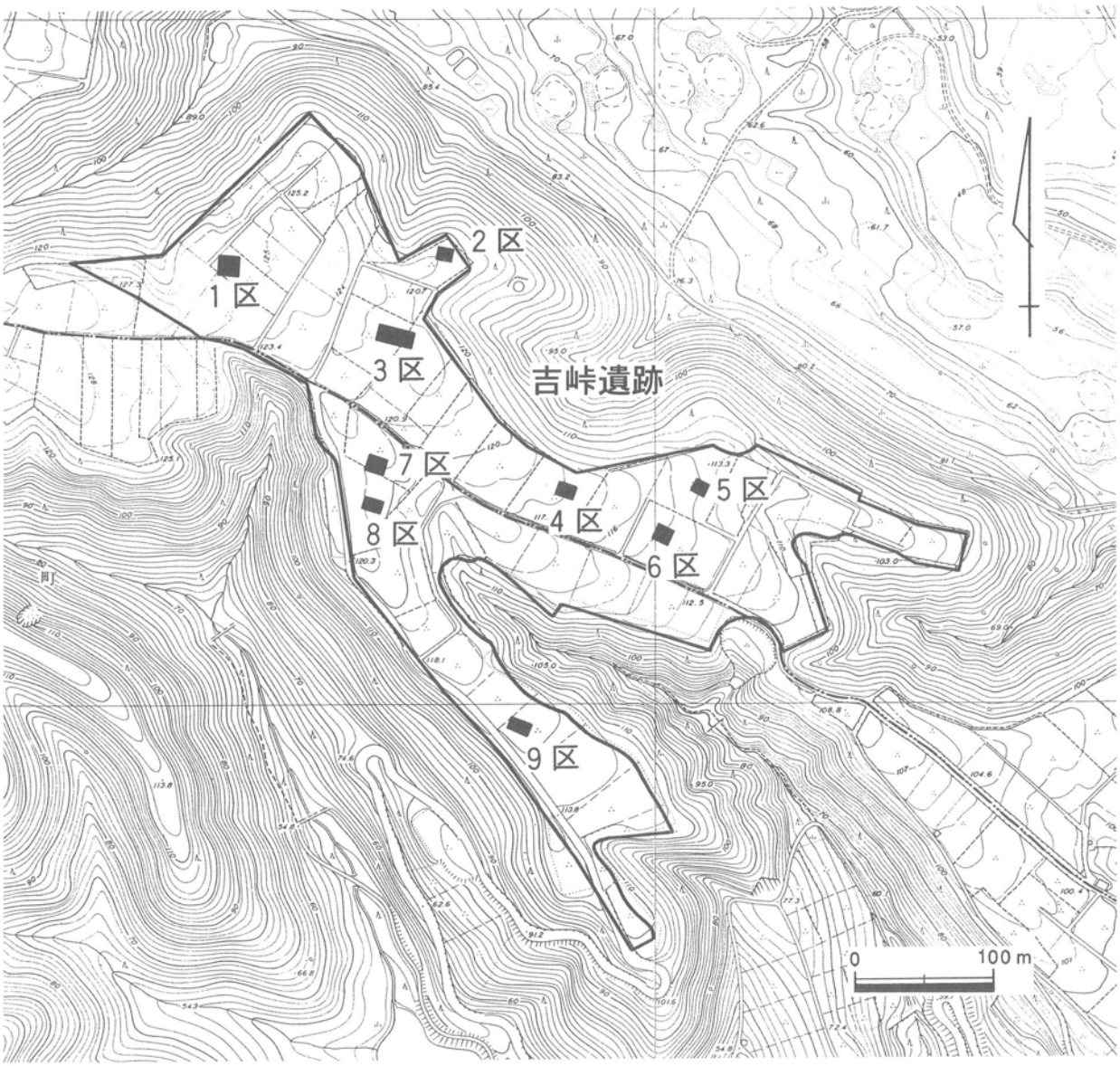


図７　吉峠遺跡　本調査対象地

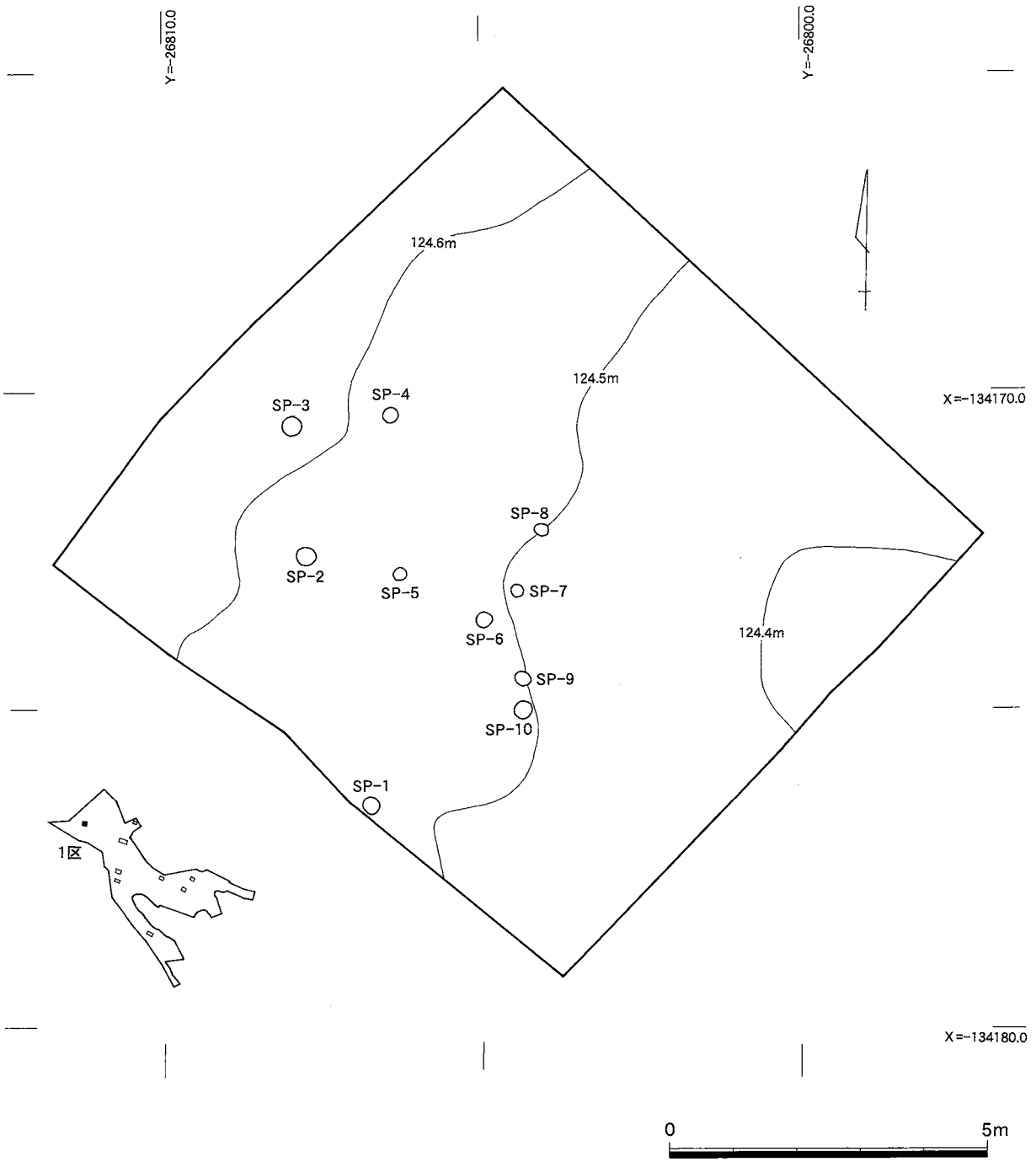


図８　吉峠遺跡１区全体図

(2)　**遺物**

遺物は撹乱土中から１の石鏃片が出土したのみである（図９）。この石鏃は一部を欠損するものの、基部に抉りが入り、凹基無形鏃であることがうかがえる[1]。頁岩製で、長さ1.7cm、幅1.3cm、厚さは0.2cm、重さは0.3ｇである。

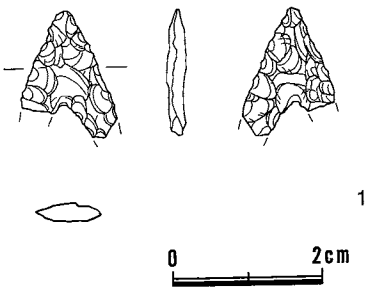


図９　１区の出土遺物

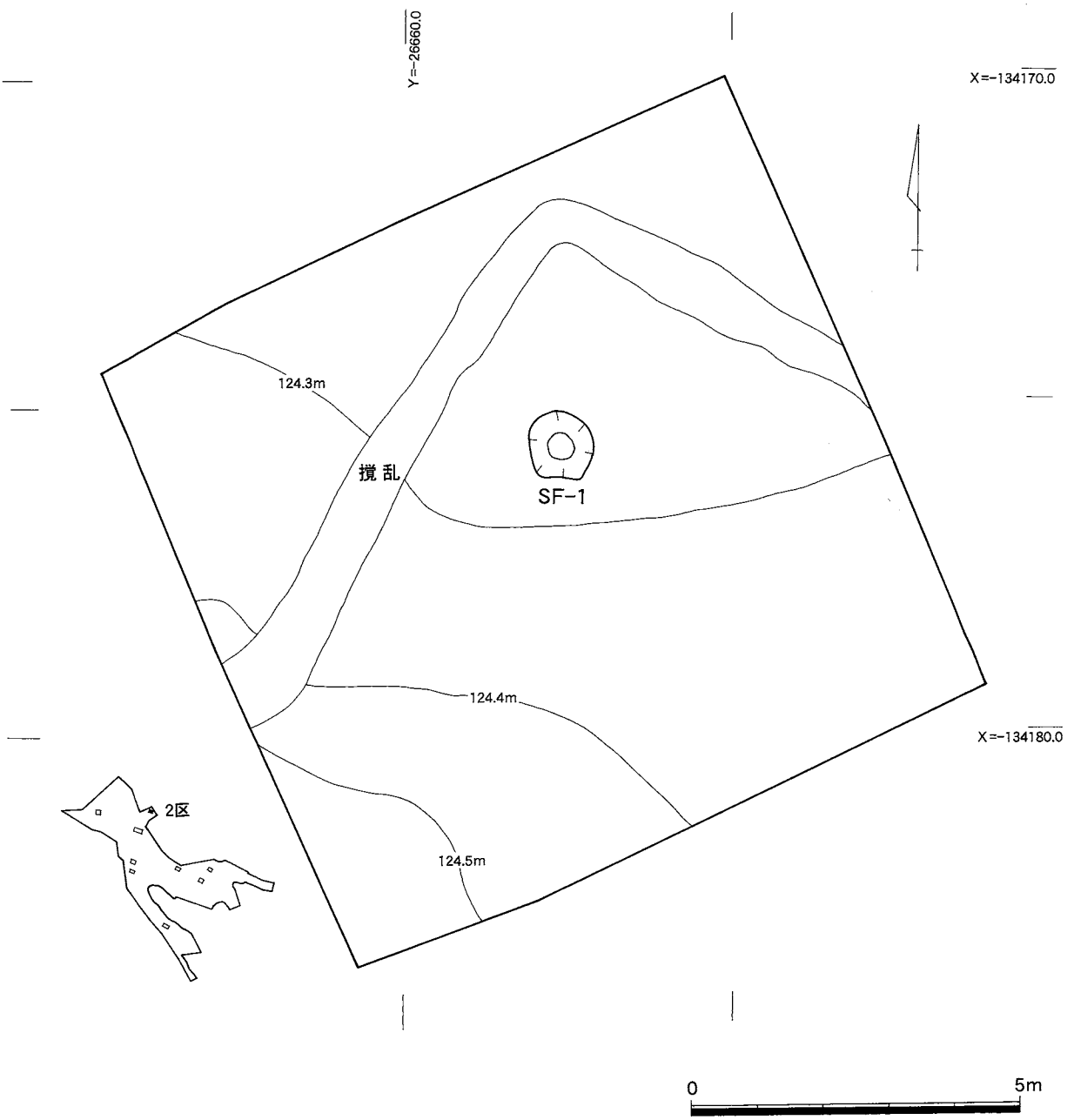


図10　吉峠遺跡２区全体図

２．２区

２区は最も北に位置する調査区である（図10）。調査区は南西から北東に向かって、なだらかに下っている。この調査区では１条の溝と土坑１基（ＳＦ－１）を検出したが、遺物は一切出土しなかった。

調査区の北半で検出された溝は幅30cm、深さ30cm程度である。しかし、遺構の覆土は表土層と同一で、開墾時あるいは耕作時のものと考えられる。

土坑は調査区の中央部で検出した。この土坑は直径80cm、検出面からの深さは30cmで、土坑の中には５～10cmの角礫と円礫が詰められていた（図11）。これらの礫は焼成を受けた痕跡が認められた。ただし、土坑の壁面や底部には焼成を受けた痕跡は見られなかった。この遺構は縄文時代に見られる集石土坑と考えられるが[2]、遺物などの出土は無かったので明確な時期は確定できない。ただし、吉峠遺跡における他の調査区では炉穴等が検出されており、これらの遺構は縄文時代早期に位置づけられている。また、

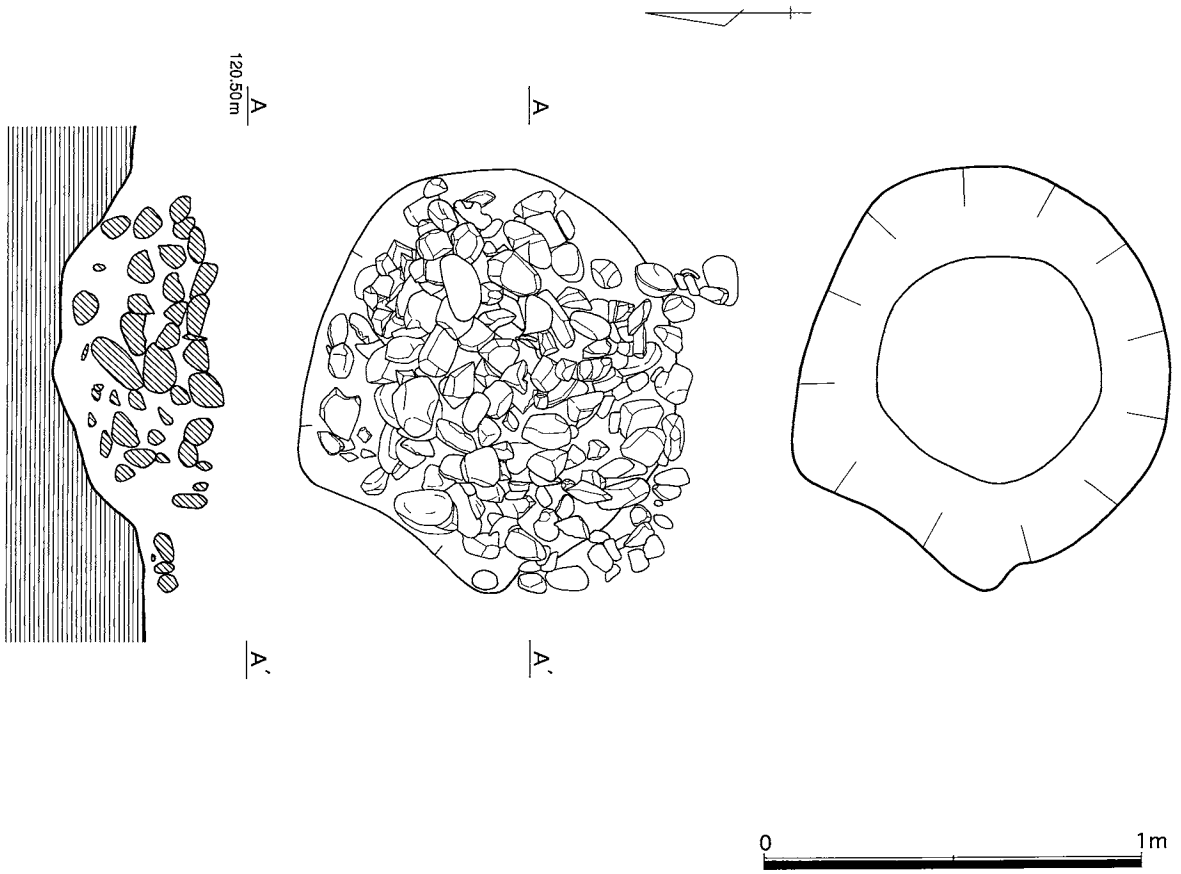


図11　２区　ＳＦ－１実測図

吉峠遺跡では縄文時代前期以降の遺構・遺物は発見されていない。憶測ではあるが、２区で検出した土坑も縄文時代早期の可能性を指摘したい。

３．３区

３区は今回調査を実施した中では最も範囲の広い調査区である（図13）。調査区は西から東に向けて、なだらかに下っている。調査区内では６基のピットを検出したが、出土した遺物は皆無であった。

３区で検出した６基の遺構の内、１基（ＳＦ－１）は内面に焼成を受けている。この遺構は東西50cm、南北45cmの円形で深さは83cmである（図12）。一般的な形状とはやや異なるが炉穴の可能性が高く[3]、縄文時代早期の遺構と考えられる。

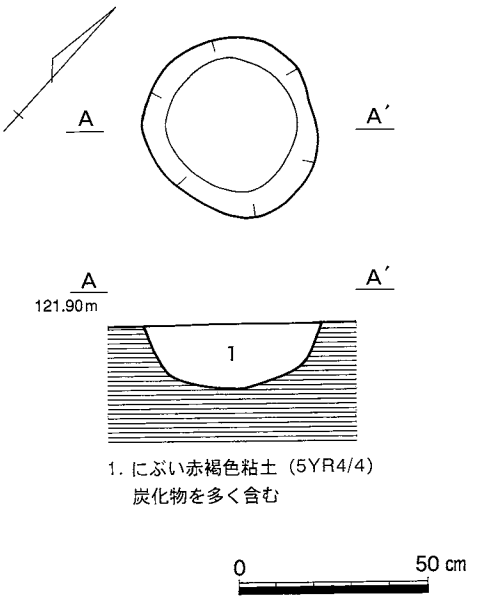


図12　３区　ＳＦ－１実測図

その他の遺構はＳＰ－１が平面楕円形で長軸55cm、短軸35cm、深さ11cmである以外は、直径20cm程度、深さ20～30cm程度の規模である。これらの遺構については時期を明言できないが、覆土の様子からＳＦ－１と時期を大きく隔てるものではないと考えたい。

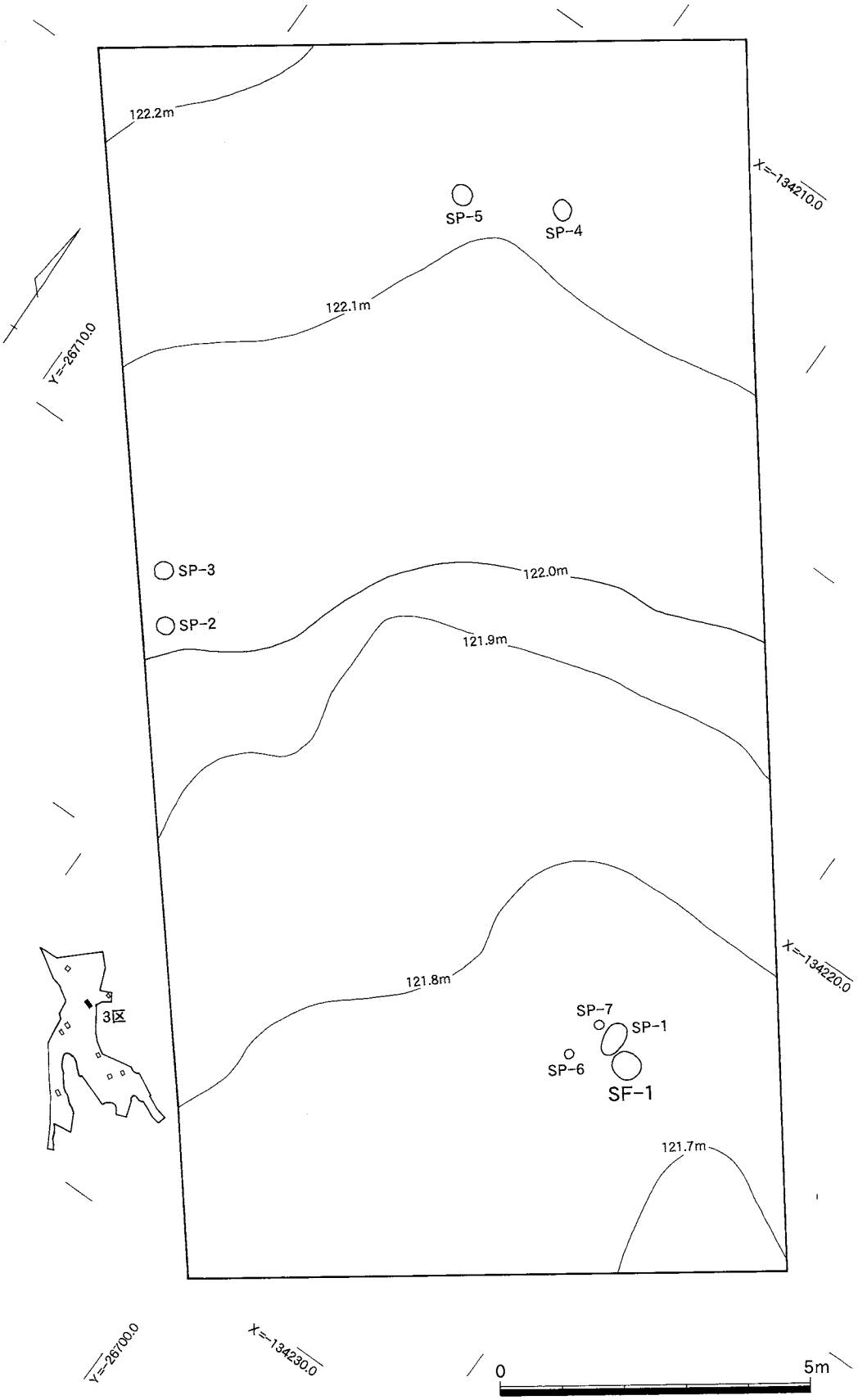


図13　吉峠遺跡３区全体図

４．４区

４区は３区の約150m南東に位置する。調査区は北西から南東に向けて、なだらかに下っている（図14）。この調査区では11基のピットを調査したが、遺物は全く出土しなかった。

検出された11基のピットはいずれも直径10～20cm、深さ10～30cmの規模であった。いずれの遺構も覆土には炭化物が含まれていたが、特にＳＰ－１とＳＰ－４では多くの炭化物が含まれていた。しかし、焼土などは存在しなかった。出土遺物も無いため、これらの遺構の時期を明言することはできない。他の調査区の例を踏まえると、これらも縄文時代の可能性が指摘できる。

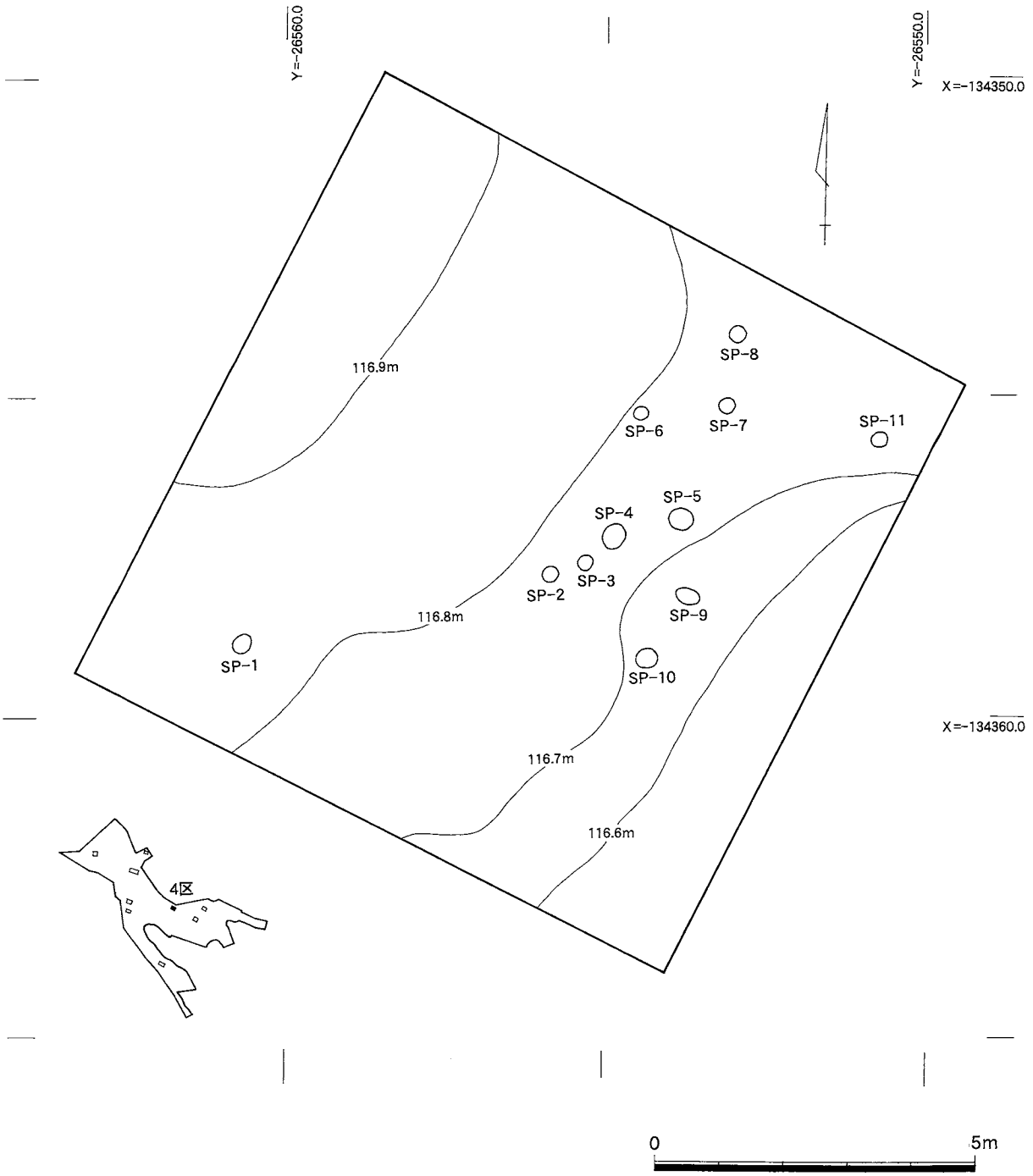


図14　吉峠遺跡４区全体図

５．５区

(1) 遺構

５区は４区の東方約80mの距離に位置する調査区である。調査区は南から北に向かって、なだらかに下っている。この調査区では３基の土坑と６基のピットを検出した（図15）。

ＳＦ－１は南北90cm、東西60cmであるが、深さは５cmと浅い土坑である。ＳＦ－２は南北75cm、東西35cm、深さ20cmの遺構である。ＳＦ－３は直径約45cm、深さ20cm、壁面には焼成を受けている。ＳＦ－３の覆土には焼土の粒子と炭化物が多く含まれていた。この遺構は炉穴と考えられ、縄文時代早期に位置づけられる。

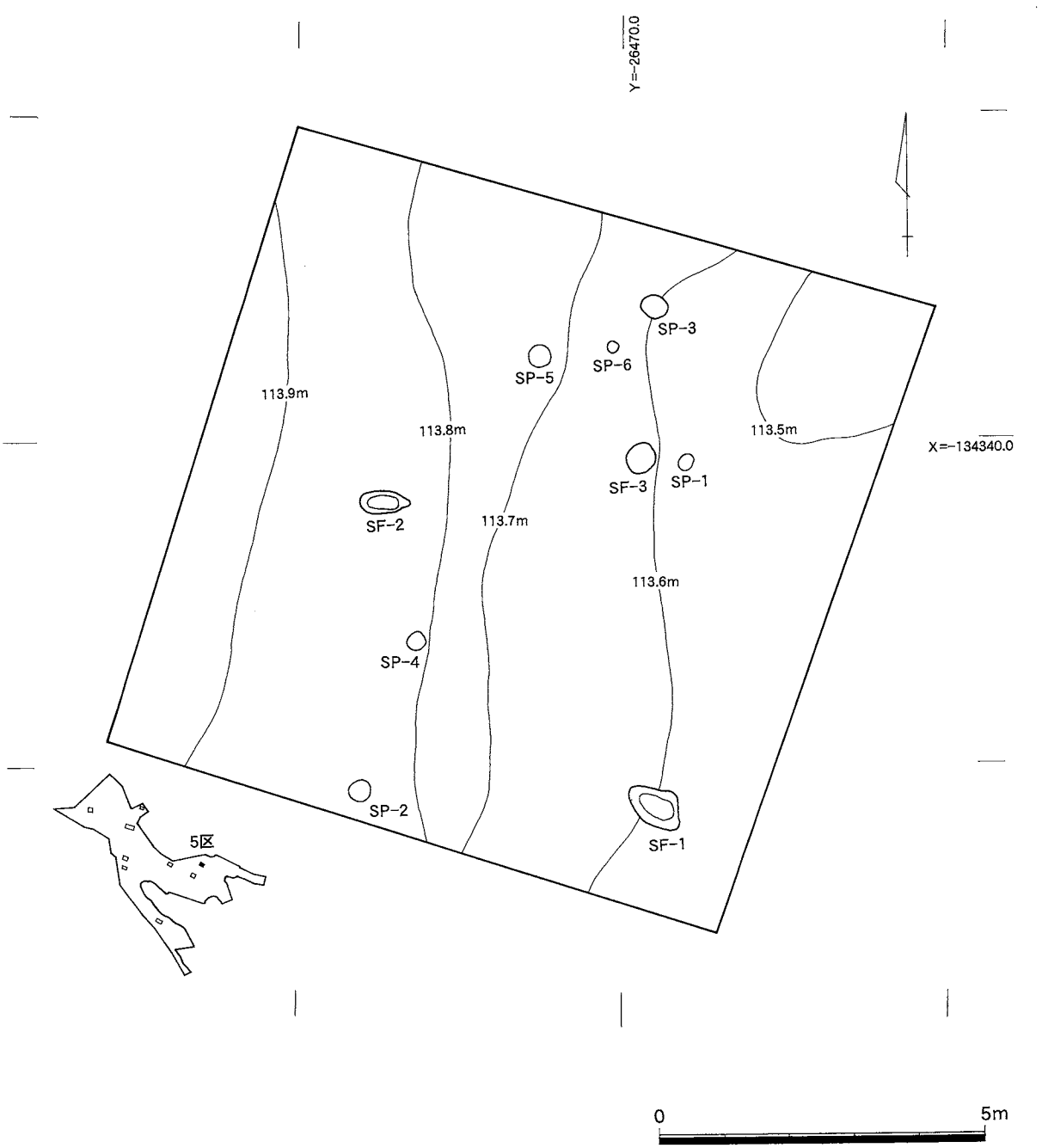


図15　吉峠遺跡５区全体図

ＳＰ－１～６はいずれも直径15～40cm、深さ15～50cmである。６基とも覆土には炭化物が含まれていたが、ＳＰ－３とＳＰ－５では特に炭化物が多く含まれていた。なお、ＳＰ－３からは縄文土器の細片が出土した。そのため、この遺構は縄文時代以降のものと言える。覆土の様子は水掛渡Ｄ古墳群や坂口千頭ヶ谷古墳等の古墳時代以降のものとは異なるため、この遺構は縄文時代の蓋然性が高いと考えられる。その他の遺構についても、覆土の様子からＳＰ－３と同時期のものと推測される。

(2) 遺物

ＳＰ－３からは縄文土器の破片が出土した。ただし、細片である上に表面の風化が著しく詳細をつかめないため、時期や型式を特定できなかった。なお、５区ではこれ以外には遺物は出土しなかった。

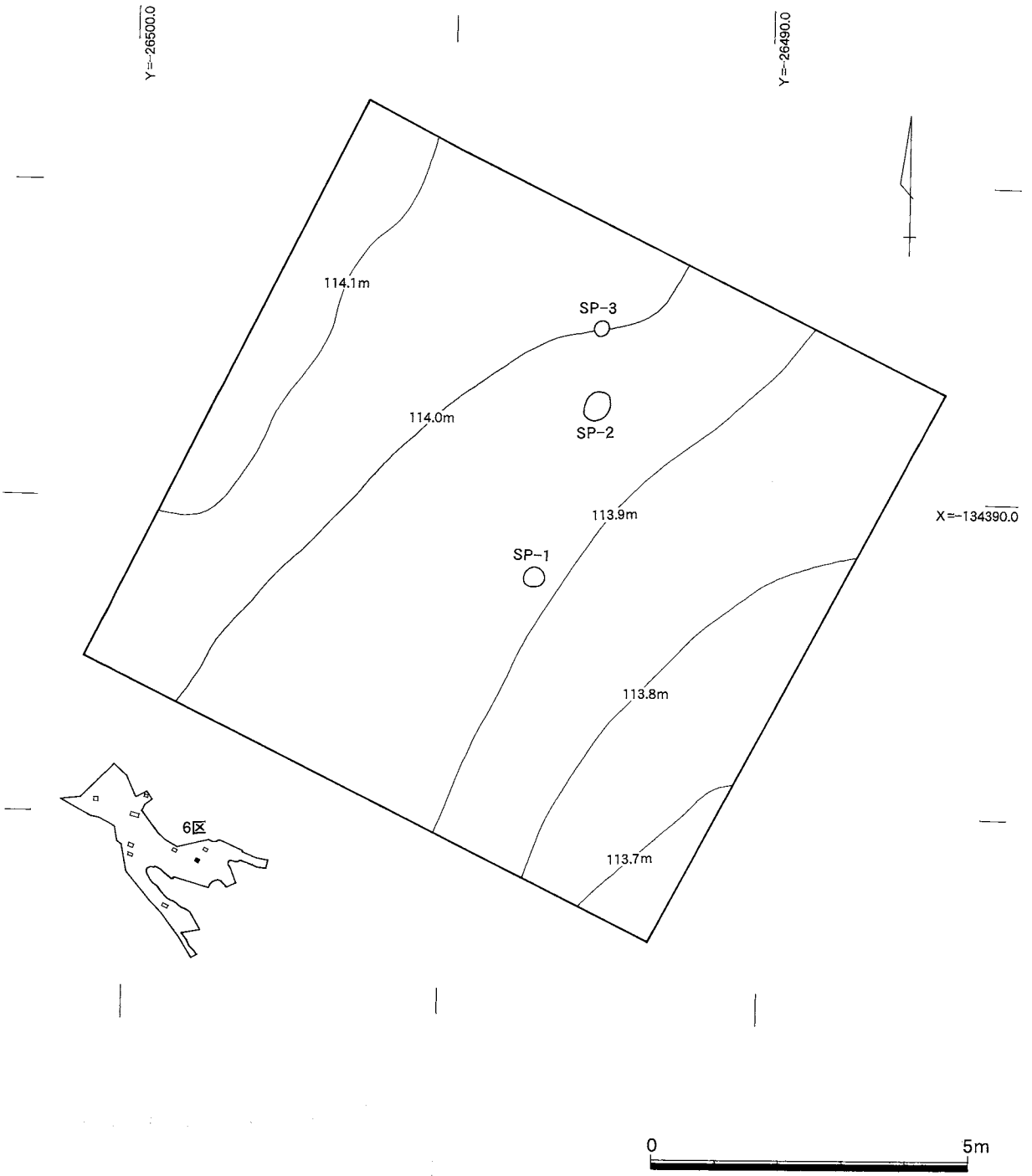


図16　吉峠遺跡６区全体図

6．6区

6区は5区の約30m南方に位置し、調査区は西から東に向けて下っている。調査の結果、3基のピットが検出されたが（図16）、遺物の出土はなかった。

ＳＰ－１は直径約30cm、深さ27cm、ＳＰ－２は長径48cm、短径40cm、深さ18cmで南北にやや長い。ＳＰ－３は直径24cm、深さ32cmの遺構である。これらの遺構の覆土にはいずれも炭化物が含まれていた。３基のピットはいずれも時期を特定する手がかりを欠くが、覆土の様子から他の調査区で検出している遺構と同時期の縄文時代に位置づけられるものと推測される。

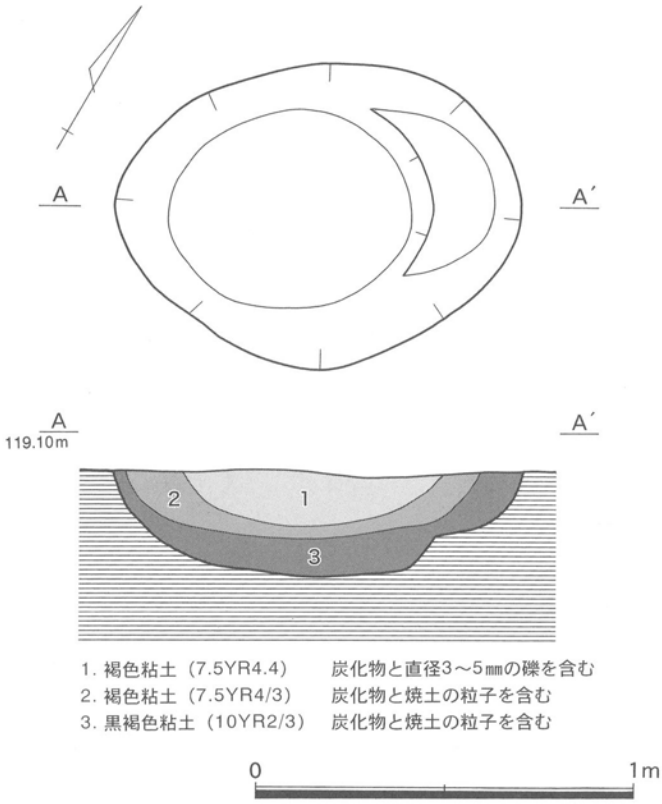


図17　7区　ＳＦ－１実測図

7．7区

7区は吉峠遺跡のほぼ中央に位置し、今回の調査では最も多くの遺構を検出した調査区である。この調査区では3基の土坑と8基のピット、1条の溝、1軒の竪穴住居跡を検出した（図19）。

ＳＦ－１は調査区のほぼ中央に位置する遺構である（図17）。東西にやや長い楕円形で規模は長径100cm、短径80cm、深さは33cmである。壁面は焼成を受けており、覆土には炭化物の他に、焼土の粒子が含まれていた。ＳＦ－２は調査区の北端部で検出した遺構である（図18）。最大幅1.2mを測る遺構である。検出面からの深さは28cmであり、覆土には炭化物が多く含まれていた。この2基の土坑は炉穴と考えられ、縄文時代早期に位置づけることができる。なお、両者とも出土遺物は無かった。

ＳＰ－１～８は調査区の南西部に集中していた。これらのピットはいずれも直径30～45cm、深さは20～35cmの規模で、覆土には炭化物と3～10cm程度の礫が極少量含まれていた。これらの遺構からは遺物が出土しなかった。時期を明言することはできないが、これらも縄文時代に属する可能性がある。

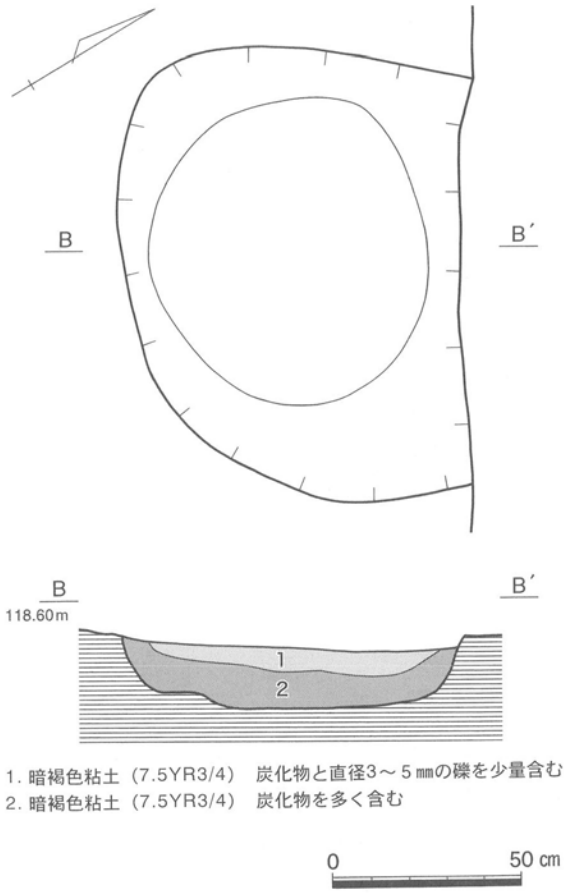


図18　7区　ＳＦ－２実測図

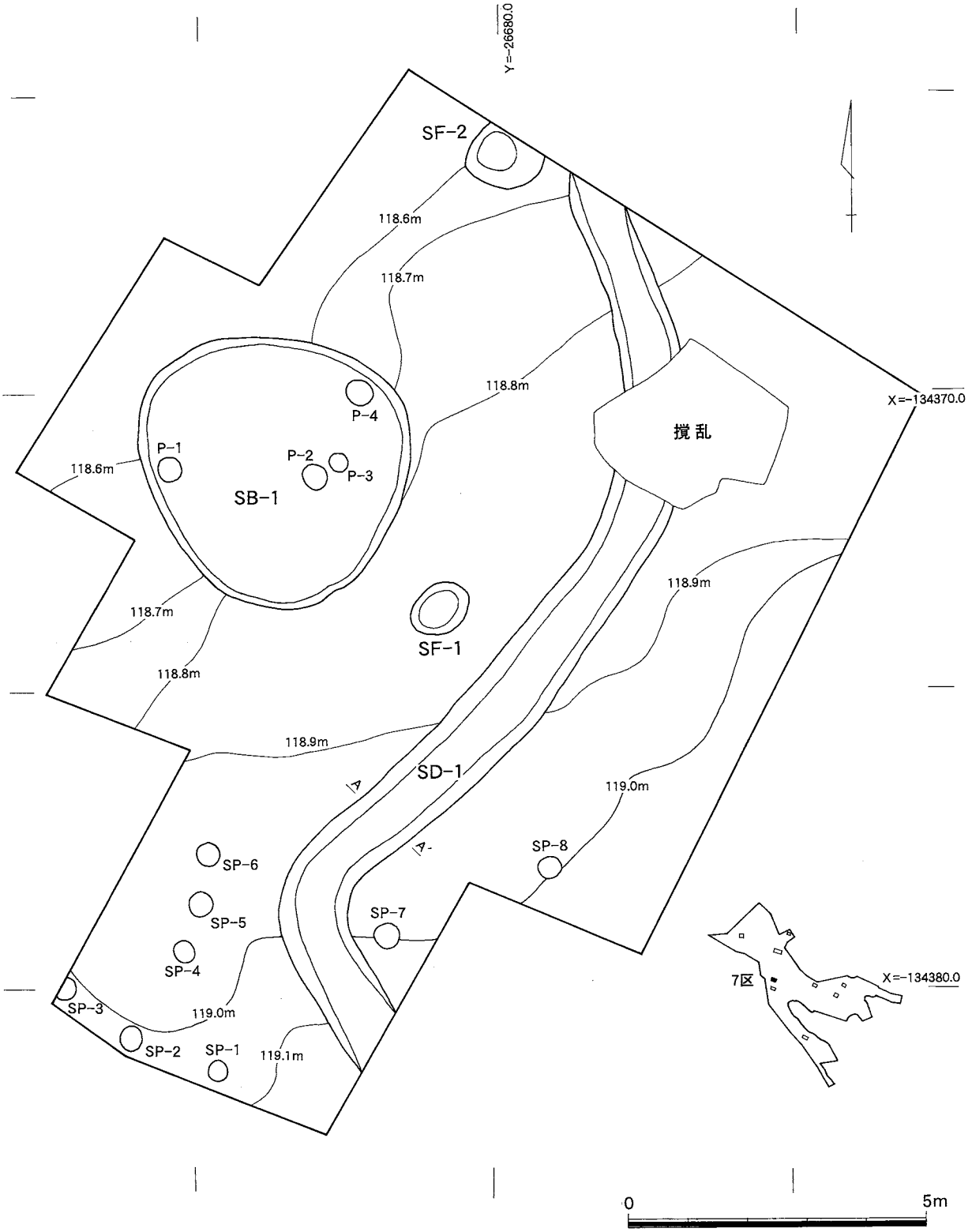


図19　吉峠遺跡７区全体図

ＳＤ－１は調査区中央部の南北を逆Ｓ字状に蛇行しながら横断する溝である。この溝の最大幅は100cmであり、深さは10cmの規模である（図21）。この遺構からも遺物は出土しなかった。時期を特定することはできないが、同調査区で検出した土坑やピットとは覆土が異なるため、縄文時代の可能性は低いと推定される。なお、確認調査時には隣接する確認トレンチにおいては、この遺構の続きを検出することはできなかった。ただし、この遺構が本来的には調査区外に続いていたことも十分考えられる。

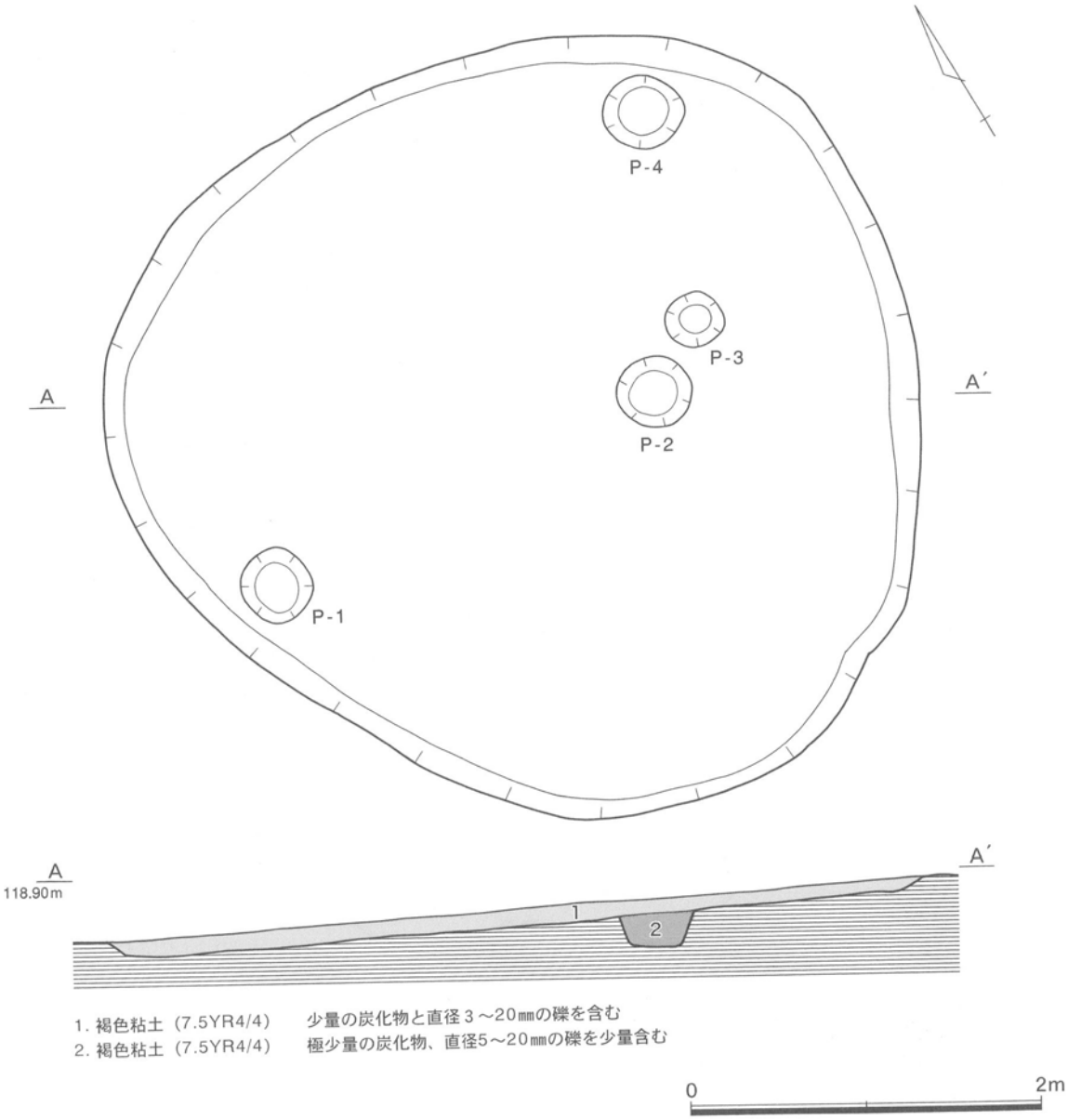


図20　７区　ＳＢ－１実測図

ＳＢ－１は調査区の北西部で検出した遺構である（図20）。この住居跡は不正形な円形の平面形態をとり、その規模は直径約4.6m、遺存する深さは15cmと浅いものであった。ＳＢ－１内には４基のピットが存在した。Ｐ－１は直径40cm、深さ27cm、覆土は焼土の粒子と多くの炭化物を含む褐色粘土である。Ｐ－２～４は直径30～40cm、深さ15～20cmで、覆土には微量の炭化物と直径３～10㎜の礫が含まれていた。これらの４基のピットの内、Ｐ－１は覆土の様子から柱穴以外の可能性も考えられる。なお、ＳＢ－１および、これに内在するピットからは遺物が出土しなかった。そのため、この竪穴住居跡の時期を確定することはできないが、周囲の遺構との関連から縄文時代早期に位置づけられる可能性がある。

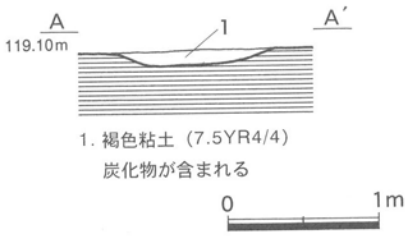


図21　７区　ＳＤ－１断面図

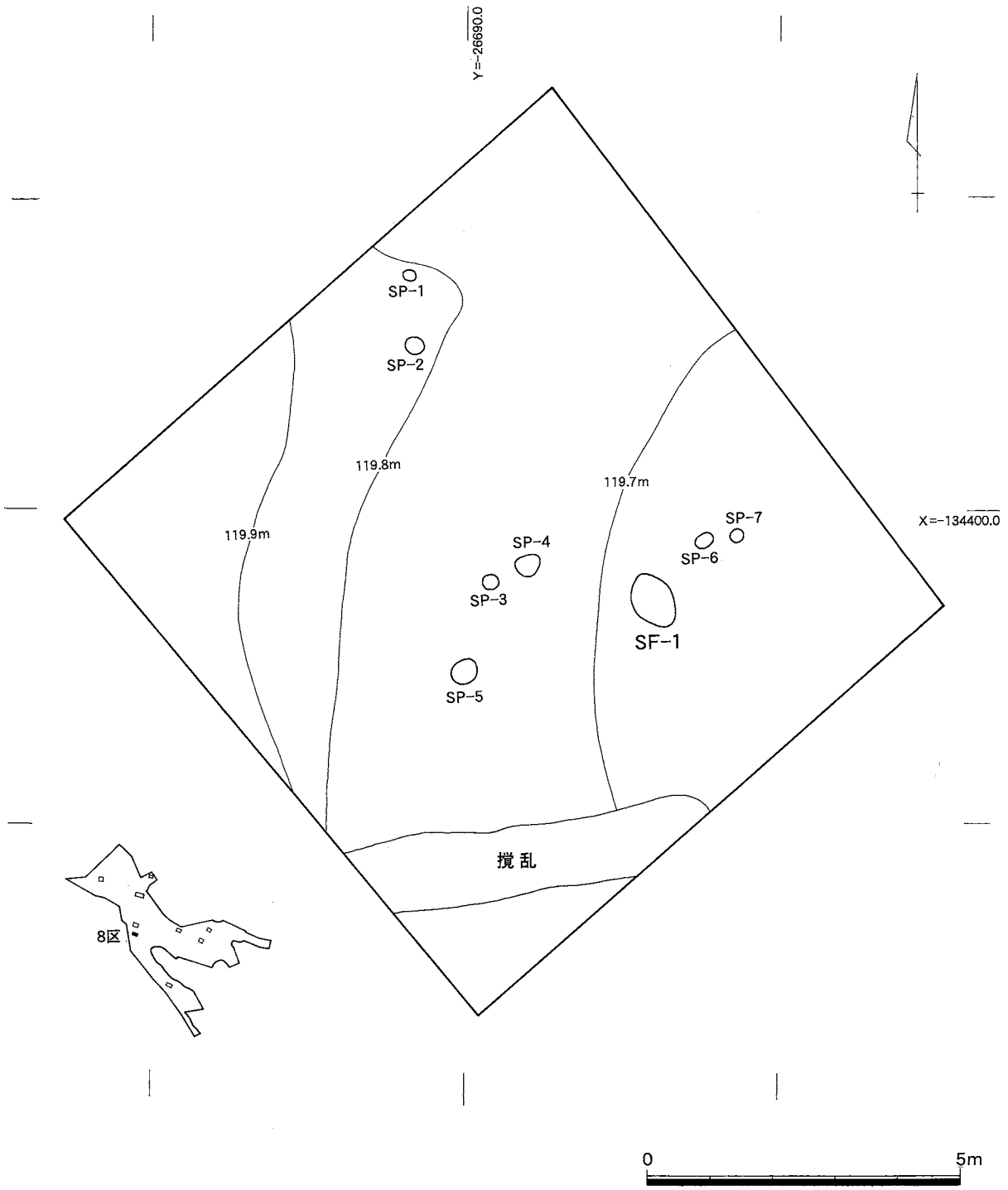


図22　吉峠遺跡８区全体図

８．８区

８区は７区の約20m南方に位置する調査区である（図22）。この調査区は西から東に向けて、なだらかに下っている。８区では１基の土坑と７基のピットを検出したが、遺物は１点も出土しなかった。

ＳＦ－１は南北にやや長く長径95cm、短径65cm、深さは20cmの規模である（図24）。覆土には炭化物が含まれ、壁面は焼成を受けていた。ＳＦ－１は炉穴と考えられ、縄文時代早期に位置づけられる。

ＳＰ－１～７は直径10～40cm、深さ20cm前後の規模である。いずれのピットにおいても覆土には炭化物が含まれていたが、ＳＰ－２とＳＰ－４では焼土の粒子も含まれていた。７基のピットに関しては時期を特定する手がかりを欠くが、覆土の様子からはＳＦ－１と同時期の可能性が考えられる。

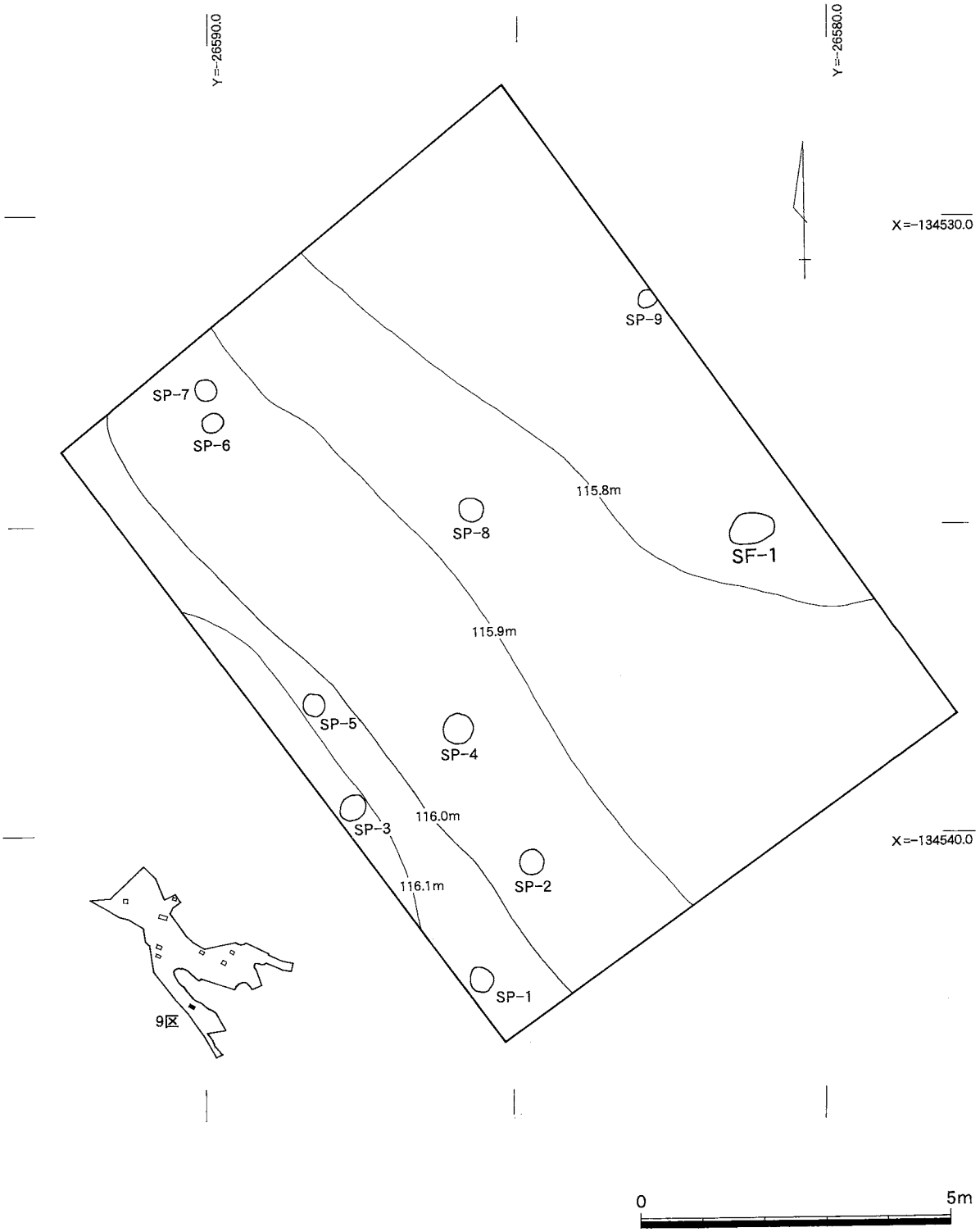


図23　吉峠遺跡９区全体図

９．９区

９区は８区の南南東約180mに位置し、今回調査を実施した調査区の中では、最も南に所在する調査区である。この調査区は南西から北東に向けて、なだらかに下っている。９区では９基のピットと１基の土坑を検出した（図23）。しかし、遺物は出土しなかった。

ＳＰ－１～９の規模は直径30～50cm、深さ10～30cmである。いずれのピットも覆土には炭化物が含まれており、ＳＰ－１では焼土の粒子も含まれていた。これらのピットの時期を直接うかがう手がかりは

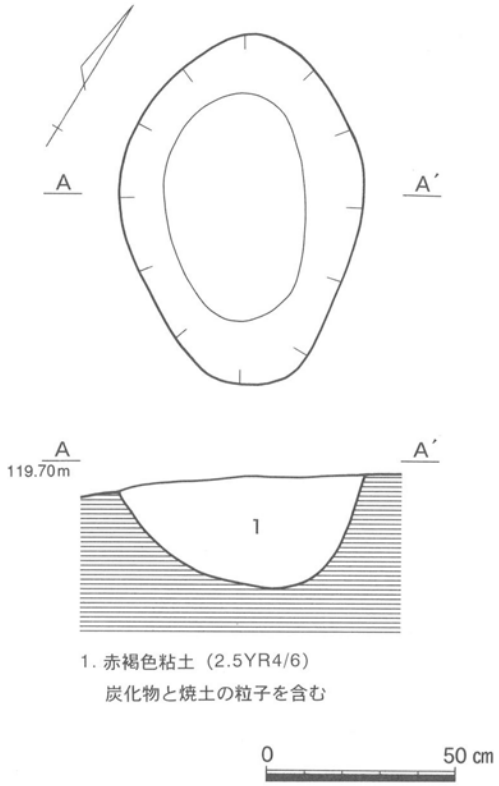


図24　８区　ＳＦ－１実測図

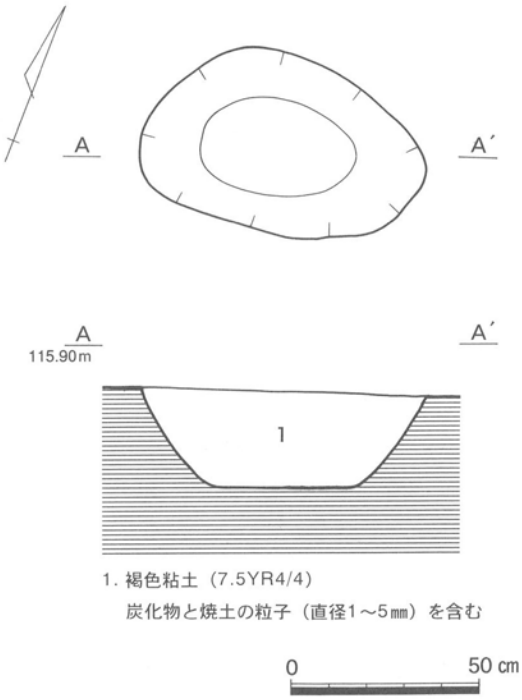


図25　９区　ＳＦ－１実測図

ないが、覆土の様子からは他の調査区と同様に縄文時代の遺構である可能性が考えられる。

ＳＦ－１は東西70㎝、南北45㎝の土坑で、深さは25㎝である（図25）。壁面は焼成を受けており、覆土には炭化物と焼土の粒子が含まれていた。この遺構は炉穴と考えられ、縄文時代早期に位置づけられる。

10. 確認調査時の出土遺物

吉峠遺跡では確認調査における表土除去時に須恵器の破片が出土した。これらの大半はＴｒ－０とＴｒ－18、特にその交点付近からの出土であった（図26）。２と３は高坏、４と５は坏身、６は甕、７は坏蓋である（図27）。図示した７点以外にも数個体分の須恵器の破片が出土したが、細片であり図示し得るものではなかった。また、８の剥片は表面採取したものである。

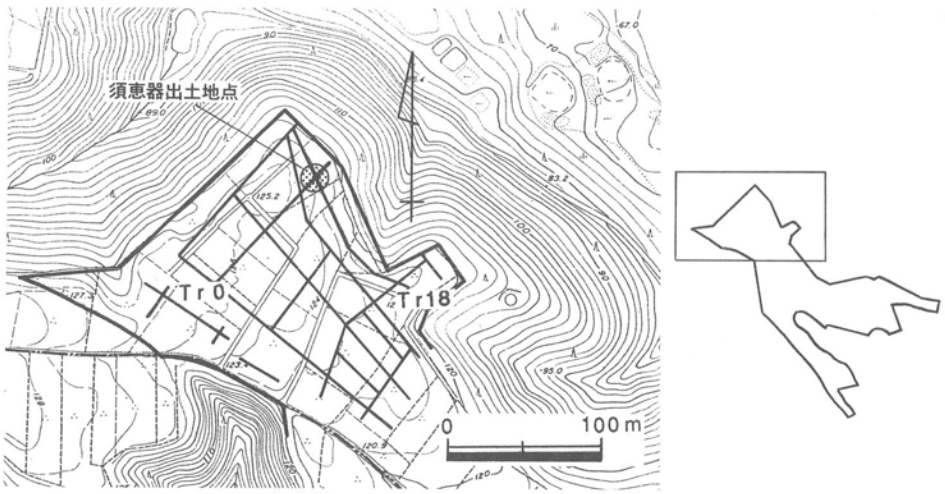


図26　確認調査時の遺物出土地点

２はＴｒ－０とＴｒ－18の交点付近から出土した須恵器の高坏で、坏部と脚部の約２/３を欠損していた。口径は13.9㎝、器高は11.9㎝、焼成は良好で灰白色を呈する。坏部の下半が回転ヘラケズリされる以外は横ナデにより調整される。

３はＴｒ－０とＴｒ

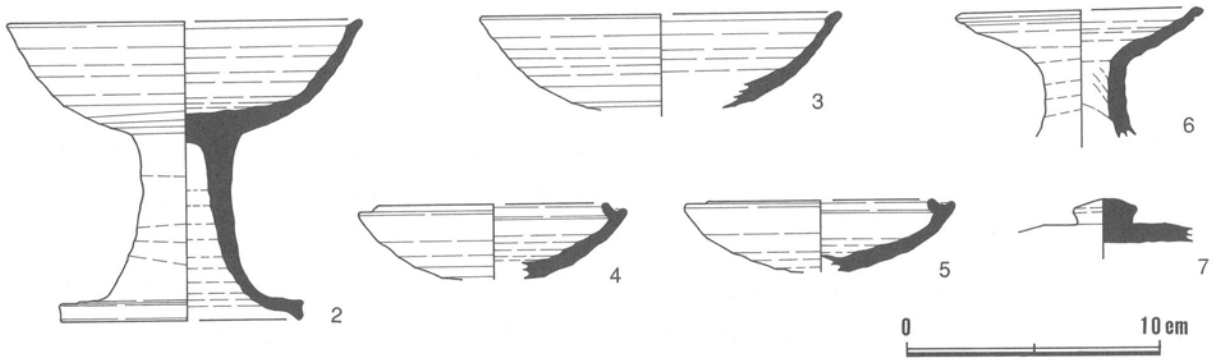


図27　吉峠遺跡出土遺物１

－18の交点付近から出土した須恵器である。坏部の一部のみの残存であるが、口縁部の類似性から２と同じ高坏であると考えられる。口径は14.0cm、焼成は良好で灰色を呈する。調整は外面下半を回転ヘラケズリする以外は横ナデが行われている。

４と５は共に、Ｔｒ－０とＴｒ－18の交点付近から出土した須恵器の坏身である。残存状況は全体の約１/３程度である。４は口径8.8cm、器径10.6cm、器高2.9cm、５は口径8.8cm、器径10.7cm、器高2.8cmに復原でき、共に立ち上がりは著しく内傾する。焼成は良好で４は青灰色、５は灰色を呈する。両者とも外面底部を回転ヘラケズリ、その他は横ナデによる調整が行われる。

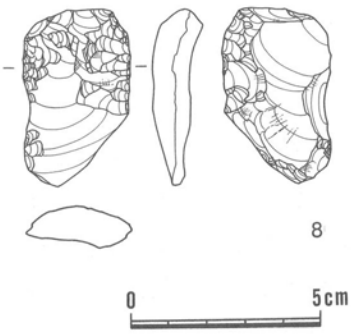


図28　吉峠遺跡出土遺物２

６はＴｒ－０から出土した須恵器である。口縁部と頸部上半が残存したのみであるが、瓶であると考えられる。口径は9.0cm、焼成は良好で灰白色を呈する。口縁部の内面には自然釉が付着する。

７はＴｒ－０とＴｒ－18の交点付近で表面採取した須恵器の坏蓋であるが、頂部と摘みが残存するのみである。焼成は良好で青灰色を呈する。

２～６はＴＫ217～46型式並行期に位置づけられ[4]、７世紀中葉前後の時期のものと言える。７はＴＫ48～ＭＴ21型式並行期に位置づけられ、７世紀後葉～８世紀初頭に時期を求めることができる。

８はＴｒ－０で表面採取した剥片である。この剥片の石材は頁岩である。

註

1　石鏃については鈴木1983を参照した。
2　集石土坑については谷口1986を参照した。
3　当研究所職員　富樫孝志の教示による。なお、炉穴の定義は諸説あるが、ここでは石川1985にならい、壁面あるいは底面に焼成を受けた遺構を炉穴として捉えた。
4　須恵器の型式は田辺1981に基づく。ただし、吉峠遺跡出土の須恵器は大阪府南部古窯跡群で生産されたものではないため、～型式並行期と表記する。また、本文中ではＴＫ～、ＭＴ～等の略号を使用する。

表５　吉峠遺跡出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	器径(cm)	備考	写真図版
27	2	Ｔｒ－０と Ｔｒ－18の交点	須恵器	高坏	５Ｙ７/１(灰白色) ５Ｙ３/１(オリーブ黒色)	13.9	11.9	13.9	１/３残存、脚部径9.3cm	34
	3	Ｔｒ－０と Ｔｒ－18の交点	須恵器	高坏	Ｎ５/(Ｂ)(灰色)	14.0	(4.1)	14.0	１/７残存	34
	4	Ｔｒ－０と Ｔｒ－18の交点	須恵器	坏身	５Ｂ５/１(青灰色)	(8.8)	(2.9)	(10.6)	１/３残存	34
	5	Ｔｒ－０と Ｔｒ－18の交点	須恵器	坏身	7.5Ｙ５/１(灰色)	(8.8)	(2.8)	(10.7)	１/４残存	34
	6	Ｔｒ－０	須恵器	瓶	５Ｙ７/１(灰白色)	9.0	(5.2)	－	１/４残存、頸部径(3.2cm)	34
	7	Ｔｒ－０と Ｔｒ－18の交点	須恵器	坏蓋	５Ｂ６/１(青灰色)	－	(1.7)	－	摘み部のみ残存、摘み部径2.5cm	－

第３節　吉峠遺跡のまとめ

吉峠遺跡の本調査で検出した遺構はピットと土坑、竪穴住居跡、集石土坑、溝である。土坑の中には壁面や底面に焼成を受けたものが見られ、これは炉穴と考えられる遺構である。炉穴は３区、５区、７区、８区、９区で検出した。出土遺物は皆無であるが、縄文時代早期に位置づけられる遺構である。

炉穴以外では２区で検出した集石土坑が注目できる。この集石土坑は用礫が土坑底部まで隈無く充填されていた。また、土坑は焼成を受けた痕跡や底部に付随施設は無いという特徴を持つ。谷口1986に基づくと１種ａ類イに分類される特徴である。このタイプは関東地方南西部・中部地方では縄文時代早期・前期・中期に集中する傾向が指摘されており、２区で検出された集石土坑もこの時期のものと推測される。ただし、時期を下る例も存在するため確証を得るものではない。なお７区では１軒の竪穴住居跡と１条の溝を検出した。竪穴住居跡は直径約4.6mの不正形なものであった。出土遺物が無いため、時期を確定できないが、周囲の状況から縄文時代早期の可能性も考えられる。溝は覆土の様子から縄文時代に遡るものではないと言えるが、時期を特定することはできない。

遺物は石鏃と縄文土器の細片が各１点出土したに留まる。石鏃は縄文時代に位置づけられるが、詳細な時期を特定することはできない。縄文土器の破片は摩滅が著しく型式や時期を確定するにはことはできないが、早期に位置づけられる可能性がある[1]。

なお、遺物は確認調査時にもＴｒ－０とＴｒ－18の交点付近から集中して出土した。出土したのは須恵器と剥片である。遺物出土地点を中心として確認トレンチの拡張を試みたが、遺構は検出できなかった。この付近は開墾や耕作による削平が著しく、そのため遺構が完全に削平されたものと考えられる。出土した須恵器は７世紀中葉～８世紀初頭のもので、おそらく付近に古墳が存在したのであろう。

註

1　渋谷昌彦氏の御教示による。

表６　吉峠遺跡遺構計測表

地区名	遺構名	径（cm）		深さ(cm)	覆　　土	
1区	ＳＰ－１	直径25	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が多く混ざる。
	ＳＰ－２	直径30	－	20	明褐色粘土(7.5ＹＲ５/８)	少量の炭化物と径10～100mmの礫を含む。
	ＳＰ－３	直径30	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径５mm程度の礫を含む。
	ＳＰ－４	直径25	－	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－５	直径20	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	径３～５mm程度の礫を少量含む。
	ＳＰ－６	直径25	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径３～10mm程度の礫を含む。
	ＳＰ－７	直径20	－	35	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物を含む。
	ＳＰ－８	直径20	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の炭化物と径３～10mmの礫を含む。
	ＳＰ－９	直径25	－	15	明褐色粘土(7.5ＹＲ５/６)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－10	直径30	－	35	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径３～10mmの礫を少量含む。
3区	ＳＰ－１	長径55	短径35	30	赤褐色粘土(5ＹＲ４/６)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－２	直径30	－	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－３	直径30	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物を多く含む。
	ＳＰ－４	直径35	－	25	にぶい赤褐色粘土(５ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－５	直径35	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－６	長径15	短径15	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－７	直径15	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。

地区名	遺構名	径（cm）		深さ（cm）	覆土	
4区	ＳＰ－１	長径30	短径25	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	多くの炭化物と径３～20mmの礫が少量含まれる。
	ＳＰ－２	直径25	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径３mm程度の礫を極少量含む。
	ＳＰ－３	直径25	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物を含む。
	ＳＰ－４	長径40	短径35	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の径５～30mmの礫と炭化物を多く含む。
	ＳＰ－５	長径40	短径35	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径３～20mmの礫を少量含む。
	ＳＰ－６	直径20	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径５mm程度の礫を極少量含む。
	ＳＰ－７	長径25	短径25	10	明褐色粘土(7.5ＹＲ５/６)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－８	直径25	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－９	長径40	短径25	10	明褐色粘土(7.5ＹＲ５/６)	極少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－10	直径35	－	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径５～20mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－11	直径25	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物を含む。
5区	ＳＰ－１	長径25	短径20	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の炭化物を含む。
	ＳＰ－２	長径35	短径35	35	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物を含む。
	ＳＰ－３	長径45	短径35	45	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の径３～20mm礫と多くの炭化物を含む。縄文土器片出土。
	ＳＰ－４	直径30	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	径３mm程度の礫を少量含む。
	ＳＰ－５	長径35	短径30	35	暗褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が多く、径30mm前後の礫を含む。
	ＳＰ－６	直径15	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	少量の炭化物を含む。
	ＳＦ－１	長径50	短径20	5	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物を多く含む。
	ＳＦ－２	長径75	短径35	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が含まれる。
	ＳＦ－３	長径45	短径35	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	少量の径10～30mmの礫と多くの炭化物、焼土の粒子を含む。
6区	ＳＰ－１	長径35	短径30	25	赤褐色粘土(5ＹＲ４/６)	炭化物が含まれる。
	ＳＰ－２	長径50	短径40	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	少量の炭化物と径３mm前後の礫を含む。
	ＳＰ－３	直径25	－	30	明褐色粘土(7.5ＹＲ5/8)	炭化物を含む。
7区	ＳＰ－１	直径30	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	極少量の炭化物と径５～20mmの礫を含む。
	ＳＰ－２	長径40	短径35	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径３～30mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－３	直径40	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径５～20mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－４	直径35	－	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径５～10mmの礫を少量含む。
	ＳＰ－５	直径40	－	35	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径３～50mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－６	直径40	－	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径３～30mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－７	直径45	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径３～10mmの礫を極少量含む。
	ＳＰ－８	直径40	－	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径５～30mmの礫を極少量含む。
	SB-1-P-1	長径45	短径40	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物が多く混ざる。焼土の粒子が混ざる。
	SB-1-P-2	－	－	－	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径５～30mmの礫が含まれる。
	SB-1-P-3	長径45	短径40	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物と径５～20mmの礫が少量混ざる。
	SB-1-P-4	長径35	短径30	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物と少量の径３～10mmの礫が混ざる。
	SB-1-P-5	長径45	短径45	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	極少量の炭化物と径３～10mmの礫が混ざる。
8区	ＳＰ－１	直径20	－	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が多く混ざる。
	ＳＰ－２	直径30	－	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	極少量の炭化物と焼土の粒子が混ざる。
	ＳＰ－３	直径25	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が含まれる。
	ＳＰ－４	長径45	短径40	30	にぶい赤褐色粘土(５ＹＲ４/４)	炭化物と焼土が混ざる。
	ＳＰ－５	長径45	短径40	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物の径５～30mmの礫が極少量含まれる。
	ＳＰ－６	長径30	短径20	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物と径３～10mmの礫が極少量含まれる。
	ＳＰ－７	直径20	－	10	褐色粘土(7.5ＹＲ４/６)	炭化物が含まれる。
9区	ＳＰ－１	長径40	短径40	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物が多く混ざる。径５～10mmの礫と焼土の粒子が極少量混ざる。
	ＳＰ－２	直径40	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と焼土の粒子が混ざる。
	ＳＰ－３	長径50	短径40	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物が含まれる。
	ＳＰ－４	直径50	－	15	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物が含まれる。
	ＳＰ－５	長径40	短径35	30	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	極少量の炭化物が含まれる。
	ＳＰ－６	長径35	短径30	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径３～10mmの礫が極少量含まれる。
	ＳＰ－７	長径35	短径35	20	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と径10～50mmの礫が含まれる。
	ＳＰ－８	直径40	－	35	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物が多く含まれる。
	ＳＰ－９	長径30	短径30	25	褐色粘土(7.5ＹＲ４/４)	炭化物と焼土の粒子が含まれる。

第４章　水掛渡Ｄ古墳群

第１節　調査の概要

水掛渡Ｄ古墳群は平成12年度における静岡空港関連遺跡Ｂ地点の確認調査で発見された古墳群である。この古墳群は丘陵先端に近い平坦面に立地し、その標高は約140mである。谷を隔てた西隣の尾根には水掛渡Ｃ古墳群が、一段低い標高約60mの段丘上には水掛渡Ａ・Ｂ古墳群が存在する。

今回、調査を実施した古墳は14基であった。墳丘が判明するものは、いずれも円墳で周溝が巡っていた。14基の古墳の主体部は全て横穴式石室であった。副葬品としては須恵器や玉類をはじめ、鉄鏃や大刀等が出土した。出土した遺物からこの古墳群は７世紀中葉から８世紀初頭のものといえる。

また、古墳の他には縄文時代の遺構と遺物が調査区内に存在した。遺物の多くは縄文時代早期のものである。ただし、少量ながらも中期や晩期の遺物も出土した。次節以下に調査の成果を述べるが、始めに古墳の調査について記載し、次にそれ以外の遺構・遺物について記すこととしたい。

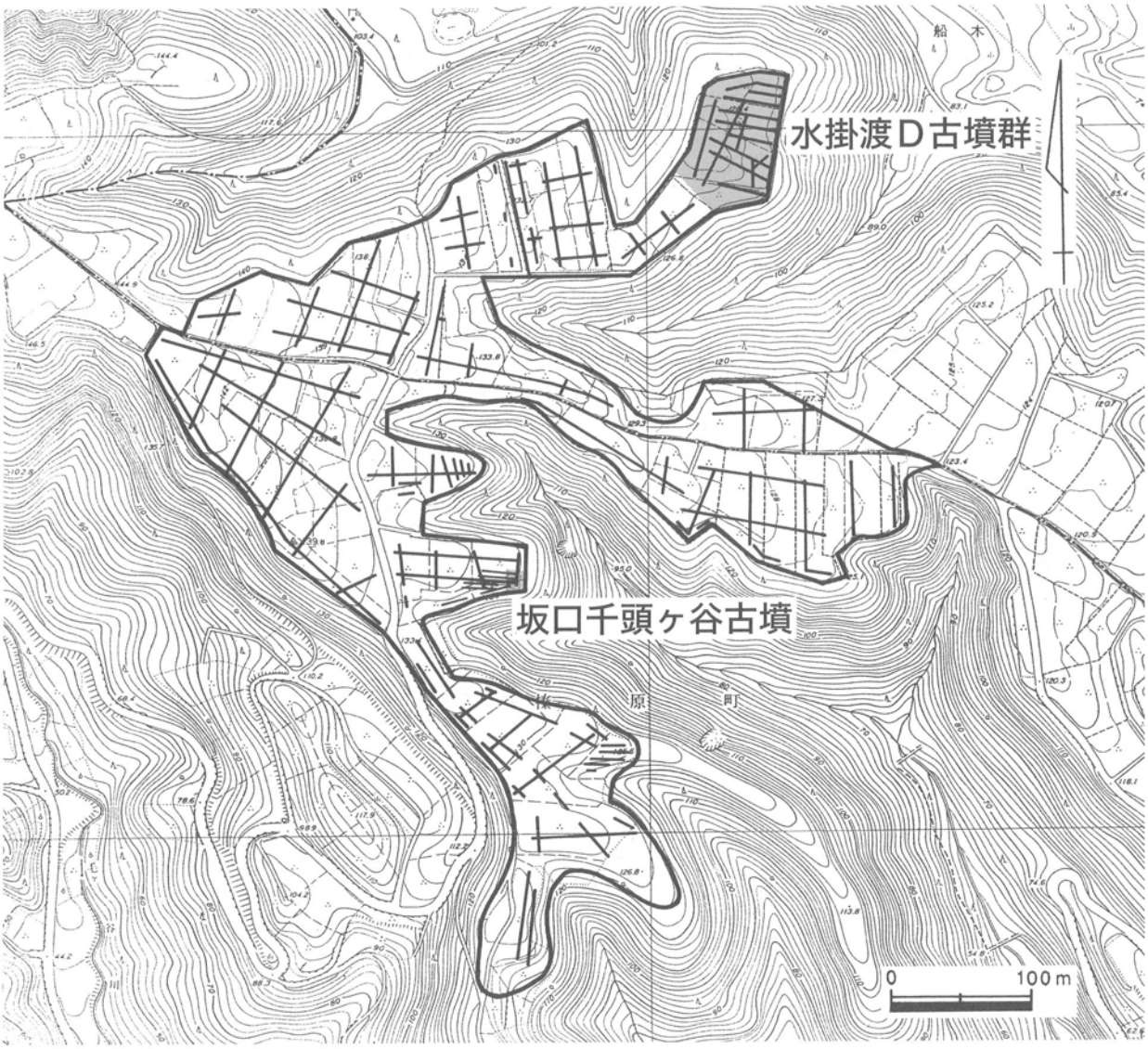


図29　Ｂ地点確認トレンチの設定状況と水掛渡Ｄ古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳の位置

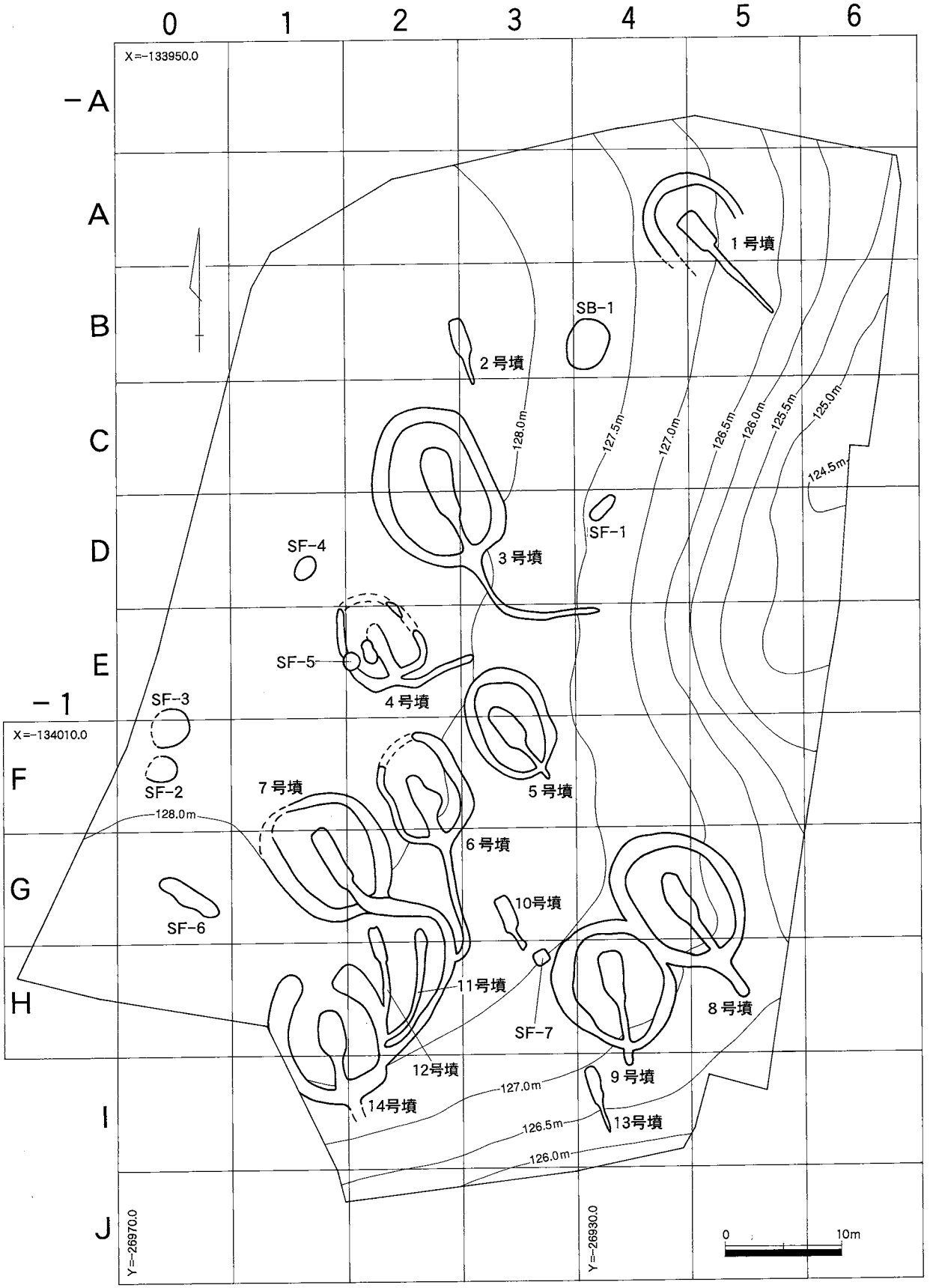


図30　水掛渡D古墳群全体図

第２節　古墳時代

水掛渡Ｄ古墳群では横穴式石室を主体部に持つ古墳を14基検出した。14基の古墳のうち墳形が判明するものはいずれも円墳であり、各古墳の石室開口部からは墓道がのびていた。６号墳・７号墳・11号墳・12号墳・14号墳の５基は墓道や周溝が結びつく様子が鮮明であった。主な出土遺物は須恵器であるが、装身具や武器が副葬されていた古墳も見られる。なお、遺物は周溝や墓道からも出土した。以下に調査の成果を古墳別に記す。

１．１号墳

(1)　墳丘と外部施設（図31）

古墳の位置と残存状況　１号墳は古墳群の中では最も北に位置する古墳である。墳丘は開墾により既に削平されていたが、周溝の一部は残存していた。主体部からは南東方向にのびる墓道も検出した。

墳形と規模　周溝の残存部から、この古墳は円墳であることが判明した。東西が約6.6mであるのに対し、南北は7.0m程度と推定される。１号墳は南北がやや長い楕円形となっている。

周溝　周溝は墳丘の西側、北側と東側で確認できたが、南東方向では検出されなかった。しかし、これは削平による影響が考えられ、元来は周溝が全周していたと推測される。周溝の最大幅は約1.4mで、深さは最深部で0.4mである[1]。

墓道　主体部である石室開口部からは墓道がのびていた。墓道は南東方向に向けてなだらかに下っており、8.1mの長さが検出できた。墓道の幅は石室開口部と接するところで0.7m、深さは同地点で0.2mであるが、石室から遠ざかるにつれて幅と深さを減じていく。

(2)　主体部（図32・33）

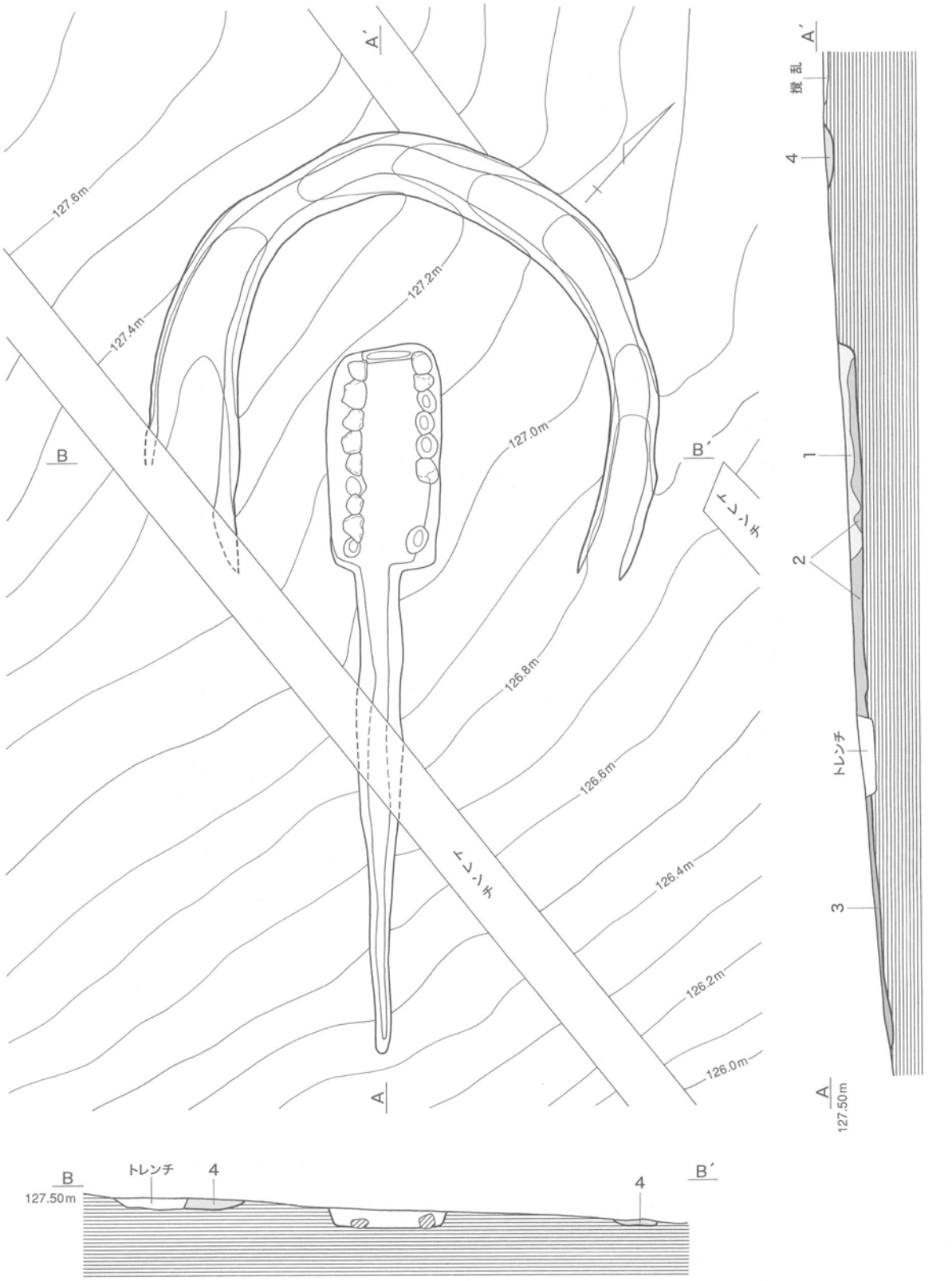
残存状況と形状　主体部には横穴式石室が採用されていた。石室内は撹乱が一部床面にまで達し、全ての奥壁と大半の側壁は除去されていた。石室の残存状況としては側壁の基底石と床面の敷石を残す程度である。開口部付近の石材がほぼ抜き取られていたため断定はできないが、石室形態は無袖式になると考えられる。玄室の平面形態は石室中央部がやや膨らむものの長方形と捉えることができる。石室は主軸[2]をＮ－40°－Ｗに取り、南東方向に開口部を持つ。床面の標高[3]は129.55mである。

規模　石室規模は全長が3.6mである。幅は奥壁推定位置で0.8m、開口部も0.8m前後と推定される。最大幅は奥壁推定位置から1.7m地点で0.9mである。残存高は床面より測り0.5mである。

床面の状態　石室床面には礫が敷設されていた。敷石の範囲は奥壁から約1.9m地点までであり、使用されるのは0.3m程度と0.1m程度の円礫と角礫である。石室開口部側の約1.5mの範囲は敷石が認められなかった。この付近は撹乱が床面まで達していたため、敷石が除去された可能性もある。しかし、水掛渡古墳群における他例でも石室開口部付近に敷石を施さない例は多く[4]、１号墳も同様であった蓋然性が高い。

閉塞状況　閉塞は墓道が石室に接する部分でなされている。1.0mの範囲で５～30cm程度の円礫と角礫の自然石を使用して不規則に積み上げられている。残存するその高さは0.3mである。

使用石材　側壁は円礫の自然石を使用している。基底石は横積みを主体としている様子を把握できるが、２段目以上については残存しないため不明である。敷石と閉塞石には円礫と角礫の自然石が併用される。奥壁は残存しないが、石材の抜き取り跡から判断すると、基底石には石室幅と成りえる１石が広口積みされていたようである。



1．暗褐色粘土（10YR3/4）　炭化物や直径2～5㎜の礫を多く含む撹乱層
2．褐色粘土（7.5YR4/4）　石室埋土　縄文土器や剥片が混入する
3．褐色粘土（7.5YR4/4）　墓道埋土
4．褐色粘土（10YR4/6）　周溝埋土　縄文土器や剥片が混入する

0　5m

図31　水掛渡Ｄ１号墳墳丘図

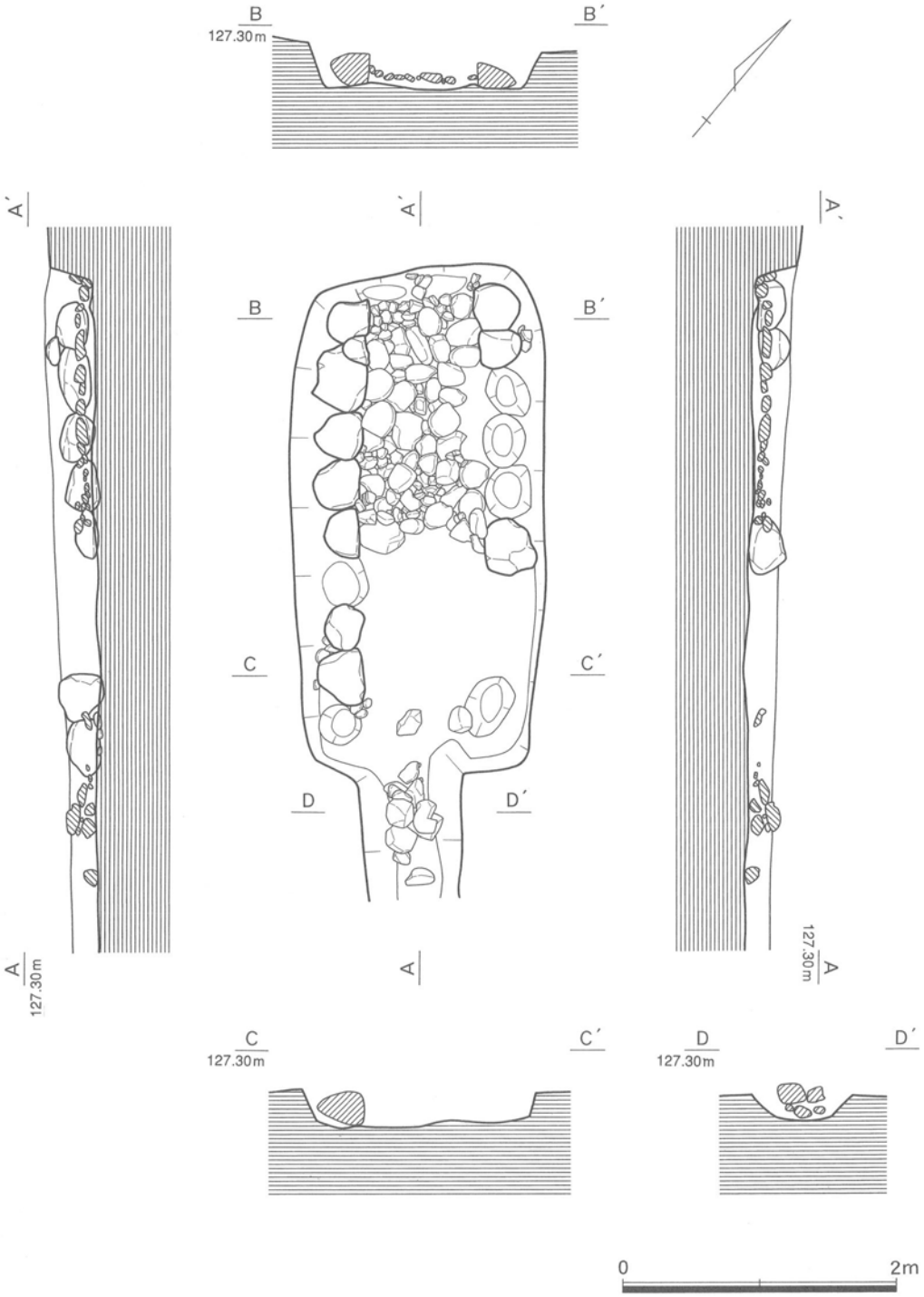


図32　水掛渡Ｄ１号墳石室展開図

掘り方　掘り方は長方形の平面形状を呈し、その規模は全長3.7m、最大幅1.9mである。石室床面はほぼ水平で、そのまま墓道に移行し床面に段差などの造作は見られない。

(3)　出土遺物

遺物の出土状況（図33）　古墳に関わる遺物としては須恵器が石室内から出土した。出土した須恵器は平瓶が１点と坏身が１点である。共に床面からやや浮いた状態で、敷石が施されない範囲からの出土である。この付近は撹乱がほぼ床面に達していたので、その影響による２次的移動を受けていると考えられる。この他に、石室内と周溝からは縄文土器片と剥片が出土したが、いずれも細片であった。

出土遺物（図34）　９と10は共に石室覆土から出土した須恵器である。９の平瓶は底部の一部を欠くものの、ほぼ完形に復原できた。口径10.1cm、器高は18.2cm、胴部の最大径は19.4cmを測る。焼成は良好で灰白色を呈する。肩部には円形貼付文を有する。

10は体部から口縁部にかけての約１/４が残存した。坏身と考えられるが、坏蓋の可能性もある。口径は10.1cm、残存高は3.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。体部の内外面共にナデによる調整が行われている。

以上の２点は７世紀後葉に位置づけられる。上記の須恵器以外に石室と周溝の覆土から縄文土器片と石器の剥片が出土した。ただし、縄文土器は細片の上に風化が著しく、器種や型式等を判別できない。

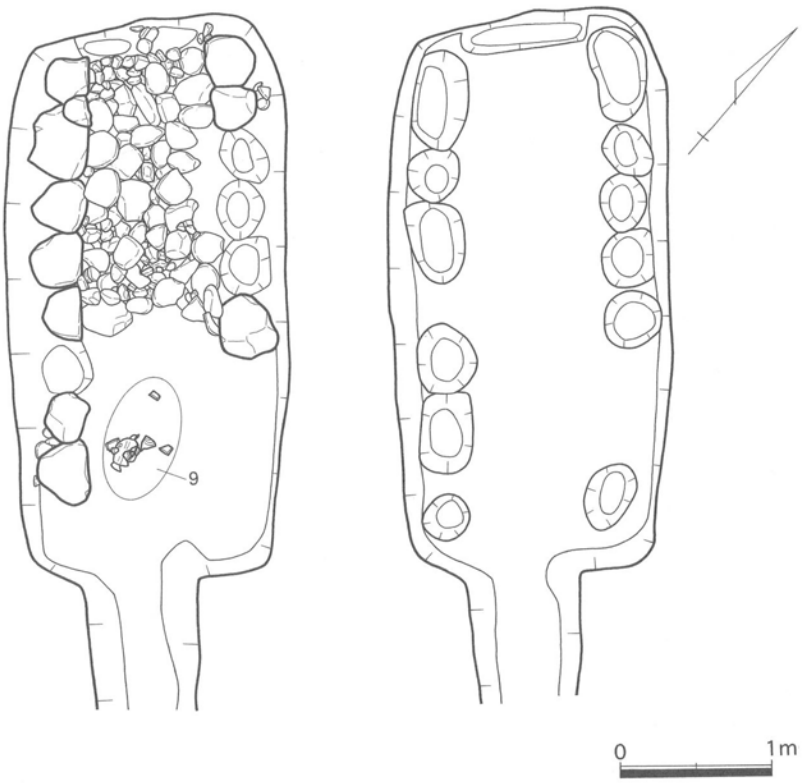


図33　１号墳の遺物出土状況と掘り方

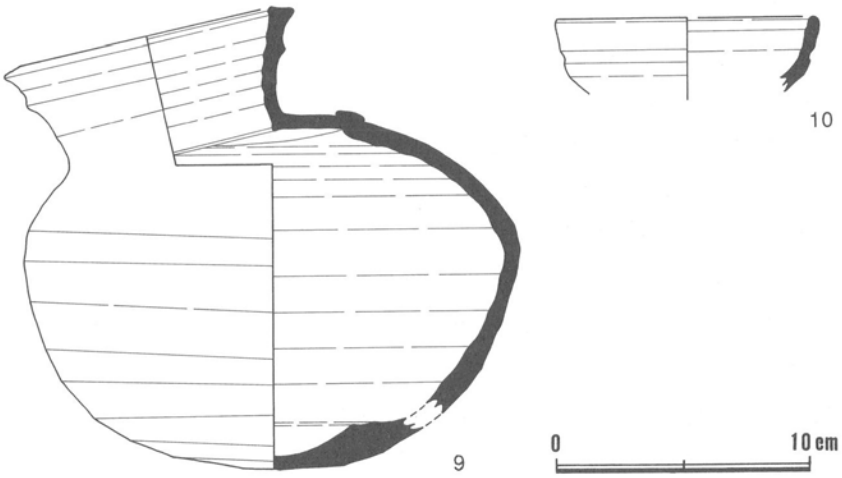


図34　水掛渡Ｄ１号墳出土遺物

(4)　小結

調査の結果１号墳は円墳で、無袖式の横穴式石室を主体部とすることが判明した。遺物は７世紀中葉～後葉に位置づけられる２点の須恵器が出土したのみである。２点とも撹乱による影響を受け、元位置を留めるものではないようである。この２点が築造時のものか追葬時のものか判別はできず、１号墳の築造時期を明言することはできない。ただし、他に出土遺物が無いことから、ここでは７世紀中葉～後葉の築造と捉えたい。墳丘規模や石室規模は水掛渡Ｄ古墳群内では中規模のものと言える。なお、１号墳では覆土から縄文時代の遺物が出土した。更に、１号墳の周囲では他にも縄文時代早期と考えられる土器片が表採できた。１号墳の南西約８ｍには縄文時代の竪穴住居跡（ＳＢ－1）が存在し、他にもこの時期の遺構が存在していた可能性は十分に考えられる。１号墳が縄文時代の何らかの遺構を破壊して築かれたことも想定でき、その際に縄文時代の遺物が混入した可能性がある。

2．2号墳

(1) 墳丘と外部施設（図35）

古墳の位置と残存状況　2号墳は調査区北側のほぼ中央、1号墳の西南西約18mに位置する古墳である。墓道の存在は確認できたが、墳丘は既に削平されており、周溝の痕跡も存在しなかった。

墳形と規模　削平が著しく、墳形とその規模は不明である。少なくとも、築造当初は主体部を覆う程度の墳丘が存在していたと考えられる。他の古墳の例から直径5～6m程度の円墳であったと推測され、おそらく周溝も有していたのであろう。

墓道　墓道は主体部から2.8m南南東にのびている様子が検出できた。墓道の最大幅は0.5m、深さは0.2mである。主体部と接する部分が幅、深さ共に最大値を示し、遠ざかるにつれて次第に幅と深さを減じていく。なお、墓道の延長線上には3号墳があり、3号墳の周溝あるいは墓道とつながる可能性も考えられる。

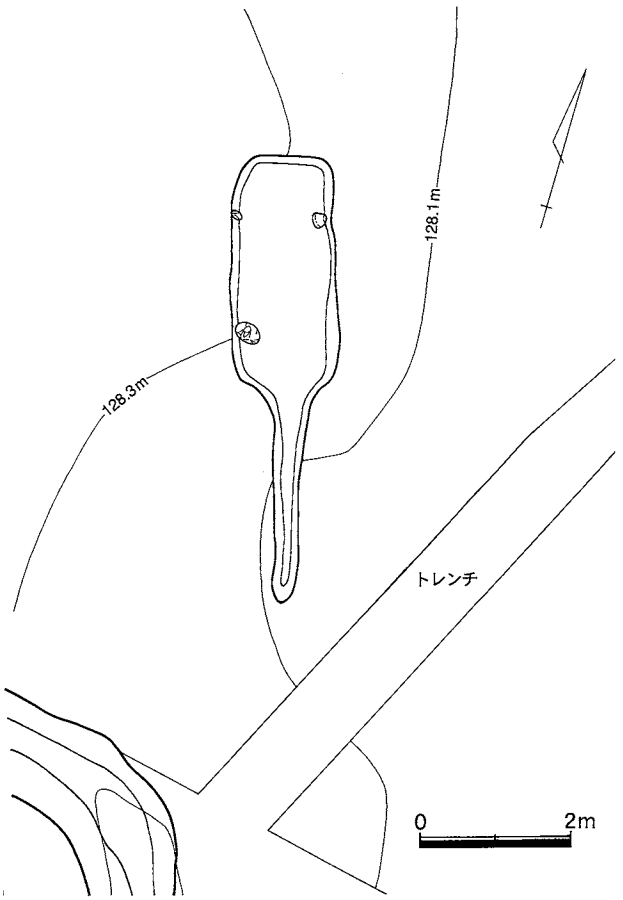


図35　水掛渡D2号墳墳丘図

(2) 主体部（図36）

残存状況と形状・規模　主体部は南東に開口する横穴式石室で、主軸方位はN－15°－Wであった。しかし、削平が深くまでおよんでいたため、その残存状況は側壁基底石の極一部と床面の敷石をわずかに残す程度であった。残存状況が悪く石室形状を詳細に把握することはできないが、袖を造りだした痕跡が確認できないため、無袖式の石室と推測される。また、掘り方の形状から玄室の平面形態は長方形あるいは緩やかな胴張形と推測される。規模についても推測の域を出るものではないが、全長約2.6m、最大幅は0.7m前後と考えられる。なお、奥壁推定位置の床面標高は128.2mである。また、閉塞石は一切残存せず、その状況は不明である。

床面の状態　石室床面に施された敷石は残存していた。敷石がなされる範囲は奥壁推定位置から1.8m地点までであり、上面が平坦になるように敷設されている。敷石に使用される石材は、直径5～10cm程度の円礫と角礫である。なお、石室開口部側の約0.8mの範囲には礫が存在していない。これは、1号墳同様に元々敷石が施されなかったと考えられる。

使用石材　わずかに残存した側壁基底石は円礫の自然石を使用している。床面は先述した通り、円礫と角礫を併用している。なお、奥壁は残存しなかったが、掘り方から判断すると複数の石材で最下段を構成していたようであり、側壁と同様の石材を使用していたと考えられる。

掘り方　掘り方は長方形の平面形状を呈し、その規模は全長3.1m、幅1.3mである。石室床面はほぼ水平であり、そのまま墓道に移行し床面に造作はみられない。

(3) 出土遺物

遺物の出土状況（図37）　遺物は石室内から須恵器と鉄器が出土した。須恵器は坏身3点、坏蓋1点、瓶類の頸部が1点、長頸瓶あるいは広口壷の体部が1点である。この他にも数個体分の須恵器片が出土した。鉄製品は刀子が1点出土した。覆土から出土した14を除く6点はいずれも石室床面上からの出土である。もっとも、この古墳は破壊が床面まで達していることから、これらの遺物が元位置を留めてい

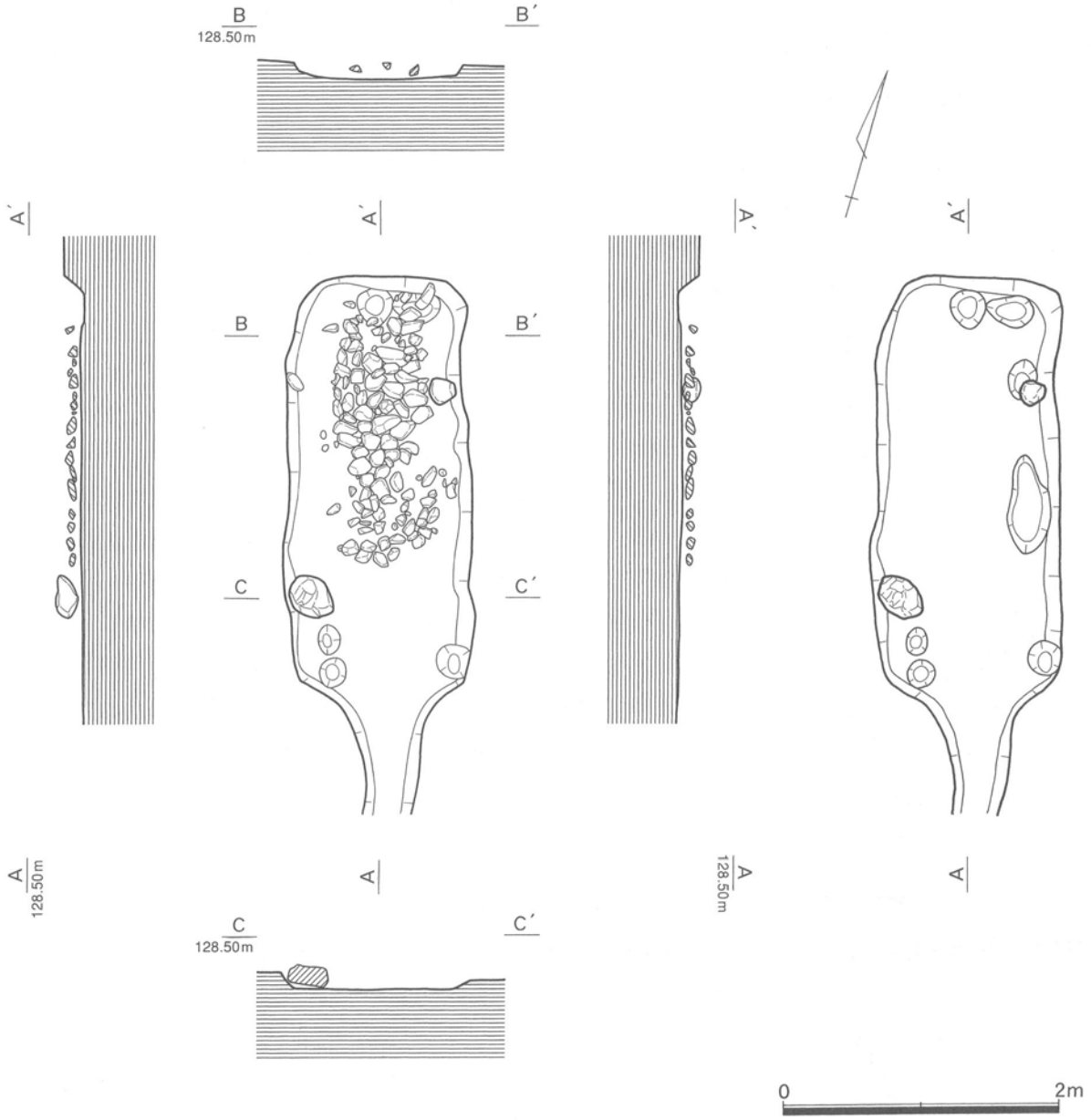


図36　水掛渡Ｄ２号墳石室展開図

るとは考え難い。なお、14・16・17は敷石の施される範囲から、12・13・15は敷石が施されない部分からの出土である。

出土遺物（図38）　11～16は石室内から出土した須恵器である。11は石室中央部の床面上から出土した瓶類の頸部である。12とは別個体のものと考えられる。焼成は良好で灰白色を呈する。口径は7.5cm、残存高は7.5cmである。

12は石室開口部に近い床面上から出土した。体部の１/４程度の遺存状況であり、瓶類の体部と推測される。復原される胴部の最大径は14.6cm、残存高は6.3cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。

13は12と同様に、石室開口部付近から出土した坏蓋である。返りを有し、頂部には宝珠状の摘みを持つ。口径9.6cm、器径11.5cm、器高2.7cm、焼成は良好で灰白色を呈する。

14は覆土から出土した坏身である。残存したのは口縁部の一部であり、図上で復原を行った。内傾の著しい短小な受部を有する。口径9.5cm、器径11.4cmと推定され、残存高は1.5cmである。焼成は良好で灰色を呈する。

15は12や13と同様に石室開口部に近いところから出土した坏身である。体部から口縁部の約１/４が残存した。口径は11.3cm、器高3.6cmで焼成は良好である。外面は灰色、内面は灰白色を呈する。底部外面にはヘラ記号がみられる。

16は石室奥壁側の覆土から出土した坏身である。全体の約１/３が残存した。口径は11.0cm、器高は4.1cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。外面底部にはヘラ記号を有する。調整は外面体部と内面が横ナデ、外面底部はナデによる調整が行われている。

17は刀子である。残存長6.7cmと小型ではあるが、ほぼ完形であると考えられる。刀身長3.5cm、刀身幅は0.9cm、茎の残存長は3.2cmである。

なお、13～16はＴＫ46型式並行期[5]に位置づけることができる。

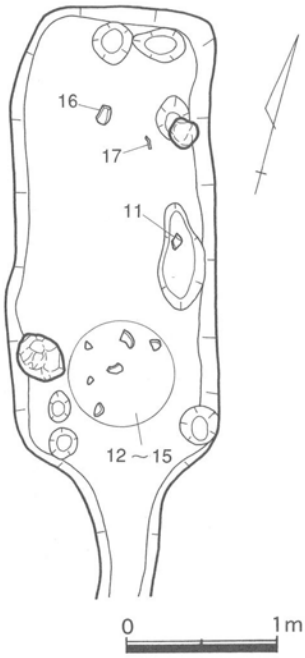


図37　２号墳の遺物出土状況

(4)　小結

２号墳は水掛渡Ｄ古墳群の中でも比較的標高の高い位置に所在するため削平が著しかった。外部施設の状況は墓道の存在を知り得たのみである。主体部は横穴式石室であるが、これも削平のため床面の敷石と側壁の一部が遺存するのみであった。石室は無袖式と推測されるが、確証を得るものではない。石室内からは須恵器と鉄器が出土したが、撹乱が床面にまで達し、遺物は元位置を留めるものではない。出土した須恵器の年代は７世紀第３四半期と言えよう。この時期を２号墳の築造時期とは断定できないが、時期を違える遺物が出土していないことから、２号墳は７世紀第３四半期の築造で、追葬が行われていないと考えたい。

３．３号墳

(1)　墳丘と外部施設（図39・41）

古墳の位置と残存状況　３号墳は２号墳の南方約４ｍで検出した。削平が著しく、周溝と墓道が残存したのみである。

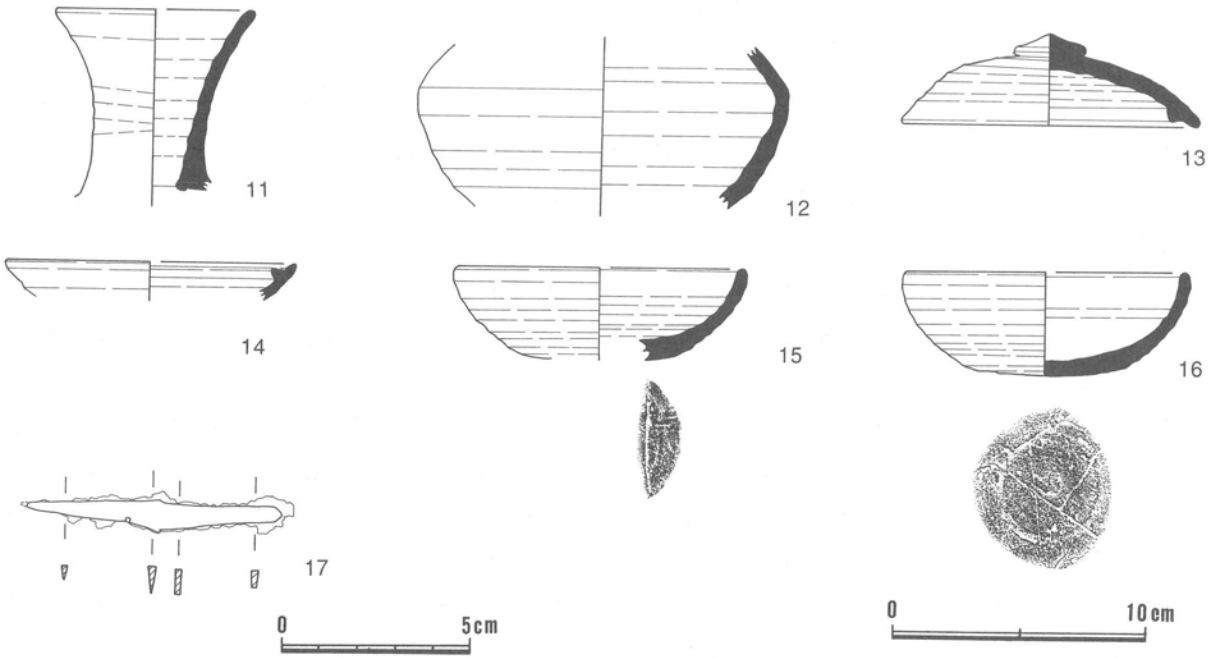


図38　２号墳の出土遺物

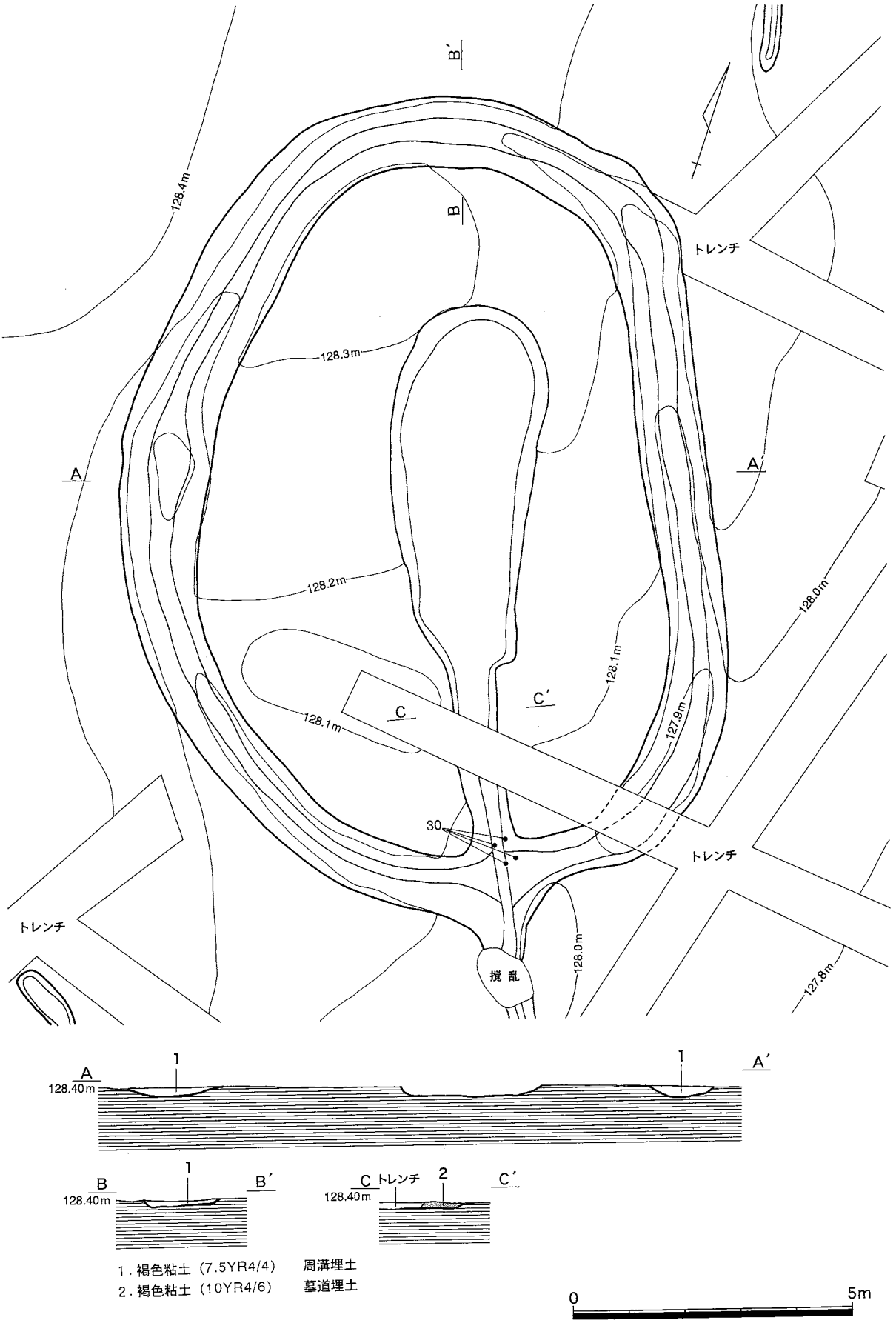


図39　水掛渡Ｄ３号墳墳丘図

墳形と規模　墳丘は削平を受け、盛り土等の痕跡は存在しなかった。しかし、周溝が全周していたため、墳形と規模を知ることはできた。周溝の様子から３号墳は南北が長い不正形な円墳であることが判明した。その規模は南北長13.1m、東西長9.1mである。

周溝と墓道　周溝の幅は1.0～1.7mであるが、墳丘の西側が広く、東側が狭い状況にある。深さは0.1～0.2mである。墳丘北側が最も浅く、東側が深い。

３号墳の主体部からは長くのびる墓道が検出できた。検出できた墓道の総延長は約17mである。墓道は主体部である横穴式石室の開口部からは直線的にのびるが、約10m地点で向きを東に変え、調査区東側の斜面に向かってなだらかに下る。墓道の最大幅は0.7m、深さは最深部で0.1mであるが、主体部から遠ざかるに従い、幅と深さを減じていく。

(2)　主体部（図40・42）

残存状況と形状　主体部には横穴式石室が採用されていたが、東側壁基底石の１石と敷石の一部が残存するのみで

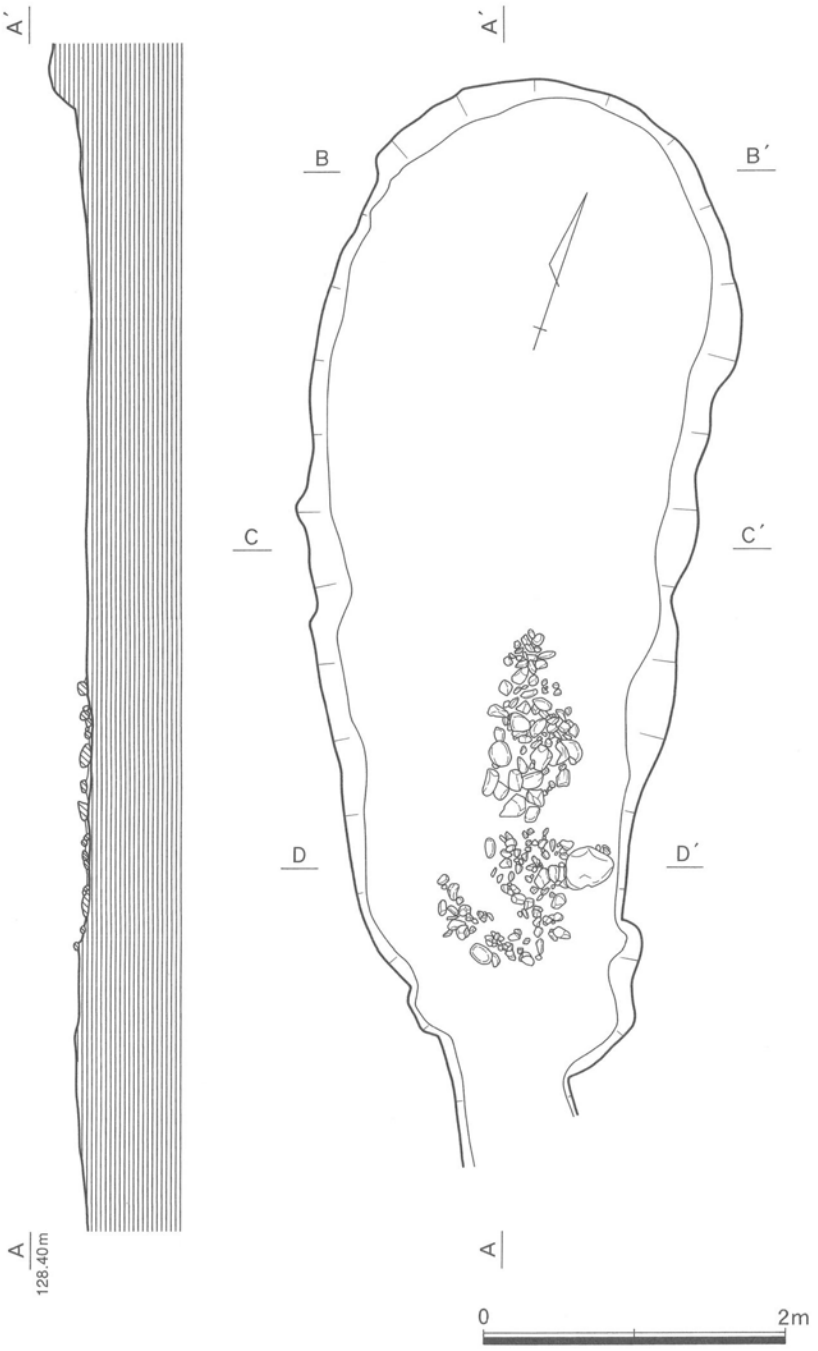


図40　水掛渡Ｄ３号墳石室展開図

図41　水掛渡Ｄ３号墳の墓道実測図

あった。そのため、石室の全貌については不明で、主軸をN－18°－Wに持ち、南側に開口することが判明したに留まる。また、閉塞石も残存しなかった。

規模　残存状況が悪いため、規模に関しても推測の域を出ない。掘り方から判断すると、全長は5.5m程度で最大幅は1.2～1.5m程度であったと考えられる。

床面の状態　床面には敷石が施されていたようであるが、これも残存するのは開口部付近の長さ約2.2m、幅約1.0mに渡る範囲のみである。本来的には石室床面のほぼ全面に敷設されていたと考えられる。使用される石材は5～20cm程度の円礫と角礫の自然石である。

使用石材　側壁は東側基底石1石の遺存に留まる。この石材は最大幅30cm程度の円礫で、小口積みされている。敷石と同様に自然石である。

掘り方　掘り方は全長6.6mである。幅は奥壁側が最も広く2.8mであるが、開口部側に行くに従い幅を狭め、敷石が残存する付近では1.6mとなる。もっとも、撹乱を受けているため、本来の形状を示しているものではないと考えられる。

(3)　出土遺物

周溝と墓道の遺物出土状況（図39）　周溝と墓道が交差する付近から須恵器が出土した（図44－30～33）。30と31は坏身、32は高坏の坏部、33は長頸瓶の口縁部と考えられる。この他にも数個体分の

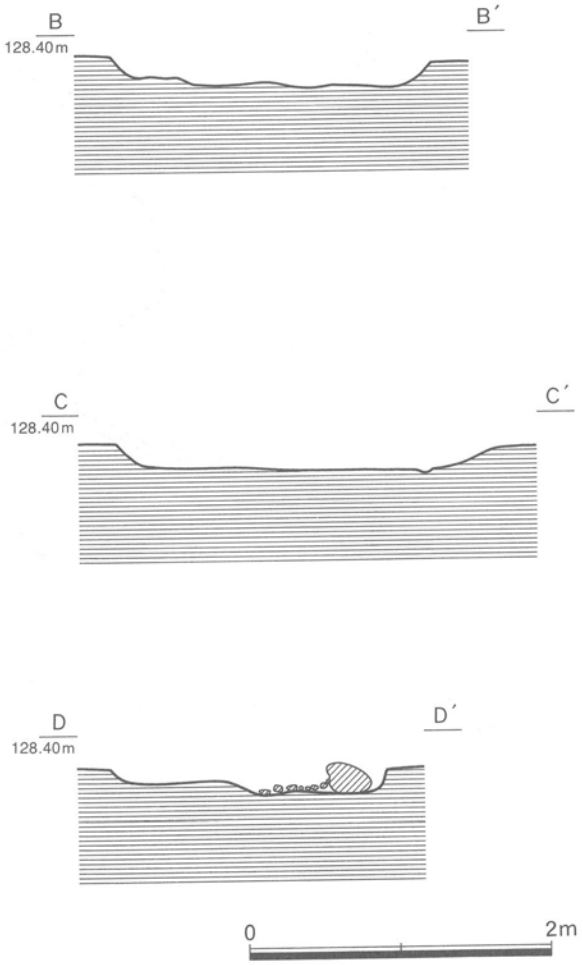


図42　3号墳石室横断面図

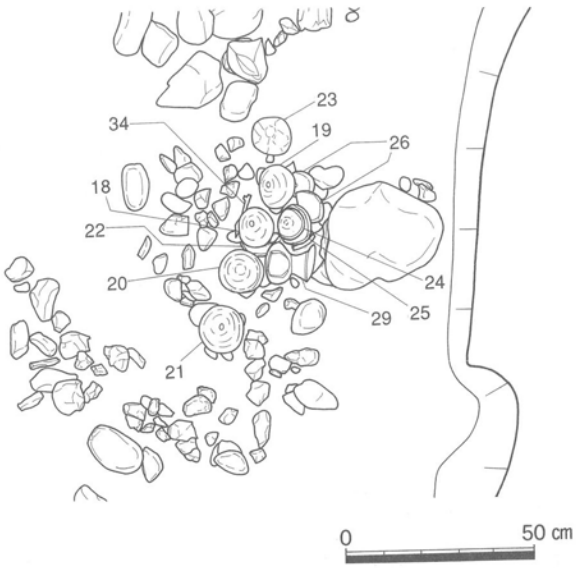


図43　3号墳の遺物出土状況

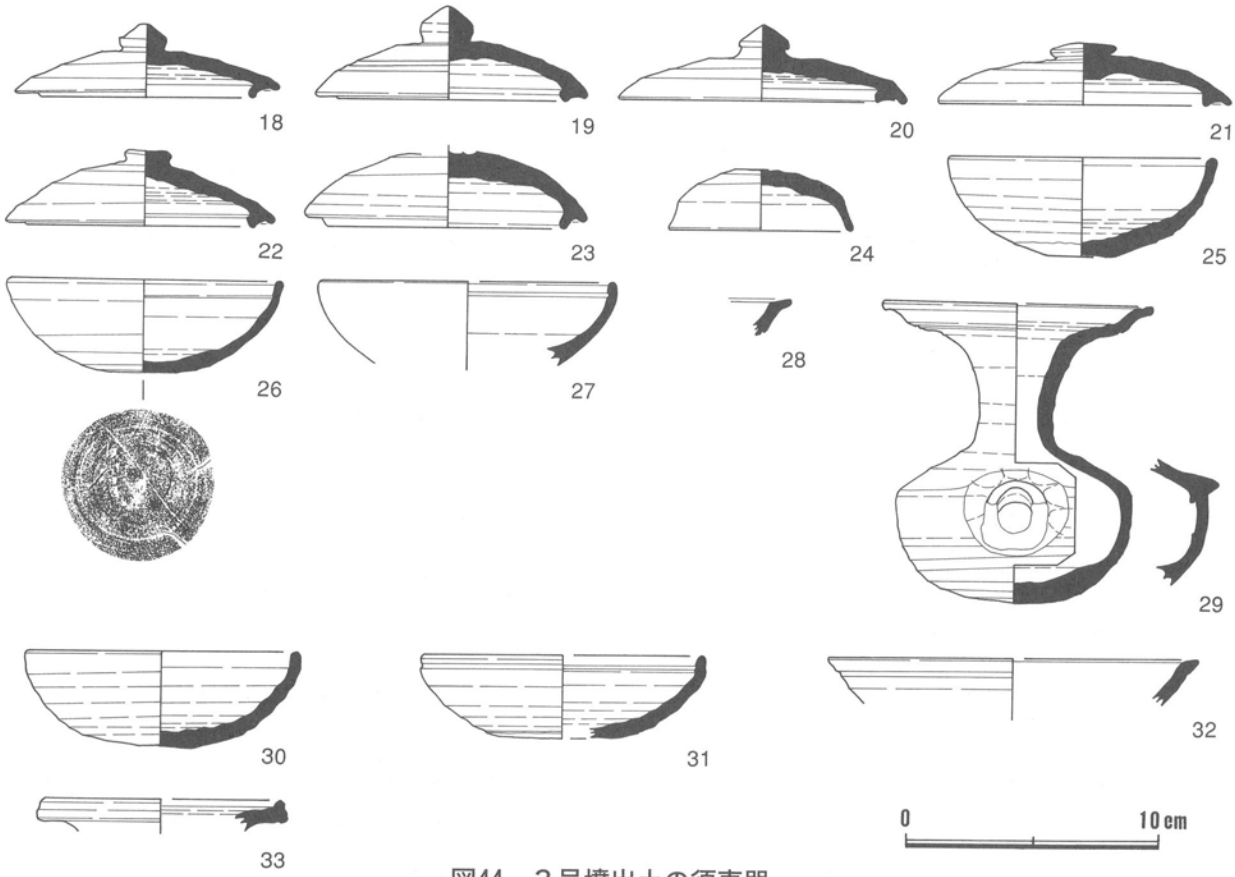


図44　３号墳出土の須恵器

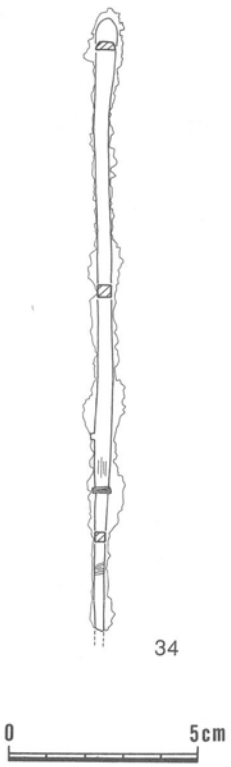


図45　３号墳出土の鉄器

須恵器片が出土したが、細片であり、図示し得るものではなかった。

石室内の遺物出土状況（図43）　石室内から出土したのは須恵器と鉄器である。須恵器（図44）は坏蓋６点（18～23）、坏身が３点（25～27）と、甕が１点（29）、短頸壷の蓋が１点（24）、高坏の破片が１点（28）である。鉄器は鉄鏃が１点（図45－34）である。３号墳は主体部の大半が撹乱を受けていたが、18～26・29・34の遺物は敷石の直上から出土し、元位置を留めるものであった。なお、24と25は重なって出土した。これらの遺物は側壁側にまとめられた様相を示している。断定はできないが、これらの遺物は追葬時に、側壁側に片づけられた副葬品と考えたい。

石室内の出土遺物（図44・45）　18～29は石室内から出土した須恵器である。18から23は返りを持つ坏蓋である。18～22の残存状況はほぼ完形であり、頂部に摘みを有する。23は頂部の摘みが遺存しなかった。大きさは口径8.2cm～9.4cm、器径10.4cm～11.6cm、器高2.5cm～3.7cmである。焼成は良好で灰白色を呈し、19・21・22は外面に自然釉が付着する。いずれも外面口縁部から内面は横ナデ、外面頂部は回転ヘラケズリによる調整が行われている。この内、19・22・23は同心円の回転ヘラケズリである。19と20の摘みはヘラケズリの後に貼り付けられている。

24は短頸壷の蓋と考えられる。これは25と重なった状態で出土した。口径は7.2cm、器高は2.4cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。外面体部から内面は横ナデによる調整が行われ、外面頂部は同心円の回転ヘラケズリによ

る調整が行われる。

25～27は坏身である。いずれも受部を持たない形状である。25と26は床面直上の出土であるが、27は主体部の撹乱土からの出土である。口径は10.3～11.5cmで27が最も大きく、25が小さい。器高は25が4.0cm、26が3.7cmである。27は底部を欠損しその残存高は3.3cmである。全て焼成は良好で、25と27は灰白色を呈し、26は内面灰白色で外面灰色である。27は表面の劣化が著しく調整は不明である。25と26の調整は外面体部から内面は横ナデ、外面頂部は回転ヘラケズリ、外面底部はヘラ切り未調整である。なお、27は内面口縁部に一条の沈線を巡らす。

28は主体部の撹乱土から出土した須恵器片である。口縁部のみの残存であるが、高坏の口縁部と考えられる。焼成は良好で灰白色を呈し、横ナデによる調整が観察できる。

29は床面直上から出土した甕である。口径は10.5cm、器高9.9cm、胴部の最大径は9.3cmである。注口は貼り付けられる。焼成は良好で灰白色を呈する。胴部外面底部は回転ヘラケズリで調整が行われ、その外は横ナデの調整が行われている。

以上の石室内出土須恵器はＴＫ46型式並行期のもので、７世紀第３四半期に位置づけられる。

34は床面直上から出土した鉄鏃である。この遺物は18の下から出土した。尖根式鑿箭鏃[6]で茎の端部を欠損するが、ほぼ完形と言えよう。残存長16.3cmを測る。茎関は片側を欠損するものの棘状関であることがうかがえる。茎の一部には木質が付着する。

周溝および墓道の出土遺物（図44） 周溝と墓道から出土した遺物は全て須恵器である（30～33）。30と31は坏身である。30は墓道から、31は周溝の覆土から出土した。ともに焼成は良好で、30は灰色、31は内面が灰白色で外面が灰色を呈する。30は口径10.5cm、器高3.8cmである。31は口径11.0cm、器高3.3cmである。両者ともに調整は外面体部と内面は横ナデ、外面底部はヘラ切り未調整である。なお、31は口縁部内面と外面にそれぞれ一条の沈線を持つ。

32は周溝覆土から出土した須恵器である。口縁部の一部が残存する程度であるが、高坏の坏部であると考えられる。焼成は良好で灰色を呈する。

33は墓道と交差する付近の周溝から出土した。この遺物も口縁部のみが出土であるが、その形状から瓶類の口縁部であることが言える。焼成は良好で灰白色を呈する。

周溝内からはこの他に数点の須恵器が出土したが、全て細片であり図示するには至らなかった。これらの遺物を含め、周溝から出土した須恵器は石室内と同じくＴＫ46形式併行期に位置づけられる。

(4) 小結

３号墳は２号墳と同様に削平が著しかった。しかし、全周する周溝が検出でき、この古墳が円墳であることが判明した。その長軸は約13mの長さであり、３号墳は水掛渡Ｄ古墳群の中では大きなものの一つである。主体部は横穴式石室であったが、撹乱が床面にまで達し、ほとんどの石材は抜き取られていた。そのため石室形状を把握することは不可能であった。石室内からは一括して須恵器と鉄器が出土し、須恵器の時期は７世紀第３四半期に位置づけられる。また、周溝や墓道からも同時期の須恵器が出土した。上述したような古墳の残存状況にもかかわらず、石室内の遺物の多くが元位置を留めるものであった。これらは東側壁寄りに乱雑にまとめられた状況を呈し、追葬時に片づけられたものと推測される。断定はできないものの、これらの須恵器が初葬時に伴うものの可能性は高い。この場合、３号墳の築造年代は７世紀第３四半期に求めることができる。

また、３号墳では総延長約17mにおよぶ墓道も検出できた。この墓道は途中で向きを直角的に変え、調査区東側の谷に向かってのびている。なお、後述する４号墳の墓道も同方向に向かってのびており、あるいは４号墳の墓道とつながる可能性も十分に考えられる。

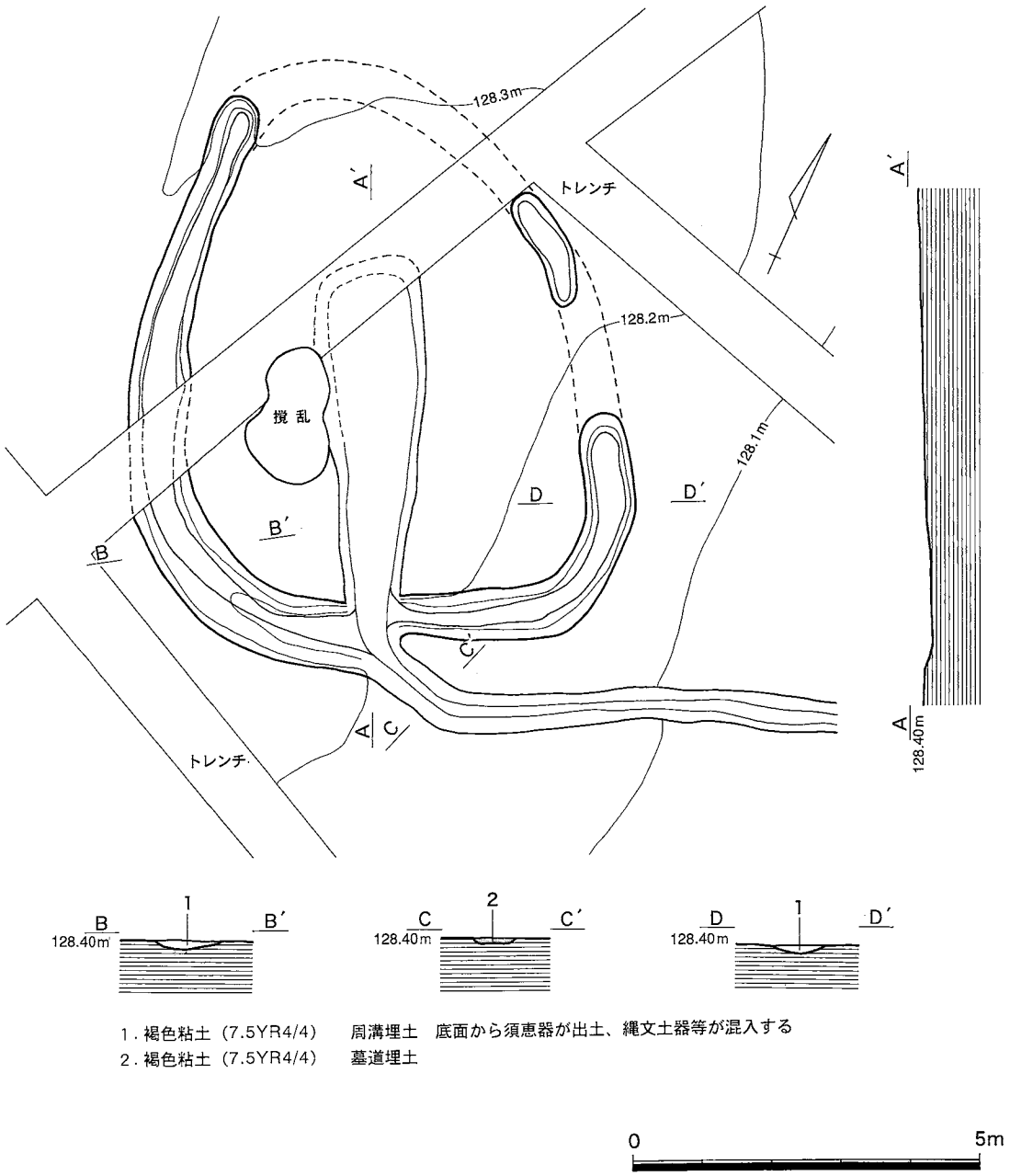
4．4号墳

(1) 墳丘と外部施設（図46）

古墳の位置と残存状況　4号墳は調査区のほぼ中央で検出できた。この古墳の北東約5mには3号墳、東南東約6mには5号墳が存在する。4号墳は水掛渡D古墳群内では比較的高所に所在する古墳であり、2号墳や3号墳と同様に墳丘並びに主体部は削平が著しかった。周溝は墳丘北側から東側にかけて一部不鮮明であるが、全周していた様子がうかがえる。また、主体部からは墓道が長くのびている様子が明らかであった。

墳形と規模　先述したとおり墳丘自体は削平を受け、盛り土の様子等は把握できなかった。しかし、周溝が残存したことから、4号墳は東西6.1m、南北約7.0mの不正形な円墳であることが判明した。

周溝　周溝は墳丘の北側と東側では検出できなかったが、本来的には全周していたと考えられる。周溝の幅は0.5～1.0m、深さは0.1～0.2mで、南西部が最も幅が広く深い。北東部に向い幅と深さを減じ



1．褐色粘土（7.5YR4/4）　周溝埋土　底面から須恵器が出土、縄文土器等が混入する
2．褐色粘土（7.5YR4/4）　墓道埋土

図46　水掛渡D4号墳墳丘図

る。周溝の南西部からは須恵器片が集中して出土した（図48）。なお、周溝の西側には縄文時代の陥穴と考えられる土坑が存在し、周溝はこの遺構の上部を削平していた。

墓道　検出した墓道の総延長は約8.0mにおよぶ。墓道は周溝の外側に至ると向きを大きく東に向け、調査区東側の斜面に向けてのびている。墓道の最大幅は0.7m、深さは0.2mであるが、主体部から遠ざかるにつれて次第に幅と深さを減じていく。

(2)　主体部（図47）

残存状況と形状　主体部は墳丘と同様に深くまで削平を受けていた。更に、主体部の西側には後世の撹乱が深くまでおよんでいる。主体部は横穴式石室を採用していたと考えられるが、奥壁や側壁から閉塞石に至るまで全ての石材が抜き取られていた。そのため、石室の規模や構造等は不明と言わざるを得ない。主軸方位はN－25°－Wである。撹乱は床面に達していたが、床面標高は128.15mである。

掘り方　掘り方も撹乱の影響を受けており、詳細は掴めない。おそらく、他の古墳と同様に長方形の平面形であったのであろう。なお、最大幅は0.9mであった。床面はほぼ水平で、そのまま墓道に移行するようである。

(3)　出土遺物

石室内の遺物出土状況（図47）　主体部からは須恵器が出土した（図49）。35と36は短頸壷とその蓋である。これは石室と墓道の接点付近、おそらく閉塞部になると考えられる位置からの出土である。この２点は床面直上の出土であるが、元位置を留めるものであるかは不明である。この他に、数点の須恵器片がほぼ同位置から出土したが、細片であり図示し得るものではなかった。なお、玄室覆土からは１点の縄文土器と３点の石片が出土した。いずれも細片であるため、詳細を知ることはできなかった。

周溝の遺物出土状況（図48）　周溝からは須恵器が出土した（図49－37～45）。37～40と43～45は周溝の南西部から集中して出土した。この７点は底面からの出土で、二次的な移動を受けていない。また、

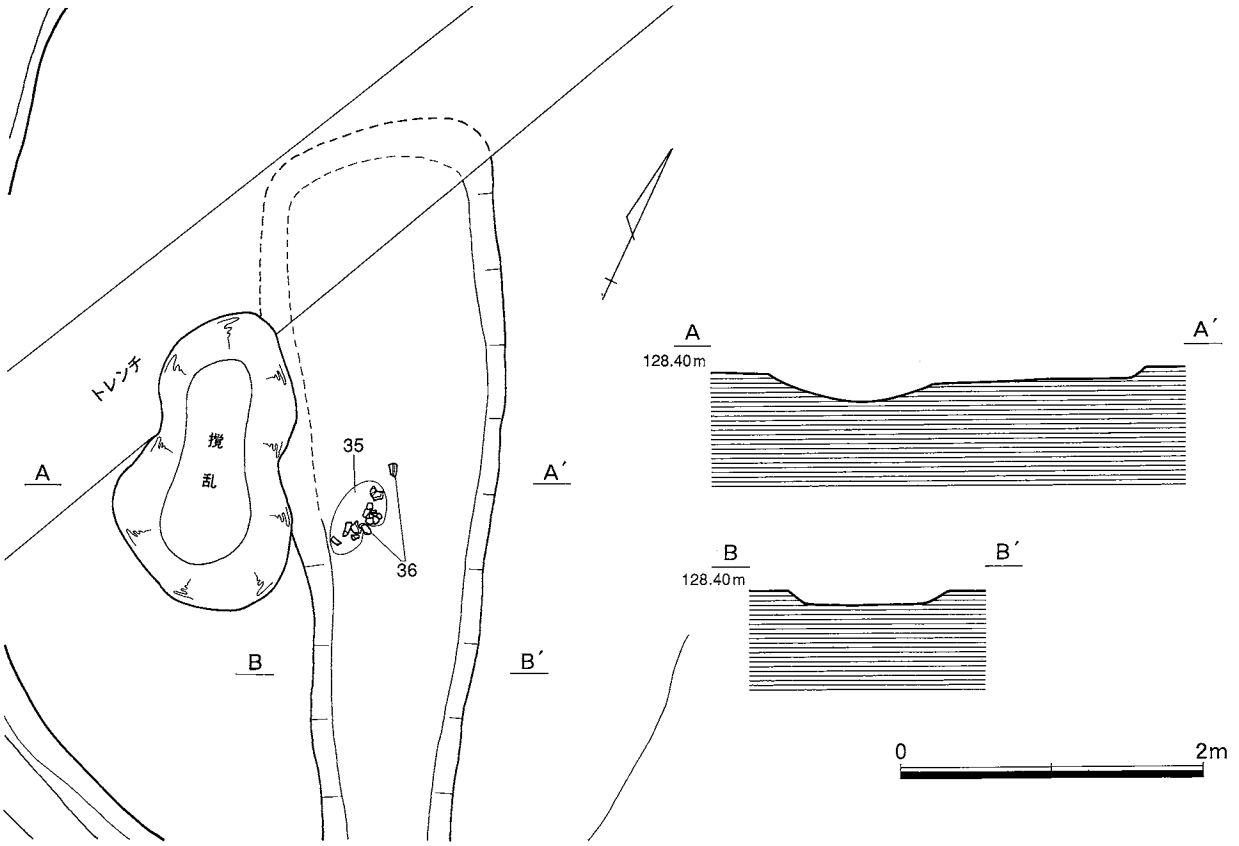


図47　水掛渡Ｄ４号墳石室掘り方

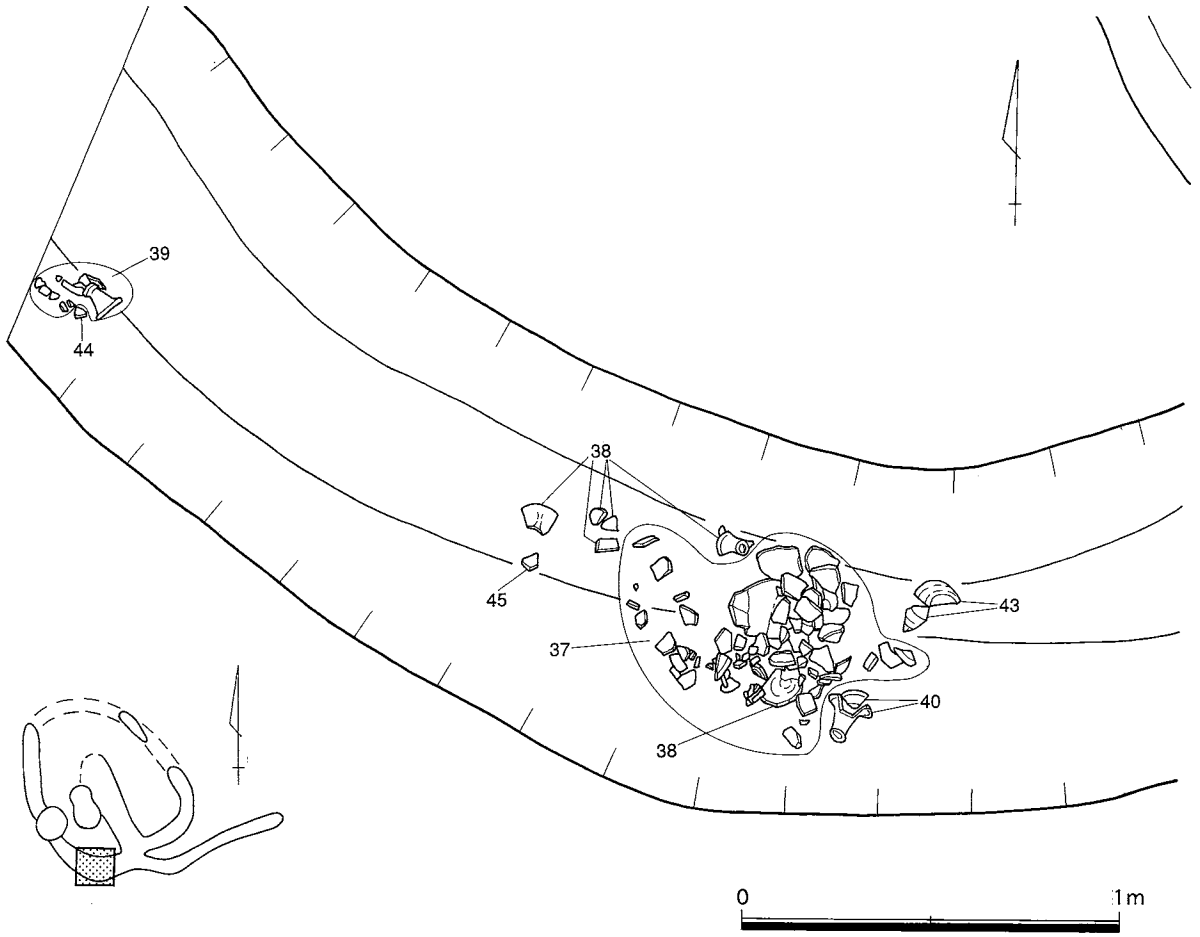


図48　４号墳周溝の遺物出土状況

いずれもほぼ完形に近い状態に復原可能であった。そのため、この場で一括して破砕されたものと考えられる。41と42は墓道と周溝の交点付近からの出土であるが、共に底面からは浮いた状態で二次的な移動が考えられる。

上述した須恵器以外に周溝の覆土からは縄文土器片が１点、石鏃が２点、剥片が８点出土した。縄文土器片は風化が著しいため、型式を把握することはできなかった。石鏃は流紋岩製のものである。

主体部の出土遺物（図49）　35と36が主体部から出土した須恵器である。35は短頸壷で胴部から口縁部が残存した。口径は9.4cm、胴部の最大径は23.8cm、残存高は11.1cmである。球形の胴部から、頸部が直線的に立ち上がる。焼成は良好で灰白色を呈する。また、外面には自然釉が厚く付着する。36は短頸壷の蓋で全体の約１/２が残存した。口径は12.1cm、器高は5.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。外面頂部は同心円の回転ヘラケズリ、それ以外は横ナデによる調整が行われる。

周溝の出土遺物（図49）　37～45が周溝から出土した須恵器である。37は甕である。残存状況は全体の約１/２程度であった。器高は37.5cm、口縁部は外反し最大径17.7cm、口径は16.1cmである。体部は肩が張らず、中央より若干上方で最大径35.9cmとなる。底部には一部欠損する箇所が見られ、ここに接合する破片は存在しなかった。この部位は意図的に穿孔されたと考えられる。焼成は良好でおおむね灰色を呈す。胴部内面は同心円文、胴部外面は平行叩き目文が見られ、頸部から口縁部は横ナデによる調整が行われている。

38は平瓶である。体部上半の１/４程度を欠損していた。器高は14.7cm、口径は5.9cm、胴部最大径は12.8cmである。焼成は良好で灰白色を呈し、肩から口縁にかけて自然釉が付着する。体部下面は回転ヘラケズリが行われ、その他の部位は横ナデによる調整である。

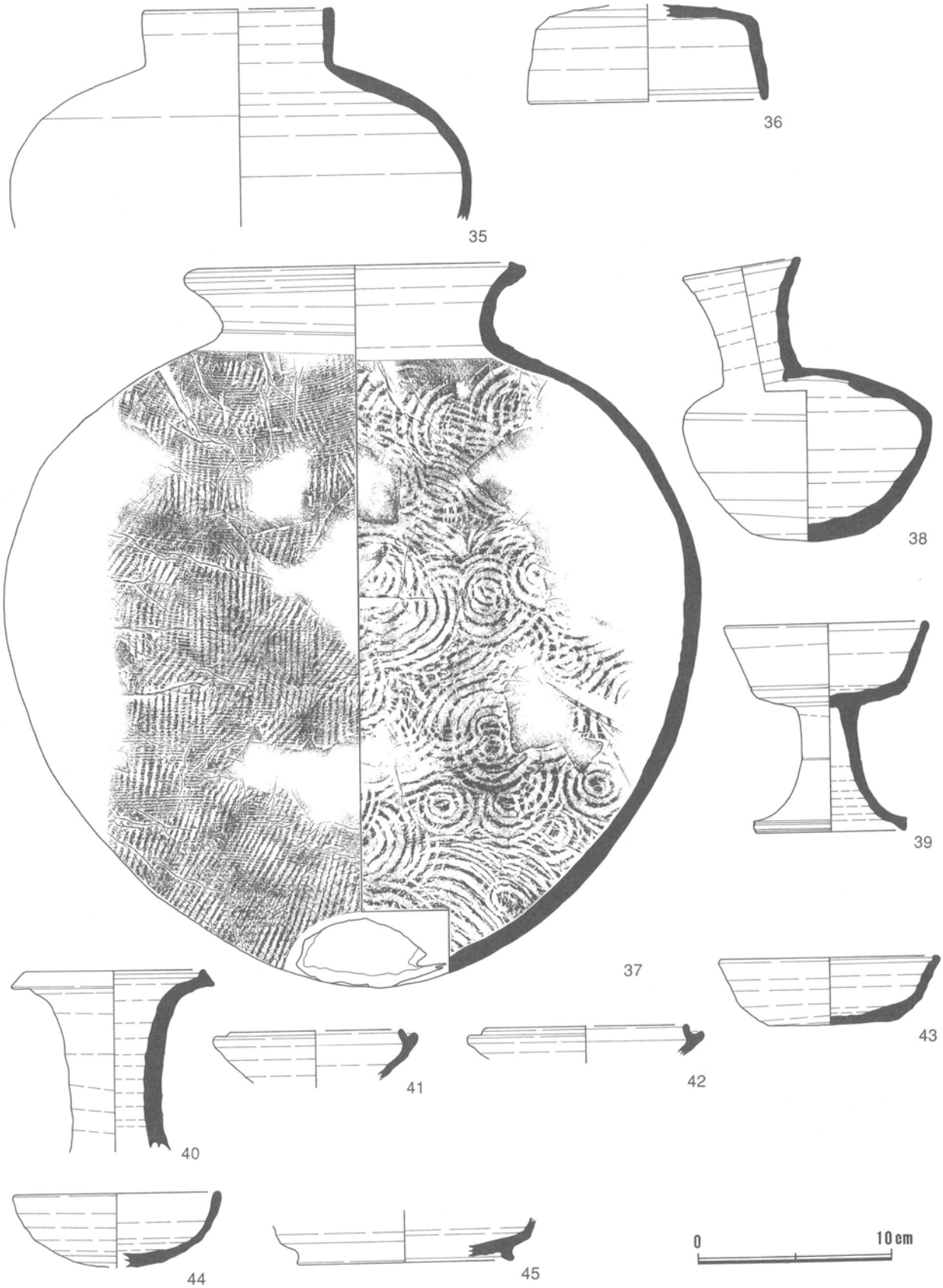


図49　４号墳の出土遺物

39は高坏である。口縁部の一部を欠くものの、ほぼ完形に復原できた。器高は10.8cm、口径10.4cmである。焼成は良好であり、灰白色を呈し、脚部裾に自然釉が付着する。坏部の外面底部が回転ヘラケズリされる以外は、横ナデによる調整が行われる。

40は体部が残存しなかったため、断定はしかねるが、長頸瓶の頸部と考えられる。口径は9.2cmである。焼成は良好で灰黄色を呈し、頸部外面と口縁部内面には自然釉が付着する。

41と42は覆土から出土した坏身である。共に残存状況が悪いため図上で復原を行った。両者ともに短く内傾する受部を持ち、41は口径8.8cm、最大径10.6cm、42は口径10.3cm、最大径12.2cmである。焼成は良好で、41は内面が灰白色で外面が灰色、42は内外面共に灰白色を呈する。

43と44は周溝から出土した坏身である。この２点の坏身は41や42と異なり、受部を持たない。43は器高3.5cm、口径は11.2cm、口縁部内面には１条の沈線を巡らす。44は全体の約１/２が残存し、口径10.5cm、器高3.8cmである。共に、外面体部と内面は横ナデによる調整が行われる。ただし、43は外面底部がヘラ切り未調整であるのに対し、44は同心円の回転ヘラケズリとなっている。２者ともに焼成は良好で43は灰白色、44は内面が灰白色で外面が灰色を呈する。

45は高台を有する坏身である。残存状況は悪く、底部の一部が残存したのみであった。高台径は11.0cmで、41～44の坏身に比べると一回り大きなものである。焼成は良好で灰色を呈する。

これらの須恵器は若干の型式差が見られるが、７世紀中葉～後葉に位置づけられる。なお、45はこれより若干新しく位置づけられる。

なお、周溝覆土からは縄文土器片と石鏃や剥片が出土した。図100－229・232・233の石鏃を除き、いずれも細片であるため、図示し得るものではなかった。石鏃については、次節で改めて記す。

(4) 小結

４号墳は削平が深くまでおよび、残存状況としては悪いものであった。周溝が残存したため、長径7.0m程度の円墳であることは判明した。主体部は横穴式石室と推察されるが、全ての石材を消失しているため、全貌の解明は能わなかった。削平の著しい４号墳であったが、周溝の南西部から一括して須恵器が出土したことは大きな成果であった。周溝出土の須恵器は出土状況から、古墳築造後ほどなくして意図的に破砕されたものと考えられる。これらの遺物はＴＫ46～ＴＫ48型式並行期に位置づけられるので、４号墳は７世紀中葉～後葉に墓前祭祀が行われたと言えよう。４号墳からのびる墓道は途中で向きを大きく変え、３号墳の墓道の方に続いている。墓道のつながりから、４号墳は３号墳と同じ単位群と考えられる。

なお、古墳に直接関わる遺物では無いが、主体部や周溝の覆土からは縄文土器や石器が出土した。縄文土器は細片である上に摩滅が進み、詳細は不明である。４号墳の周溝には縄文時代のものと考えられる陥穴が存在する。更に、４号墳の南西には縄文時代の遺構であるＳＦ－３・５が存在する。これらの縄文時代の遺構に関わる遺物が、４号墳の主体部や周溝に流入したのであろう。

５．５号墳

(1) 墳丘と外部施設（図50）

古墳の位置と残存状況　５号墳は調査区のほぼ中央、４号墳の東南東約６ｍに所在する。西南西約２ｍには６号墳が存在する。この古墳も先述した４基の古墳と同様に削平が著しいものであった。ただし、周溝がほぼ全周している様子や、墓道は検出でき、往時の姿をうかがうことはできた。

墳形と規模　墳丘は既に削平されていたため盛り土等の状況は不明であり、本来の墳丘の高さを知ることはできない。かろうじて残存した周溝から、５号墳が不正形な円墳であることは明らかである。その直径は東西約5.8m、南北約8.9mで南北にやや長い楕円形である。なお、周溝は東側に比べ、西側の幅が狭い。その要因として、西隣にある６号墳の存在が考えられる。

周溝　周溝は全周していた様子がうかがえる。周溝の幅は0.7～1.2m、深さは0.1～0.2mである。

墓道　墓道は主体部から直線的にのびており、主体部から約2.0m地点で周溝と交差し、周溝外側に約0.8m続いている。その総延長は約3.5mである。幅は0.4～0.7m、深さは主体部との接点では0.1mであるが、主体部から遠ざかるほどに幅と深さを減じていく。

(2)　主体部（図51）

残存状況と形状　主体部は横穴式石室を採用していたが、奥壁と側壁の石材全てが抜き取られていた。更に、撹乱は床面にまで達していた。このように残存状況は決して良好とは言えないが、石材の抜き取り跡から５号墳は無袖式で玄室平面形態は胴張形であることが推測される。なお、石室奥壁寄りの敷石上で床面の標高は127.75mを計り、主軸をN－38°－Wに取る。

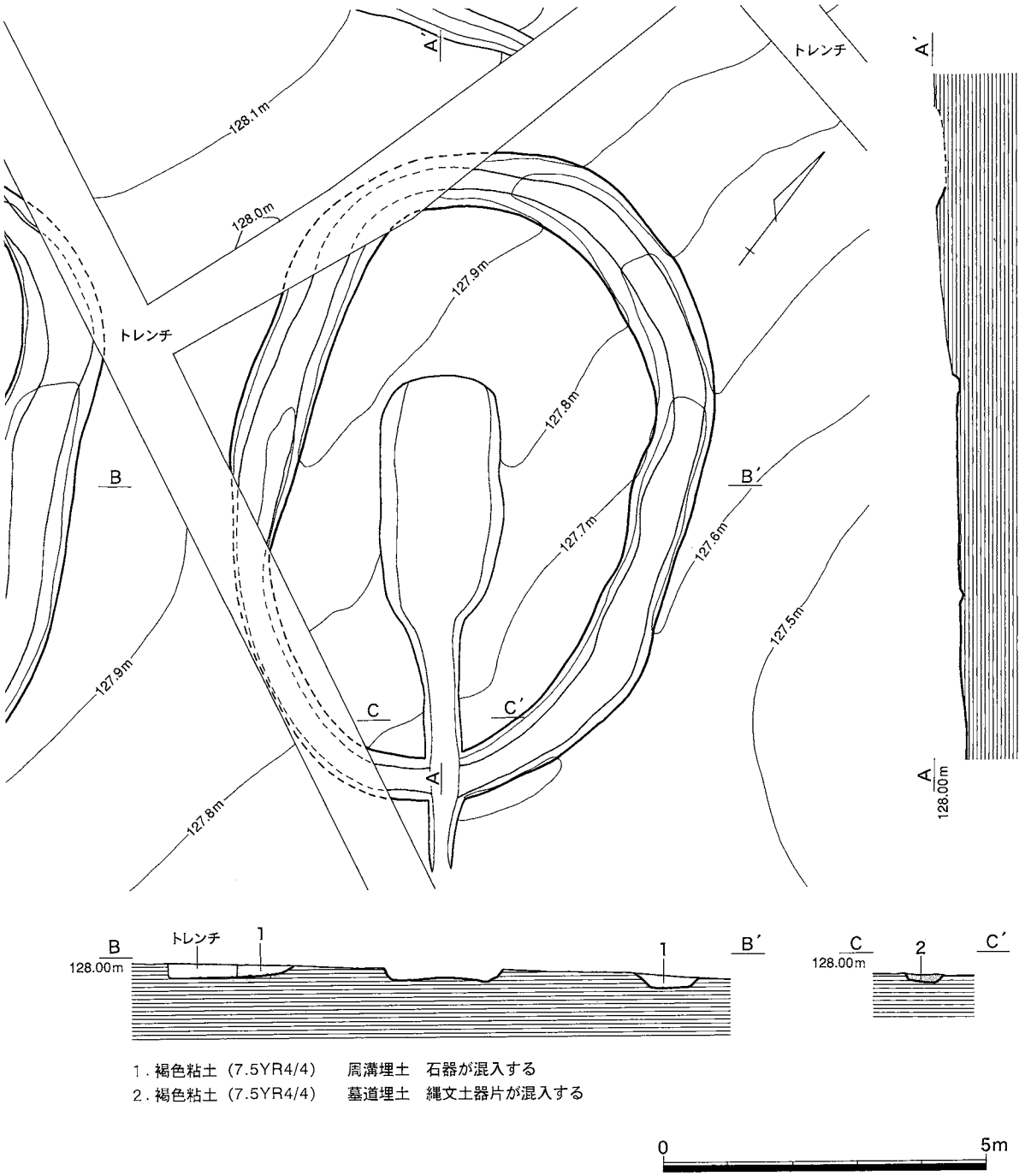


図50　水掛渡Ｄ５号墳墳丘図

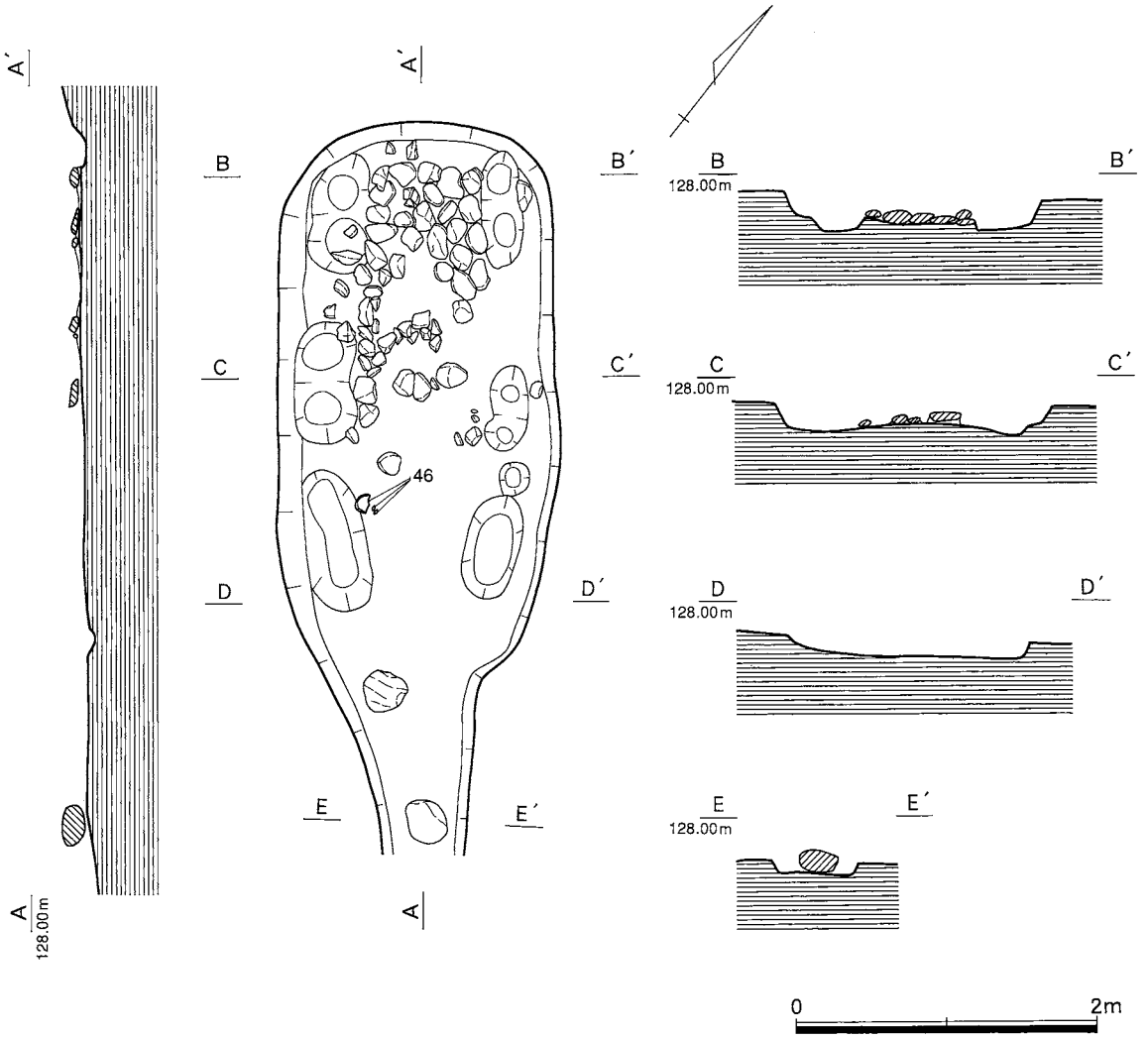


図51　水掛渡Ｄ５号墳石室展開図

規模　上述のような残存状況であるため、石室の詳細な規模は把握しかねるが、石材の抜き取り跡や床面に残された敷石の範囲から判断すると、全長約3.3m、最大幅約0.8mと推定される。

床面の状態　床面には敷石が施されていたが、撹乱を受けていたため全面には残存していなかった。敷石は奥壁推定位置から約2.2m地点まで見られ、５～20cm程度の円礫を主に用いている。石室の開口部側約1.1mの範囲には敷石が存在しなかったが、築造当初から意図的に敷石を施さなかった可能性がある。石室の床面は墓道に至るまで、ほぼ水平である。

閉塞状況　石室から墓道へ移行する部分に２個の石材が残存していた。この２石は閉塞石の一部と考えられ、閉塞は奥壁推定位置から約3.5mの地点から約1.2mの範囲に存在したようである。閉塞に使用される石材は最大径20cm程度の円礫である。

使用石材　側壁と奥壁は一切が残存しなかったため、使用される石材は不明である。側壁は基底石を据えた痕跡から判断すると、20～30cm程度の石材を横積みしていたようである。先述した通り、敷石に使用される石材は円礫を主体とし角礫が一部に混ざる。閉塞には20cm程度の円礫が使用される。残存した石材は全て自然石であった。

掘り方　石室の掘り方は全長5.7m、最大幅1.8mの長方形である。また、側壁の基底石を据え付けた痕跡も存在し、その深さは0.1～0.2m程度である。石室床面はほぼ水平に保たれ、そのまま墓道へと続く。

(3) 出土遺物

遺物の出土状況(図51)　５号墳では石室内から２点の須恵器片と７点の鉄片が出土した。46の須恵器坏身は石室内の開口部寄りで敷石が施されていない部分から出土した。この須恵器は床面の直上から出土し、埋葬時の元位置を留めている可能性がある。47は石室の覆土から出土した須恵器片で、高坏の口縁部と考えられる。７点の鉄器は石室覆土から出土した。いずれも、石室北半の撹乱土中からの出土である。

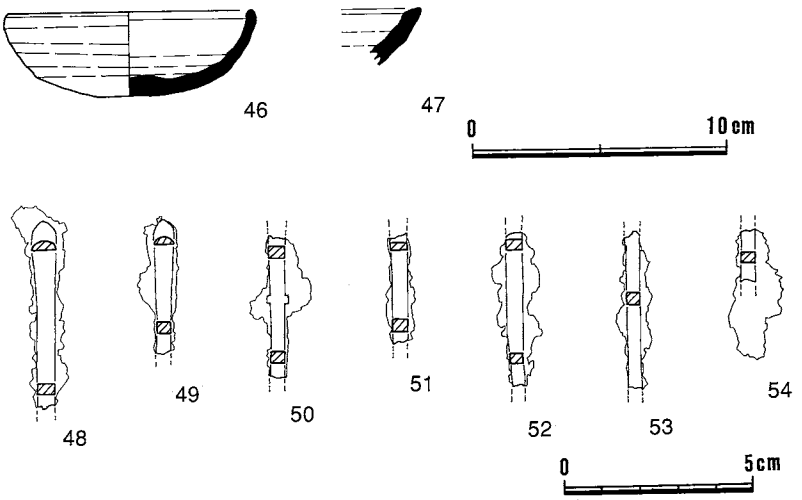


図52　５号墳の出土遺物

この他に、５号墳では石室や墓道の覆土から縄文土器片、剥片が出土した。これらの遺物は周囲からの流れ込みによるものと考えられる。

出土遺物（図52）　46は石室の床面上から出土した須恵器の坏身で、口縁部の一部を欠損していた。口径9.6cm、器高3.4cmである。焼成は良好で灰白色を呈し、外面体部から内面にかけては横ナデによる調整が行われている。外面底部はヘラ切り未調整である。この土器はＴＫ217～ＴＫ46形式併行期に位置づけられ、７世紀中葉前後のものと言える。

47は石室の覆土から出土した須恵器である。細片であるため断定はできないが、高坏の口縁部に相当すると考えられる。焼成は良好で灰白色を呈する。

48～54は鉄鏃の破片である。いずれも細片であるが、尖根式の鉄鏃であることがうかがえる。48と49は鑿箭式の鏃身部で、48は残存長5.0cm、49は残存長3.6cmである。50は中央に棘状関を確認でき、頸部と茎であることがうかがえる。なお、茎の断面形状は方形である。51～54は頸部が遺存したのみである。ただし、51は先端部で断面形状が薄く変化するので、鏃身部付近の可能性が高い。確実な数は把握できないが、５号墳には２本あるいは３本以上の長頸鏃が副葬されたと言える。

なお、５号墳の墓道からは縄文土器片が出土した（図99－216・217)。表面の風化が進んでいたが、縄文時代早期後葉に位置づけられる。これについては次節に改めて記す。また、石室と周溝覆土からは剥片も出土した。

(4) 小結

５号墳も１～４号墳同様に墳丘と主体部の大半を削平されていた。ただし、遺存した周溝の様子から、この古墳は円墳であることが判明した。主体部は無袖式と推定される横穴式石室である。この石室は床面に敷石が見られるが、１号墳等と同様に開口部側の約１/３には敷石を使用しないものと考えられる。古墳に伴う遺物はＴＫ217～ＴＫ46形式併行期に位置づけられる２点の須恵器と鉄鏃の破片のみであった。５号墳は７世紀中葉かやや遅れる時期に埋葬行為が行われていたといえるが、これが初葬であるのか追葬であるのかは不明である。さて、５号墳の墳丘は東側に比べ西側が狭くなっている。これは、西隣に位置する６号墳の存在が影響していると考えられる。

６．６号墳

(1) 墳丘と外部施設（図53）

古墳の位置と残存状況　６号墳は調査区のほぼ中央部に所在し、北には４号墳、東には５号墳、南西には７号墳が存在する。これまでに述べた古墳と同様、墳丘の大半が削平されていた。しかし、ほぼ全周する周溝と主体部から延々と続く墓道は検出できた。

墳形と規模　墳丘は削平されていたが、周溝の様子から６号墳は南北約8.3m、東西は最大5.8mの規模で、南北が東西に対して長い円墳であることが把握できた。ただし、円墳と言っても東西の中央部に歪みが見られる不正形な形状を示し、最も幅を狭めたところでは5.2mの長さである。もっとも、築造理念はあくまでも円墳であったと考えられる。

周溝　周溝は墳丘北側の一部が残存しなかったが、全周していた様子を知り得た。周溝は幅0.5～1.2mである。周溝の深さは墓道との結節点が最も深く約0.2mであるが、墳丘の東側と西側では0.05mの深さである。

墓道　墓道は主体部から約12m離れたところまでは直線的に続き、そこで向きを西に変え1.5m程のびた所で７号墳の墓道とつながる。その総延長は約13.5mである。幅は主体部と接する部分では0.8m、７号墳の墓道と接する地点では0.6mである。深さは主体部と接する部分で約0.3m、７号墳の墓道と接する部分では約0.2mである。

(2) 主体部（図54～56）

残存状況と形状　主体部は他の古墳と同様に横穴式石室であったが、石材の大半が抜き取られていた。特に石室奥半は破壊が進み、奥壁は全く遺存しなかった。一方、石室の開口部側半分は両側の側壁が１～２段残存していた。ただし、左側壁[7]は直径1.5m程度の撹乱を受け、石材は元位置を留めるものでは無かった。このような後世の改変が著しい残存状況であるため、石室の形状は無袖式で長方形の玄室平面形態であることが把握できた程度である。なお、石室の床面にも撹乱が達していたが、敷石は残存していた。この石室は主軸をＮ－28°－Ｗに取り、南南東に開口する。

規模　上述したような残存状況であるため石室の正確な規模をつかむことはできなかったが、石材の抜き取り跡や敷石の状況から全長約3.6mと推定される。石室中央部から開口部にかけては側壁基底石が残存したため、幅をうかがうことはできた。幅は石室中央部で0.7m、開口部も0.7mである。

床面の状態　床面の一部には撹乱がおよんでいたが、床面に施された敷石の大半は残存した。敷石の範囲は奥壁推定位置から2.4m地点までである。これより開口部側にも若干の石材が床面上に存在するが、これらは本来的な敷石ではなかったと考えられる。石室開口部側の約1.1mは敷石が施されない範囲である。敷石に使用される石材は５～20cm程度の円礫と角礫が主体であるが、石室中央部には長辺50cm、短辺30cmの偏平な礫が存在する。この石材は床面直上に存在し、側壁や天井の崩落石とは考えがたい。なお、この石材から開口部側には敷石が見られなくなるため、玄室内を区分する意図を持って設置されたものと考えられる。床面の標高は奥壁推定位置手前の敷石上で測り127.79mである。

閉塞状況　主体部と墓道の接点において、約1.1mの範囲で10～40cm程度の石材がまとまって存在する。これが、閉塞石の一部であったと考えられる（図55）。

使用石材　石室の側壁に使用される石材は円礫の自然石である。基底石は最大幅30～50cm程度の石材を横積みで使用する。２段目以上は一部が残存するのみであるが、基底石よりやや小型の石材使用し、小口積みしているようである。床面の敷石は先述した通りである。閉塞石は10～40cm程度の円礫の自然石を使用する。

掘り方　石室の掘り方は全長3.9m、最大幅1.4mの長方形の平面形態である。深さは検出面から測り、最深部で約0.4mである。石室の掘り方は屈曲を持たずに、なだらかに墓道へ移行する。

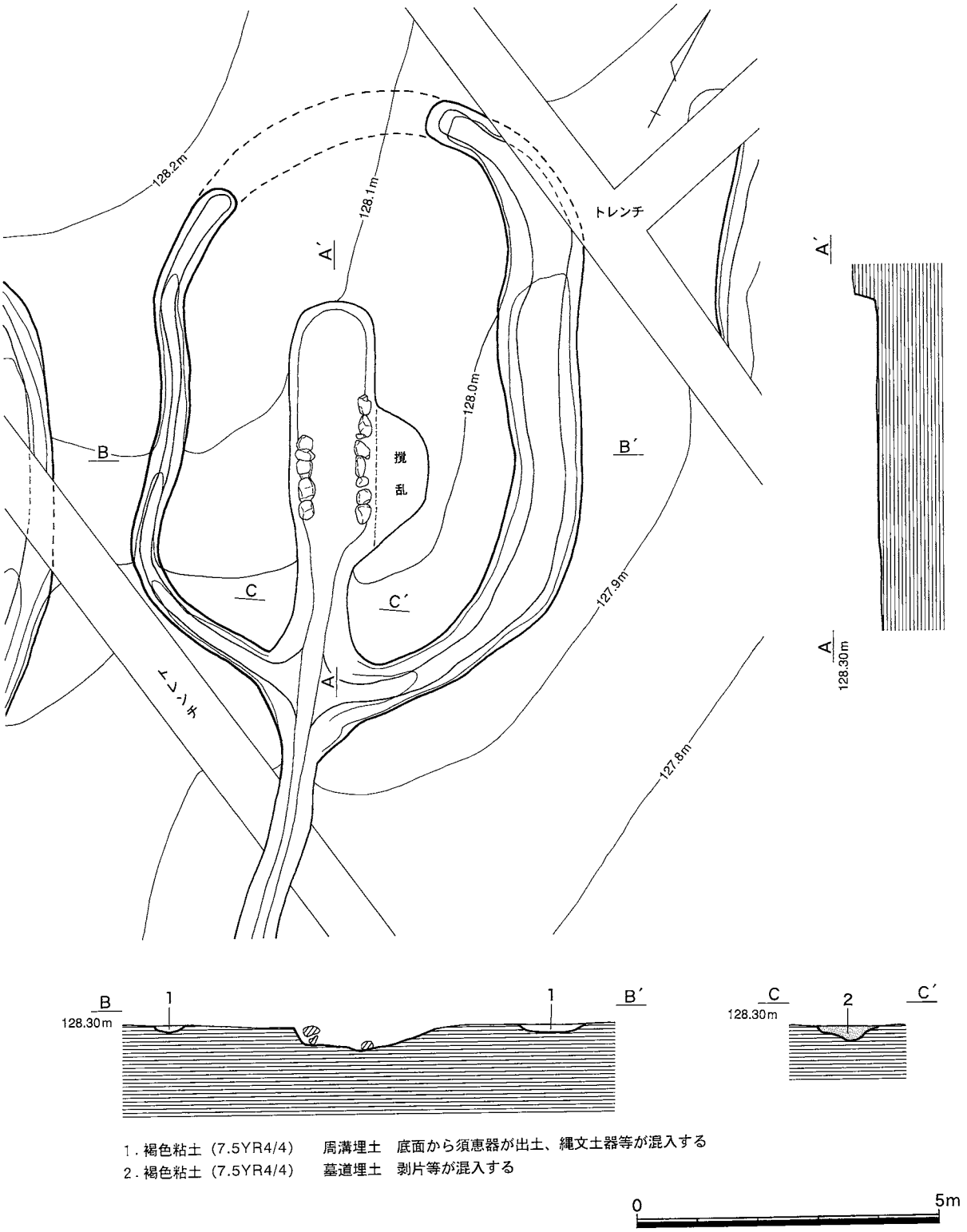


図53　水掛渡Ｄ６号墳墳丘図

(3)　出土遺物

主体部の遺物出土状況（図56）　６号墳の石室内からは須恵器と鉄器が出土した（図58）。55のフラスコ形長頸瓶と58の平瓶は敷石上の出土である。63の刀子は敷石が施されない部分の床面からの出土である。これら３点は撹乱の影響を受けているものの、元位置から大きく動くものではないようである。更に、石室覆土をふるいにかけたところ、64と65の鉄器も出土した。

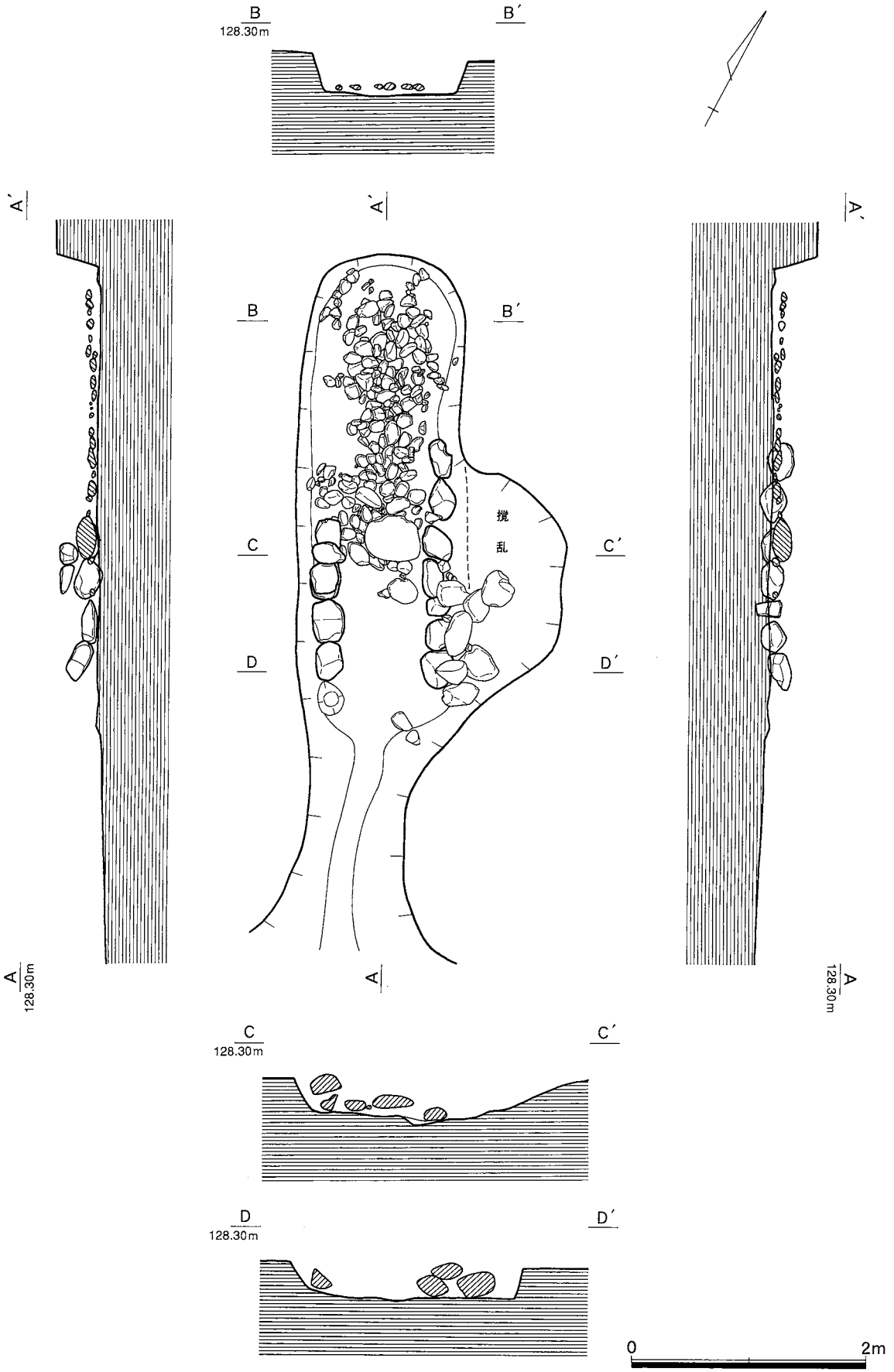


図54　水掛渡Ｄ６号墳石室展開図

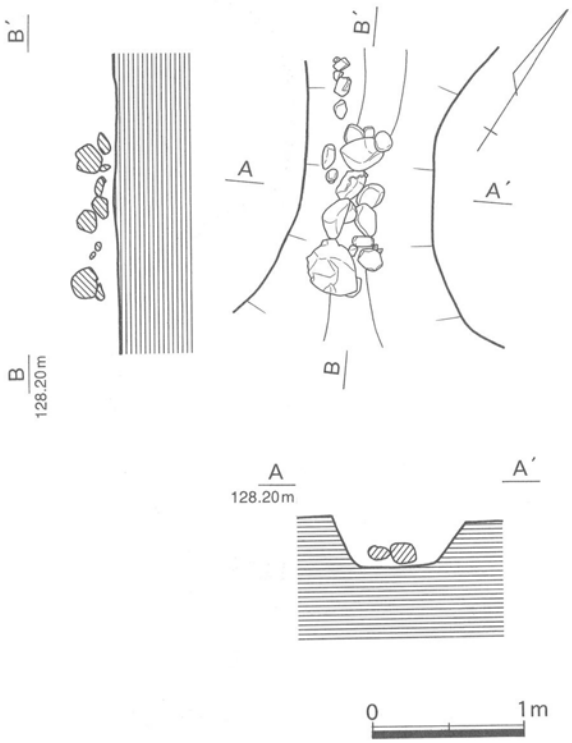


図55　６号墳閉塞石の状況

なお、石室東側の撹乱からは56の須恵器坏身が出土した。この遺物は撹乱に伴い、石室内から掻き出されたものと考えられる。

周溝の遺物出土状況（図57）　遺物は周溝と墓道が接する概ね１m四方の範囲からまとまって出土した。ここから出土したのは図58－57・59・62の須恵器と60の土師器である。いずれも、底面からの出土であった。また、接合することはできなかったものの62と同一個体になると考えられる甕の破片が多数出土した。

なお、６号墳では黒曜石製の石鏃が周溝覆土から１点出土したのを始め（図100－230）、剥片が30点程度出土した。縄文土器も周溝から１点の細片が出土した。周溝覆土からは61の灰釉陶器椀も出土した。

石室内の出土遺物（図58）　石室内からは55・58の須恵器と、63～65の鉄器が出土した。主体部東側の撹乱から出土した56の須恵器も本来的には６号墳の副葬品であったと考えられる。55はフラスコ形長頸瓶である。口縁部の１/４程度を欠損する以外は完形に復原できた。口径は10.3cm、器高24.0cm、胴部の最大径は18.4cmである。胴部は回転ヘラケズリ、頸部から口縁部は横ナデによる調整が行われる。焼成は良好で、灰白色を呈し、湖西産と考えられる。

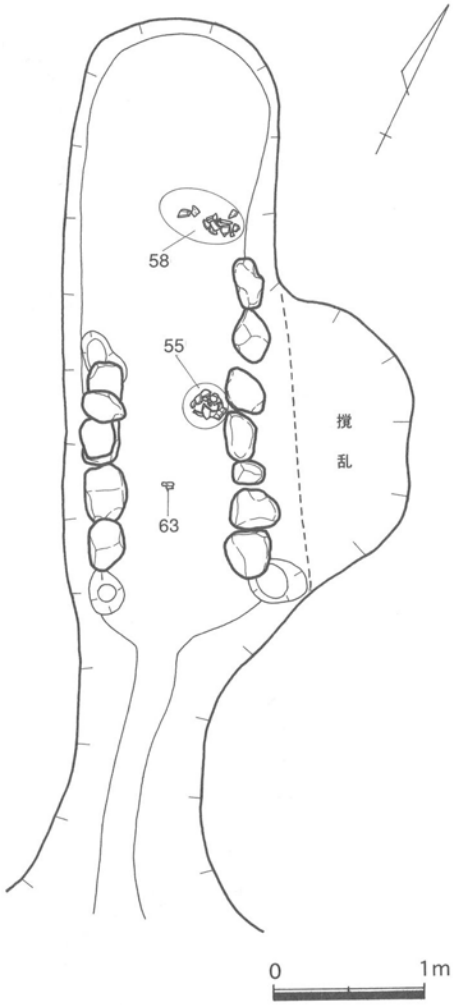


図56　６号墳石室の遺物出土状況

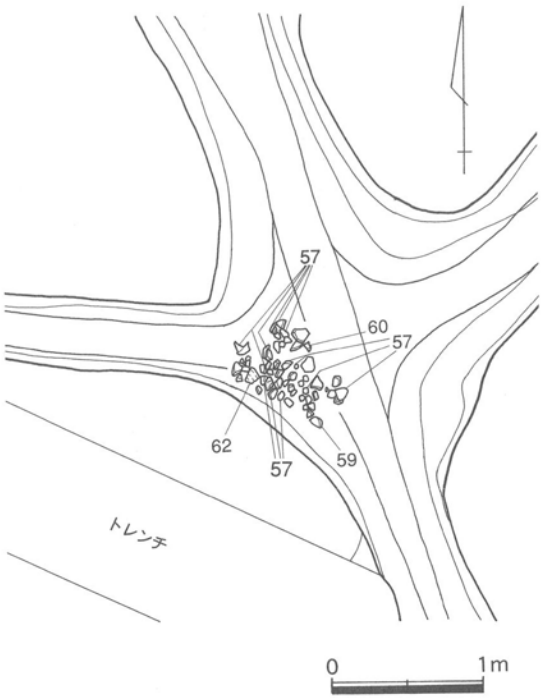


図57　６号墳周溝の遺物出土状況

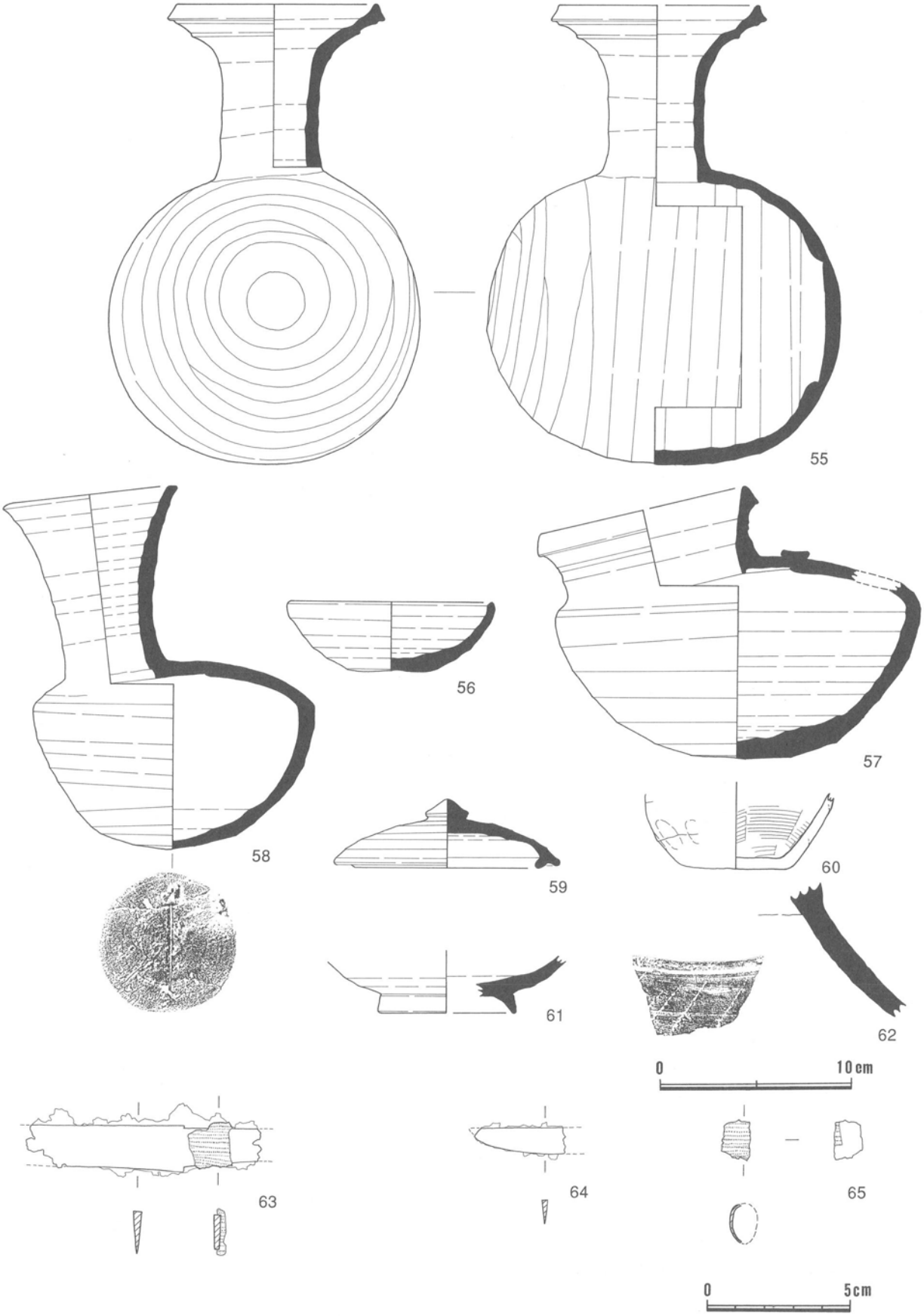


図58　６号墳の出土遺物

58は平瓶で、口縁部と体部の一部を欠損していた。口径8.2cm、器高19.0cm、胴部の最大径は14.7cmである。体部の外面底部はヘラケズリにより調整が行われるが、その外は横ナデによる調整である。また、丸底の底面にはヘラ記号を有する。焼成は良好で灰白色を呈し、湖西産と考えられる。

56の坏身は全体の１/２程度の残存であった。口径10.5cm、器高3.7cmを測る灰白色の須恵器である。焼成は良好であり、内面から外面体部は横ナデで調整が行われる。外面底部はナデで調整されている。

以上の３点はＴＫ217～ＴＫ48型式並行期に位置づけられ、７世紀中葉～後葉のものと言える。

63～65は鉄器である。63と64は刀子の破片である。63は残存長8.3cmの内、鏃身部の残存長は5.6cm、茎の残存長は2.7cmである。関は両関で茎には木質が付着する。64は刀身部の3.2cmが残存した。63と64は同一個体の可能性もあるが、現状では判別がつけられない。ここではその可能性を指摘するに留めたい。65は鉏の破片である。残存長は1.0cmと小さく、復原される形状も1.4cmと小型のものである。そのため、63に伴うものとは考えがたい。外面の一部と内面には木質が付着する。

周溝の出土遺物　６号墳に直接関わるものとしては、周溝と墓道の接点付近から57・59・62の須恵器と60の土師器が出土した。57は平瓶である。一部を欠くもののほぼ完形に復原できた。口径は11.0cm、器高14.2cm、胴部の最大径19.0cmであり、肩部には円形貼付文を１つ所有する。外面体部から底面にかけては回転ヘラケズリ、その外は横ナデの調整が行われる。焼成は良好で、灰白色を呈する。

59は返りを持つ坏蓋で全体の２/３が残存した。焼成は良好で、外面には自然釉が付着する。口径は9.6cm、最大径は11.8cm、器高3.6cmである。頂部には宝珠状の摘みを有する。調整は外面頂部が回転ヘラケズリ、その他は横ナデである。

60は土師器である。底部のみの残存であるため器種を特定できない。表面の風化が激しく調整は判然としないが、内面にはハケ目、外面には指頭圧痕が確認できる。

62は甕の頸部である。焼成は良好で灰白色を呈する。胴部内面には平行文の叩き目が見られる。周溝内からは62と同一個体と考えられる甕の体部の破片が多数出土した。

周溝から出土した須恵器は石室内から出土したものと同様に７世紀中葉～後葉に位置づけられる。

なお、周溝と墓道からは古墳時代以外の遺物も出土した。61は覆土から出土した灰釉陶器の椀である。時期は11世紀代に位置づけられる[8]。細片である上に風化が著しいため、図示できなかったが縄文土器の破片も出土した。また、図100－230の鉄鏃も６号墳周溝から出土した石鏃である。この他にも剥片が多数出土した。縄文時代の遺物については次節に改めて記す。

(4)　小結

６号墳も決して良好とは言えない残存状況であった。開墾による削平のため、墳丘の盛り土は残存しなかった。ただし、周溝の様子から墳形と規模を把握することはできた。墳形は不正形ながらも円墳の範疇として理解できるものである。主体部には横穴式石室を採用していた。多くの石材が抜き取られていたが、無袖式で長方形の玄室平面形態であることが判明した。遺物は石室内と周溝から出土した。石室から出土したのは須恵器と鉄器である。元位置をほぼ留めると解釈できる遺物も見られるが、これが初葬時のものか追葬時のものかは不明と言わざるを得ない。周溝からは墓道と接する部分を中心に須恵器や土師器が出土した。これらは墓前祭祀に伴い、一括して破棄されたものとして考えられよう。６号墳から出土した須恵器はいずれも７世紀中葉～後葉に位置づけられるものである。６号墳で特に目を引くのは13.5mの長さに渡り検出された墓道である。墓道は７号墳の墓道とつながり、６号墳は７号墳と単位群を成していたようである。なお、７号墳の墓道は14号墳の周溝につながる。更に、14号墳の周溝には11号墳や12号墳の墓道もつながっている。６号墳、７号墳、11号墳、12号墳、14号墳は14号墳を中心とした被葬者間の結びつきがうかがえる。

さて、６号墳の墳形が歪んでいた要因としては東の４号墳、西の７号墳の存在が考えられる。おそらく、６号墳は４号墳と７号墳より後に築造されたのであろう。そのため、先に存在していた２基の古墳をさけるように築かれ、このような形状になったと考えたい。なお、４号墳の出土遺物は７世紀中葉～後葉、６号墳もほぼ同時期、７号墳も同時期に位置づけられる。出土遺物からは時期差を看取し難く、短期間の内に４号墳、６号墳、７号墳が築造されたと考えられる。

７．７号墳

(1) 墳丘と外部施設（図59）

古墳の位置と残存状況　７号墳は６号墳の西南西約２ｍに所在する。更に、７号墳の南方約２ｍには12号墳、南南東約４ｍには11号墳が存在する。水掛渡Ｄ古墳群の中では７号墳の周辺は最も古墳が密集する範囲である。残存状況を見ると、これまでに述べた古墳と同様に７号墳も墳丘の大半を削平されていた。調査で検出した外部施設は、周溝と墓道である。

墳形と規模　墳丘盛り土は残存しなかったものの、残存した周溝の様子から墳丘形状や規模を把握することはでき、７号墳は円墳であることが判明した。その規模は東西8.5m、南北10.8mで、他の古墳と同様に東西より南北がやや長い。

周溝　周溝は墳丘の北西部では一部不鮮明であるが、全周していた様子が確認できる。周溝の幅は0.7～1.5m、深さは0.2～0.3mである。墳丘北西部が狭く、浅い傾向にある。

墓道　主体部からは長くのびる墓道が検出できた。墓道は主体部から2.2m程直線的にのび、周溝と交差する。周溝より外側に至ると弧を東側に描くように向きを変える。周溝外側から約９ｍのびたところで、６号墳の墓道が合流する。そこから、緩やかに南西に向きを変え14号墳の周溝につながっている。墓道の総延長は23mで、11号墳・12号墳を避けているかの様相を示す。幅は周溝との交点付近が最も広く1.4mである。ここから離れるにつれ次第に狭まり、14号墳の周溝と接する部分では0.7mである。深さは主体部との接点が最も深く0.5mであるが、主体部から遠ざかるに従い徐々に浅くなる。６号墳の墓道と合流する地点では0.2mの深さである。なお、周溝の底面より、墓道の方が一段深く、その高低差は約0.2mである。

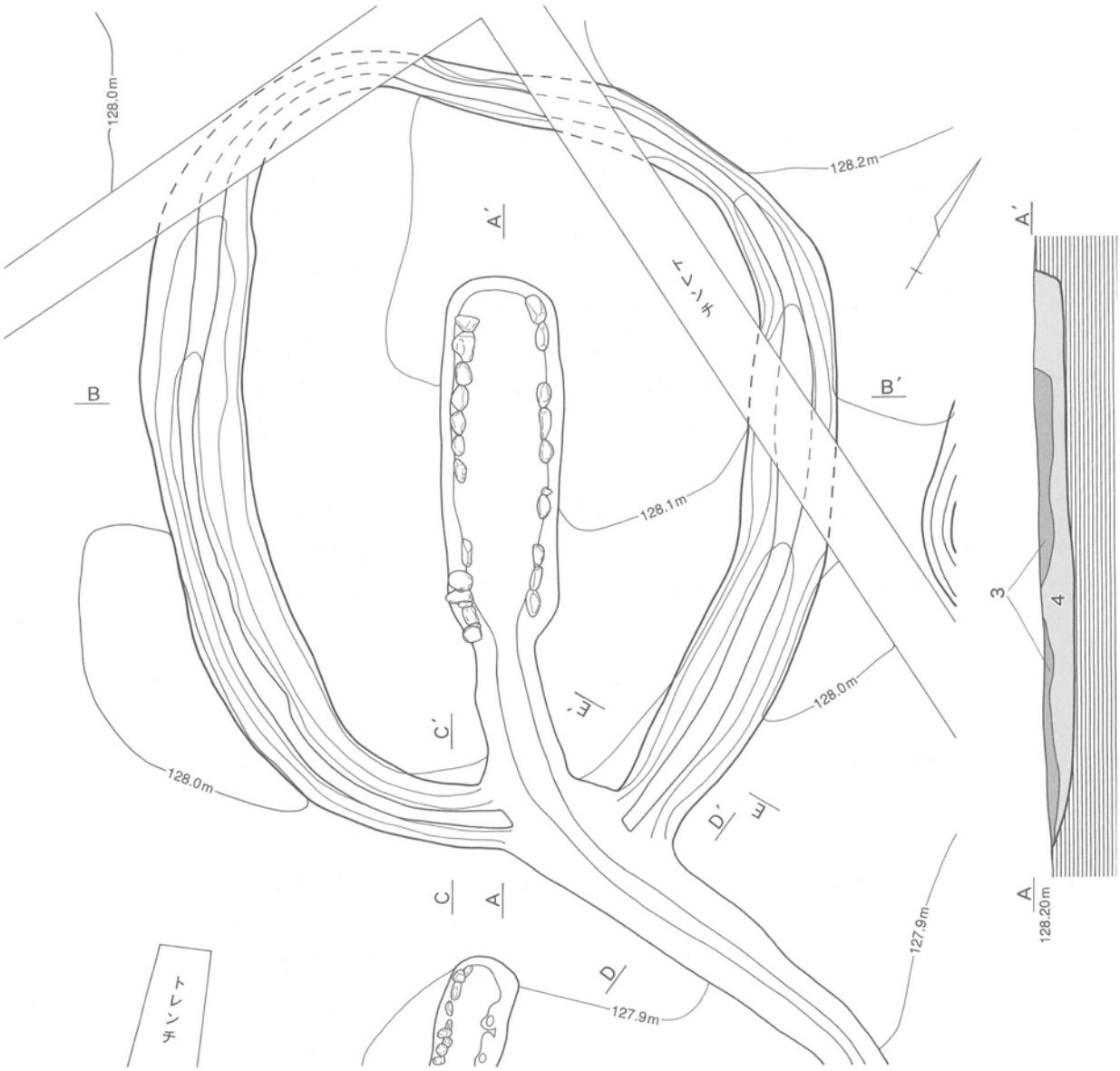
(2) 主体部（図60～62）

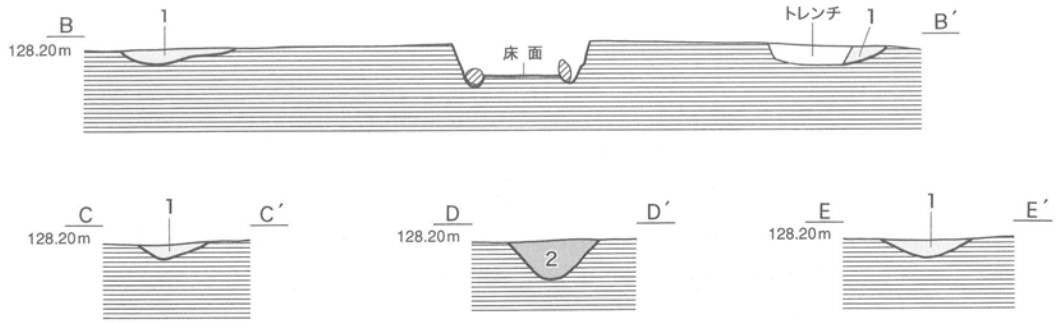
残存状況と形状　主体部は横穴式石室であったが、後世の開墾により破壊が進み、側壁が１～２段残存する程度であった。石室は無袖式で、玄室平面形態は緩やかな胴張形を呈することを知り得たが、立体構造を把握にするには至らなかった。左側壁の石室開口部には立柱石を配し、石室の内外を区分する意図をうかがうことができる。石室の主軸方位はＮ－28°－Ｗで、南南西に開口する。撹乱は一部床面にまで達していたが、敷石は残存し、閉塞部分も破壊を免れていた。

規模　石室の規模は全長4.9mである。幅は奥壁手前で0.8m、開口部で0.8m、奥壁推定位置から2.2m地点で最大幅1.1mである。

床面の状態　石室内にはほぼ全面に礫が敷設されていた。ただし、撹乱を受けた石室中央部の一部は敷石を欠く。使用される礫は、直径５～10cm程度の円礫と角礫の自然石である。奥壁推定位置から1.5m地点には最大幅20cm程度のやや大きめの石材４点を一列に並べ主軸と直交させ、玄室内を区分する意図がうかがえる。床面の標高は石室奥部の敷石上面で130.43mである。

閉塞状況　７号墳は石室の開口部から、墓道と周溝の交点付近にかけて30cm程度の石材を使用して閉塞が行われていた。上部が削平されるものの、残存状況は良好であったと言える。その範囲は奥壁推定位置より4.2m地点から約3.2mの範囲である。石材はいずれも円礫の自然石で、乱雑に積み上げられている。ただし、石室内側に面するものは小口積みされ整えられている。





1．暗褐色粘土（7.5YR3/4）　周溝埋土
2．暗褐色粘土（7.5YR3/4）　墓道埋土
3．撹乱
4．褐色粘土（7.5YR4/4）　石室埋土

0　5m

図59　水掛渡Ｄ７号墳墳丘図

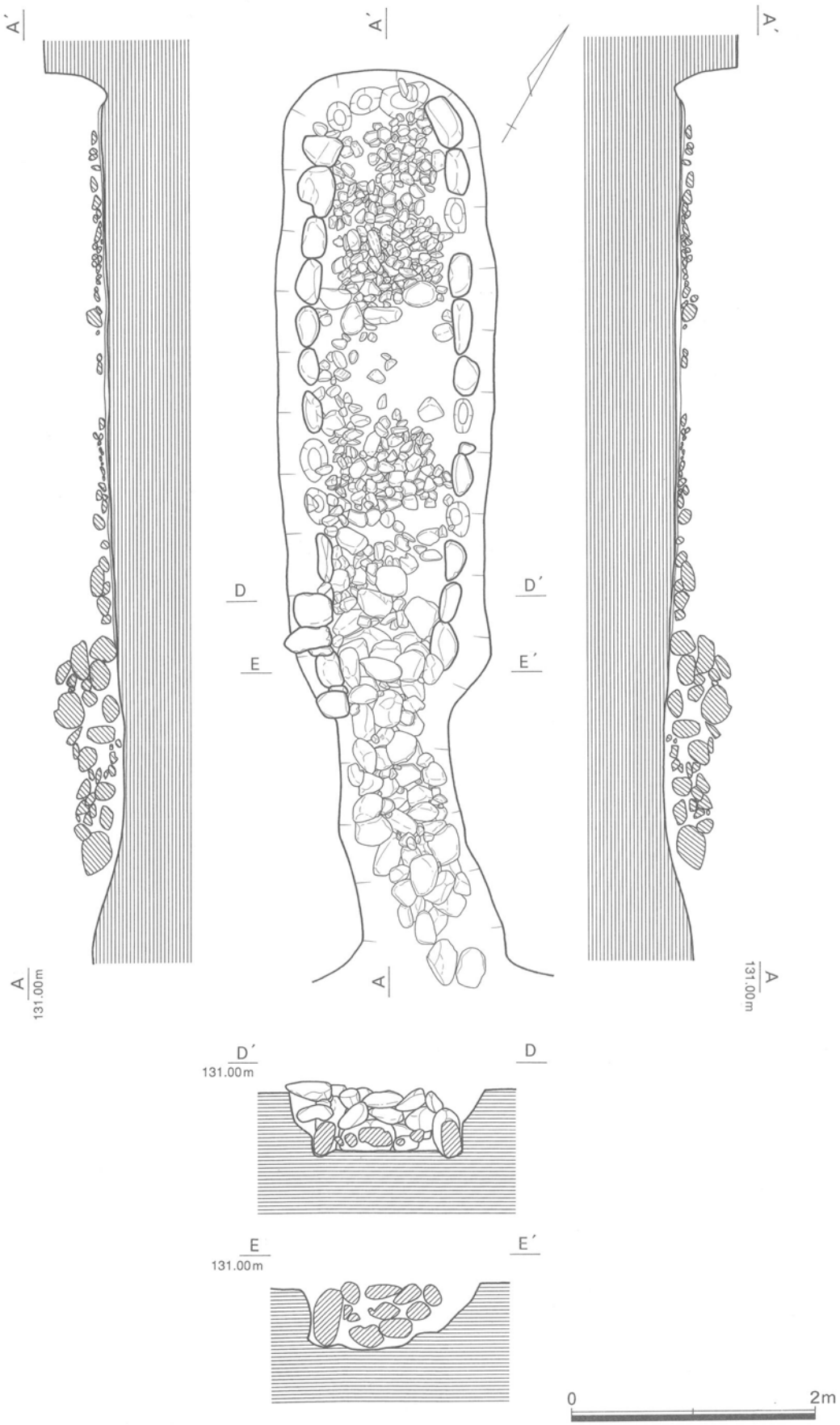


図60　水掛渡Ｄ７号墳石室展開図（閉塞石除去前）

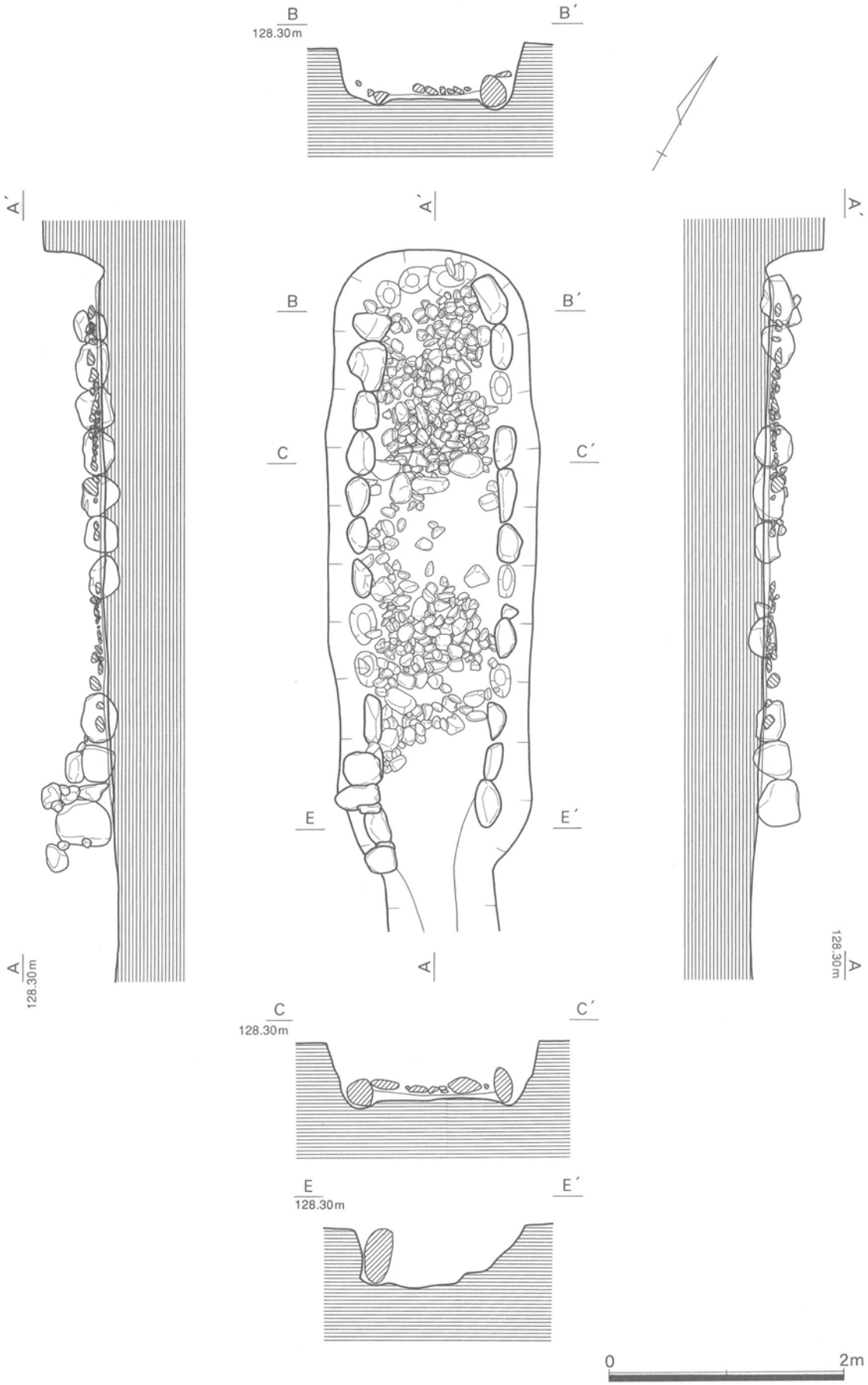


図61　水掛渡Ｄ７号墳石室展開図（閉塞石除去後）

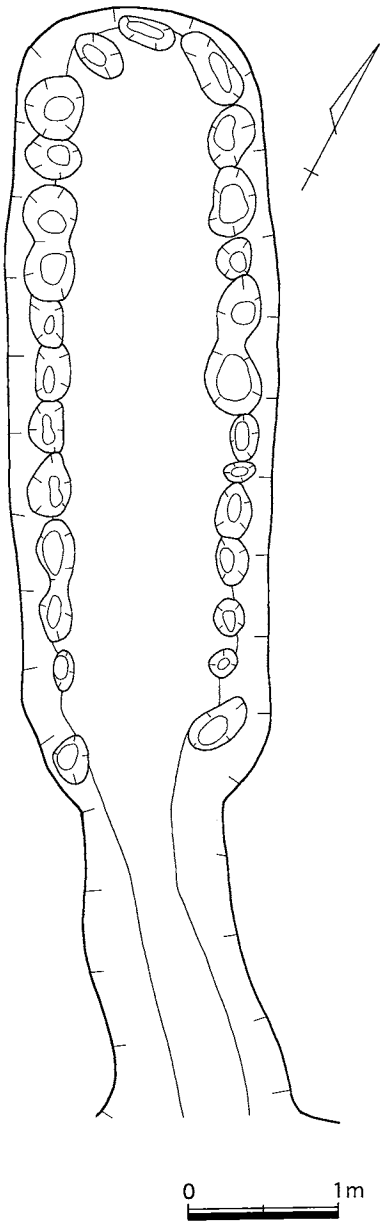


図62　７号墳石室の掘り方

石材の使用方法　７号墳に使用される石材は全て自然石であり、敷石と閉塞石の状況は上述したとおりである。側壁は最大幅30～40cm程度の円礫を使用する。基底石は広口横積みされ、２段目以上は小口積みされるようである。開口部の基底石は右側壁では広口縦積みされ、左側壁では顕著ではないものの他の石材より一回り大きめの石材を使用し、共に立柱石を意識していると見なせる。奥壁は石材の抜き取り跡から判断すると、鏡石状の石材を使用せず側壁同様の石材使用方法であったとうかがえる。

掘り方　掘り方は隅丸長方形を呈し、その規模は全長5.1m、最大幅1.8mで石室より一回り大きい程度である。床面はほぼ水平に掘られ、造作を持たずに墓道へと移行する。

(3)　出土遺物（図63）

石室内の遺物出土状況　石室内は撹乱を受けていた事もあり、須恵器２点が覆土から出土に留まる（図63－66・67）。共に元位置を留めるものではない。また、古墳時代の遺物ではないが、撹乱土からは69と70の灰釉陶器が出土し、剥片も９点出土した。これらは流れ込んだものと考えられる。なお、風化が進み図示するに至らなかったが、閉塞石の下部から土師器の坏身が１点出土した。

周溝の遺物出土状況　周溝の覆土からは図63－68の須恵器に加え、図100－234・236の石鏃が出土した。68の須恵器は底面から浮いた状態であった。これが墓前祭祀に伴うものであるならば、周溝がある程度埋没した時期のものと言える。石鏃は墓道からも出土し（図100－235）、周溝から出土したものも含めて石器は流れ込みによるものと考えられる。なお、墓道からは縄文土器の細片も１点出土したが、細片である上に風化が著しく詳細は不明である。

出土遺物　66と67は石室の覆土から出土した須恵器である。いずれも口縁部の細片であり、図上で復原を行った。66は口径9.4cmに復原でき、焼成は良好で灰白色を呈する。断定はできないが、瑳の可能性が考えられる。なお、内面には自然釉が厚く付着している。67は平瓶の口縁部と考えられ、口径8.9cmである。焼成は良好で、灰白色を呈する。時期は特定し難いが、２点とも７世紀中葉～７世紀後葉の可能性が高い。

68は周溝の覆土から出土した須恵器である。坏の底部と考えられ、底径は9.0cmである。焼成は良好で、灰白色を呈する。底面は回転ヘラケズリが行われ、ヘラ記号を有する。断定できないが、８世紀代に位置づけられよう。

69と70は石室の覆土から出土した灰釉陶器で、共に東遠江で生産されたものである。２点とも焼成は良好で灰白色を呈する。69は底部のみの残存、70は全体の３/４程度が残存した。70は口径15.1cm、器高6.2cmで、内面と外面は横ナデによる調整が行われる。外面底部には糸切り痕を残し、高台にはスノコの圧痕が観察できる。内面体部には釉が付着する。２点の灰釉陶器は11世紀代に位置づけられる。

墓道と周溝から出土した石鏃は３点ともに流紋岩製のものである（図100－234～236）。これらについ

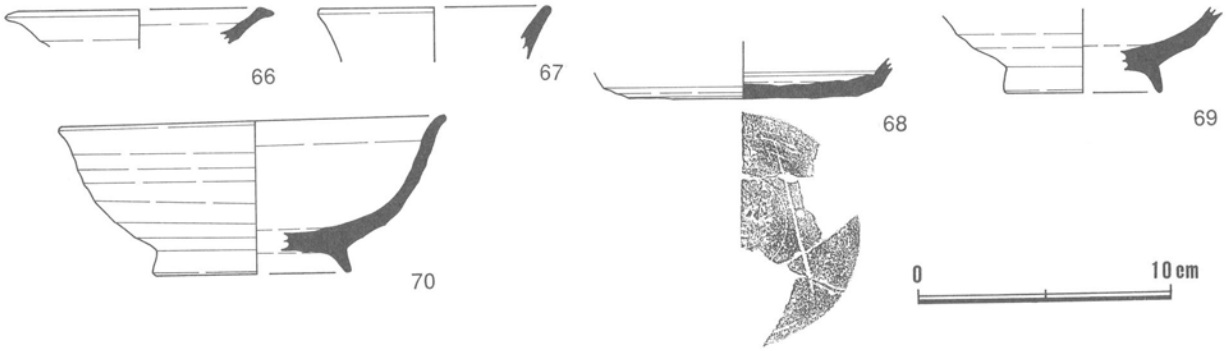


図63　７号墳の出土遺物

ては、次節に改めて記す。なお、墓道から出土した縄文土器は風化が著しいことに加え細片であり、詳細も不明である。

(4)　小結

７号墳も他の古墳と同様に削平と石材の抜き取りを受け、墳丘と主体部の残存状況は悪かった。しかし、周溝が残存したことで墳形とその規模を把握することはでき、主体部も基底石の状況から形状が判明した。この古墳は最大径10.8mの円墳で、全長4.9mの無袖式の横穴式石室を採用していた。墳丘規模や石室規模は水掛渡Ｄ古墳群中では大きな古墳と言える。また、石室は無袖式ではあるが、開口部に立柱石を配すなど他の古墳に見られない特徴も持っていた。この古墳は６号墳と同様に長くのびる墓道が検出できたことも特徴的である。墓道は東側に大きく弧を描き、あたかも11号墳・12号墳・14号墳を回避するかのようである。７号墳は６号墳の墓道と途中で合流し、14号墳の周溝に接続する。14号墳には11号墳、12号墳の墓道もつながるため、各古墳間の被葬者は結びつきがあったと言えよう。７号墳は出土遺物が少なく築造時期を断定できないが、７世紀中葉～後葉に古墳が造営されていたと考えられる。また、７号墳の墓道に６号墳の墓道が合流するので、７号墳は６号墳より先出するのであろう。もっとも、６号墳も７世紀中葉～後葉の造営年代が当てられるため、大きな時間差を持つものではないと言える。

８．８号墳

(1)　墳丘と外部施設（図64）

古墳の位置と残存状況　８号墳は調査区の南東部に位置し、西隣の９号墳と周溝を接している。この古墳も他の古墳と同様に上部を削平されていた。外部施設としては、周溝と墓道が検出される程度であった。削平状況は著しく、周溝と墓道はわずかにその痕跡を残す程度である。

墳形と規模　墳形はかろうじて残存した周溝から円墳であることが判明した。その規模は東西8.1m、南北11.0mで南北がやや長い状況にある。

周溝　周溝は全周し、幅は0.8～1.7mである。深さは0.1m程度と浅いものであった。墳丘西側で９号墳の墓道と重なるが、切り合いの様子はつかめず、ほぼ同時期の埋没のようである。

墓道　墓道は主体部から直線的に約8.0mのびている状況が確認できた。もっとも、墓道の残存も周溝と同じ状況で、0.1mの深さが残る程度である。幅は最大1.0mである。墓道は本来的には調査区外へと続いていたと考えられる。なお、水掛渡Ｄ古墳群の立地する丘陵は調査区外になると急傾斜が始まる。８号墳の墓道がのびる先も急斜面となっている。

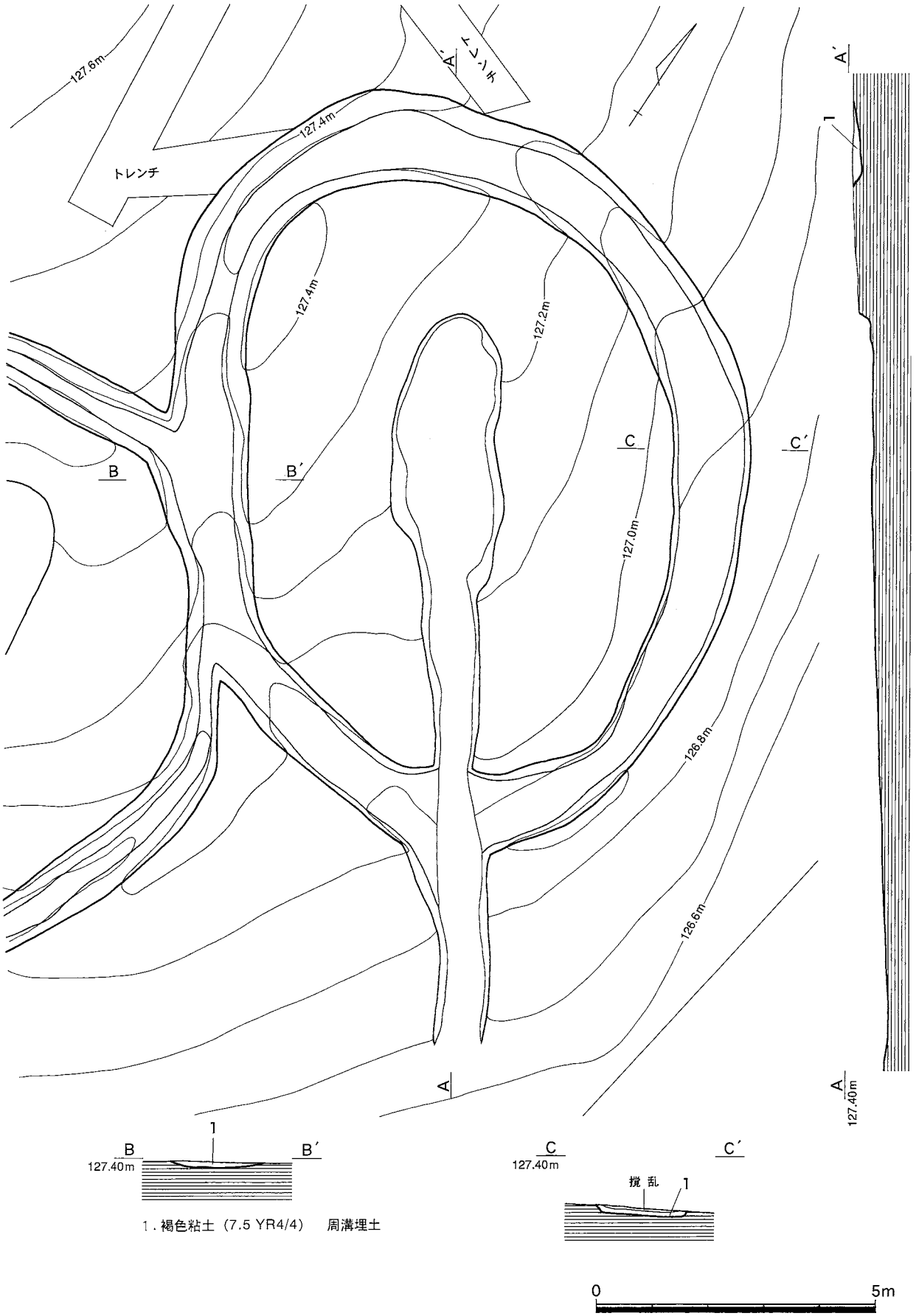


図64　水掛渡Ｄ８号墳墳丘図

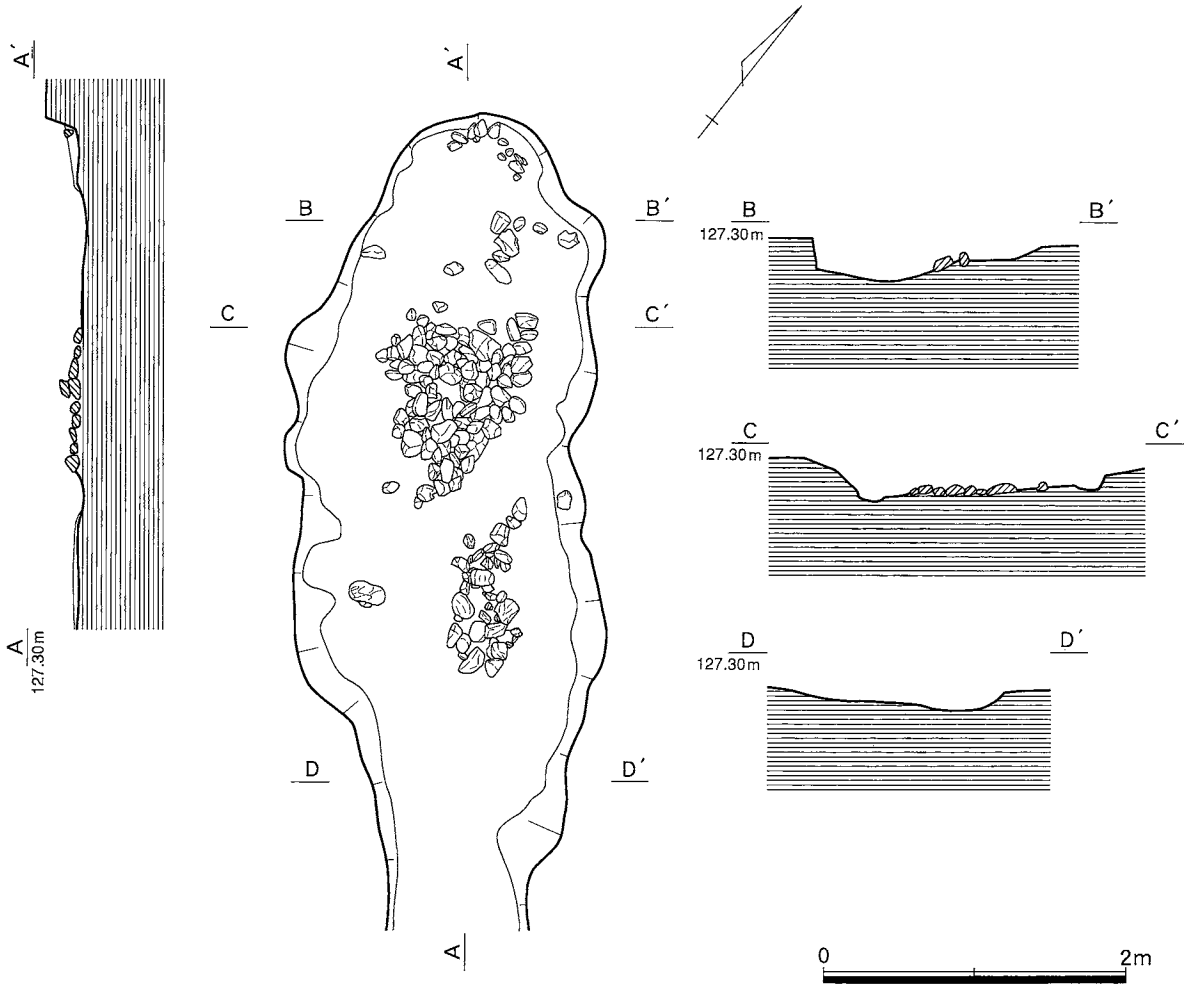


図65　水掛渡Ｄ８号墳石室展開図

(2)　**主体部（図65・66）**

残存状況と形状　主体部は主軸をＮ－30°－Ｗに持つ横穴式石室であった。残存したのは敷石の一部のみで、側壁と奥壁は全く残存しなかった。そのため、石室の形態は不明と言わざるを得ない。また、閉塞施設についても一切が残存しなかった。

規模　掘り方や敷石の範囲から石室規模を推測すると、全長3.5m、最大幅1.1m程度と考えられる。

床面の状態　床面にも撹乱がおよんでいたが、一部は破壊を免れ敷石が遺存した。敷石が検出された範囲は、主軸方向を基準として長さ約2.5m、幅約1.0mである。ただし、この中を南北に斜行する撹乱が存在するため中央部が寸断される。敷石に使用されるのは自然石である。５cm程度の角礫が主体で、円礫も混在する。床面の標高は石室奥側の敷石上で127.02mである。

使用石材　先述したような残存状況であるため、奥壁や側壁に使用される石材は不明である。

掘り方　掘り方についても、撹乱の影響が大きく不鮮明な部分が多い。全長は４m前後、幅は1.5～2.0m程度であったと推測される。現状では検出面から深さを測ると、最深部でも0.1mと浅いものであった。

(3)　**出土遺物**

遺物の出土状況（図66）　遺物は石室内から須恵器と鉄器が出土した（図67）。71・73・78・79の須恵器と83の刀子、94～98・100の鉄鏃は石室中央部の西寄りからまとまって出土した。74～76の須恵器は石室開口部付近に散在した。ただし、これらの遺物はいずれも撹乱による２次的な移動を受け、元位置を留めるものではない。

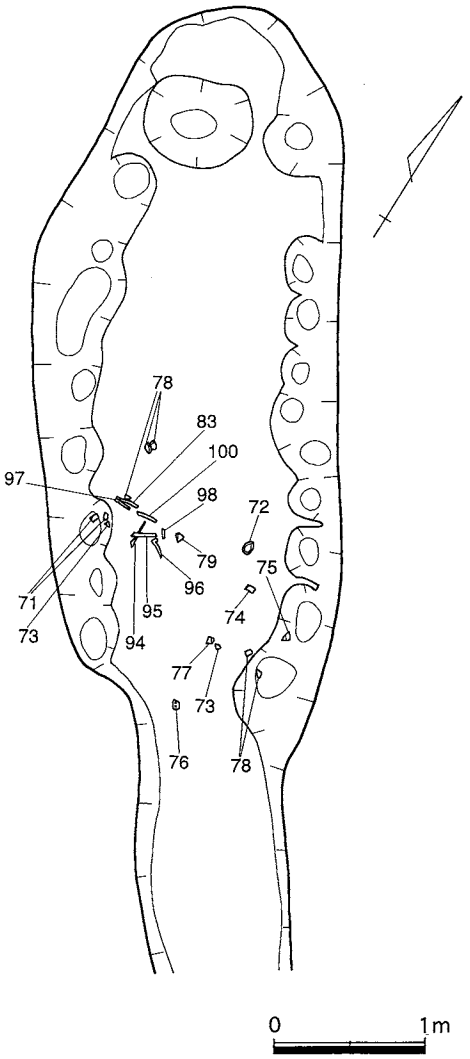


図66　８号墳の遺物出土状況

石室覆土をふるいにかけた所、14点の鉄器の破片が出土した。この中には、大刀の鍔（82）等も含まれていた。また、８号墳の石室内からは古墳時代の遺物ではないが、剥片や縄文土器の細片も出土した。これらの遺物は周囲からの流れ込みによるものであろう。なお、周溝からの出土遺物はなかった。

出土遺物（図67）　71～79はいずれも石室内から出土した須恵器である。71と72は受部を有する坏身で、残存したのは口縁部の一部のみであるため図上で復原を行った。71は口径11.5cm、器径13.6cm、72は口径8.4cm、器径10.2cmと推測される。共に、焼成は良好で灰白色を呈し、横ナデにより調整が行われている。

73～77は受部を有さない坏身である。ただし、坏蓋となる可能性もある。５点とも体部から口縁部にかけての一部の残存に留まるため、図上で復原を行った。口径は最も小さな76が8.2cm、最も大きな77でも9.2cmである。焼成はいずれも良好で灰色あるいは灰白色を呈する。調整は外面体部から内面にかけて横ナデによる調整が行われている。74と75は底面に回転ヘラケズリが行われていることが確認できる。なお、76は体部外面に一条の沈線を巡らす。

78は瓶類の口縁部であるが、遺存したのは口縁部の２/５程度であった。焼成はやや悪く、灰白色を呈する。

79は細片の出土に留まったが、高坏の坏部と考えられる。口径は14.7cmと推測され、焼成は良好で灰白色を呈する。

８号墳の石室内から出土した須恵器はいずれも細片であるが、ＴＫ46形式併行期あるいはその前後に位置づけられる。７世紀中葉～後葉のものと言える。

80～100は石室内から出土した鉄器である。82・84～98・100以外は石室覆土をふるいにかけたところ発見した遺物である。80は大刀の刀身の破片、81は鉏、82は鍔の破片である。断定できないが、これらは同一個体のものであろう。80の刀身の最大幅は2.4cmである。81の鉏は全体の約３/４が残存した。内面には木質が付着し、残存幅2.4cm、長さ2.7cmである。82の鍔は１/４程度の残存であったが、倒卵形の無窓鍔であることがうかがえる。全長8.9cm、幅は7.3cmと推定され、象嵌は施されていない。

83～87は刀子である。それぞれ別個体であるため、８号墳では少なくとも５点の刀子が副葬されていたことが判明した。83の刀身の長さは11.7cmと推定される。関は両関で、茎は残存長4.3cmである。この刀子は94～98・100の鉄鏃とまとまって出土した。84は残存長12.3cm、刀身長は7.7cmである。関は両関で、茎には木質が付着する。また、鉏も残存し、鉏の内面にも木質が付着する。85～87は刀身部の一部の残存に留まった。

88～93は両頭金具である。いずれも残存状況は悪く、完形を保つものは無かった。88は筒金を欠損し、残存長は2.5cm、頭部は直径0.4cmである。89～92は片方の頭部を欠損し、更に、91と92は筒金も遺存しなかった。残存長は89が2.5cm、90が2.7cm、91が1.9cm、92が1.5cmであった。

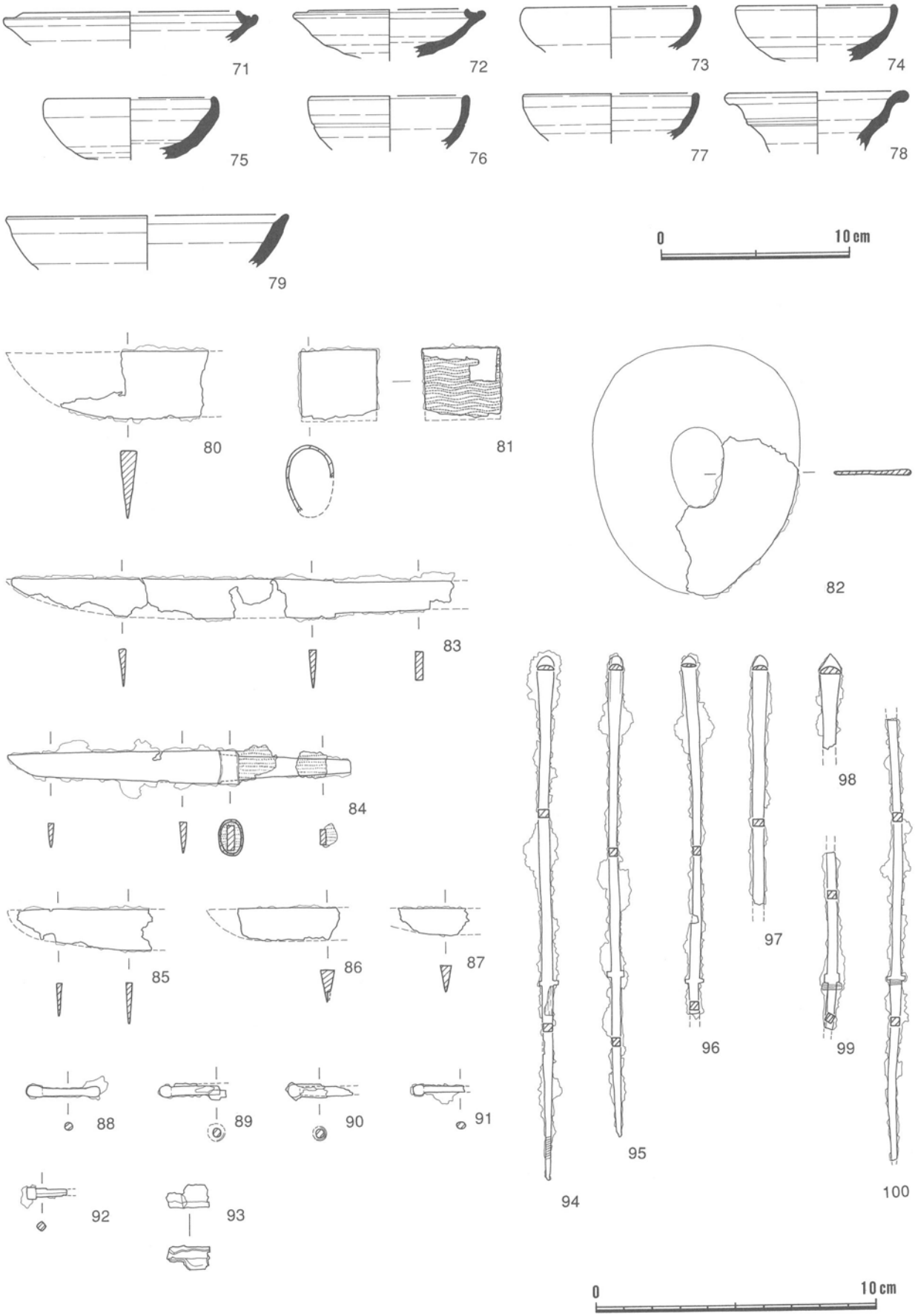


図67　８号墳の出土遺物

頭部の直径は89が0.4cm、90が0.5cm、91が0.4cm、92が0.4cmである。89と90は筒金が断片的に遺存し、その直径は89が0.6cm、90が0.5cmである。なお、花弁は確認できなかった。93は筒金のみが出土した。残存長は1.5cm、直径は0.5cmと推定される。花弁の有無については不明である。８号墳では両頭金具は少なくとも５個体分が存在したようである。

94～100は鉄鏃で、いずれの鏃も尖根式である。94～98は鏃身部が残存し、全て鑿箭式であることが判明した。また、94～96・99・100は茎関が遺存し、その形状は棘状関であった。出土した７点の鉄鏃のうち、鏃身部から茎まで残存したのは94・95の２点のみである。94は全長18.6cm、鏃身と頸部を合わせた長さは11.5cm、茎の長さは7.1cmである。95は全長17.1cm、鏃身部と頸部を合わせた長さは11.2cm、茎の長さは5.9cmである。96は茎の一部を欠損していた。残存長は12.7cmで、鏃身部と頸部を合わせた長さは11.5cmである。97と98は鏃身部と頸部の一部が残存した。97は残存長8.9cm、98は残存長3.4cmである。99と100は頸部と茎が遺存し、残存長は99が6.3cm、100は15.7cmである。

上記以外に８号墳では剥片や縄文土器片が出土した。これらは、細片であるため詳細をつかむことはできなかった。

(3) 小結

８号墳は破壊が著しかったものの、直径11m程度の円墳であることが明らかとなった。８号墳の周溝は９号墳の周溝と接していた。その状況から８号墳と９号墳はほぼ同時期の古墳と推察される。埋葬施設は全長3.5m前後の横穴式石室であるが、奥壁と側壁の全ての石材が抜き取られていたため石室の形状については不明である。撹乱の著しい主体部からは須恵器や、大刀やその鍔、刀子、鉄鏃、両頭金具等の鉄器が出土した。８号墳は水掛渡Ｄ古墳群の中では最も多くの鉄器を出土した古墳であることは注目できる。須恵器は細片となっていたが、７世紀中葉～後葉に位置づけられるものであった。もっとも、これらの遺物は２次的移動を受けているため、初葬時のものであるのか追葬時のものであるかは不明である。

９．９号墳

(1) 墳丘と外部施設（図68）

古墳の位置と残存状況　９号墳は調査区の南東部に位置し、８号墳と周溝を接する古墳である。また、９号墳の南方約２mには13号墳、北西約３mには10号墳が所在する。９号墳も上部を削平され、墳丘盛り土は消滅していた。周溝と墓道は破壊を免れ残存し、墳形や規模をうかがうことはできた。なお、削平は墳丘東側が西側に比べ著しい。

墳形と規模　残存した周溝から、９号墳は円墳であることが言える。ただし、南北に対し、東西がやや短く、長径10.6m、短径8.9mの長さである。

周溝　周溝は全周している様子が検出できた。幅は0.5～2.0m、深さは0.3～0.1mである。墳丘東側に比べ、西側の幅が広く深い傾向にある。ただし、墳丘西側の南半部は北半部に比べ、著しく幅が狭まる。これは、９号墳の南西に所在する13号墳の存在が影響していると考えられる。なお、周溝の南西部からは遺物が出土した。

墓道　墓道は主体部である横穴式石室の開口部から南方へ直線的にのびている。検出できた長さは6.2mである。深さは主体部に接する部分が最も深く0.3mで、次第に減じていく、なお墓道からは須恵器が出土した。

(2) 主体部（図69～71）

残存状況と規模　主体部は横穴式石室であった。残存したのは奥壁と側壁の基底石と２段目の一部、床面の敷石であった。もっとも、側壁は半分以上の石材が既に抜き取られており、床面にまで達する撹

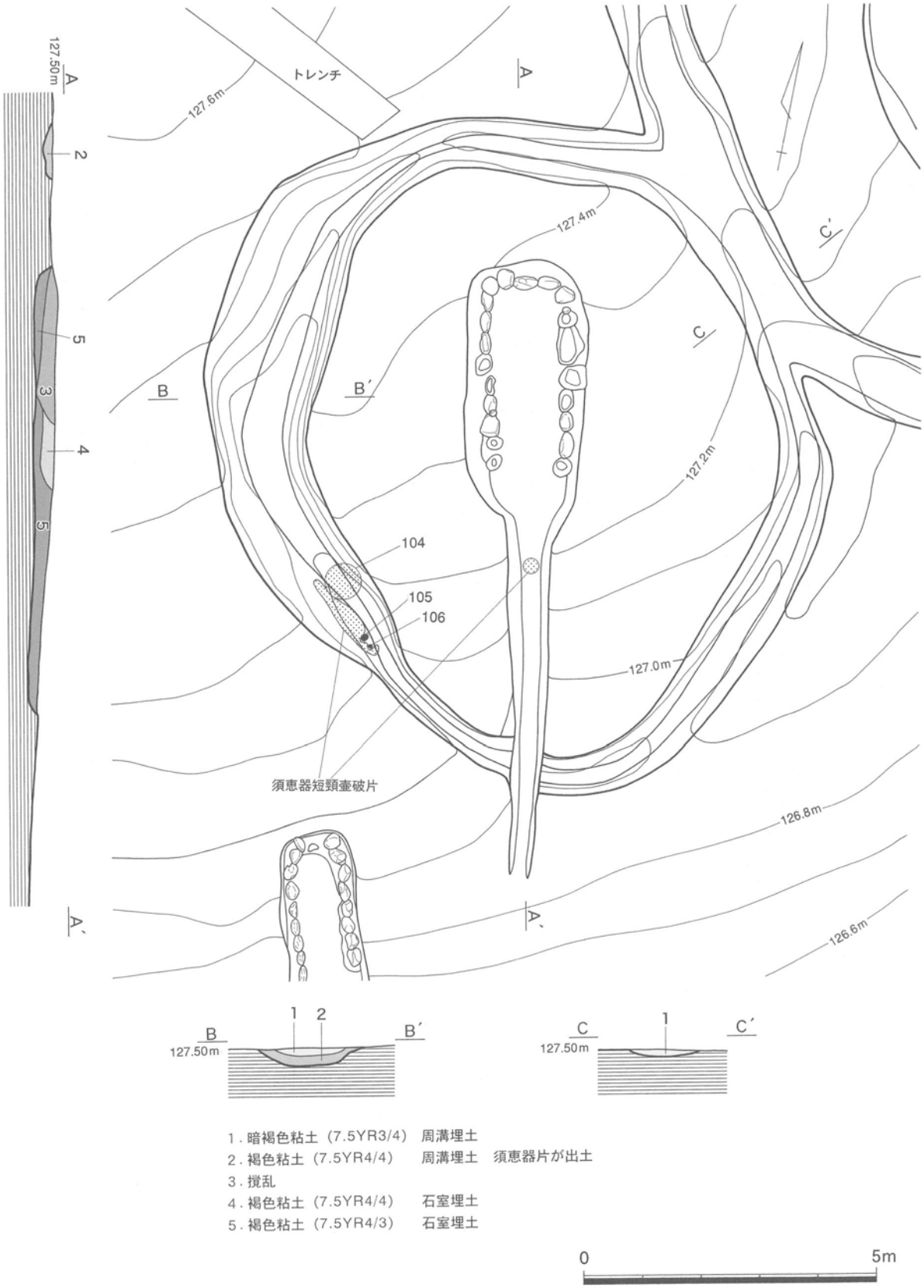


図68　水掛渡Ｄ９号墳墳丘図

乱もみられた。このような残存状況であるため断定はできないが、石室は無袖式のものと推定される。玄室の平面形態は若干の胴張を示すが、長方形と見なせるものである。主軸方位はN－12°－Wであり、東に隣接する８号墳とは若干異なる。

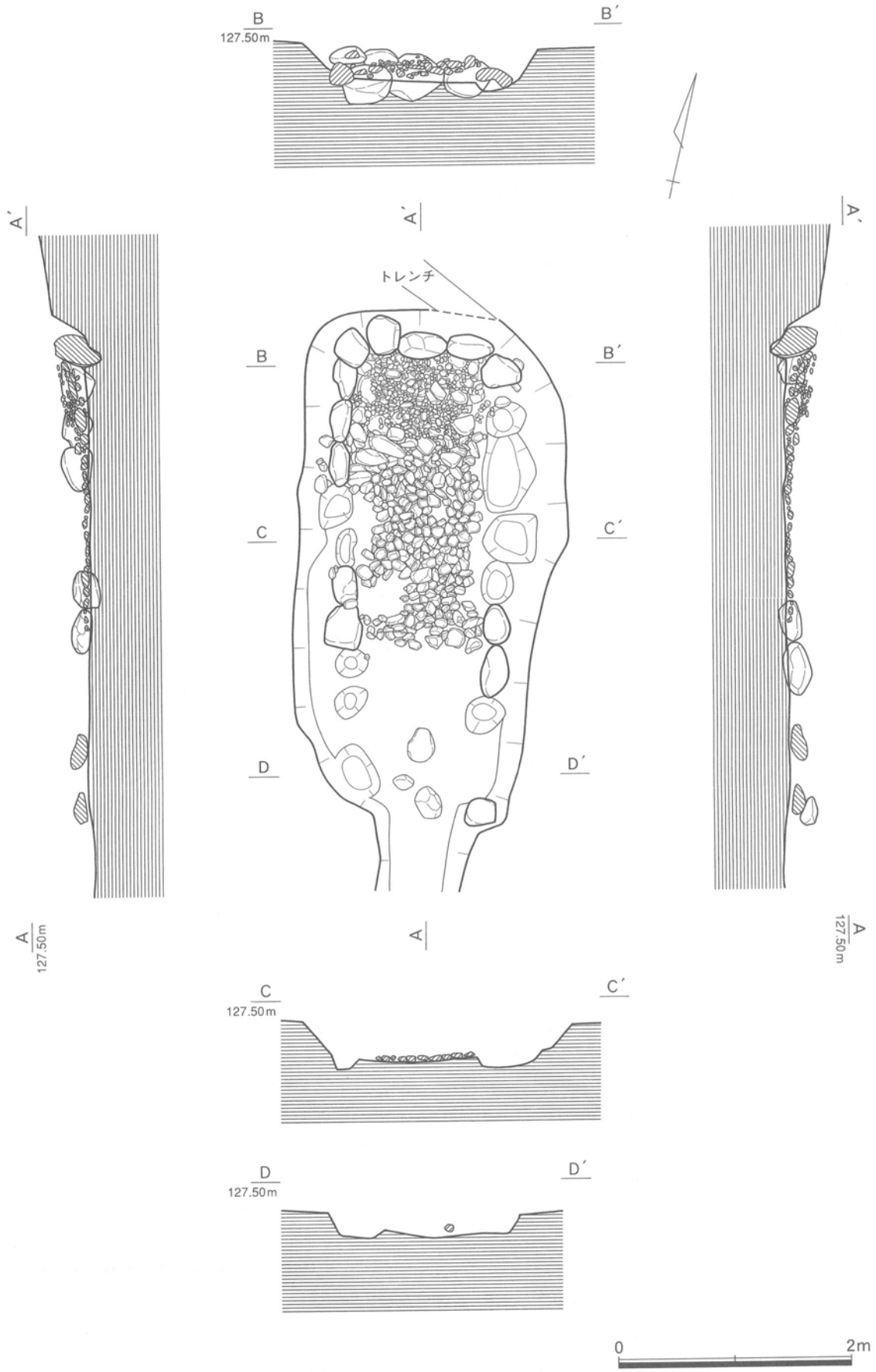


図69　水掛渡Ｄ９号墳石室展開図

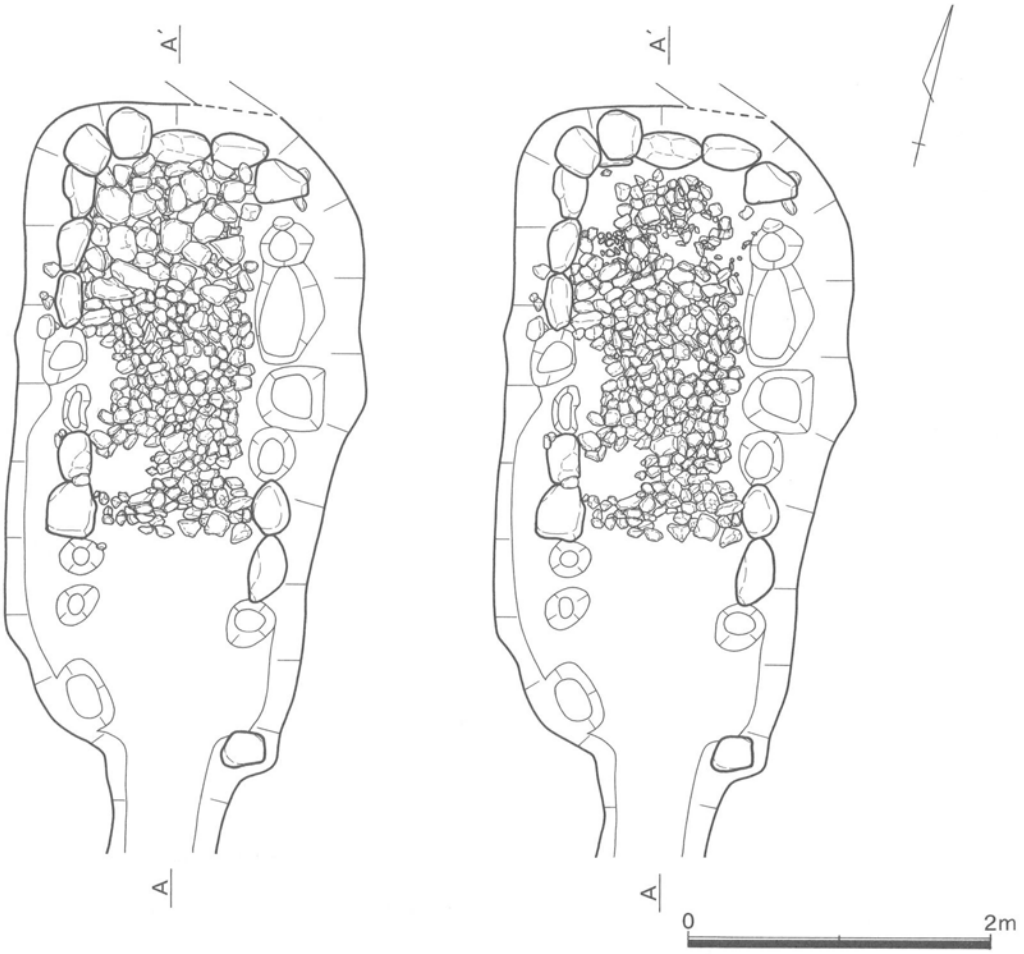


図70　９号墳石室床面（第２面・第３面）

規模　石室の全長は4.0mである。石室の幅は奥壁が1.1m、開口部の幅は推定で0.8m、最大幅は奥壁から1.0m地点にあり1.2mである。残存する高さは0.3m程度である。

床面の状態　床面には礫が敷設されている。ただし、その状況は他の古墳と異なる様相を示していた。敷石が施される範囲は奥壁から2.5m地点までであり、開口部側の1.5mの範囲には敷石が見られなかった。他の古墳と異なるのは、奥壁から0.8m地点までは敷石が３重に施されていることである。上から第１面、第２面、第３面と呼称して各面の状況を見ることにする。第１面は２～５㎝程度の円礫が使用される。この円礫はいずれも表面が潤滑な玉石であった。第２面は５～20㎝程度の偏平な円礫を主体に形成されている。第３面で使用される石材は10㎝前後の円礫と角礫で、いずれも自然石である。各面において使用される石材の傾向が異なるため、それぞれの面を容易に区分できた。標高は石室中央の奥壁手前で計測して第１面が127.26m、第２面が127.23m、第３面が127.10mであり、いずれの床面も開口部側が0.05m程低くなっている。各面は密着し、各面と面の間に遺物や堆積層は存在しなかった。

閉塞状況　石室開口部付近には敷石と異なる３点の石材が床面上に存在し、これらが閉塞の一部であったと考えられる。その範囲は奥壁から3.2m地点から0.9mの範囲であった。他の古墳と同様に、石室開口部から墓道にかけて円礫を積み上げ閉塞となしていたと推測される。

使用石材　９号墳に使用される石材はいずれも自然石であった。奥壁には鏡石は使用されず、最大幅40㎝前後のやや偏平な円礫が使用され、基底石は３個の石材で構成される。基底石はいずれも広口横積みで、１石のみ残存する２段目は小口積みである。側壁は最大幅30～40㎝程度のやや偏平な円礫が使用される。基底石は広口横積み、２段目は小口積みである。

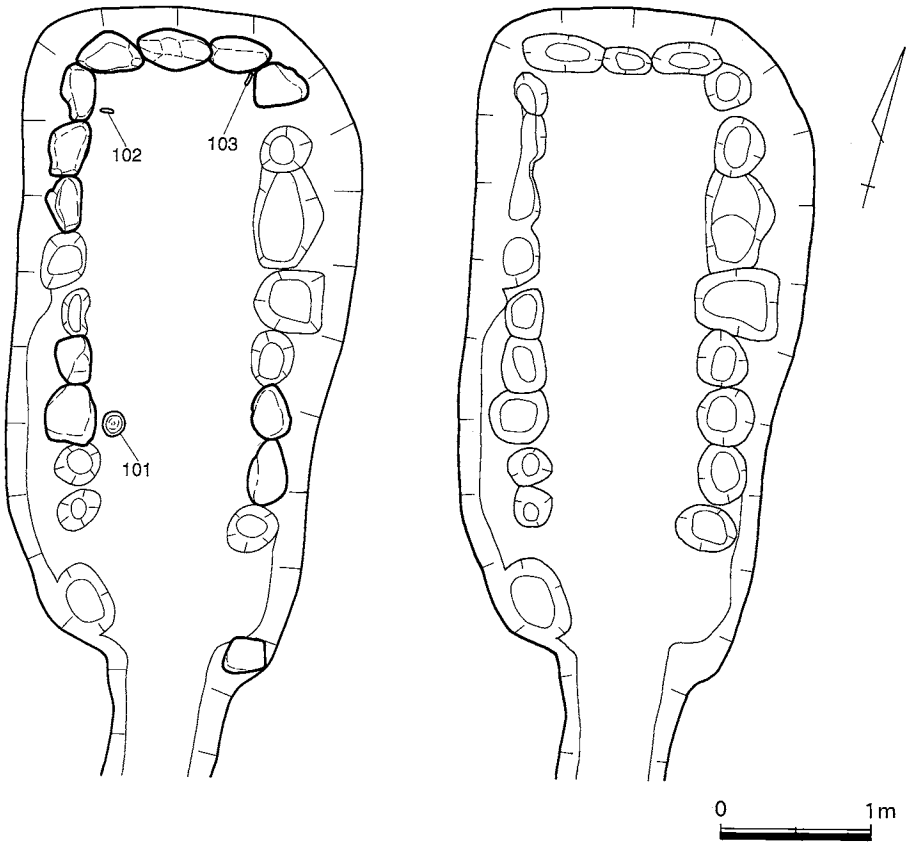


図71　９号墳の遺物出土状況と石室の掘り方

掘り方　掘り方の平面形は隅丸の長方形で、全長4.4m、最大幅2.3mである。現状では検出面から0.3mの深さで地山を掘込んでいる。石室床面は水平に掘削され、貼り床などは行われていない。墓道から傾斜が始まり、墳丘外に向かって緩やかに下っていく。

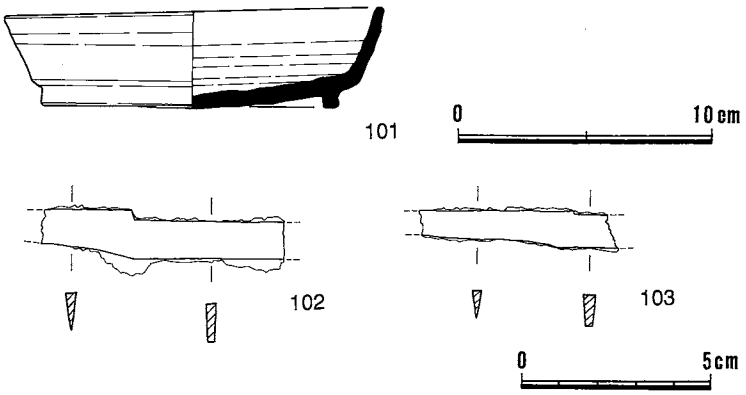


図72　９号墳石室内の出土遺物

(3)　出土遺物

石室内の遺物出土状況（図71）　石室内からは須恵器の坏身１点と刀子２点が出土したが、いずれも元位置を留めるものではい。

周溝の遺物出土状況（図68）　遺物は石室外からも出土した。周溝から出土した遺物は須恵器の短頸壷が２点と坏身が１点である。この３点は周溝南西部の底面上から集中して出土した。これらは墓前祭祀に伴い破砕されたものと考えられる。また、墓道からも短頸壷の胴部の破片が出土した。接合はできなかったものの、周溝から出土した２者の短頸壷のいずれかと同一個体のようである。

石室内の出土遺物（図72）　101～103は石室内の出土遺物である。101は石室覆土から出土した須恵器である。高台を有する坏身で、完形品であった。口径は14.8cm、器高は4.0cm、高台径は11.5cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。外面体部から内面にかけては横ナデによる調整が行われる。底部は回転ヘラケズリが行われ、高台を貼り付けた後に横ナデによる調整が行われている。

102と103は石室内から出土した刀子である。共に刀身部と茎の一部の遺存に留まり、全貌を把握することはできなかった。102は刀身部の残存長2.5cm、茎の残存長3.9cmである。103は刀身の残存長4.2cm、茎の残存長1.1cmである。

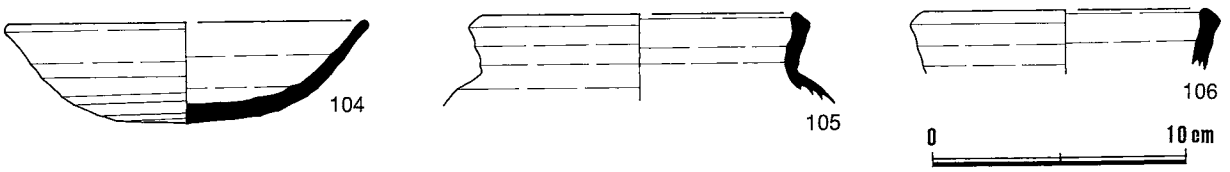


図73　９号墳周溝の出土遺物

周溝の出土遺物（図73）　104～106は周溝から出土した須恵器である。104は坏身で、全体の約２/３が残存した。口径は14.0cm、器高4.0cmである。焼成は良好で、内外面共に底部から体部は灰白色、口縁部が灰色である。調整は外面体部から内面は横ナデ、外面底部は同心円の回転ヘラケズリである。

105と106は短頸壺である。共に頸部から口縁部の一部が残存したのみである。口径は105が12.4cm、106が11.0cmである。両者とも焼成は良好で灰白色を呈し、後者には口縁部から内面にかけて自然釉が付着する。なお、この２者は互いの口径が異なる点と周囲から出土した体部の破片が２個体分存在したことから別個体と捉えた。

(4)　小結

９号墳は最大径10.6mの円墳で埋葬施設は無袖式と推定される横穴式石室であった。墳丘や石室平面形で見た限りでは、他の古墳と別段、変わりない形状といえる。しかし、石室床面の敷石は奥壁寄りが３重になるという、水掛渡Ｄ古墳群内では類を見ない形状であったことは注目できる。敷石各面の間には遺物や堆積層が無かったため、追葬による床面の増設とは考え難い。なお、水掛渡Ｃ古墳群では床面が２重になるものも存在したが、３重になるものは見られなかった。

遺物は石室内と周溝、墓道から出土した。石室内から出土したのはＭＴ21型式並行期の須恵器坏身と刀子片である。この須恵器は追葬時のものと考えられる。周溝からは、墓前祭祀に伴い破砕されたと考えられる須恵器が３点出土した。これらは、墳丘南西部の周溝底面上からの出土であり、９号墳が築造された直後の遺物と考えられる。そのため、９号墳は７世紀後葉に築造され、８世紀初頭に追葬が行われたと言えよう。

10.　10号墳

(1)　墳丘と外部施設（図74）

古墳の位置と残存状況　10号墳は調査区南半の中央部で検出した。南東約４ｍには９号墳、西方約６ｍには11号墳、北北西約６ｍには６号墳が存在し、これらの古墳に取り囲まれたような立地状況である。残存状況を見ると、墳丘の上部は完全に削平された状況であった。10号墳では周溝の痕跡も全く存在せず、外部施設で検出できたのは墓道のみであった。そのため、墳形やその規模を把握することはできなかった。ただし、他の古墳を参照にすると直径６ｍ前後の円墳と推測される。

墓道　外部施設で唯一検出できたのは墓道であった。検出できた長さは2.2m、幅は最大で0.5m深さは0.1mであった。

(2)　主体部（図75・76）

残存状況と形状　主体部は横穴式石室であった。主体部も墳丘と同様に上部のほとんどを削平され、石材の抜き取りも多々見られた。石室は奥壁と側壁の基底石の一部と床面の敷石が残欠したのみである。そのため、残存する石材と石材の抜き取り跡から推測すると、無袖式であったと考えられる。玄室の平面形は長方形で、主軸はＮ－24°－Ｗである。

規模　石室は開口部側の石材の抜き取りが著しく、正確な規模を把握することはできなかった。掘り方や石材の抜き取り痕から判断すると、全長約2.8m、奥壁幅0.8m、最大幅0.9mと推定される。

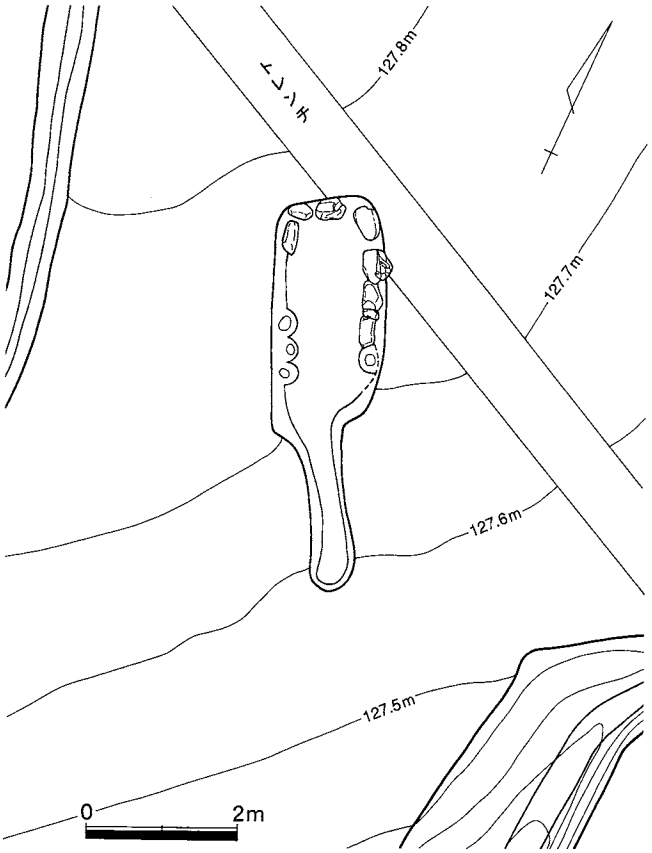


図74　水掛渡D10号墳墳丘図

床面の状態　床面には敷石が奥壁から2.0mの範囲まで存在した。敷石には最大径10～30cm程度のやや扁平な石材が使用される。ただし、奥壁から1.5m地点まではその中でも大振りな石材が用いられる傾向にある。石室の開口部側約0.8mの範囲には敷石が施されない。床面は礫が敷設される範囲は水平に地山が掘削されるが、敷石が存在しない部分から開口部に向けて緩やかに上昇する。床面の標高を奥壁手前中央で計測すると、地山上で127.38m、敷石上で127.55mである。石室開口部中央の地山面の標高が127.55mである。掘り方を見れば、床面が開口部に向け上昇するようにうかがえるが、敷石を含めて見ると、10号墳の石室床面は水平であるといえよう。

閉塞状況　閉塞石と確定できるものは残存しなかったが、石室が墓道へ移行する部分に最大幅5cmと15cm程度の石材が各1石残存した。おそらく、これが閉塞石の一部であろう。なお、奥壁からは2.9mの距離である。

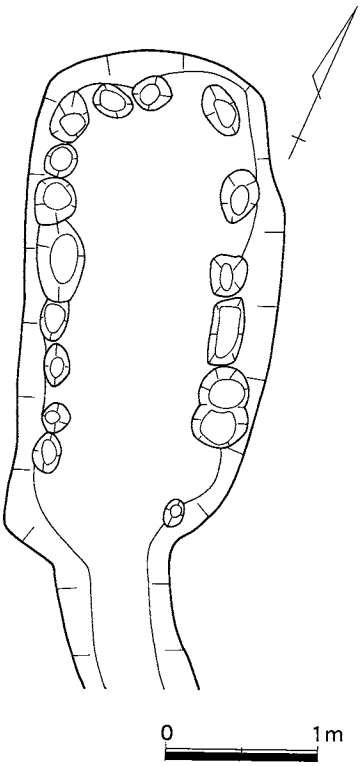


図75　10号墳石室の掘り方

使用石材と用法　10号墳に使用される石材は全て自然石であった。奥壁は基底石の2石が遺存する。本来的にはもう1石あったのであろう。奥壁基底石は両者とも最大幅約30cmの偏平気味の円礫で、広口積みされる。奥壁はいわゆる鏡石ではなく、このような石材を複数段積み上げて構成されていたと推察される。側壁は最大幅30～50cm程度のやや偏平な円礫が使用される。残存する基底石の使用状況はいずれも広口横積みである。敷石については上述した通りである。

掘り方　掘り方の平面形は隅丸長方形で、全長3.1m、最大幅1.7mの規模である。現状では地山面を0.3m程度掘り窪めている様子が確認できる。石室床面に対し、墓道底面の方が0.15m程度高い。石室床面は開口部付近で緩やかに上昇し、墓道に接続する。

(3)　出土遺物

10号墳からは古墳に直接関わる遺物は出土しなかった。ただし、玄室覆土からは、黒曜石片を含む剥片が9点出土した。これらの剥片はいずれも細片であるため図化しなかった。

(4)　小結

10号墳の外部施設は墓道を検出したのみで、墳丘や周溝に関しては不明であった。他の古墳の例から、本来は周溝が存在した可能性はある。埋葬施設は他の古墳と同様に横穴式石室であった。石室は無袖式と推測され、玄室の平面形は長方形である。

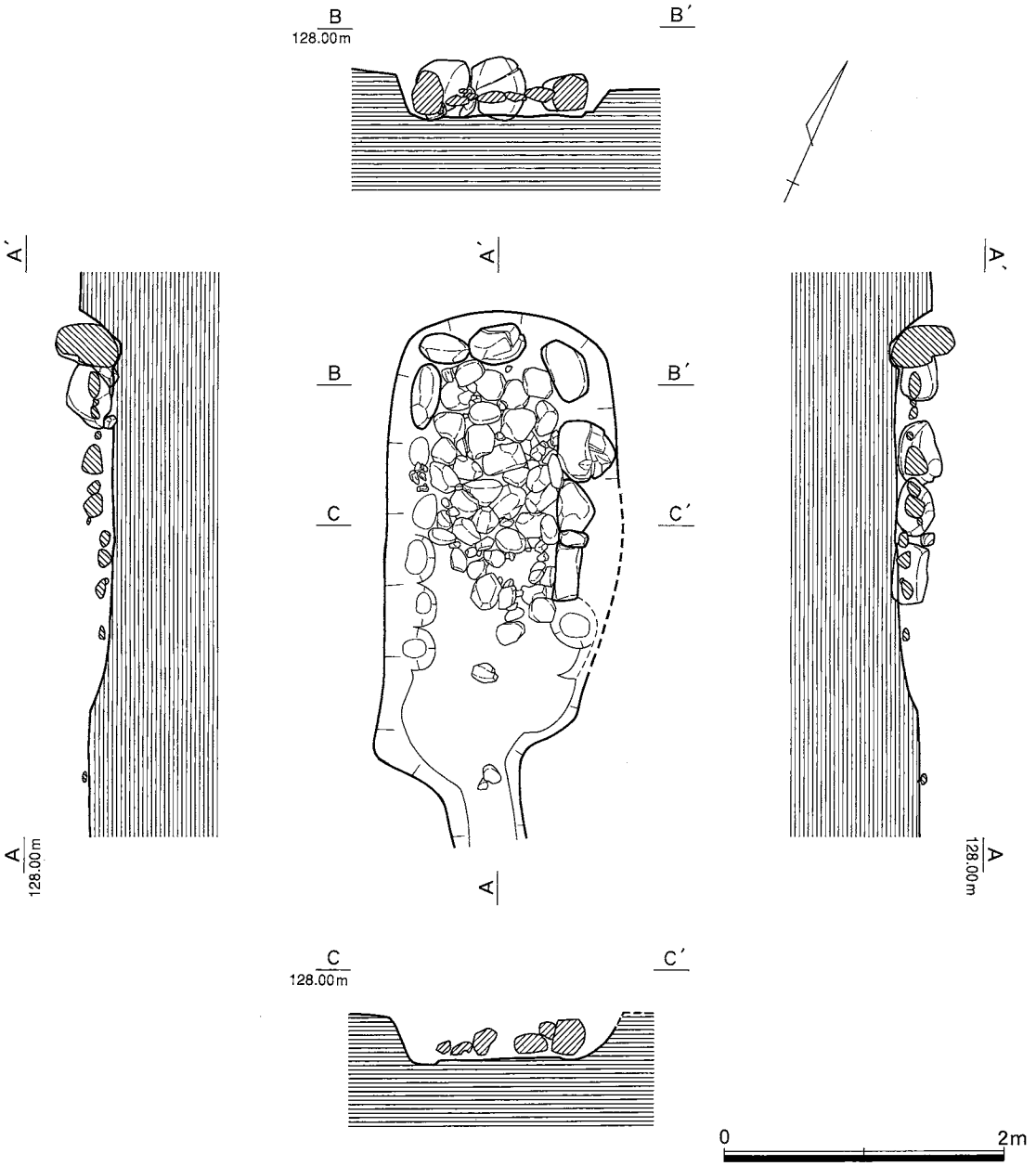


図76　水掛渡D10号墳石室展開図

石室規模は全長2.8mで水掛渡D古墳群中では比較的小型のものである。石室の床面は墓道底面に比べ15cm程低い。そのため、石室開口部は緩やかに上昇して墓道へとつながるという、水掛渡D古墳の他の古墳には見られない特徴を持っている。10号墳の床面には敷石が施されていたが、使用される石材は10～30cm程度と他の古墳に比べ、大きめの石材であった。そのため、床面の状況を見ると、敷石の上面と墓道底面はほぼ同じくらいの標高となり、石室開口部側の敷石が施されない範囲が一段低くなる様相を示す。10号墳は床面の状況が他の古墳と異なる特徴を持つと言える。ところで、10号墳からは古墳に関わる遺物が出土しなかった。そのため、遺物から10号墳が造営された時期をうかがうことはできない。ただし、立地や墓道の延びる方向からすれば、10号墳は８号墳や９号墳と同一単位群の可能性がある。８号墳と９号墳は７世紀中葉～後葉には埋蔵行為が行われており、10号墳もこれに近い時期の造営であろう。ただし、10号墳はこの２者の背後に立地することから、８号墳と９号墳に後出する蓋然性が高い。

11. 11号墳

(1) 墳丘と外部施設（図77）

古墳の位置と残存状況　11号墳は調査区の南西部に所在し、西方約2.5mには12号墳が存在する。更に、11号墳の北側から南側にかけてこの古墳を取り囲むように７号墳の墓道がのびている。残存状況は他の古墳と同様に、墳丘の大半を削平されていた。外部施設では墓道が検出できたが、周溝は存在しなかった。

墳形と規模　墳丘の痕跡は一切存在せず、周溝も検出できなかったことから、11号墳の墳形とその規模を把握することはできなかった。本来的には主体部を覆う程度の墳丘を有していたと考えられる。隣接する12号墳と11号墳の東半を取り巻くように存在する７号墳墓道の位置関係から推測すると、11号墳は南北５～６m、東西３～４m程度の円墳であったと推測される。

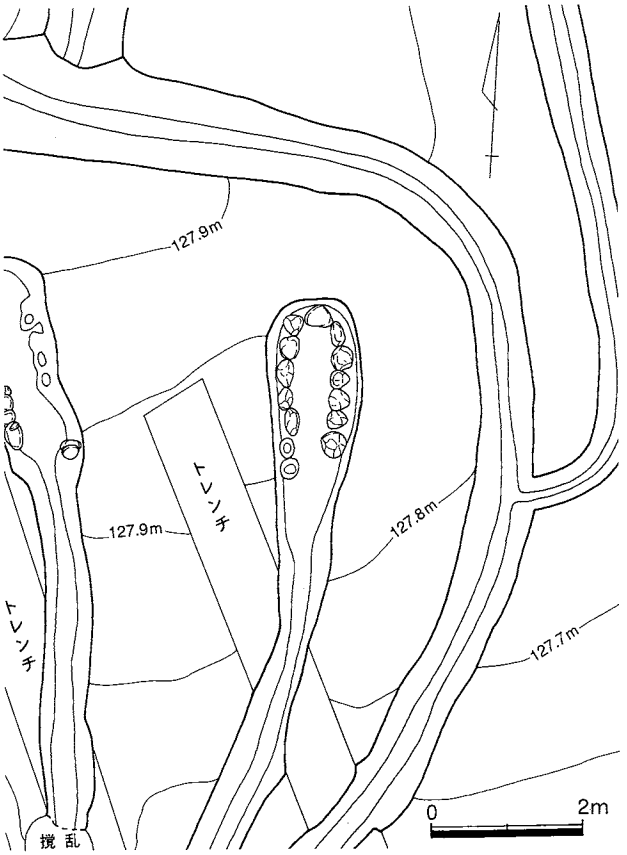


図77　水掛渡Ｄ11号墳墳丘図

墓道　墓道は総延長約７mにわたり検出できた。墓道は主体部からほぼ直線的に約４mのびたところで向きを緩やかに西に変える。更に、約３mのびて14号墳の周溝につながる。なお、11号墳の墓道と14号墳の周溝接点の北側約1.5mでは12号墳の墓道が、南側約0.8mでは７号墳の墓道が14号墳の周溝に接している。墓道の幅は主体部との接点で0.7m、深さは0.1mである。

(2) 主体部（図78・79）

主体部の形状と残存状況　主体部は主軸をＮ－５°－Ｗに持つ無袖式の横穴式石室であった。玄室の平面形は幾分胴張傾向にあるものの長方形と見なせるものである。残存状況は奥壁と側壁の基底石、床面の敷石、閉塞石の一部が残存する程度であった。ただし、側壁基底石の内、石室開口部に近い数石は抜き取りにあっていた。また、床面にまで達する撹乱も見られ、奥壁手前の敷石の一部は除去されていた。

規模　石室の規模は推定全長2.2m、奥壁幅0.4mである。最大幅は奥壁から0.6m地点にあり、0.6mである。

床面の状況　石室床面には敷石が施されていた。敷石は奥壁から1.9m地点まで存在するが、奥壁手前0.3mの範囲にはほとんど見られない。これは、本来的な状態ではなく、後世に撹乱を受けた際に除去されたものと考えられる。敷石に使用される石材は最大幅20cm前後の偏平な円礫である。これがほぼ隙間無く石室床面に敷きつめられている。なお、奥壁から1.9m地点より外側にも幾つかの石材が床面に存在するが、これは閉塞石の一部と考えられる。敷石の上面はほぼ水平に保たれ、奥壁から0.3m地点の敷石上の標高は127.73mである。なお、奥壁手前の地山上の標高は127.67mである。

閉塞状況　石室開口部付近には床面の敷石と異なる石材が存在し、これらが閉塞石の一部とみなせる。閉塞石は奥壁から測って1.9m地点から0.8mの範囲にかけて存在し、10～30cm程度の円礫が使用されている。この円礫は敷石と異なり、偏平な石材ではないため区分がつく。おそらく同様の石材を積み上げ閉塞としていたのであろう。

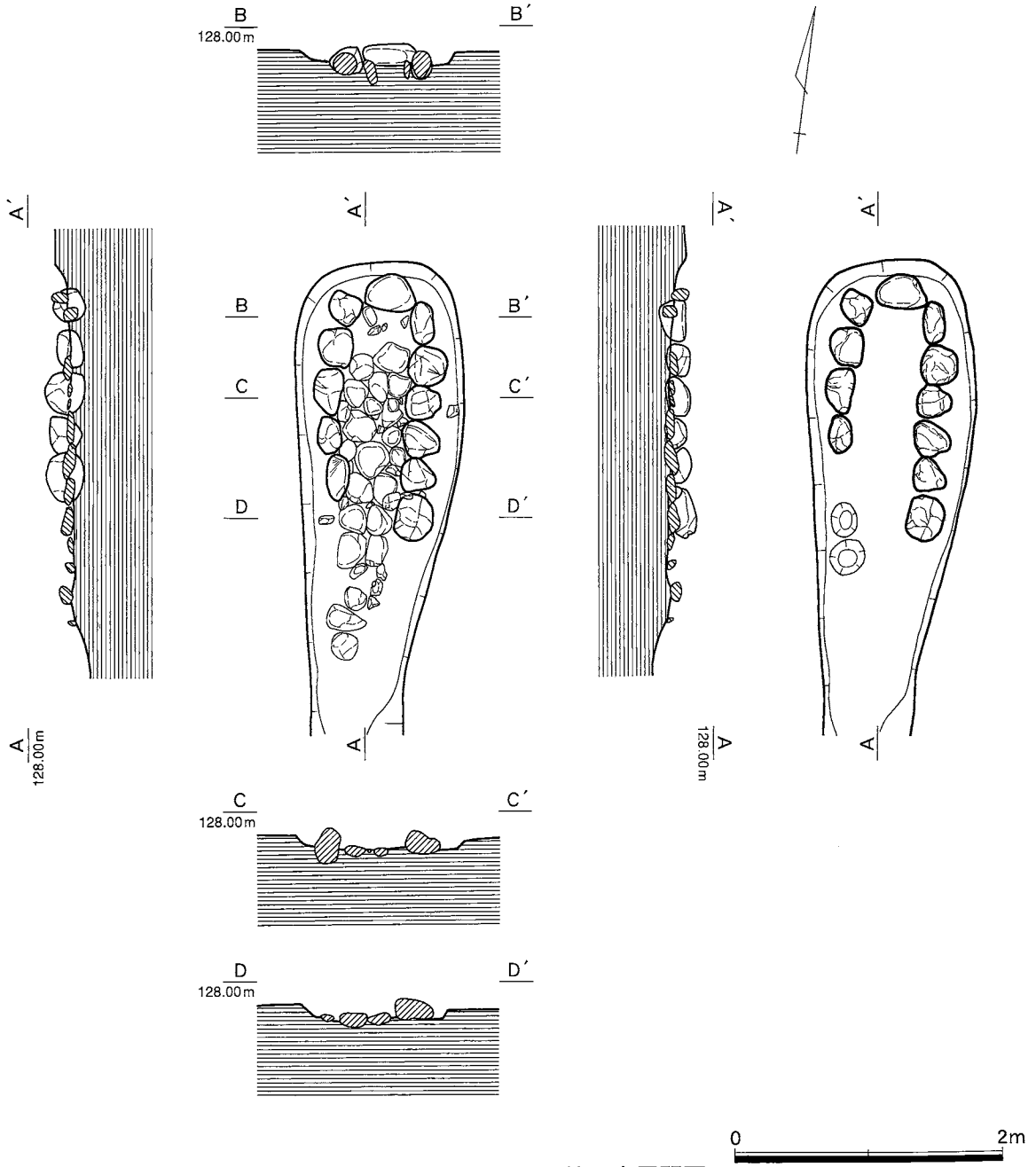


図78　水掛渡D11号墳石室展開図

使用石材　奥壁基底石に使用される石材は最大幅40cm程度の大きさで、１石で奥壁幅となる石材である。これを横積みで使用している。奥壁は基底石と同様の石材を数段積み重ねて形成されたものと推定される。側壁基底石は最大幅20～30cm程度の石材が使用される。大半が横積みであるが、一部には広口横積みするものも見られる。左側壁は６石、右側壁は５石基底石が残存する。石材の抜き取り跡から判断すると、両側壁とも基底石は７石であったといえる。閉塞石と敷石については先に述べた通りである。なお、11号墳に使用される石材は、いずれの石材も自然石である。

掘り方　石室の掘り方は全長2.6m、最大幅1.2m、検出面から測り0.2mの深さであった。４号墳や６号墳を除く多くの古墳が所謂「羽子板型」の平面形状を呈す掘り方であるのに対し、11号墳では明確な屈曲はせず、なだらかに墓道と接合する。奥石室床面は水平に地山が掘削される。墓道底面は石室床面より５cm程低く、石室開口部から徐々に下って行く。

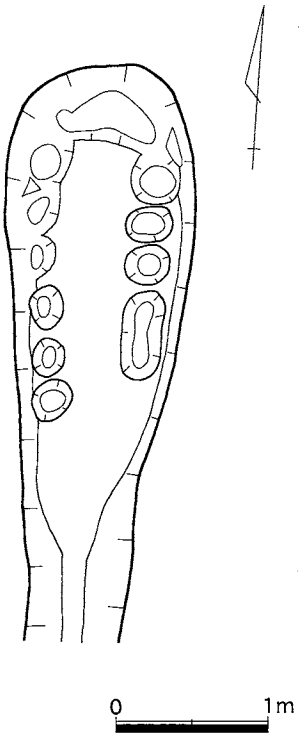


図79　11号墳石室の掘り方

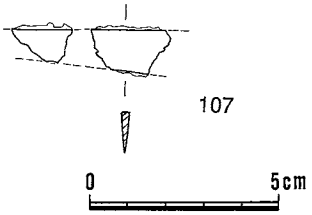


図80　11号墳の出土遺物

(3)　出土遺物（図80）

遺物出土状況　石室内の覆土をふるいにかけたところ、刀子片が１点出土した。この他にも、もう１点鉄片が存在したが、細片であるため詳細をつかむことはできなかった。

出土遺物（図80）　107は刀子で、刀身部の一部が残欠した。刀身部の幅は1.2cmと推定される。

(4)　小結

11号墳はこの墳丘や周溝が残存しなかった。もっとも、本来的には主体部を覆う程度の墳丘を有していたと推測される。一見、周溝のようにこの古墳を取り囲むのは７号墳の墓道である。11号墳では周溝は検出されなかった。ただし、11号墳の周溝を利用して７号墳の墓道が造られた可能性もある。11号墳の主体部は横穴式石室であるが、その規模は全長2.2m程度と水掛渡Ｄ古墳群の中では小型のものであった。11号墳の墓道は14号墳の周溝とつながっている。14号墳の周溝につながる墓道を持つ古墳は11号墳の他に、６号墳、７号墳、12号墳が存在する。各古墳の被葬者間の結びつきがうかがえる。遺物が出土しなかったため、11号墳そのものから、この古墳の時期を把握することはできなかった。ただし、14号墳の背後に立地すること、７号墳の墓道が11号墳を迂回するように造られることから、11号墳は14号墳に後出し７号墳に先出すると考えられる。また、同じような立地状況の12号墳では７世紀中葉の須恵器が出土していることから、11号墳もこれに近い時期に埋葬行為が行われていたのであろう。

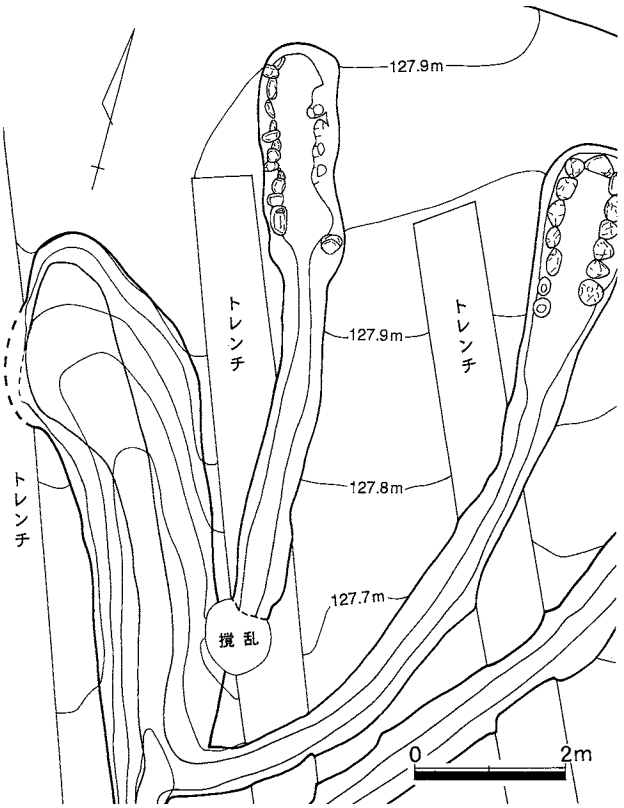


図81　水掛渡Ｄ12号墳墳丘図

12.　12号墳

(1)　墳丘と外部施設（図81）

古墳の位置と残存状況　12号墳は調査区の南西部に位置し、この古墳を取り囲むように東に11号墳、北に７号墳、南西に14号墳が存在する。隣接する11号墳と同様に上部の大半を削平され、墳丘や周溝は検出できなかった。外部施設で検出できたのは主体部からのびる墓道だけである。

墳形と規模　墳丘と周溝はその痕跡すら存在しなかったため、12号墳の墳形と規模を直接知る手がかりは無かった。もっとも、主体部を覆い隠す程度の墳丘を有していたのであろう。隣接する11号墳や14号墳の周溝の位置から、12号墳は南北５m程度、東西３～４m程度の円墳であったと推測される。

墓道　墓道は主体部から直線的に4.5m程のびたところで14号墳の周溝につながる。墓道の幅は0.6m、深さは検出面から0.2m程度である。

(2)　主体部（図82・83）

主体部の形状と残存状況　主体部となるのは主軸をN－16°－Wに持つ横穴式石室である。残存状況は決して良好とはいえないものであった。残存したのは西側壁の基底石と２段目の一部、東側壁の一部、床面の敷石である。

さて、12号墳の横穴式石室はこれまでに述べた１～11号墳とは若干異なる形状であった。12号墳の石室平面形は一見すると無袖式である。しかし、西側壁を見ると、奥壁指定位置から約1.5mにある基底石は小振りではあるが縦積みされている。他の基底石は横積み、あるいは小口積みされているので、明らかに異なる用法である。更に、この縦積みされる石材はわずかに石室内に突出していることも確認でき、玄門の立柱石を意識したといえるであろう。また、東側壁をみても、西側壁の玄門立柱石と対峙する部分は基底石を据えた痕が石室内側に突出していることがうかがえる。このように12号墳は側壁の状況に石室内外を区画する意図を見出すことができ、石室形態はいわゆる擬似両袖式として捉えることができる。

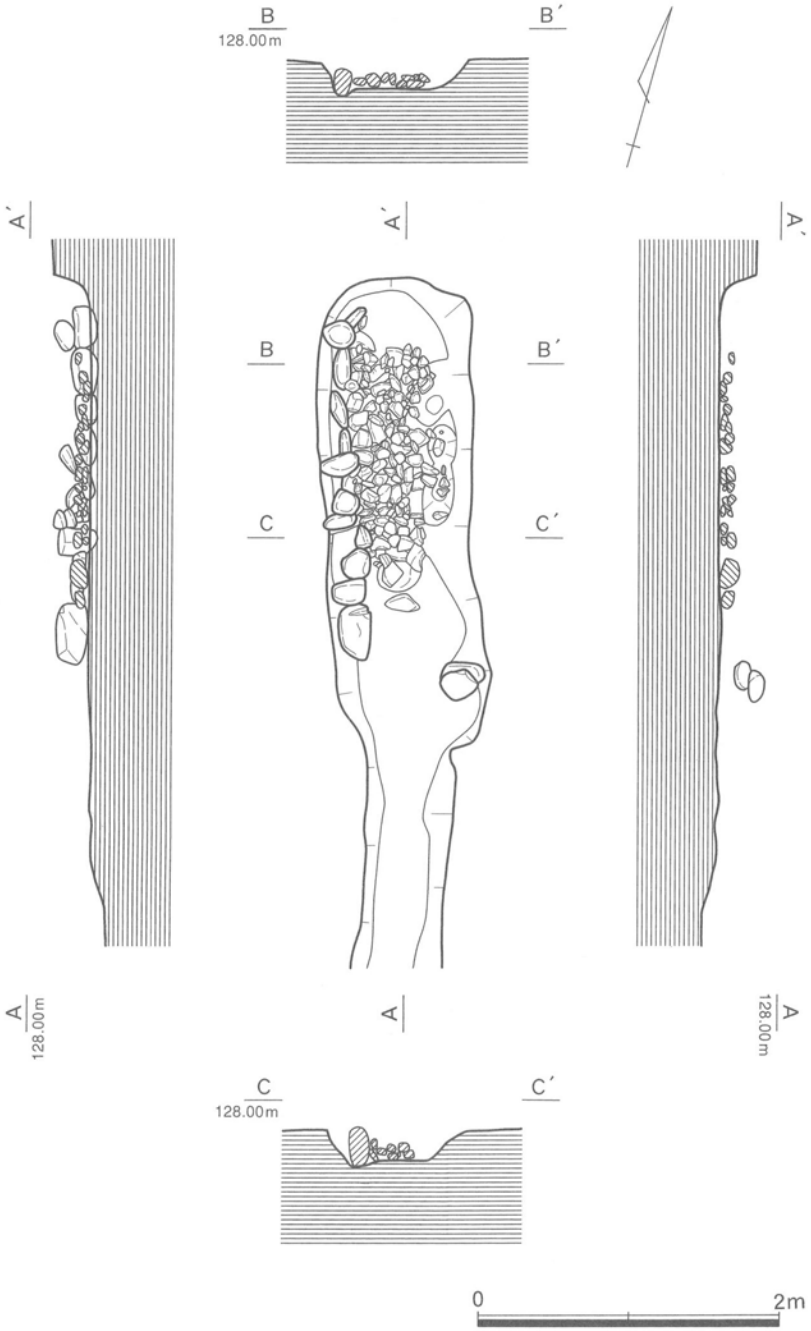


図82　水掛渡Ｄ12号墳石室展開図

規模　石室の全長は約2.7mである。玄室は奥搾り形の平面形で、その長さは1.5m、最大幅は0.6m、玄門の幅は0.4mと推定される。羨道は長さ1.2m、幅約0.5mである。

床面の状態　石室床面には礫が敷設され、その範囲は奥壁推定位置から2.0m地点までである。床面に使用される礫はいずれも自然石で、５～20㎝程度の円礫と角礫が併用される。なお、20㎝程度の石材は扁平なものが用いられる傾向にあり、敷石上面が水平になるように敷設されている。床面の標高を石室最中央の敷石上で測ると、127.80mである。

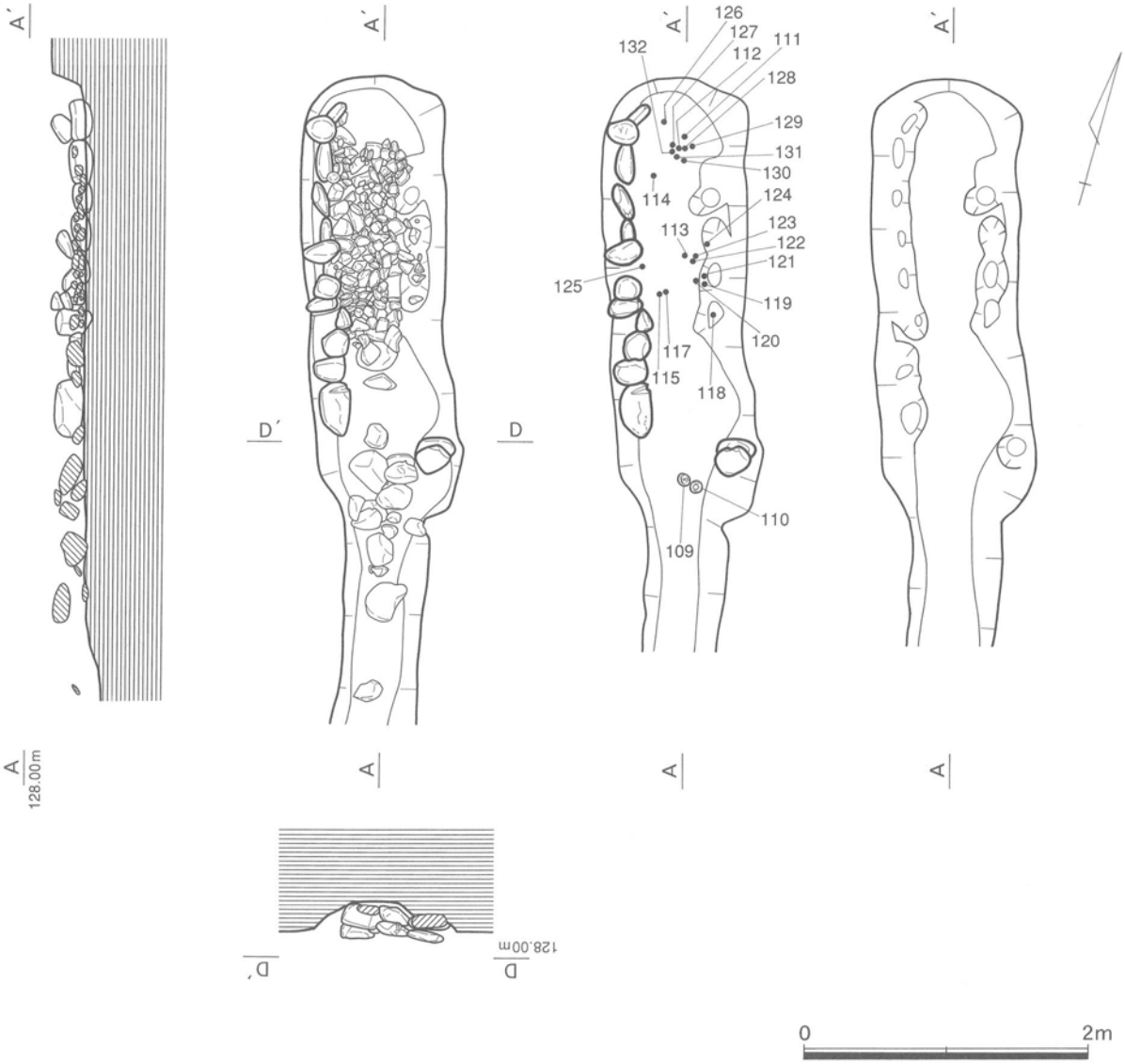


図83　12号墳石室閉塞状況と遺物出土状況、掘り方

閉塞状況　閉塞は奥壁推定位置から測って、約2.5mのところから1.2mの範囲にみられた。閉塞に使用されるのは10～30cm程度の円礫の自然石である。これらの石材を不規則に積み上げて閉塞としていることが確認できた。

使用石材　12号墳に使用されるのは、いずれも自然石であった。側壁は玄室、羨道ともに最大幅20cm前後の円礫が用いられる。西側壁の玄門を除き、基底石は玄室と羨道ともに広口横積みが主体となり、一部に小口積みが混ざる。２段目以上は小口積みが主体となるようである。玄門の立柱石は積み方が異なるものの、使用石材とその規模は他の基底石と同様である。奥壁はその痕跡から１石で奥壁幅となり得る石材を基底石に使用していたことがうかがえる。敷石と閉塞石は先述した通りである。

掘り方　掘り方は長方形の平面形態で、その規模は全長3.1m、最大幅1.0m、検出面からの深さは0.3mである。石室の床面は水平に掘削され、墓道に至っても約1.0mの所まではほぼ水平に保たれる。そこからなだらかに傾斜し、14号墳の周溝へつながっている。

(3)　出土遺物（図83・84）

遺物の出土状況　遺物は玄室内から玉類が、閉塞部から須恵器が出土した。玉類は大半が敷石の隙間

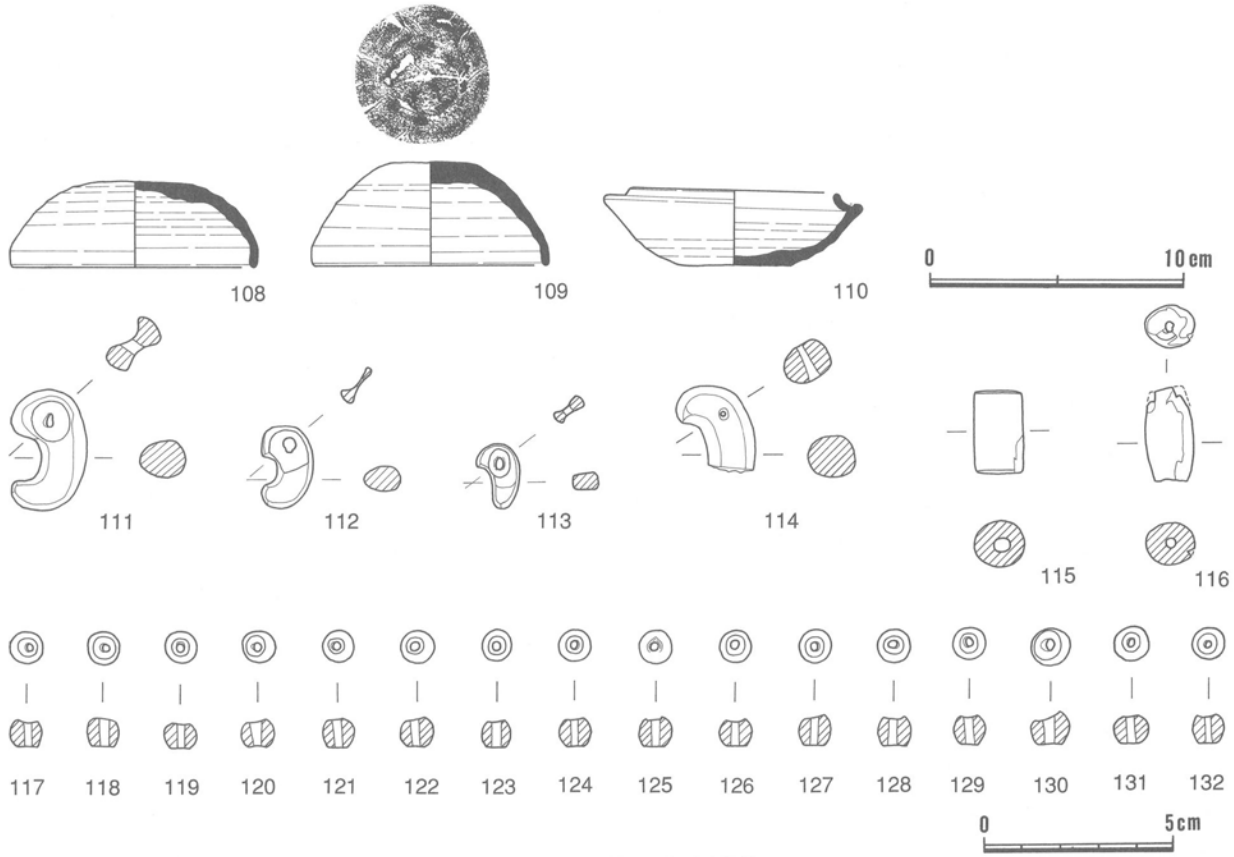


図84　12号墳の出土遺物

から出土し、敷石を除去した段階で検出できた玉類もある。玉類は埋葬後に時を経て敷石の隙間に転落したものと考えられる。なお、玉類の一部には覆土から出土したものもあるが、これらは撹乱による影響が考えられる。

閉塞部からは須恵器が３点出土した。この内、108の坏蓋は覆土中から、109の坏蓋と110の坏身は閉塞石の直下から出土した。なお、玄室からは剥片が１点と縄文土器の細片３点が出土した。墓道からも石鏃１点（図100－237）を始め、剥片が出土した。

出土遺物　108～110は閉塞部から出土した須恵器である。３点とも完形品であった。108と109は坏蓋で、108は口径9.5cm、器高3.4cm、109は口径9.1cm、器高4.1cmである。共に焼成は良好で青灰色を呈し、調整は外面体部から内面は横ナデ、外面頂部はヘラ切り未調整である。

110は受部を有する坏身で、出土状態から109と対を成すものといえる。焼成は良好で青灰色を呈する。調整は外面体部から内面にかけて横ナデ、外面底部はヘラ切り未調整である。口径は8.0cm、器径は10.2cm、器高は3.1cmである。これら３点の須恵器はＴＫ46形式併行期に位置づけられる。

111～132は玄室内から出土した玉類である。111～114の４点は勾玉、115は管玉、116は棗玉、117～132の16点は丸玉である。４点の勾玉の内、111～113は滑石製で完形であったが、瑪瑙製の114は頭部が残存したのみである。大きさは、111が全長3.18cm、112が全長2.15cm、113が全長1.70cm、114が残存長2.30cmである。111～113と114では孔の穿孔状況に違いが見られる。114は片側から穿孔が行われる以外には頭部に造作は見られない。一方、111～113の３点は穿孔が片側から行われ、更に、孔の周辺が直径0.7cm～1.0cm程度、深さ0.2～0.3cm程度、窪んでいる様子が確認できる。

115の管玉は緑色凝灰岩製で、全長2.18cmである。穿孔は片側から行われている。116は琥珀製の棗玉で、全長は2.50cmである。棗玉は残存状況が悪く表面の一部が剥落する。117～132は丸玉である[9]。

丸玉の直径は0.80cm～1.00cmで、いずれも片側から穿孔されている。上述した22点の玉類の出土状況からは、その並びや装着状況を復原することはできない。

(4) **小結**

12号墳は11号墳と並んで築造された古墳で、11号墳と同様に墓道以外の外部施設は残存しなかった。主体部は横穴式石室であり、全長2.7mと規模も11号墳同様に小型のものであった。しかし、石室の形状は11号墳と異なり、小型ながらも疑似両袖式の石室形態であった。遺物は閉塞部から須恵器が、玄室から玉類が出土した。水掛渡D古墳群では装身具を出土した古墳は12号墳の他に14号墳のみである。閉塞部から出土した須恵器はTK46形式併行期に位置づけられる。これが初葬時のものか、追葬時に伴うものであるのかは断定できないが、7世紀第3四半期に埋葬行為が行われたことは言えよう。なお、時期を違える遺物が出土していないことや小型化した石室であることから、12号墳は追葬が行われていない可能性も十分にあり得る。

12号墳では墓道が14号墳の周溝と接続していた。墓道と周溝のつながりから、6号墳、7号墳、11号墳、14号墳との関係をうかがうことができる。古墳の立地状況から判断すると12号墳は14号墳に後出し、6号墳と7号墳に先出するといえよう。ただし、出土遺物には大きな時期差を見出すことはできないため、これらの5基は近い時期に次々に築造されたと考えられる。

13. 13号墳

(1) 墳丘と外部施設（図85）

古墳の位置と残存状況　13号墳は調査区の南東端に所在し、北東約2mには9号墳が存在する。墳丘は削平を受け、盛り土の痕跡は全く残存しなかった。また、周溝も検出されず、唯一確認できた外部施設は墓道のみである。

墳形と規模　先述したような残存状況であるため、墳形やその規模を直接うかがうことはできなかった。もっとも、主体部を覆い隠す程度の墳丘は有していたとは考えられる。13号墳の北東に所在する9号墳の周溝が一部歪んでいることは13号墳の墳丘の存在を意識したためであろう。水掛渡D古墳群において墳形が判明する古墳はいずれも円墳であることから、13号墳も円墳と推測される。墳丘規模は南北長6～7m程度と推測される。

墓道　墓道は主体部から3.5m程度直線的にのびている。ただし、主体部の掘り方と墓道の境が不鮮明であるため、確定できる数値でないことを断っておく。墓道の幅は0.3mであるが、深さは非常に浅く0.1mに満たないものであった。

(2) 主体部（図86・87）

主体部の形状と残存状況　主体部は主軸をN－19°－Wに持つ無袖式の横穴式石室であった。削平により奥壁と側壁の大半の石材が失われ、基底石と2段目の一部の残存に留まった。撹乱は床面にまで達していたが、敷石は残存していた。閉塞石は残存しなかった。

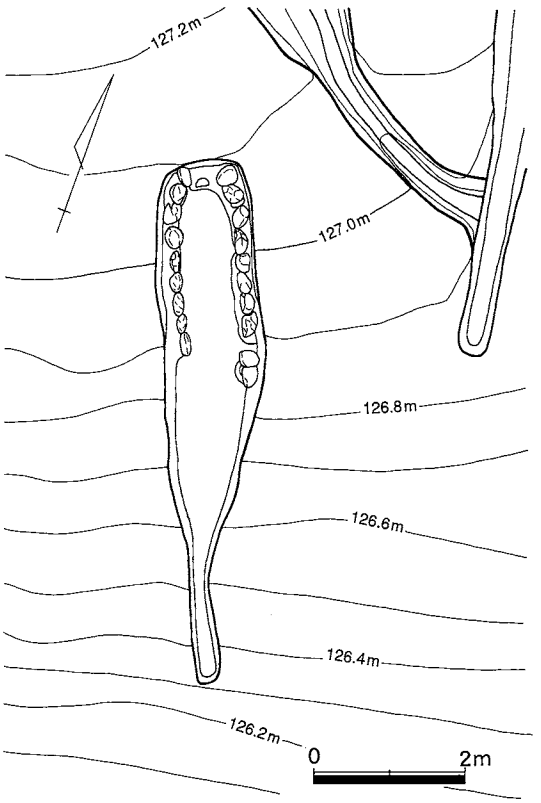


図85　水掛渡D13号墳墳丘図

規模　石室の規模は全長2.8mである。奥壁幅は0.4m、最大幅は0.8mである。幅が最大となるのは、奥壁から1.0mのところである。石室の平面形は奥壁部の幅が狭まる、いわゆる奥搾り形である。

床面の状況　床面には敷石が施されていた。敷石は奥壁から1.5mの地点まで存在する。ただし、奥壁から0.6m地点を境に、奥壁側と開口部側では使用される石材の大きさが異なる。奥壁側では最大幅30～40cm、厚さ10cm程度の偏平な円礫が敷石に使用される。一方、開口部側は５～10cm程度の円礫が使用される。石室開口部付近には敷石が存在しなかった。これは他の古墳と同様に、築造当初から意図的に礫を敷設しなかったものと考えられる。なお、床面の標高は奥壁手前中央の敷石上で126.80mである。

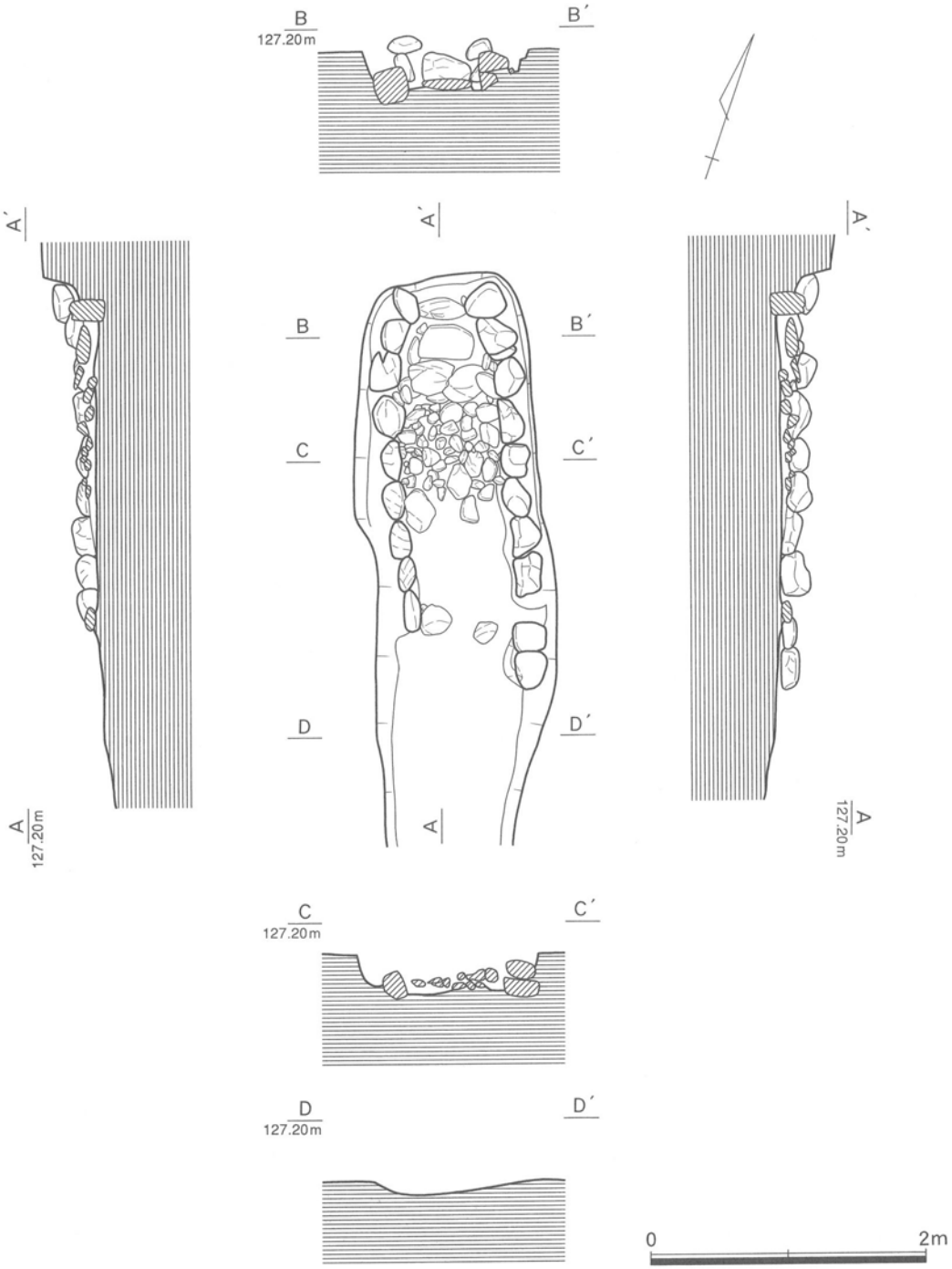


図86　水掛渡Ｄ13号墳石室展開図

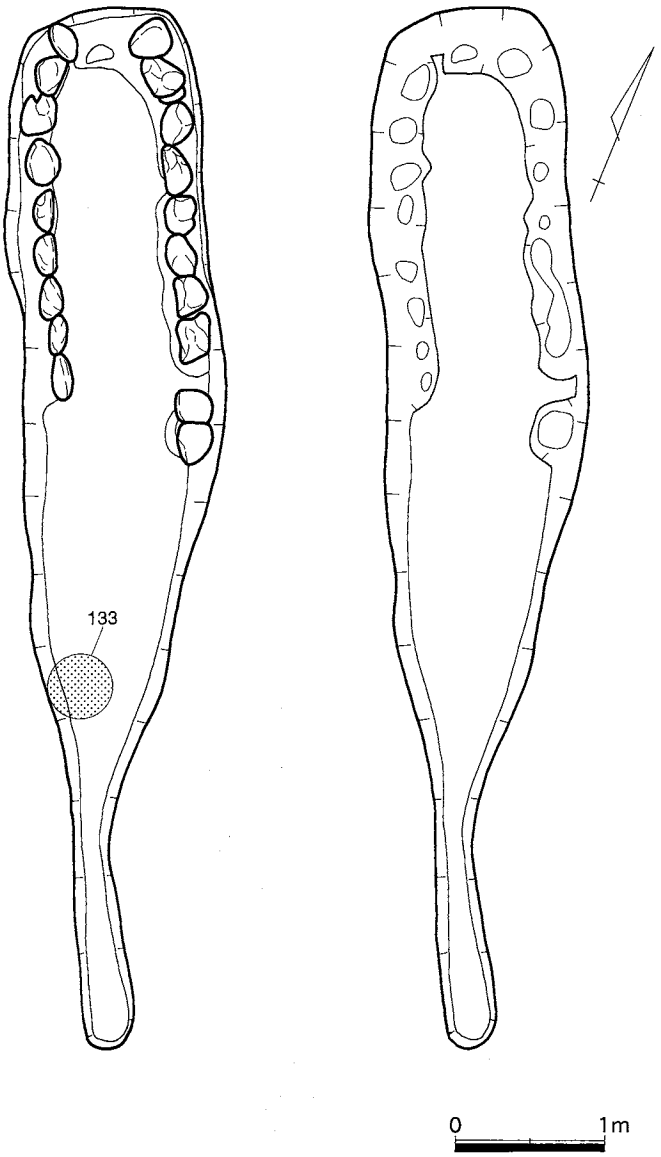


図87　13号墳石室の基底石と掘り方

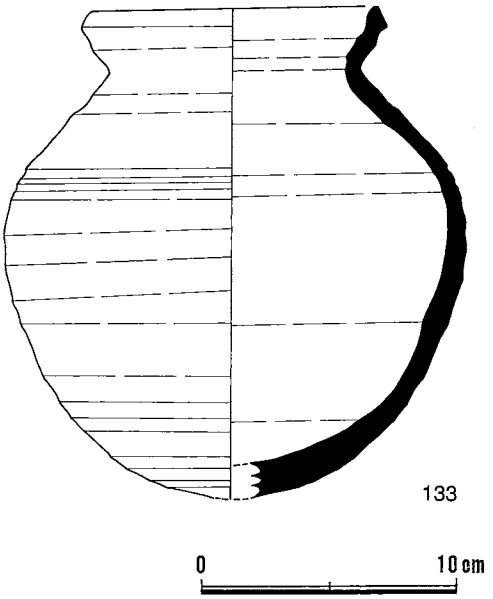


図88　13号墳の出土遺物

使用石材　奥壁の基底石は最大幅40cmの円礫を広口横積みしている。奥壁は同様の石材を数石積み重ねて形成していたと考えられる。側壁を見ると、基底石は最大幅30cm程度の円礫が広口横積みされている。わずかに残存した２段目の石材は小口積みされている。敷石については先述した通りである。13号墳に使用される石材は全て、自然石であった。

掘り方　石室の掘り方は隅丸長方形の平面形態であった。その全長は3.4m、最大幅1.3mで、石室より一回り大きい程度である。検出面からの深さは0.4mであった。ただし、石室の掘り方と墓道の境界が不鮮明であるため、計測値は確定的なものではないことを断っておく。石室床面はほぼ水平に地山が掘削され、墓道から傾斜が始まり、徐々に下っていく。

(3)　出土遺物（図88）

遺物の出土状況　13号墳の石室内からは副葬品は全く出土せず、覆土から剥片が出土したのみである。墓道の覆土からは須恵器が１点出土したが、元位置を留めるものではなかった。

出土遺物　133は墓道覆土から出土した須恵器の短頸壺である。全体の１/３程度が残存し、口径は11.2cm、器高は19.3cmである。焼成は良好で、灰色を呈する。外面底部が回転ヘラケズリされる以外は横ナデにより調整が行われる。石室内から剥片も出土したが、細片であり図示できるものではない。

(4)　小結

13号墳は墳丘盛り土や周溝が遺存しなかったが、長径６～７m程度の円墳と推測される。主体部は無袖式の横穴式石室であるが、これも基底石が残る程度であった。13号墳の特徴は床面に施された敷石にある。それは石室の奥壁側と開口部側で使用される石材が違うことである。このような状況の敷石を持

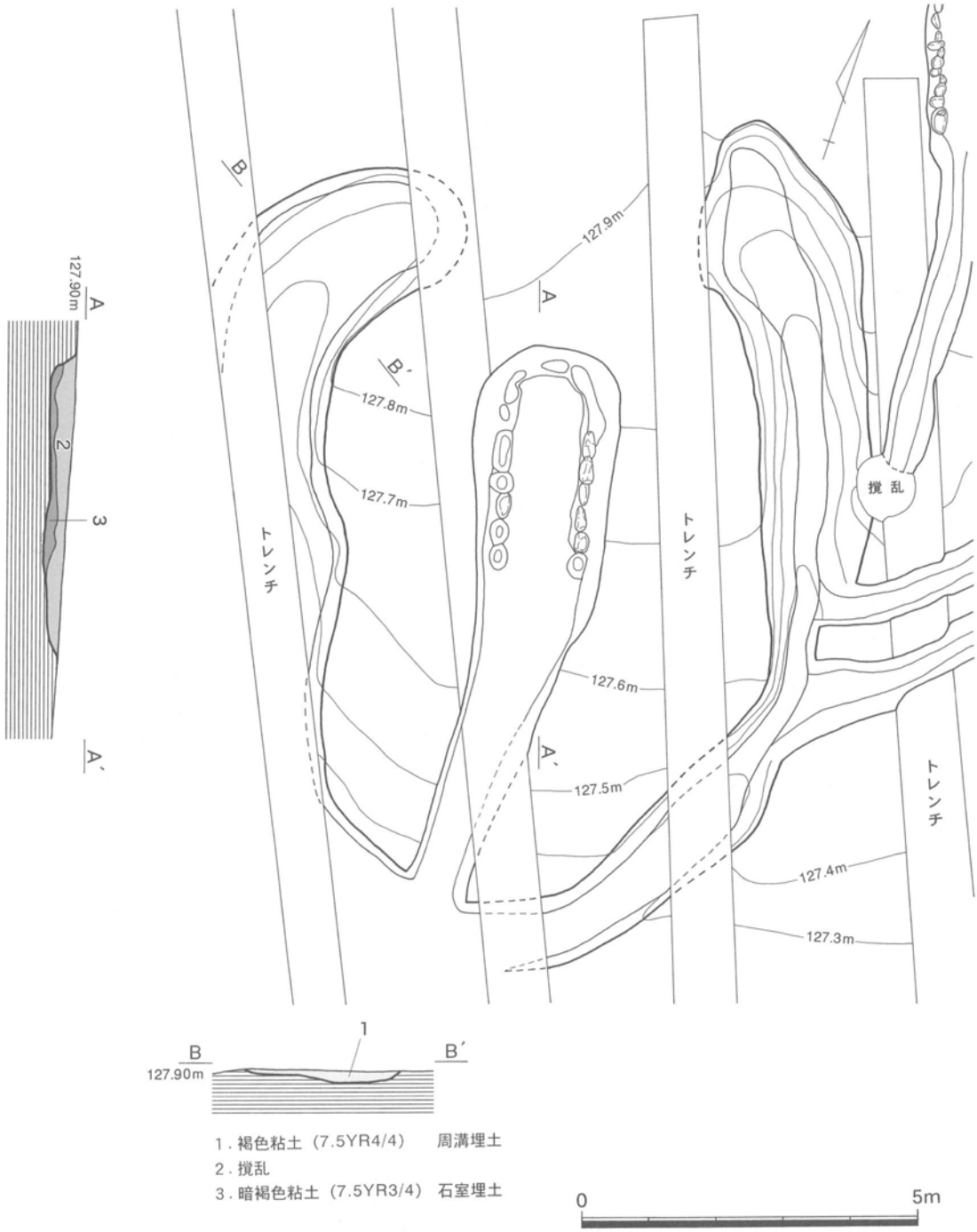


図89　水掛渡D14号墳墳丘図

つ古墳は水掛渡D古墳群では13号墳のみである。古墳に伴う遺物は墓道から須恵器が１点出土したのみである。この須恵器は７世紀後半代に位置づけられる。これが、初葬時のものか、追葬時のものかは不明である。ただし、７世紀後葉築造と考えられる９号墳の周溝は13号墳の存在を意識したとみられる歪みがある。この点から13号墳は９号墳に先行する時期の築造と考えられる。

14. 14号墳

(1) 墳丘と外部施設（図89）

古墳の位置と残存状況　14号墳は調査区の南西端に所在し、北東には12号墳が隣接する。墳丘は削平

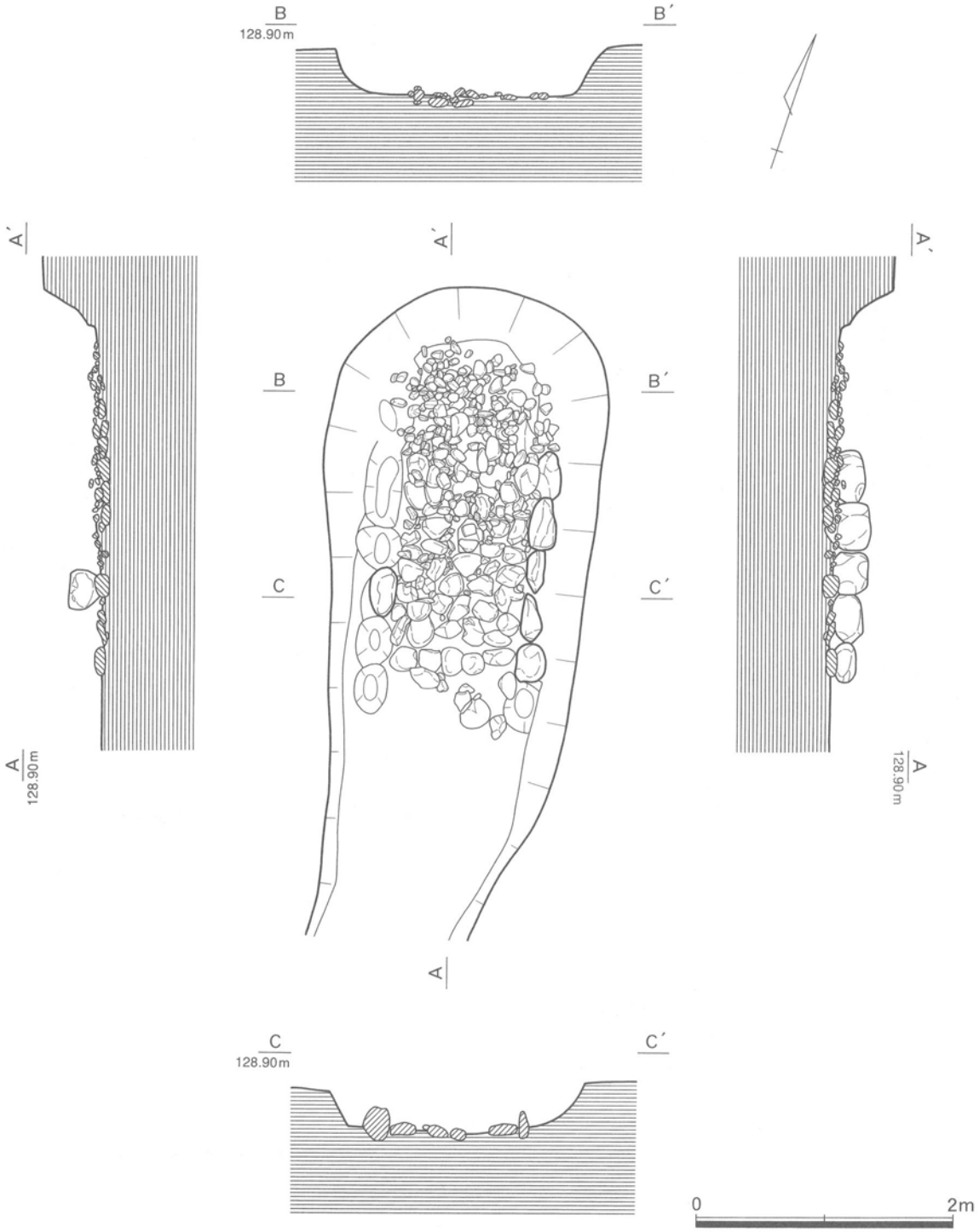


図90　水掛渡D14号墳石室展開図

が著しく、盛り土の痕跡は無かった。しかし、周溝と墓道の一部は検出することができた。

墳形と規模　周溝の状況からこの古墳は円墳であることがうかがえる。規模は南北約10m、東西7.5mであり、南北方向がやや長い状況にある。

周溝　周溝の幅は最大2.3m、最も深いところで検出面から0.5mである。周溝は北西部の一部が検出できなかったものの、本来的には全周したと考えられる。周溝が検出できなかった部分は周溝の掘削深度が東側や西側に比べ浅かったのであろう。そのため、開墾に伴う削平で消滅したと考えられる。

墓道　墓道は主体部から周溝に至るまでの4.0mの長さが検出できた。幅は0.9〜1.2m、深さは0.3m

である。

(2) 主体部（図90）

主体部の形状と残存状況　主体部は主軸をN－18°－Wに持つ横穴式石室である。ただし、多くの石材が抜き取られ、遺存したのは側壁の一部と床面の敷石に留まる。そのため、石室の詳細な形状を把握することはできなかった。また、閉塞の施設も残存しなかった。

規模　掘り方から石室の全長は3.8m前後、最大幅は1.0mと推測される。

床面の状態　床面には敷石が施されていた。敷石が残存した範囲は長さ3.0m、幅1.0mである。敷石は２面存在し、上面が5～10cm程度の円礫と角礫、下面が10～20cm前後のやや偏平な円礫を使用する。上面は奥壁推定位置から1.6m地点まで存在し、下面は奥壁推定位置から0.2mのところから2.6mの範囲に存在する。ただし、敷石の上下面は完全に区分できるものではない。奥壁推定位置付近の床面の標高は上面で128.40m、下面で128.35mをそれぞれ敷石上で測る。

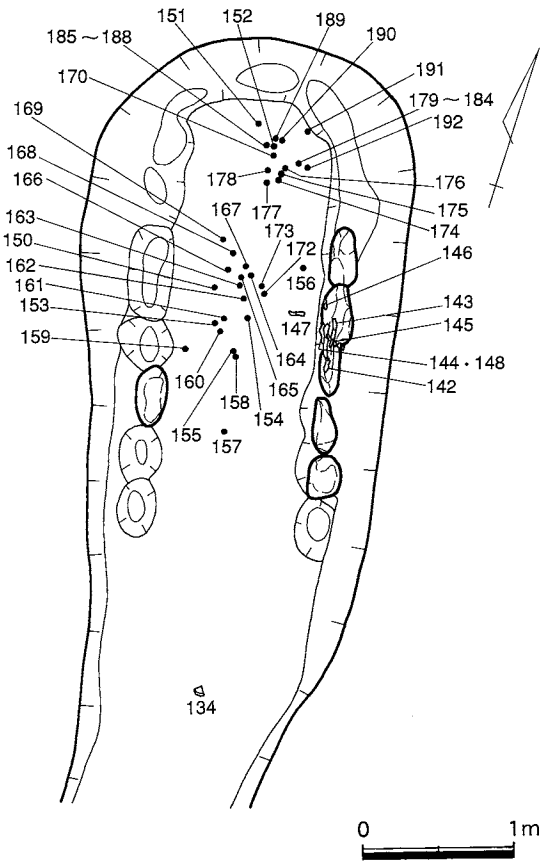


図91　14号墳の遺物出土状況

使用石材　残存する側壁の基底石に使用されるのは最大幅30～40cm程度の偏平な円礫で、広口横積みされている。奥壁は痕跡から判断すると、いわゆる鏡石は使用されないようである。奥壁の基底石には３個の石材が使用され、その大きさは最大幅約30～50cm程度であったと推測される。敷石については先述の通りである。14号墳に使用される石材は全て自然石である。なお、閉塞石は残存しなかったため、その状況や使用石材については不明である。

掘り方　石室の掘り方は全長4.3m、最大幅2.1mである。検出面からは最も深いところで0.5m程、堀込まれている。石室の床面はほぼ水平に掘削され、墓道から傾斜が始まり下っていく。

(3) 出土遺物

周溝の遺物出土状況　周溝からは須恵器が出土した（図92）。出土したのは坏蓋１点、坏身１点、短頸壷１点、瓶類の体部が１点、瓶類の口縁部２点、甕が１点、坏あるいは高坏の口縁部が１点である。この他に、数個体分の破片が存在したが、細片であるため図示しなかった。周溝から出土した須恵器は全て底面から浮いた状態で出土した。なお、周溝からは剥片も出土した。

主体部の遺物出土状況（図91）　石室内からは大刀と刀子、多数の玉類が出土した（図93・94）。鉄器は東側壁付近から集中して出土した。142の大刀と143～146・148の刀子は側壁基底石上から出土した。147の刀子は東側壁に近い敷石上から、149は石室覆土から出土した。鉄器はいずれも元位置を留めるものではなく、石材の抜き取り等に伴い２次的な移動を受けた結果と考えられる。

玉類は出土状況から、奥壁側のグループ（151・152・170～191）と石室中央部のグループ（150・153～169）に分けられる。玉類は大半が敷石の隙間あるいは敷石を除去した段階で出土した。これらは元位置を留めるものではなく、２次的な移動を受けていると考えられる。石室は撹乱を受けていたこともあり、覆土からも多数の玉類（192～214）が出土した。また、石室開口部付近からは須恵器の細片も出土した。

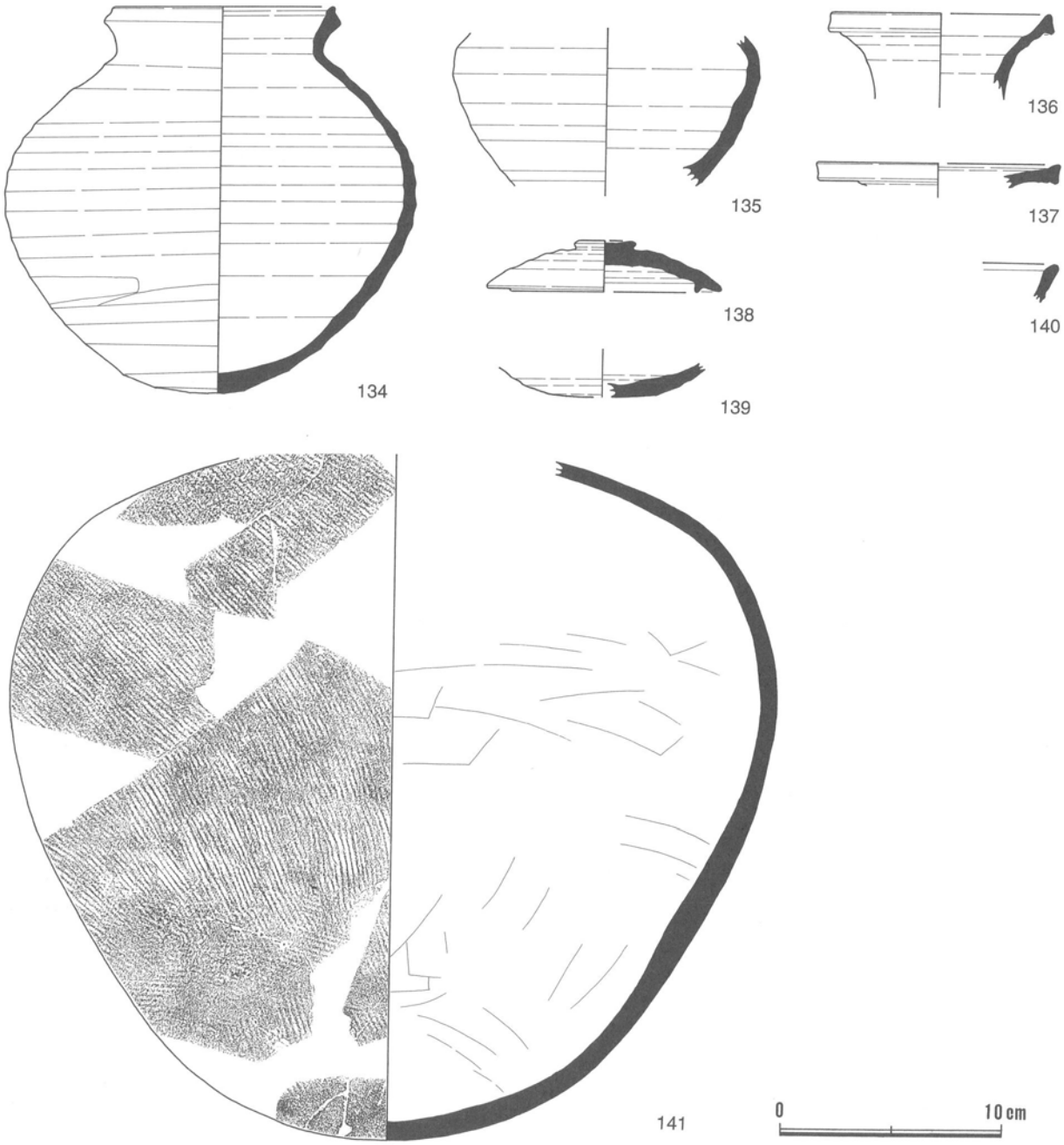


図92　14号墳の出土遺物１

周溝の出土遺物　134～141は周溝から出土した須恵器である。134は周溝と墓道の交点から出土した短頸壺である。全体の約１/３が残存し、器高17.6cm、口径9.6cmである。焼成は良好で、灰白色を呈する。調整は外面底部が回転ヘラケズリ、その他は横ナデである。

135は周溝の南東部から出土した瓶類の胴部である。焼成は良好で、灰白色を呈する。外面底部が回転ヘラケズリ、その他は横ナデによる調整が行われている。

136と137は瓶類の口縁部である。136は周溝の南西部、137は周溝の南東部から出土した。共に口縁部の一部の出土に留まり、全容をうかがうことはできなかった。

138は坏蓋である。周溝の南東部から出土した。残存状況は全体の１/４程度である。口径8.4cm、器高2.3cm、焼成は良好で灰白色を呈する。体部内外面に横ナデが行われている。

139は坏の底部、140は高坏の口縁部である。共に周溝の南東部から出土したが、極一部の残欠に留ま

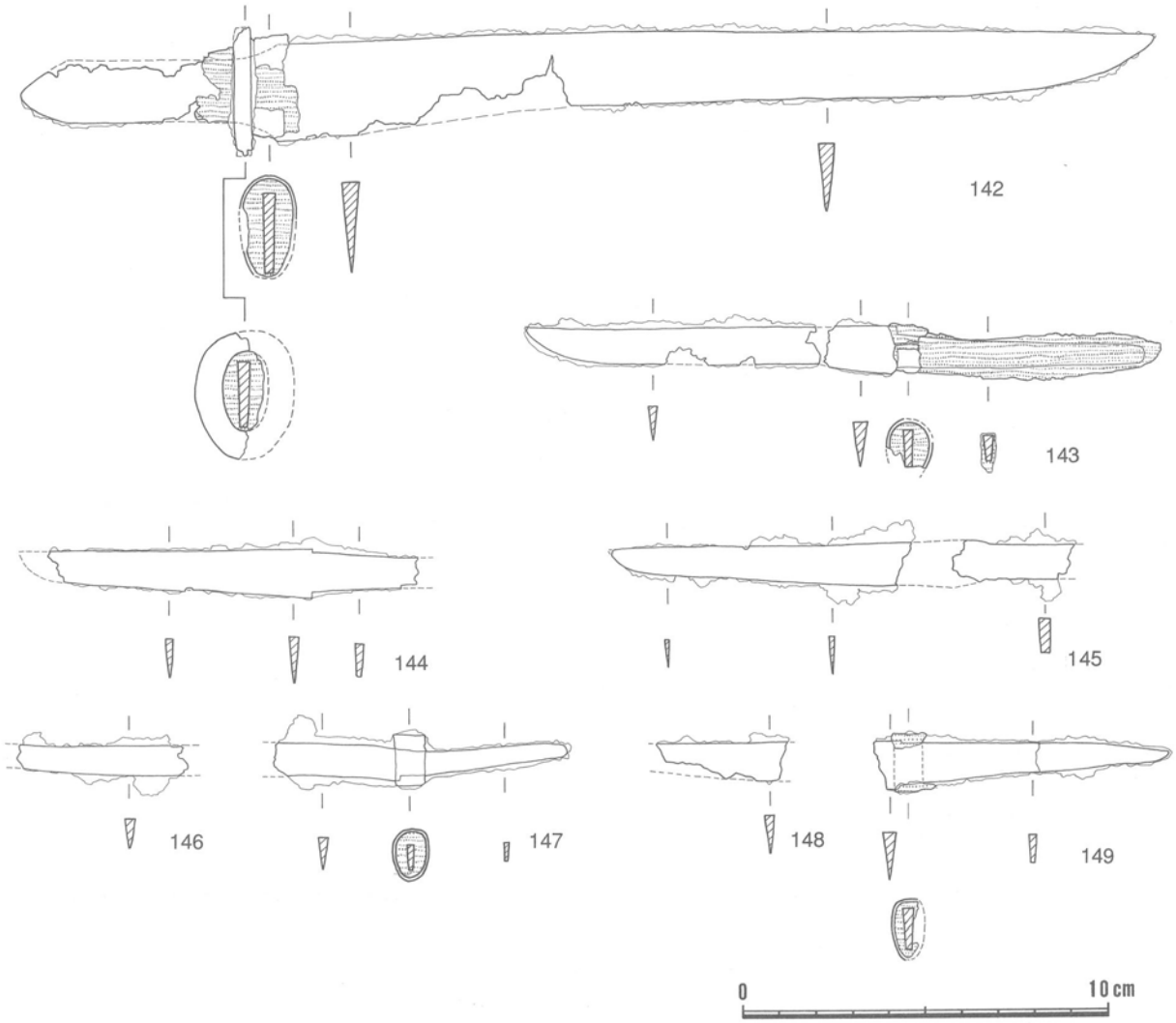


図93　14号墳の出土遺物２

り全容は不明である。

141は甕で、胴部の１/６が出土した。周溝の東部から南西部にかけて同一個体の破片が出土している。なお、周溝からは上記以外の数個体分の須恵器片に加え剥片も出土した。これらは細片であるため、図示し得るものではなかった。これらの須恵器はＴＫ46型式並行期とその前後に位置づけられるもので、時期は７世紀中葉～後葉と言える。

主体部の出土遺物　石室内から出土したのは142～149の鉄器と150～214の玉類である。142は大刀で、鎺と鍔が残存した。全長31.0cm、刀身は長さ24.0cm、幅2.6cmである。鎺から茎にかけては木質が付着していた。

143～149は刀子である。143は刀身の一部を欠くものの、刀身長10.1cmと推定できる。茎には木質が付着し、その長さは6.8cmである。また、鎺も残存した。144の刀子は残存長10.1cm、刀身の残存長7.2cm、茎の残存長2.9cmである。145は刀身の一部欠くものの、刀身は9.3cm以上の長さであったと推測される。茎の残存長は2.4cmである。146の刀子は刀身の残存に留まり、その長さは4.7cmであった。147は刀身の一部と茎が残存した。残存長は8.1cmで、鎺もみられる。149の刀子は残存長3.6cmで、残存したのは刀身の一部である。149は刀子の茎である。残存長は8.1cmで、鎺を伴う。なお、茎には木質が付着していた。なお、146と147、148と149は同一個体である可能性も考えられるが、確証を得るものではない。しかし、少なくとも14号墳には５点以上の刀子が副葬されていたことは言えよう。

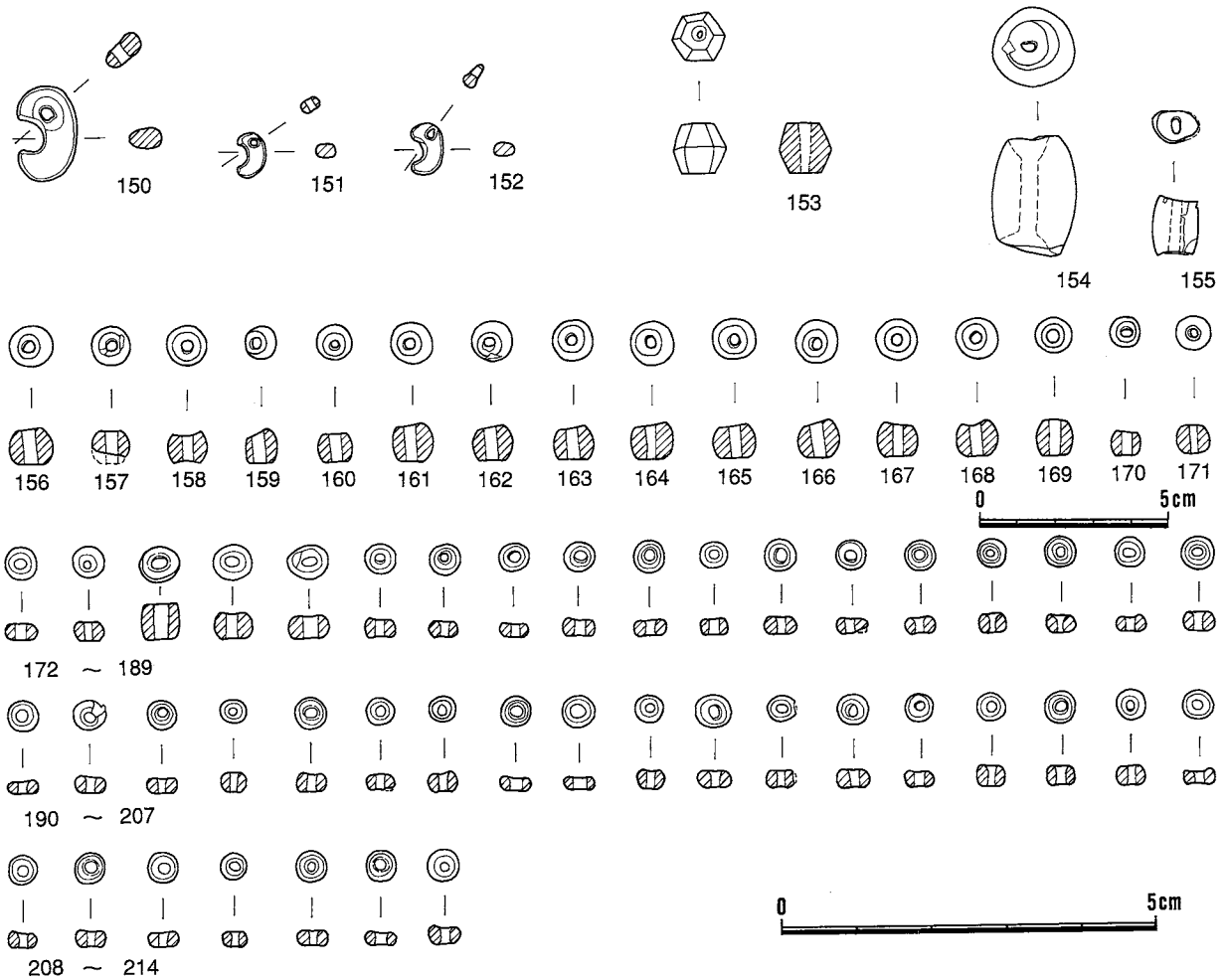


図94　14号墳の出土遺物３

150～214は14号墳から出土した玉類である。150～152の３点は滑石製の勾玉で、長さは150が2.55cm、151が1.20cm、152が1.35cmである。153は水晶製の切子玉で、全長1.35cmの大きさである。154と155の２点は琥珀製の棗玉である。154は長さ3.20cm、155は長さ1.60cmである。156～171は丸玉である。直径0.80～1.20cmで156・157・160～162・164～168・170・171は滑石製、158・159・163・169は蛇紋岩製である。172～214はガラス製の小玉である。172・173・177～214は直径0.4cm前後、厚さ0.2cm前後、濃青色のガラスであるが、174～176は直径0.6cm、厚さは174が0.55cm、175が0.35cm、176が0.30cmと他に比べてわずかに大きく、ガラスの色調は水色である。

(4)　小結

14号墳は墳丘や横穴式石室の残存状況が悪かったにもかかわらず、鉄刀や多数の玉類が出土した。豊富な副葬品とまでは言えないものの、出土した副葬品が総じて乏しい水掛渡Ｄ古墳群の中では注目できる古墳である。この古墳は攪乱が石室床面にまで達していることから、その際に遺物も持ち去られた可能性は高く、本来的にはより多くのものが副葬されていたのであろう。また、６号墳、７号墳、11号墳、12号墳の墓道は全て14号墳の周溝とつながっている。この点から、これら５基の被葬者に密接な関連をうかがえる。14号墳は石室内から出土した遺物から時期を明言することはできない。しかし、11号墳や12号墳は立地状況から、14号墳に後出すると考えられる。12号墳は７世紀第３四半期に埋葬行為が行われていることが確認でき、14号墳はこれに遡る時期に築造されたと考えられる。また、水掛渡Ｄ古墳群で表面採取した遺物の中で確実に６世紀代に遡る遺物は見られないことから、14号墳の築造時期は７世

紀前葉～中葉と推知される。

ところで、14号墳の石室は床面が２面存在した。当初から２重に造られたのか、追葬に伴い増設されたのかは資料を欠くため断定できない。ただし、床面の敷石を完全に上下面に区分できない部分もあるため、前者の可能性が高いことを指摘したい。

註

1　深さについては検出面から計測した値である。これ以降に記載する遺構についても同様である。
2　本報告書では石室開口部の中央と奥壁の中央を結んだ線を主軸と捉え、開口部から奥壁を見た方向を主軸方位とした。
3　床面標高は奥壁手前中央で測った数値である。なお、床面に敷石が施される場合は敷石の上面で計測した。
4　過去に調査されたＡ11号墳、Ａ12号墳、Ｃ１号墳、Ｃ２号墳等で確認されている。
5　須恵器については第３章第１節と同様、田辺1981を参照した。
6　鉄鏃については㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所2003を参照した。
7　側壁の左右は奥壁から開口部を見た際の左右である。
8　灰釉陶器については山下1995を参照した。
9　丸玉の材質は輝石安山岩であるという指摘を受けた。なお、玉類を含め石材については当研究所職員　森嶋富士夫が鑑定した。

表７　水掛渡Ｄ古墳群古墳計測表

古墳名	墳形	墳丘規模		主体部						主体部の出土遺物	周溝・墓道の出土遺物
		南北(m)	東西(m)	石室形態	主軸方位	全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	最大幅(m)		
１号墳	円墳	7.0	6.6	(無袖式)	N－40°－W	3.6	－	(0.8)	0.9	須恵器(平瓶１・坏身１)・縄文土器片・剥片	縄文土器片・剥片
２号墳	(円墳)	(５～６)		(無袖式)	N－15°－W	(2.6)	－	－	(0.7)	須恵器(坏蓋１・坏身３・瓶類頸部１・瓶類体部１)・刀子１	－
３号墳	円墳	12.2	8.0	不明	N－18°－W	(5.5)	－	－	(1.2～1.5)	須恵器(坏蓋６・坏身３・高坏１・甕１・短頸壷蓋１)・鉄鏃１	須恵器片
４号墳	円墳	7.0	6.1	不明	N－25°－W	－	－	－	－	須恵器(短頸壷１・短頸壷蓋１)・縄文土器片・石片	須恵器(坏身５・高坏１・平瓶１・長頸瓶１・甕１)・縄文土器片・石鏃２・剥片
５号墳	円墳	8.9	5.8	(無袖式)	N－38°－W	(3.3)	－	－	(0.8)	須恵器(坏身１・高坏１)・鉄鏃片７・縄文土器片・剥片	縄文土器片・剥片
６号墳	円墳	8.3	5.8	(無袖式)	N－28°－W	(3.6)	－	－	0.7	須恵器(坏身１・平瓶１・フラスコ形長頸瓶１)・刀子片２・鉇１	須恵器(坏蓋１・平瓶１・甕１)・土師器１・灰釉陶器椀１・縄文土器片・石鏃１・剥片
７号墳	円墳	10.8	8.5	無袖式(開口部立柱)	N－28°－W	4.9	－	0.8	1.1	須恵器(甕１・平瓶１)・灰釉陶器椀２・剥片	須恵器片・石鏃３・石匙１(閉塞部から土師器１)
８号墳	円墳	11.0	8.1	不明	N－30°－W	(3.5)	－	－	(1.1)	須恵器(坏身７・高坏１・瓶類１)・大刀１・刀子片４・鉇１・両頭金具６・鉄鏃７・縄文土器片・剥片	－
９号墳	円墳	10.6	8.9	(無袖式)	N－12°－W	4.0	－	1.1	1.2	須恵器(坏身１)・刀子２	須恵器(坏身１・短頸壷２)
10号墳	(円墳)	(６)		(無袖式)	N－24°－W	(2.8)	－	(0.8)	(0.9)	剥片	－
11号墳	(円墳)	(５～６)	(３～４)	無袖式	N－15°－W	(2.2)	－	0.4	0.6	刀子１・鉄片１	－
12号墳	(円墳)	(５)	(３～４)	擬似両袖式	N－16°－W	2.7	1.5	－	(0.6)	勾玉４・管玉１・棗玉１・丸玉16	閉塞部から須恵器(坏蓋２・坏身１)
13号墳	(円墳)	(６～７)		無袖式	N－19°－W	2.8	－	0.4	0.8	剥片	須恵器(短頸壷１)
14号墳	円墳	10	7.5	不明	N－18°－W	(3.8)	－	－	(1.0)	大刀１・刀子５+・勾玉３・切子玉１・棗玉２・丸玉16・小玉43	須恵器(坏蓋１・坏身１・高坏１・短頸壷１・瓶類破片３・甕１)

表8　古墳出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	器径(cm)	備考	写真図版
34	9	1号墳石室内	須恵器	平瓶	2.5Y 7/1(灰白色)	10.1	18.2	19.4	1/2残存、頸部径8.6cm、自然釉付着	35
	10	1号墳石室内	須恵器	坏	5Y 7/1(灰白色)	10.1	(3.0)	10.1	1/4残存	—
38	11	2号墳石室内	須恵器	瓶類	7.5Y 7/1(灰白色)	7.5	(7.5)	—	頸部のみ残存	35
	12	2号墳石室内	須恵器	瓶類	N 7/0(灰白色)	—	(6.3)	14.6	体部1/4残存	—
	13	2号墳石室内	須恵器	坏蓋	2.5Y 7/1(灰白色)	9.6	2.7	11.5	2/3残存、摘み部径2.8cm	35
	14	2号墳石室内	須恵器	坏身	N 6/0(灰色)	(9.5)	(1.5)	(11.4)	口縁部の一部のみ残存	—
	15	2号墳石室内	須恵器	坏身	外面：N 5/0(灰色) 内面：5Y 7/1(灰白色)	11.3	3.6	11.3	1/4残存	35
	16	2号墳石室内	須恵器	坏身	N 8/0(灰白色)	11.0	4.1	11.0	1/3残存、ヘラ記号	36
44	18	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	2.5Y 7/1(灰白色)	8.2	2.9	10.4	完形品、摘み部径1.9cm	36
	19	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	N 8/0(灰白色)	8.9	3.7	10.7	完形品、摘み部径2.1cm	37
	20	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	5Y 7/1(灰白色)	9.0	3.1	11.3	完形品、摘み部径2.0cm	37
	21	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	N 7/0(灰白色)+ 5B 5/1(青灰色)	9.4	2.5	11.6	完形品、摘み部径2.6cm	37
	22	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	7.5Y 7/1(灰白色)	8.9	3.0	10.6	完形品、摘み部径1.8cm	37
	23	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	5Y 7/1(灰白色)	9.2	(3.0)	11.1	摘み部欠損、自然釉付着	37
	24	3号墳石室内	須恵器	坏蓋	2.5Y 7/1(灰白色)	7.2	2.4	7.2	完形品	37
	25	3号墳石室内	須恵器	坏身	外面：N 6/0(灰色) 内面：N 7/0(灰白色)	10.3	4.0	10.3	3/4残存、底部径2.8cm	37
	26	3号墳石室内	須恵器	坏身	7.5Y 7/1(灰白色)	10.7	3.7	10.7	完形品、ヘラ記号	37
	27	3号墳石室内	須恵器	坏身	N 7/0(灰白色)	(11.5)	(3.3)	(11.5)	底部欠損	—
	28	3号墳石室内	須恵器	高坏	5Y 7/1(灰白色)	—	—	—	口縁部のみ残存	—
	29	3号墳石室内	須恵器	甕	5Y 7/1(灰白色)	10.5	9.9	10.5	2/3残存、胴部最大径9.3cm	37
	30	3号墳周溝	須恵器	坏身	外面：7.5Y 5/1(灰色) 内面：5Y 6/1(灰色)	10.5	3.8	10.5	3/4残存、底部径2.1cm	36
	31	3号墳周溝	須恵器	坏？	外面：N 5/0(灰色) 内面：N 7/0(灰白色)	(11.0)	(3.3)	(11.0)	1/4残存	—
	32	3号墳周溝	須恵器	高坏	N 7/0(灰白色)	(14.5)	(1.8)	(14.5)	口縁部のみ残存	—
	33	3号墳周溝	須恵器	瓶類	5Y 7/1(灰白色)	(9.2)	(1.2)	—	口縁部1/2残存	—
49	35	4号墳石室内	須恵器	短頸壺	N 7/0(灰白色)	9.4	(11.1)	(23.8)	底部欠損、自然釉付着	39
	36	4号墳石室内	須恵器	短頸壺蓋	5Y 7/1(灰白色)	12.1	5.0	12.1	1/2残存	39
	37	4号墳周溝	須恵器	甕	7.5Y 5/1(灰色) N 3/0(暗灰色)	16.1	37.5	35.9	1/2残存、頸部径13.8cm	39
	38	4号墳周溝	須恵器	平瓶	5Y 7/1(灰白色)	5.9	14.7	12.8	3/4残存、頸部径4.1cm、自然釉付着	39
	39	4号墳周溝	須恵器	高坏	2.5Y 7/1(灰白色)	10.4	10.8	10.4	3/5残存、頸部径3.1cm、脚部径7.7cm 脚部裾自然釉付着	39
	40	4号墳周溝	須恵器	長頸瓶	2.5Y 7/2(灰黄色)	9.2	(9.3)	—	口縁・頸部のみ残存、自然釉付着	38
	41	4号墳周溝	須恵器	坏身	外面：N 4/0(灰色) 内面：10Y 7/1(灰白色)	(8.8)	(2.6)	(10.6)	1/6残存	—
	42	4号墳周溝	須恵器	坏身	7.5Y 8/1(灰白色)	(10.3)	(1.6)	(12.2)	1/8残存	—
	43	4号墳周溝	須恵器	坏身	2.5Y 8/1(灰白色)	11.2	3.5	11.2	2/3残存、底部径6.7cm、スノコ痕	38
	44	4号墳周溝	須恵器	坏身	外面：7.5Y 6/1(灰色) 内面：5Y 7/1(灰白色)	10.5	3.8	10.5	1/2残存、湖西産	38
	45	4号墳周溝	須恵器	坏身	7.5Y 6/1(灰色)	—	(2.2)	(13.5)	高台部径11.0cm	—
52	46	5号墳	須恵器	坏身	10Y 7/1(灰白色)	9.6	3.4	9.6	7/8残存	39
	47	5号墳	須恵器	高坏	7.5Y 7/1(灰白色)	—	—	—	口縁部のみ残存	—

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	器径(cm)	備考	写真図版
58	55	6号墳石室内	須恵器	フラスコ形長頸瓶	2.5Y7/1(灰白色)	10.3	24.0	18.4	3/4残存、頸部径5.4cm	41
	56	6号墳東側攪乱	須恵器	坏身	N7/0(灰白色)	10.5	3.7	10.5	1/2残存、底部径(4.6cm)	41
	57	6号墳周溝	須恵器	平瓶	5Y7/1(灰白色)	11.0	14.2	19.0	3/4残存、頸部径10.2cm	40
	58	6号墳石室内	須恵器	平瓶	5Y7/1(灰白色)	8.2	19.0	14.7	3/4残存、頸部径4.9cm、ヘラ記号	40
	59	6号墳周溝	須恵器	坏蓋	10YR7/2(にぶい黄橙色)	9.6	3.6	11.8	2/3残存、摘み部径2.2cm、自然釉付着	41
	60	6号墳墓道	土師器	甕	10YR7/2(にぶい黄橙色)	—	(4.0)	(9.8)	底部残存、底部径5.1cm	40
	61	6号墳周溝	灰釉陶器	椀	2.5Y7/1(灰白色)	—	(3.0)	(12.4)	1/5残存、高台部径(7.1cm)、スノコ痕	—
	62	6号墳周溝・墓道	須恵器	甕	外面:2.5Y6/1(黄灰色) 内面:7.5Y7/1(灰白色)	—	—	—	肩部のみ残存	—
63	66	7号墳石室内	須恵器	(甑)	外面:5Y3/1(オリーブ黒色) 内面:5Y7/1(灰白色)	(9.4)	(1.4)	—	口縁部のみ残存、自然釉付着	—
	67	7号墳石室内	灰釉陶器	(平瓶)	2.5Y7/1(灰白色)	(8.9)	(2.1)	—	口縁部のみ残存	—
	68	7号墳周溝内	須恵器	坏身	5Y7/1(灰白色)	—	(1.5)	(11.8)	底部のみ残存、底部径9.0cm、ヘラ記号	—
	69	7号墳石室内	灰釉陶器	椀	2.5Y7/1(灰白色)	—	(3.3)	(11.0)	底部のみ残存、高台部径(6.0cm)	—
	70	7号墳石室内	灰釉陶器	椀	7.5Y7/1(灰白色)	15.1	6.2	15.1	3/4残存、高台部径(7.4cm)、スノコ痕、糸切り痕	42
67	71	8号墳石室内	須恵器	坏身	外面:N5/0(灰色) 内面:5Y7/1(灰白色)	(11.5)	(2.0)	(13.6)	口縁部のみ残存	—
	72	8号墳石室内	須恵器	坏身	外面:N5/0(灰色) 内面:N7/0(灰白色)	(8.4)	(2.8)	(10.2)	1/3残存	—
	73	8号墳石室内	須恵器	坏身	外面:2.5Y5/1(黄灰色) 内面:N6/0(灰色)	(9.0)	(2.4)	(9.6)	1/4残存	—
	74	8号墳石室内	須恵器	坏身	7.5Y7/1(灰白色)	(8.3)	(3.0)	(8.6)	1/4残存	—
	75	8号墳石室内	須恵器	坏身	外面:N5/0(灰色) 内面:10Y6/1(灰色)	(8.8)	(3.2)	(9.4)	1/4残存	—
	76	8号墳石室内	須恵器	坏身	N5/0(灰色)	(8.2)	(2.8)	(8.7)	1/4残存	—
	77	8号墳石室内	須恵器	坏身	外面:N5/0(灰色) 内面:N7/0(灰白色)	(9.2)	(2.5)	(9.4)	1/6残存	—
	78	8号墳石室内	須恵器	瓶類	N7/0(灰白色)	(9.2)	(3.2)	—	口縁部のみ残存	—
	79	8号墳石室内	須恵器	高坏	7.5Y8/1(灰白色)	(14.7)	(2.8)	(15.1)	口縁部のみ残存	—
72	101	9号墳石室内	須恵器	坏身	2.5Y8/1(灰白色)	14.8	4.0	14.8	完形品、高台部径11.5cm	42
73	104	9号墳周溝	須恵器	坏身	口縁部:N5/0(灰色) 体部:N7/0(灰白色) 底部:N8/0(灰白色)	14.0	4.0	14.0	1/3残存	42
	105	9号墳周溝	須恵器	短頸壺	N7/0(灰白色)	(12.4)	(3.6)	(15.4)	頸部・口縁部が残存、頸部径(12.4cm)	—
	106	9号墳周溝	須恵器	短頸壺	N7/0(灰白色)	(11.0)	(2.4)	(12.3)	口縁部のみ残存、自然釉付着	—
84	108	12号墳閉塞部	須恵器	坏蓋	5B6/1(青灰色)	9.5	3.4	9.5	完形品	—
	109	12号墳閉塞部	須恵器	坏蓋	外面:5B6/1(青灰色) 内面:10Y7/1(灰白色)	9.1	4.1	9.1	完形品、ヘラ記号	42
	110	12号墳閉塞部	須恵器	坏身	5B6/1(青灰色)	8.0	3.1	10.2	完形品	42
88	133	13号墳石室	須恵器	短頸壺	N7/0(灰色)	11.2	19.3	18.2	1/3残存	44
92	134	14号墳周溝	須恵器	短頸壺	5Y7/1(灰白色)	9.9	17.6	18.5	1/3残存、頸部径9.2cm	44
	135	14号墳周溝	須恵器	瓶類	5Y8/1(灰白色)	—	(6.8)	13.8	1/3残存、ヘラ記号	—
	136	14号墳周溝	須恵器	瓶類	5Y7/1(灰白色)	(9.8)	(3.9)	—	口縁部のみ残存、自然釉付着	—
	137	14号墳周溝	須恵器	瓶類	7.5Y7/1(灰白色)	(10.8)	(1.0)	—	口縁部のみ残存	—
	138	14号墳周溝	須恵器	坏蓋	N7/0(灰白色)	8.4	2.3	10.6	1/4残存、摘み部径(2.8cm)	—
	139	14号墳周溝	須恵器	坏	7.5Y6/1(灰色)	—	(1.6)	—	底部のみ残存	—
	140	14号墳周溝	須恵器	—	5Y6/1(灰白色)	—	(1.7)	—	口縁部のみ残存	—
	141	表採・12号墳 14号墳周溝	須恵器	甕	10Y6/1(灰色)	—	(30.7)	34.6	1/6残存、自然釉付着	—

表９　古墳出土鉄器観察表

大刀・刀子観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ（cm）		最大巾（cm）		備　　考	写真図版
			残存長	刀身部	刀身部	茎		
38	17	２号墳石室内	6.7	3.5	0.9	0.7	－	35
58	63	６号墳石室内	8.3	(5.6)	1.7	1.2	木質付着	41
	64	６号墳石室内	3.2	(3.2)	0.9	－	－	41
67	80	８号墳石室内	5.3	(5.3)	2.4	－	－	42
	83	８号墳石室内	15.9	11.7	1.4	1.1	－	42
	84	８号墳石室内	12.3	7.7	1.2	0.9	錐残存、木質付着	42
	85	８号墳石室内	4.8	(4.8)	1.5	－	－	42
	86	８号墳石室内	3.6	(3.6)	1.1	－	－	42
	87	８号墳石室内	2.5	(2.5)	1.0	－	－	42
72	102	９号墳石室内	6.4	(2.5)	1.3	1.0	－	41
	103	９号墳石室内	5.3	(4.2)	1.0	0.9	－	41
80	107	11号墳石室内	(4.2)	(4.2)	1.2	－	－	41
93	142	14号墳石室内	31.0	24.0	2.6	1.7	鍔・錐残存、木質付着	45
	143	14号墳石室内	8.1	(10.1)	1.1	0.9	－	45
	144	14号墳石室内	10.1	(7.2)	1.3	1.1	－	45
	145	14号墳石室内	(9.3)	(8.2)	1.1	1.0	－	45
	146	14号墳石室内	4.7	(4.7)	0.8	－	－	45
	147	14号墳石室内	8.1	(3.3)	0.9	0.6	錐が残存、木質付着	45
	148	14号墳石室内	3.6	(3.6)	1.1	－	－	45
	149	14号墳石室内	8.1	(0.5)	1.3	1.1	錐が残存、木質付着	45

鉄鏃観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	鏃身部の形状	長さ(cm)				巾(cm)			備　考	写真図版
				残存長	鏃身部	頸部	茎	鏃身部	頸部	茎		
45	34	３号墳石室内	鑿箭	16.3	11.0		(5.3)	0.6	0.4～0.5	0.2～0.3	棘状関	41
52	48	５号墳石室内	鑿箭	5.0	(5.0)		－	0.6	0.5	－	－	41
	49	５号墳石室内	鑿箭	3.6	(3.6)		－	0.6	0.4	－	－	41
	50	５号墳石室内	不明	3.7	－	(1.5)	(2.1)	－	0.4～0.5	0.3～0.4	棘状関	41
	51	５号墳石室内	不明	2.9	－	(2.9)	－	－	0.4～0.5	－	－	41
	52	５号墳石室内	不明	4.1	－	(4.1)	－	－	0.3～0.4	－	－	41
	53	５号墳石室内	不明	4.2	－	(4.2)	－	－	0.4	－	－	41
	54	５号墳石室内	不明	1.4	－	(1.4)	－	－	0.4	－	－	41
67	94	８号墳石室内	鑿箭	18.6	11.5		7.1	0.6	0.3～0.4	0.1～0.4	棘状関	42
	95	８号墳石室内	鑿箭	17.1	11.2		5.9	0.5	0.3	0.2～0.33	棘状関	42
	96	８号墳石室内	鑿箭	12.7	11.5		(1.2)	0.6	0.4	0.3	棘状関	42
	97	８号墳石室内	鑿箭	8.9	8.9		－	0.6	0.4～0.5	－	－	42
	98	８号墳石室内	鑿箭	3.4	3.4		－	0.7	0.5	－	－	42
	99	８号墳石室内	不明	6.3	－	(4.3)	(2.0)	－	0.3～0.4	0.2～0.3	棘状関	42
	100	８号墳石室内	鑿箭	15.7	－	(9.7)	(6.5)	－	0.3～0.4	0.2～0.3	棘状関	42

両頭金具観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ（cm）		径（cm）			備　　考	写真図版
			残存	心棒	頸部	心棒	筒金		
67	88	８号墳石室内	2.5	1.6	0.4	0.3	－	－	42
	89	８号墳石室内	2.5	(2.0)	0.4	－	0.7	－	42
	90	８号墳石室内	2.7	(1.9)	0.5	－	0.5	－	42
	91	８号墳石室内	1.9	(1.4)	0.4	0.2	－	－	42
	92	８号墳石室内	1.5	(1.1)	0.4	0.2	－	－	42
	93	８号墳石室内	1.5	－	－	－	－	－	42

表10　古墳出土玉類観察表

12号墳出土玉類観察表１

挿図番号	遺物番号	種別	全長 (cm)	最大巾 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　　考	写真図版
84	111	勾玉	3.18	1.55	1.00	0.30	7.83	滑石製	43
	112	勾玉	2.15	1.00	0.65	0.25	2.10	滑石製	43
	113	勾玉	1.70	0.85	0.45	0.20	1.02	滑石製	43
	114	勾玉	(2.30)	1.25	1.10	0.15～0.35	6.40	瑪瑙製	43

12号墳出土玉類観察表２

挿図番号	遺物番号	種別	高さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　　考	写真図版
84	115	管玉	2.18	1.28	0.40	5.30	緑色凝灰岩製	43
	116	棗玉	2.50	0.85～1.25	－	－	琥珀製	43
	117	丸玉	0.73	0.83	0.20	0.70	安山岩製か	43
	118	丸玉	0.75	0.83	0.25	0.62	安山岩製か	43
	119	丸玉	0.68	0.80	0.20	0.65	安山岩製か	43
	120	丸玉	0.75	0.85	0.20～0.30	0.66	安山岩製か	43
	121	丸玉	0.75	0.83	0.20	0.69	安山岩製か	43
	122	丸玉	0.77	0.88	0.25	0.68	安山岩製か	43
	123	丸玉	0.70	0.76	0.25	0.54	安山岩製か	43
	124	丸玉	0.75	0.85	0.20	0.72	安山岩製か	43
	125	丸玉	0.80	0.88	0.20～0.25	0.73	安山岩製か	43
	126	丸玉	0.73	0.85	0.20	0.73	安山岩製か	43
	127	丸玉	0.80	0.85	0.20	0.82	安山岩製か	43
	128	丸玉	0.75	0.90	0.23	0.82	安山岩製か	43
	129	丸玉	0.75	0.85	0.23～0.25	0.73	安山岩製か	43
	130	丸玉	0.85	1.03	0.25～0.30	1.04	安山岩製か	43
	131	丸玉	0.75	0.90	0.20～0.25	0.77	安山岩製か	43
	132	丸玉	0.75	0.85	0.18	0.68	安山岩製か	43

14号墳出土玉類観察表１

挿図番号	遺物番号	種別	全長 (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　　考	写真図版
94	150	勾玉	2.55	0.87	0.85	0.28	3.06	滑石製	45
	151	勾玉	1.20	0.50	0.35	0.18	0.42	滑石製	45
	152	勾玉	1.35	0.55	0.38	0.20～0.25	0.61	滑石製	45

14号墳出土玉類観察表２

挿図番号	遺物番号	種別	高さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　　考	写真図版
94	153	切子玉	1.35	0.85～1.40	0.15～0.40	3.19	水晶製	45
	154	棗玉	3.20	1.60～2.20	－	－	琥珀製	45
	155	棗玉	1.60	1.20	－	－	琥珀製	45
	156	丸玉	0.97	1.15	0.35	1.65	滑石製	45
	157	丸玉	0.65	1.00	0.35	0.61	滑石製	45
	158	丸玉	0.85	1.05	0.30	1.39	蛇紋岩製	45
	159	丸玉	0.90	0.83	0.33	0.90	蛇紋岩製	45
	160	丸玉	0.77	0.95	0.28	0.62	滑石製	45
	161	丸玉	1.05	1.13	0.30	1.72	滑石製	45
	162	丸玉	0.95	1.10	0.35	1.47	滑石製	45

(石材については註９(Ｐ93)参照)

14号墳出土玉類観察表３

挿図番号	遺物番号	種別	高さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　　考	写真図版
94	163	丸玉	0.90	1.75	0.33	1.46	蛇紋岩製	45
	164	丸玉	0.97	1.15	0.25～0.30	1.35	滑石製	45
	165	丸玉	0.90	1.15	0.28～0.30	1.63	蛇紋岩製	45
	166	丸玉	1.00	1.14	0.33	1.25	蛇紋岩製	45
	167	丸玉	0.90	1.10	0.27	1.38	蛇紋岩製	45
	168	丸玉	0.95	1.13	0.30	1.17	滑石製	45
	169	丸玉	0.95	1.00	0.30	1.36	蛇紋岩製	45
	170	丸玉	0.65	0.80	0.28	0.61	滑石製	45
	171	丸玉	0.75	0.90	0.20	0.84	滑石製	－
	172	小玉	0.23	0.40	0.08	0.05	ガラス製	45
	173	小玉	0.25	0.40	0.08	0.06	ガラス製	45
	174	小玉	0.55	0.55	0.20	0.14	ガラス製	45
	175	小玉	0.35	0.50	0.13	0.09	ガラス製	45
	176	小玉	0.30	0.47～0.60	0.20	0.09	ガラス製	45
	177	小玉	0.27	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45
	178	小玉	0.23	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45
	179	小玉	0.20	0.40	0.13	0.04	ガラス製	45
	180	小玉	0.23	0.42	0.15	0.05	ガラス製	45
	181	小玉	0.20	0.42	0.13	0.04	ガラス製	45
	182	小玉	0.22	0.36	0.13	0.04	ガラス製	45
	183	小玉	0.23	0.42	0.12	0.06	ガラス製	45
	184	小玉	0.20	0.40	0.12	0.04	ガラス製	45
	185	小玉	0.23	0.40	0.10	0.04	ガラス製	45
	186	小玉	0.23	0.38	0.08	0.05	ガラス製	45
	187	小玉	0.23	0.40	0.08	0.05	ガラス製	45
	188	小玉	0.20	0.40	0.10	0.04	ガラス製	45
	189	小玉	0.28	0.43	0.13	0.06	ガラス製	45
	190	小玉	0.20	0.40	0.12	0.04	ガラス製	45
	191	小玉	0.25	0.40	0.10	0.06	ガラス製	－
	192	小玉	0.20	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45
	193	小玉	0.28	0.35	0.08	0.04	ガラス製	45
	194	小玉	0.25	0.40	0.10	0.04	ガラス製	45
	195	小玉	0.22	0.40	0.10	0.04	ガラス製	45
	196	小玉	0.25	0.37	0.10	0.04	ガラス製	45
	197	小玉	0.20	0.40	0.15	0.04	ガラス製	45
	198	小玉	0.18	0.40	0.20	0.04	ガラス製	45
	199	小玉	0.28	0.38	0.08	0.05	ガラス製	45
	200	小玉	0.23	0.42	0.13	0.06	ガラス製	45
	201	小玉	0.25	0.38	0.10	0.05	ガラス製	45
	202	小玉	0.23	0.42	0.10～0.14	0.05	ガラス製	45
	203	小玉	0.20	0.38	0.10	0.05	ガラス製	45
	204	小玉	0.28	0.38	0.07	0.05	ガラス製	45
	205	小玉	0.25	0.42	0.13	0.05	ガラス製	45
	206	小玉	0.27	0.40	0.08	0.05	ガラス製	45
	207	小玉	0.20	0.40	0.12	0.04	ガラス製	45
	208	小玉	0.23	0.40	0.10	0.04	ガラス製	45
	209	小玉	0.25	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45
	210	小玉	0.20	0.40	0.12	0.05	ガラス製	45
	211	小玉	0.20	0.37	0.10	0.04	ガラス製	45
	212	小玉	0.20	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45
	213	小玉	0.20	0.40	0.12	0.05	ガラス製	45
	214	小玉	0.25	0.40	0.10	0.05	ガラス製	45

（石材については註９（Ｐ93）参照）

第３節　その他の遺構・遺物

１．概要

水掛渡Ｄ古墳群の調査では縄文時代の遺物や遺構を検出した。縄文時代の遺物は調査区のほぼ全面に渡って出土したが、特に多かったのは調査区の北部（１号墳の周辺）と調査区の西部（４号墳、７号墳の西側）である。出土した遺物は縄文土器と石器である。縄文土器は早期に位置づけられるものが大勢を占めるなか、中期の土器も１点存在した。ただし、縄文土器の大半は風化が著しい上に細片であり、型式や器種を特定するに至らなかった。石器は石鏃とその未製品の他に、石匙、多数の剥片が出土した。

遺物量に比べ、検出できた遺構は少なかった。検出できた遺構は竪穴住居が１軒、土坑が５基である。この内、竪穴住居跡は出土遺物から縄文時代早期に位置づけることができる。また、５基の土坑の内、調査区西部で検出した２基は出土遺物から縄文時代早期に位置づけられるが、その性格は不明である。残る土坑のうち、２基は陥穴と考えられる遺構である。この他、炭焼窯と考えられる遺構１基と時期・性格共に不明の遺構を１基検出した。

２．縄文時代の遺構

(1)　ＳＢ－１（図95）

ＳＢ－１は調査区の北東部、１号墳の南西約7.5mで検出した。上部の削平が著しく、残存状況は良好とは言い難いものである。この住居跡は南北にやや長い楕円形の平面形態で、長軸4.4m、短軸3.8mの長さである。検出面からの深さは最深部で0.2mである。住居跡の中央部には直径0.3m、深さ0.6mのピットが存在する。覆土は褐色の粘土で炭化物と小礫が混ざるものであった。覆土や住居跡床面からは縄文土器の破片（図100－215）や石器（図101－223～225）が出土した。出土位置を見ると、石鏃や剥片は住居跡の南西部からの出土がほとんどで、縄文土器は住居跡の中央部から北東部にかけてである。出土した縄文土器は縄文時代早期末の可能性が考えられ[1]、他に時期を特定する遺物も見られないことから、この時期の竪穴住居跡と考えたい。

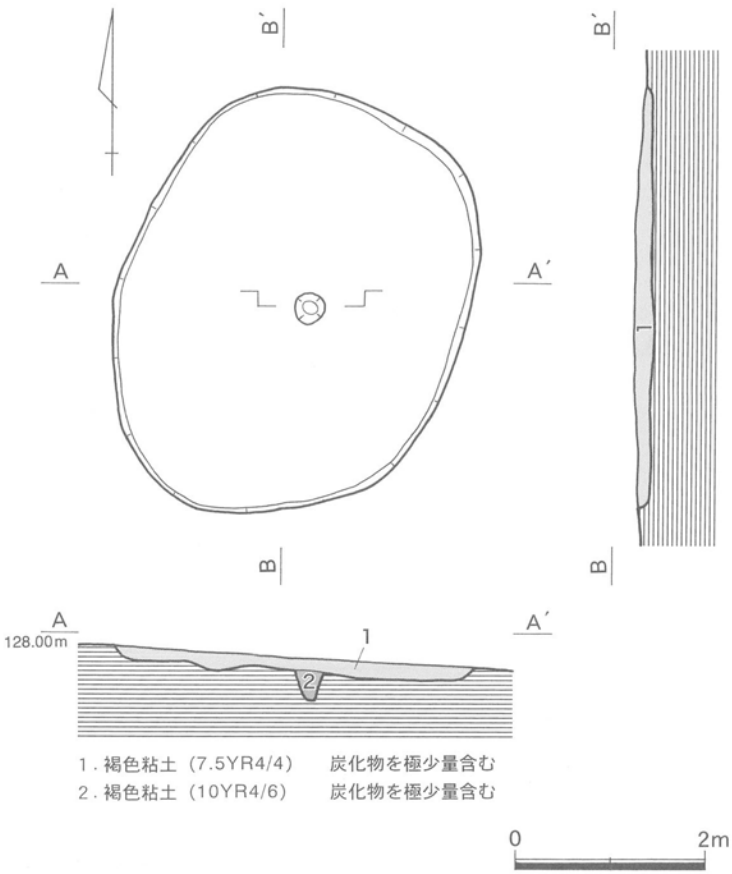


図95　ＳＢ－１実測図

(2)　ＳＦ－１（図96）

ＳＦ－１は調査区の中央部付近、ＳＢ－１の約12m南方で検出した土坑である。楕円形の平面形態で、長さは長軸が2.9m、短軸が1.1m、深さは検出面から測り0.2mである。遺物は縄文土器が出土したが、風化が著しい上に細片であるため型式は不明で

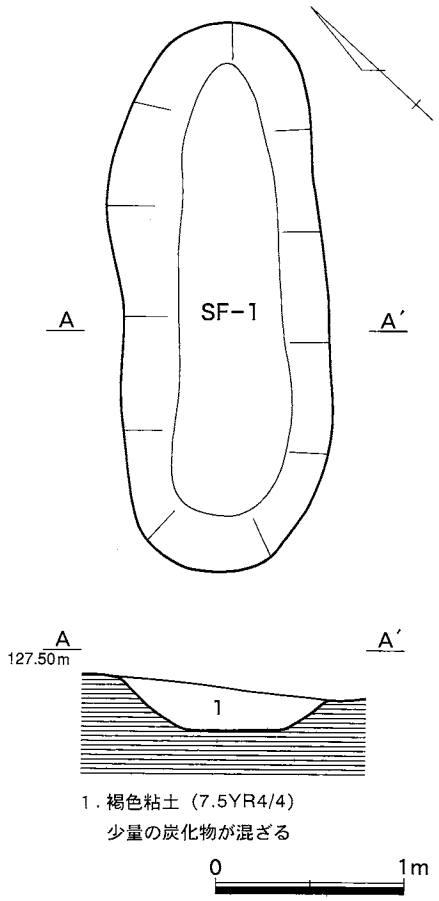


図96　ＳＦ－１実測図

ある。遺物から時期をうかがうことはできないが、周囲の状況からＳＦ－１は縄文時代早期に位置づけられる可能性がある。

(3)　**ＳＦ－２（図97上）**

ＳＦ－２は調査区の南西部に所在する土坑で、約１m北にはＳＦ－３が存在する。規模は南北2.5m、東西2.9mで、東西にやや長い円形の遺構である。検出面からの深さは0.1mと浅いものである。この土坑からは、少量の縄文土器片や石片が出土したが、いずれも細片であるため図示し得るものではなかった。ただし、縄文土器はＳＦ－３出土のものと同型式のものと考えられ、縄文時代早期末のものと考えられる。

(4)　**ＳＦ－３（図97下）**

ＳＦ－３は調査区の南西部で検出した土坑で、約15m東には４号墳が存在する。この遺構は非常に浅く、最深部でも検出

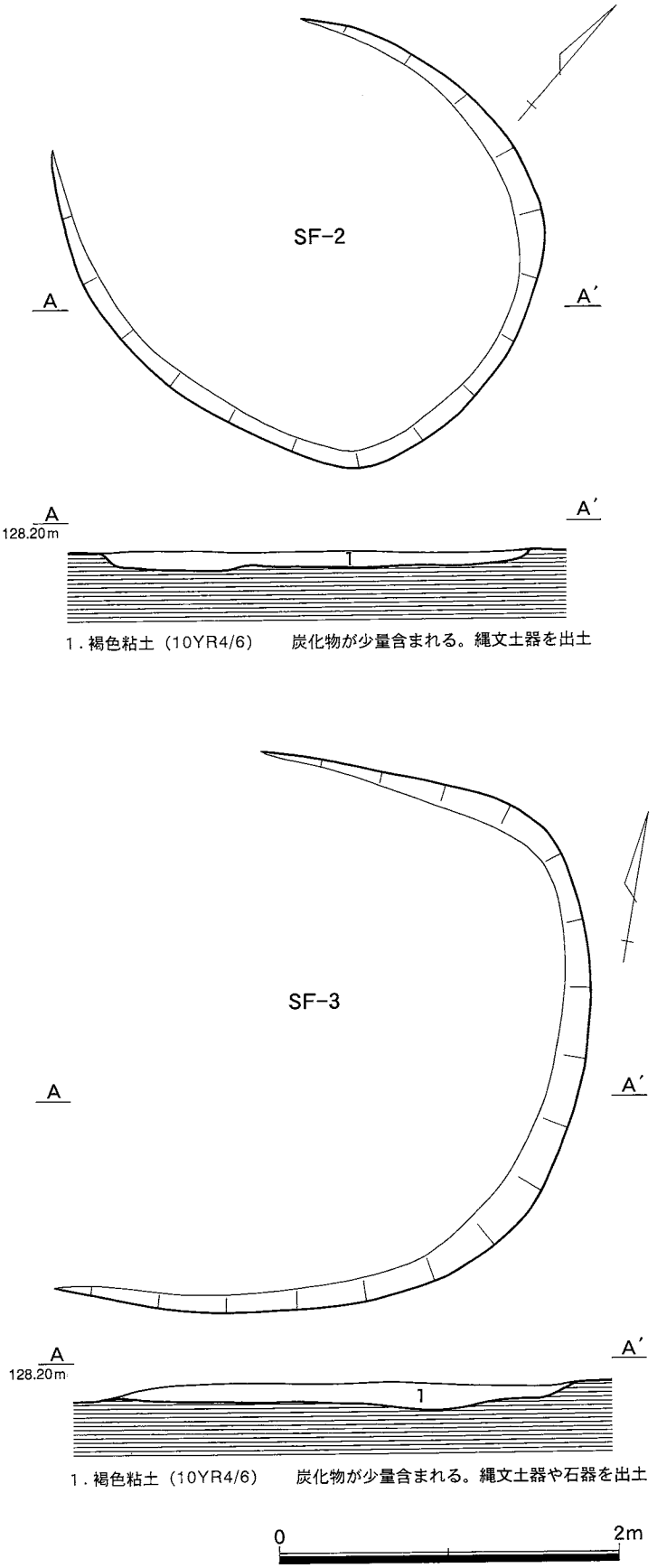


図97　ＳＦ－２・ＳＦ－３実測図

面から0.2mの深さであった。ＳＦ－３の平面形態は不正形な円形で、最大幅は3.4mである。ただし、遺構の北西部の立ち上がりは不鮮明で、なだらかに遺構検出面とつながっている。

ＳＦ－３からは縄文土器や石器が出土したが、縄文土器は風化が著しく、更に細片であるため、図示し得るものではなかった。また、この遺構の周囲では表土除去中にも縄文土器が出土した。図99－219もその一つで、条痕文系と考えられる土器である。ＳＦ－３出土の縄文土器は胎土等がこれと近似するため、219と同時期の縄文時代早期後葉に位置づけられる可能性がある。

(5)　ＳＦ－４（図98左）

ＳＦ－４はＳＦ－３の北東約16mに所在する遺構で、南東約３mには４号墳が存在する。ＳＦ－４は長径1.4m、短径1.1mの楕円形の平面形を呈する遺構である。深さは検出面から測り1.0mであるが、底面の中央には直径0.3m、深さ0.2mのピットを有する。このピットは逆茂木の跡と推測され、この土坑は陥穴であったと考えられる。この遺構からは遺物が出土しなかったため、時期を確定することはできなかった。ただし、この遺構の付近では縄文土器早期末の土器が採取できたにもかかわらず、ＳＦ－４の覆土からは一辺の土器片も出土しなかったことから、縄文時代早期末を遡る遺構の可能性が指摘できる。

(6)　ＳＦ－５（図98右）

ＳＦ－５はＳＦ－４の南南東約８mで検出した遺構である。ＳＦ－５の平面形は円形で、その最大径は1.5mである。底面は検出面から0.9mの深さで、中央に直径、深さ共に0.3mのピットを持つ。形状がＳＦ－４と類似することから、ＳＦ－５も陥穴と考えられる。なお、この遺構は４号墳の周溝と一部、重複している。４号墳では石室内や周溝、墓道の覆土から縄文土器片や石器等出土している。これらの遺物は断定できないものの縄文時代早期末の可能性が高いものである。一方、ＳＦ－５の覆土からは遺物が一切出土しなかった。そのため、ＳＦ－５は縄文時代早期末より遡る時期のものと考えられる。

３．縄文時代の遺物

ＳＢ－１やＳＦ－２・３からは縄文土器や石器等が出土した。また、１・４～８・10・12～14号墳の覆土や表土除去時、確認調査時にも縄文時代の遺物は出土した。しかし、その多くが細片であり、縄文土器はいずれも表面の風化の著しいものであった。図99～101に示したものが図示し得た遺物である。

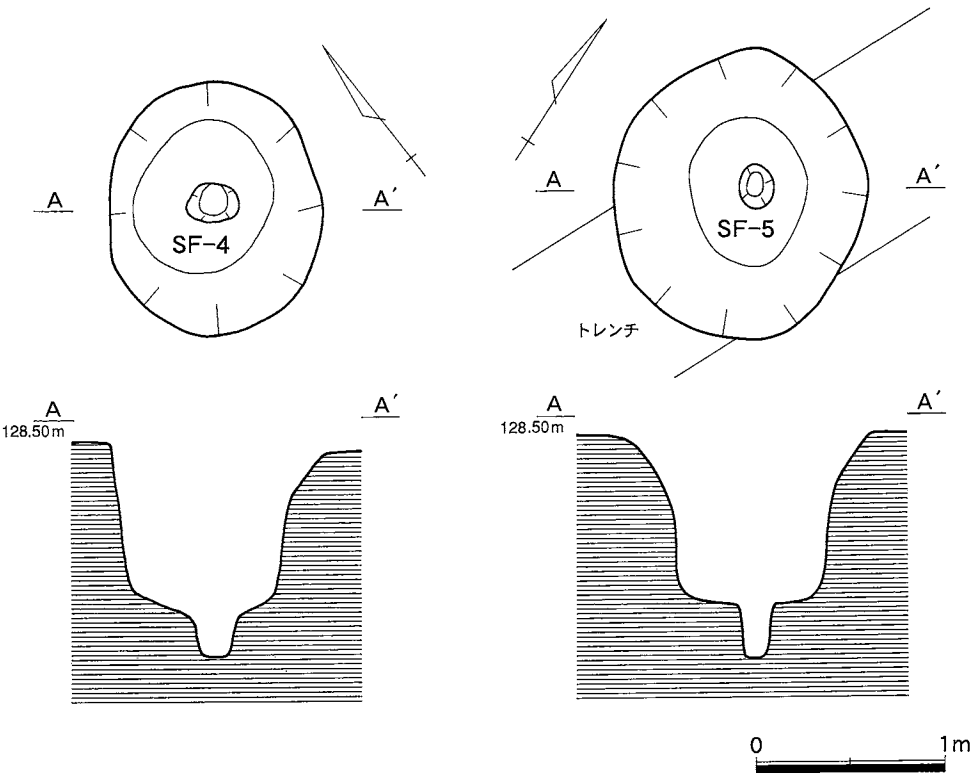


図98　ＳＦ－４・ＳＦ－５実測図

(1) 土器（図99）

215と216はＳＦ－２・３付近の表土除去時に出土した。216は微隆起線がみられ、野島式あるいは鵜ヶ島台式と考えられる。216は鵜ヶ島台式の土器である。217と218は酒杯状突起の部分が遺存した粕畑式の土器である。217はＳＦ－２・３付近の表土除去時に、218はＳＢ－１付近の表土除去時に出土した。なお、217は摩滅が著しく判然としないが、連続爪形刺突文が施文されている可能性がある。以上は縄文時代早期後葉に位置づけられる。219と220は断面三角形状を呈する隆帯がある神ノ木台式の土器である。共に５号墳の墓道覆土からの出土である。221はＳＢ－１から出土したが、細片である上に摩滅が著しく型式を判別することはできなかった。その他のＳＢ－１から出土した土器の多くは胎土が219の土器と近似する。このことから、ＳＢ－１出土の縄文土器は早期末葉に位置づけられる可能性が高い。

222は確認調査時に調査区の北端部から出土した土器である。北裏Ｃ式と考えられ、縄文時代中期初頭～前葉に位置づけられる。

(2) 石器（図100・101）

223～249が水掛渡Ｄ古墳群で出土した石器[2]である。

223～225はＳＢ－１から出土した。３点の石器はいずれも遺構の南西部の床面からの出土である。223はガラス質黒色安山岩製の石鏃で、凹基無頸鏃に分類できる。224は石鏃の未製品と考えられ、石材は流紋岩である。225は流紋岩の剥片である。

226～228はＳＦ－３から出土した石器である。いずれも、流紋岩製の凹基無頸鏃である。226は完形であるが、227と228は一部を欠損していた。

229～232は４号墳の覆土から、233は６号墳の周溝から、234～236は７号墳の周溝や墓道から、237と238は12号墳の覆土から、239～243は表土除去中に出土した石鏃である。229と237は珪質頁岩、230と231・233・240は黒曜石、232・239と242は流紋岩製である。234はチャート、235は石英、236と241はホルンフェルス、238はデイサイト、243は黒色緻密デイサイト製である。

上述した石鏃は凹基無形鏃が主流を占めるが、223・226・236・239～241のように幅と長さに差がないものと、227・229・230・233のように長さが勝るものがある。石鏃の中で目を引くのは243である。これはいわゆる「飛行機鏃」で、縄文時代晩期に位置づけられる。

244は確認調査時にＳＢ－１の付近から出土した黒曜石製の縦型石匙である。245～247は７号墳の周溝から出土した黒曜石の剥片である。246と247は表土除去中に出土した剥片で、246は流紋岩、247はガラス質黒色安山岩である。248は表土除去中に出土した流紋岩の石核である。249は打痕と磨痕が認められる。

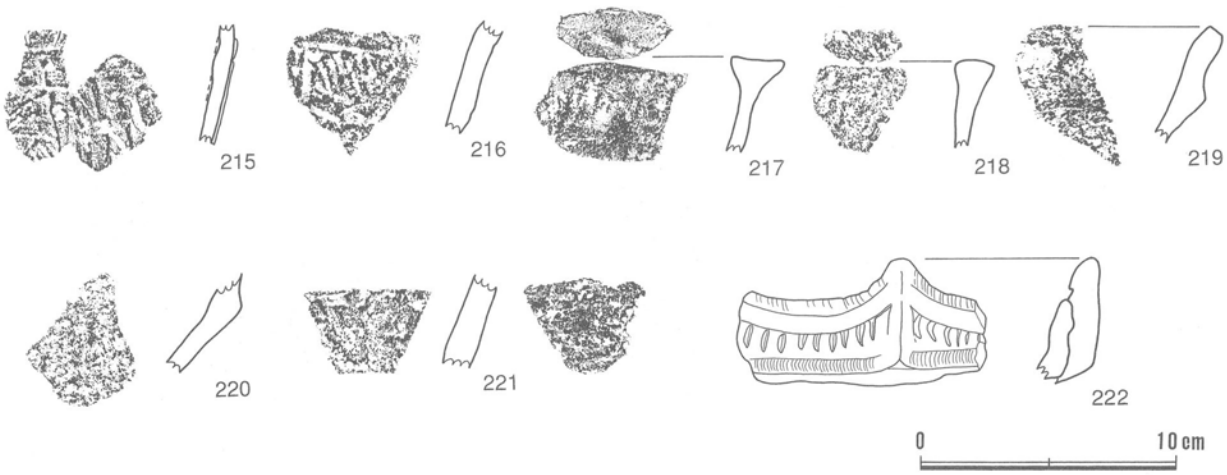


図99　水掛渡Ｄ古墳群出土の縄文土器

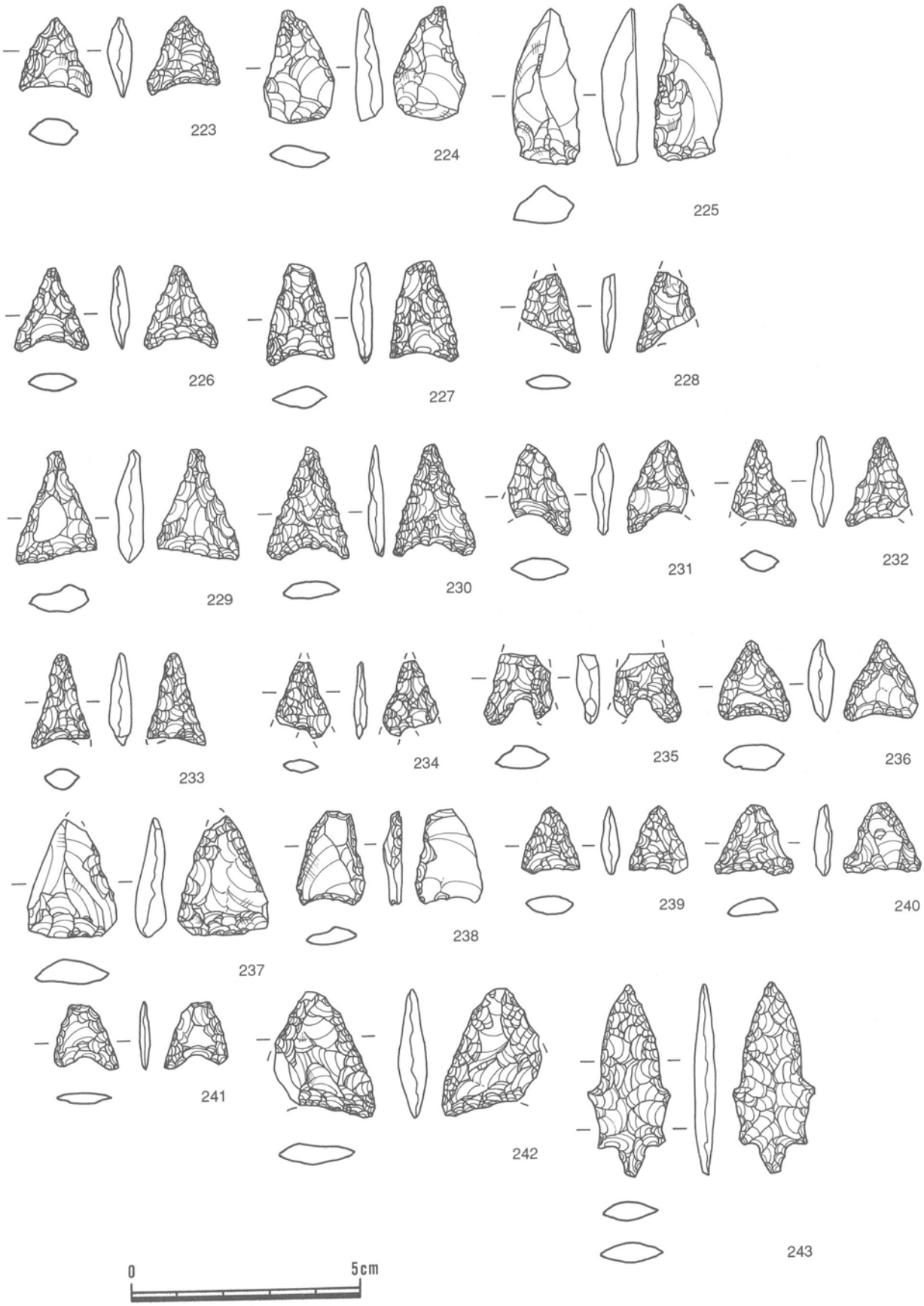


図100　水掛渡D古墳群出土の石器1

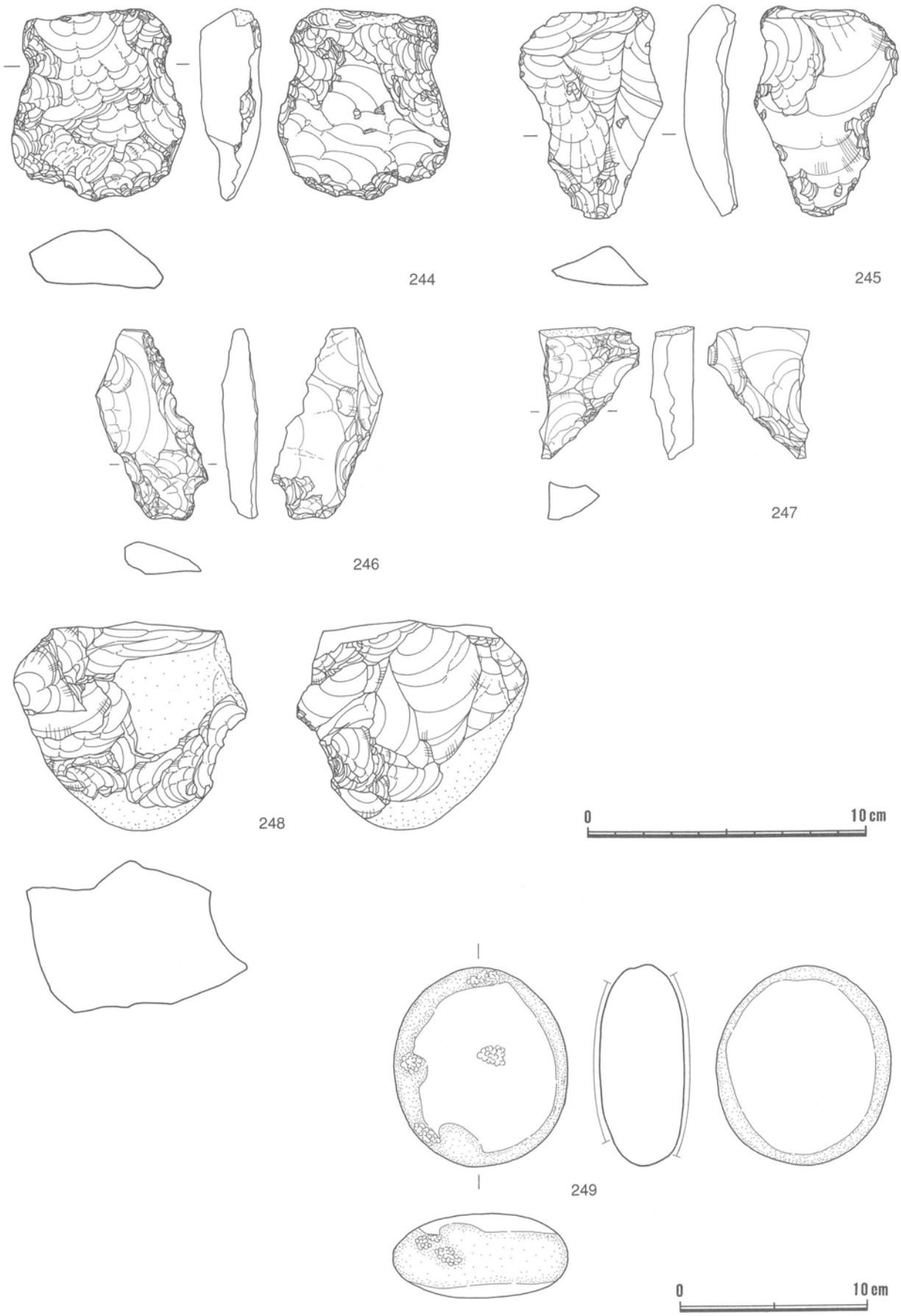


図101　水掛渡Ｄ古墳群出土の石器２

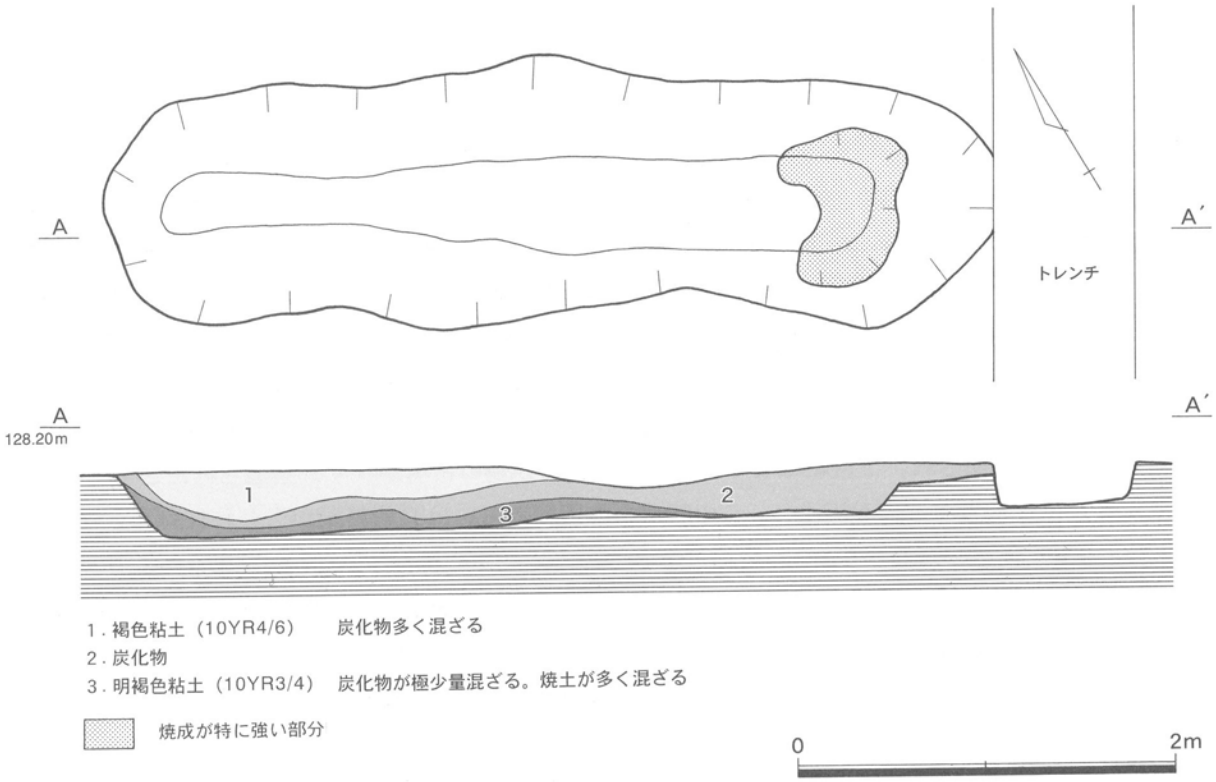


図102　ＳＦ－６実測図

４．その他の遺構

(1)　ＳＦ－６（図102）

ＳＦ－６は調査区の南西部、７号墳の約７m西側で検出した。長楕円の平面形を呈し、長軸の方位はN－57°－Wである。規模は長径4.7m、短径1.4m、検出面からの深さは0.35mである。壁面や底面は全面的に火を受けた痕跡があり、特に東側の床面では顕著であった。覆土には炭化物が多く含まれていた。これらの特徴から、ＳＦ－６は炭焼窯と考えられる。この遺構からは遺物が出土しなかったため、時期を特定することには至らなかった。ただし、同じく空港関連遺跡であるミョウガ原遺跡で検出した中世に位置づけられる炭焼窯と形状が類似する点から、ＳＦ－６も中世に位置づけられる可能性が考えられる。

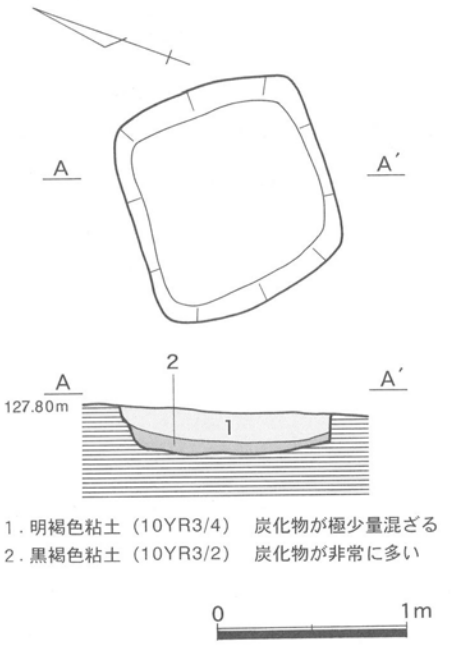


図103　ＳＦ－７実測図

(2)　ＳＦ－７（図103）

ＳＦ－７は調査区の南部、９号墳の北西0.5mに所在する遺構である。方形の平面形で、一辺1.1m、深さは0.2mである。出土遺物は無く、性格や時期を確定することはできないが、覆土の様子から縄文時代や古墳時代の遺構でないことはうかがえる。

註

1　縄文土器については渋谷昌彦氏・小崎晋氏に御教示いただいた。
2　石器は鈴木1983を参照した。

第４節　水掛渡Ｄ古墳群のまとめ

水掛渡Ｄ古墳群の本調査の結果、14基の古墳が存在することが明らかとなり、古墳以外にも縄文時代早期から中世に至るまでの遺構・遺物が検出できた。

古墳は墳形が判明した１号墳や３～９号墳、14号墳はいずれも東西より南北にやや長い円墳で、周溝が巡っていた。墳丘や周溝が遺存しなかった２号墳や10～13号墳もおそらく円墳であろう。墳丘規模は長径12.2mの３号墳が最大で、長径7.0mの４号墳が最小である。埋葬施設は14基とも横穴式石室であった。石室形態は無袖式が主流を占めるが、12号墳は疑似両袖式である。７号墳は無袖式であるが、開口部に立柱石を持つタイプである。遺物は須恵器や鉄器が出土した。出土遺物からこの古墳群は７世紀中葉から築造が開始され、７世紀末までの短期間の内に14基の古墳が次々に築造されたと考えられる。９号墳では８世紀初頭の遺物が出土し、この時期まで追葬あるいは墓前祭祀が行われていたと考えられる。また、墓道と周溝のつながりから、古墳群を３つのグループに区分することができる。まず、一つが３号墳と２号墳・４号墳のグループで、１号墳もこのグループであろう。２つ目が８号墳と９号墳・10号墳・13号墳のグループで、５号墳もここに属する可能性がある。３つ目が６号墳・７号墳・11号墳・12号墳・14号墳のグループである。水掛渡Ｄ古墳群では規模や副葬品に差が見られるが、突出した勢力の被葬者はうかがえない。短期間の内に、等質的な古墳が次々と築造されたようである。

水掛渡Ｄ古墳群では縄文時代の遺構や遺物も検出できた。遺構は住居跡１軒と陥穴２基を含む土坑５基が検出できた。陥穴２基は縄文時代早期以前のものと考えられ、残る３基の土坑と住居跡は縄文時代早期に位置づけられる。縄文時代の遺物は調査区のほぼ全面から出土した。特に、Ｅ－０、Ｅ－１、Ｆ－３、Ｇ－１、Ｇ－３グリッドは遺物が多く出土した範囲である。遺物の多くが縄文時代早期に位置づけられるが、中期の土器と晩期の石器が各１点混ざっていた。断片的な資料であるが、この地に縄文時代早期に小規模ながら集落が営まれていたことも想定できる。

表11　石鏃観察表

挿図番号	遺物番号	出土位置	全長(cm)	最大巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考	写真図版
100	223	ＳＢ－１　南西部	1.70	1.60	0.55	0.96	ガラス質安山岩	46
	224	ＳＢ－１　南西部	2.50	1.60	0.60	1.58	流紋岩	46
	226	ＳＦ－３	1.80	1.60	0.40	0.60	流紋岩	46
	227	ＳＦ－３	2.20	1.50	0.45	0.82	流紋岩	46
	228	ＳＦ－３	(1.55)	(1.10)	0.30	0.35	流紋岩	46
	229	４号墳　周溝覆土	2.45	1.75	0.60	1.90	珪質頁岩	46
	230	６号墳　周溝覆土	2.45	1.80	0.35	1.07	黒曜石	46
	231	４号墳　周溝覆土	2.00	1.35	0.50	0.80	黒曜石	46
	232	４号墳　覆土	1.95	(1.20)	0.45	0.65	流紋岩	46
	233	４号墳　墓道覆土	2.05	1.25	0.50	0.72	黒曜石	46
	234	７号墳　周溝覆土	(1.60)	(1.20)	0.30	0.45	チャート	46
	235	７号墳　墓道覆土	(1.50)	1.70	0.50	0.99	石英	46
	236	７号墳　周溝覆土	1.80	1.60	0.55	1.27	ホルンフェルス	46
	237	12号墳　墓道覆土	(2.60)	1.95	0.65	2.71	珪質頁岩	46
	238	13号墳　石室覆土	2.05	1.50	0.40	1.13	デイサイト	46
	239	表土	1.45	1.25	0.40	0.37	流紋岩	46
	240	表土	1.55	1.70	0.40	0.79	黒曜石	46
	241	表土	1.45	1.40	0.20	0.36	ホルンフェルス	46
	242	表土(Ｅ－２グリッド)	2.80	(1.70)	0.60	2.84	流紋岩	46
	243	表土(Ｈ－３グリッド)	4.20	1.80	0.50	2.33	デイサイト	46

第5章　坂口千頭ヶ谷古墳

第1節　概要

坂口千頭ヶ谷古墳は榛原郡榛原町坂口字千頭ヶ谷に所在する古墳である。平成11年度に実施した確認調査において古墳の存在が明らかとなり、平成13年度に本調査を実施した。

本調査の結果、坂口千頭ヶ谷古墳は横穴式石室を主体部として持つ古墳であることが判明した。この古墳は丘陵平坦面に立地し、東側と南側には谷が入り込み急斜面となっている。この谷を伝うと、坂口谷川の沖積平野に至ることができる。横穴式石室は開口部を南に持ち、開口部からは墓道が南側の斜面に向けて下っていく様子が確認できる。ただし、南側には谷を挟んで別の丘陵があるため、古墳から直接平野を望むことはできない。なお、調査では墳丘や周溝を検出することはできなかった。

石室内からは遺物が全く出土しなかった。遺物は周囲の覆土から須恵器の細片が1点出土したのみである。そのため、遺物から時期を確定することはできない。ただし、周辺の調査事例から、坂口千頭ヶ谷古墳は古墳時代後期のものと考えられる。

現状では単独で存在するが、本来的には群を形成していたと考えられる。調査以前は坂口千頭ヶ谷古墳の所在する場所は茶畑となっていた。おそらく、削平により他の古墳は消滅したのではなかろうか。なお、坂口千頭ヶ谷古墳は茶畑と斜面を区画する石垣に近い場所に存在したため、開墾による削平を免れたと考えられる。

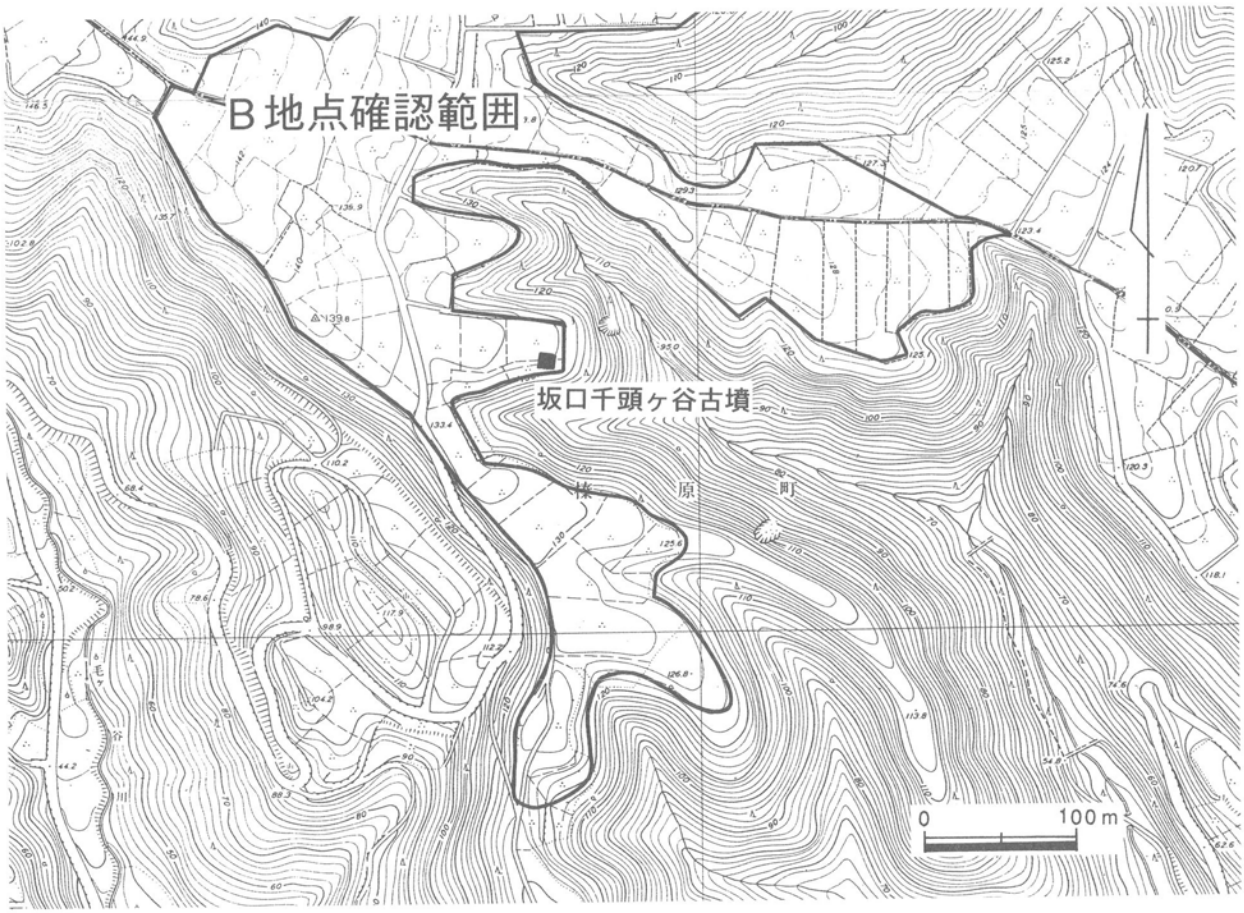


図104　坂口千頭ヶ谷古墳位置図

第2節　調査の成果

1．墳丘と外部施設

坂口千頭ヶ谷古墳は削平が著しく、墳丘や周溝は検出できなかった。もっとも、石室を覆う程度の墳丘は有していたのであろう。周溝はその痕跡すら見出せなかった事を考慮に入れると、元々存在しなかった可能性もある。あるいは、存在はしたが非常に浅いものであったのかもしれない。いずれにせよ墳丘と周溝については推測の域をでるものではない。

唯一検出できたのは主体部からのびる墓道である。墓道は幅0.5m、深さ0.1mである[1]。墓道は主体部の開口部から0.5m程直線的にのびたところで、向きを東に変え1.5m程のびている。

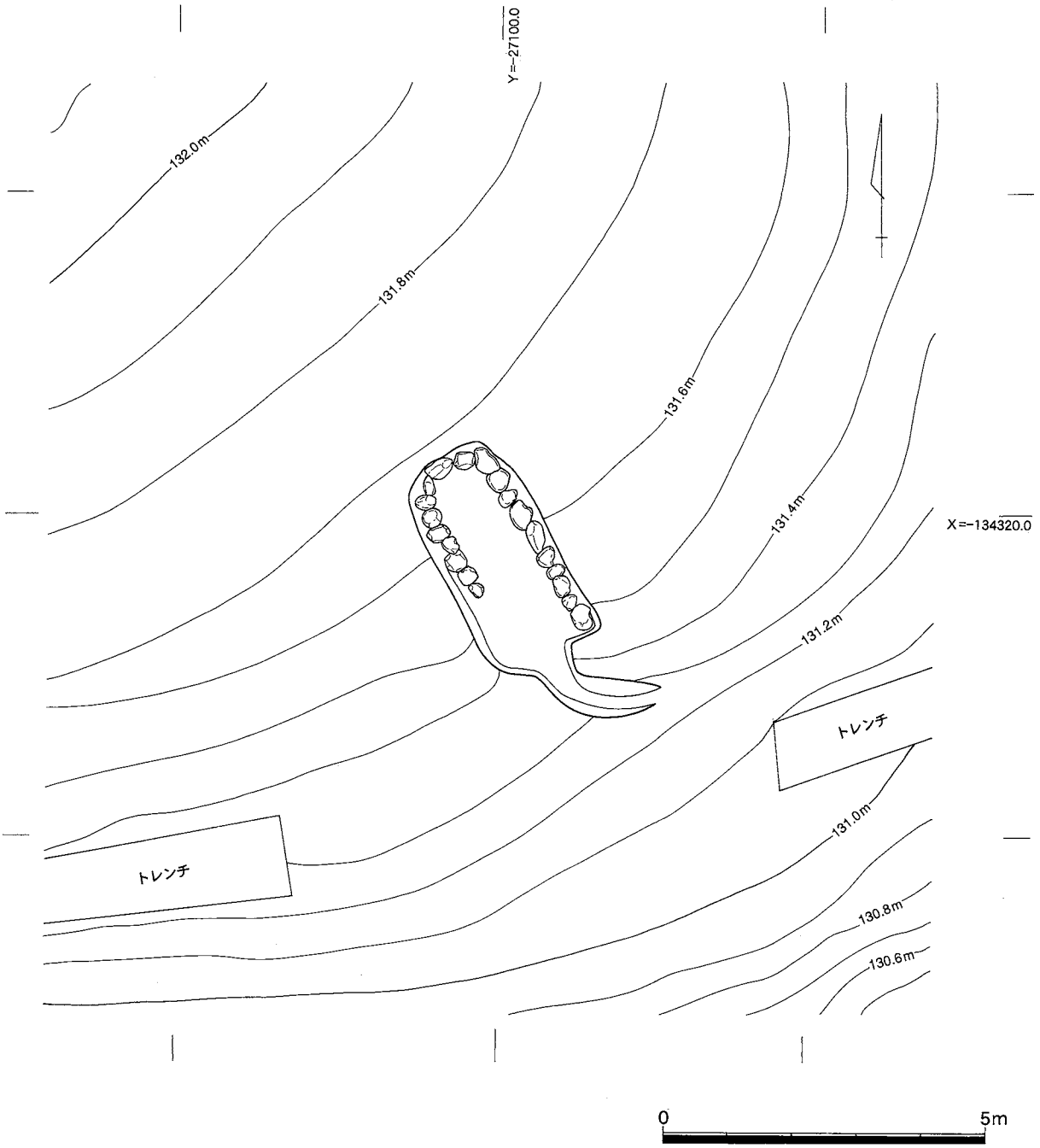


図105　坂口千頭ヶ谷古墳地形図

2．主体部

残存状況と形状　主体部はN－30°－Wに主軸を持つ横穴式石室であった。側壁と奥壁が最大３段と床面の敷石が残存するのみであった。そのため、立面構造は把握できなかったが、無袖式の石室であることは判明した。玄室平面形はいわゆる奥搾り形である。

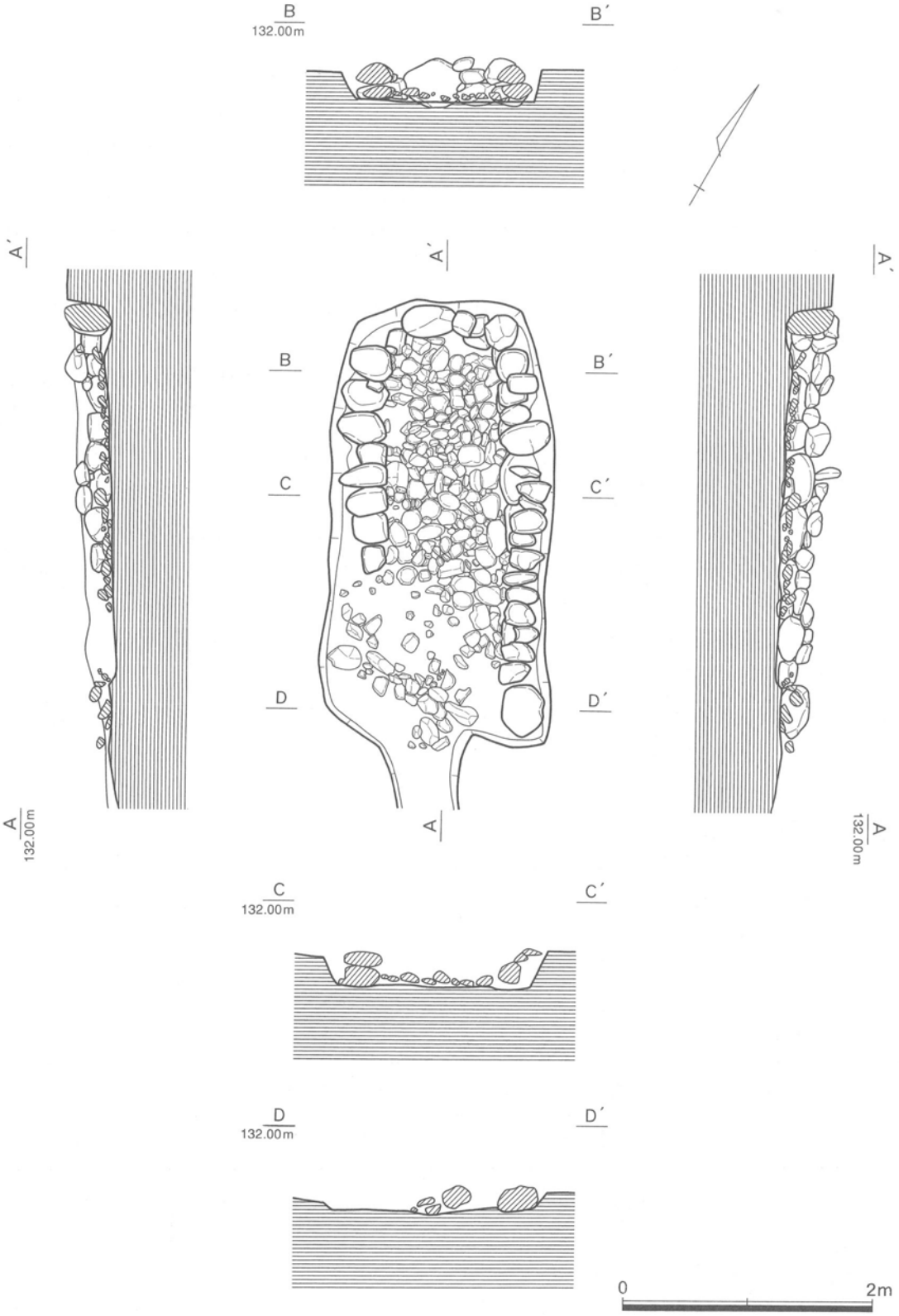


図106　坂口千頭ヶ谷古墳石室展開図

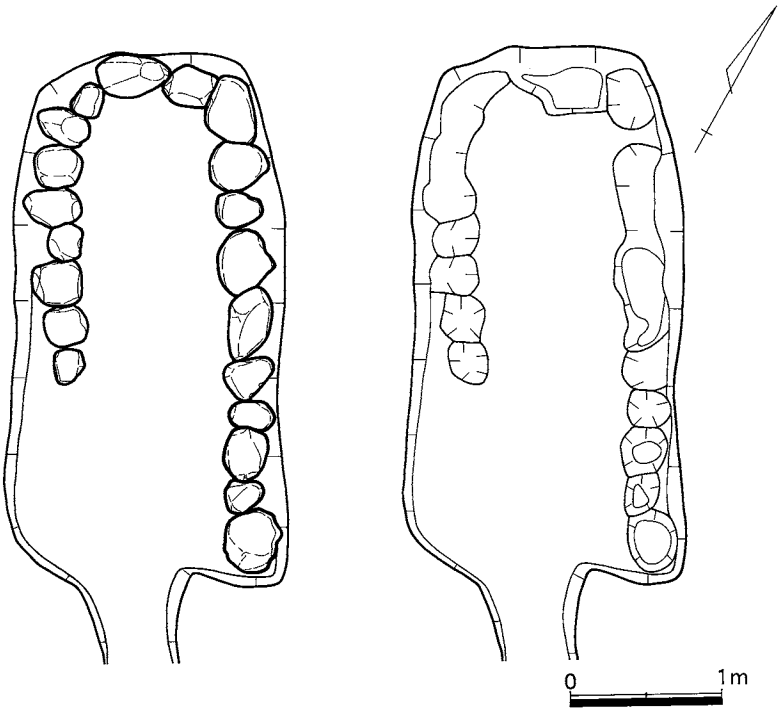


図107　坂口千頭ヶ谷古墳石室基底石と掘り方

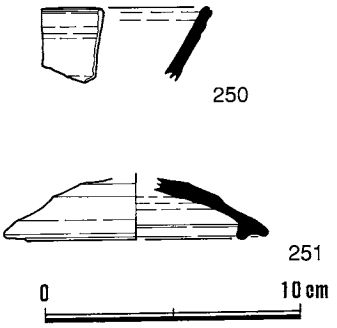


図108　坂口千頭ヶ谷古墳出土遺物

規模　石室の規模は全長3.2m、奥壁幅0.8m、最大幅1.0mである。残存する高さは奥壁付近が最も高く床面から0.3mを測る。

床面の状況　石室の床面には敷石が施される。床面には奥壁から3.2m地点まで石材が存在するが、敷石があるのは2.7m地点までである。開口部側の石材は閉塞石の一部である。敷石に使用される石材は５～30cm程度の円礫である。一部に角礫が混ざるが、いずれも自然石である。

閉塞状況　閉塞は奥壁より2.7m地点から0.7mの範囲で、最大幅10～20cmの自然石を積み上げている。ただし、残存するのはごく一部のみである。

石材と用法　使用される石材は全て自然石であり、これらは付近の地山から採取可能なものである。奥壁は最大幅約40cm、厚さ20cm程度の石材を広口横積みして使用する。この石材は残存する中では最大のものであった。この石材と側壁との間には最大幅20cm程度の礫が小口積みにされていた。

側壁は20～40cm程度の石材を使用し、基底石は横積み、２段目以上は小口積みが主体となっている。なお、左壁基底石の内、最も開口部側の石材は側壁に使用される他の石材に比べ大振りのものである。

掘り方　掘り方は長方形の平面形を呈し、全長3.5m、最大幅1.9mである。深さは最深部で0.3mである。石室の床面は水平に掘削され、墓道から傾斜が始まり下っていく。

３．遺物

調査区内から出土した遺物は１点のみで（図108－250）、石室内からは遺物が出土しなかった。石室は撹乱がほぼ床面まで達しており、開墾等による削平の際に副葬品は持ち出されたのであろう。ただし、遺物の細片すら発見出来なかった事を考慮に入れると、元来、副葬品は少なかった可能性も考えられる。

250は須恵器の坏身であるが、細片であるため詳細は不明である。焼成は良好で、灰色を呈する。251は確認調査時に坂口千頭ヶ谷古墳の北西約200mから出土した須恵器の坏蓋である。口径8.2cm、残存高2.4cmで、返りを有する。焼成は良好で灰白色を呈する。この坏蓋はＴＫ46型式併行期に位置づけられ、７世紀第３四半期に時期を求めることができる。

註

1　古墳の計測方法は第４章２節と同様の計測方法である。また、遺物についても第４章と同じ文献を参照した。

第3節　坂口千頭ヶ谷古墳のまとめ

坂口千頭ヶ谷古墳は上部の削平が著しいため墳丘や外部施設は残存せず、詳細をうかがうことはできなかった。埋葬施設として採用されていたのは無袖式の横穴式石室である。石室は墳丘と同様に上部を削平されていたため、立面構造の把握には至らなかった。玄室の平面形態はいわゆる奥搾り形で、床面には敷石が施されていた。石室の形態は水掛渡D古墳群の主な古墳と大きな違いは見られない。規模は全長3.2mで小型の石室と言える。

坂口千頭ヶ谷古墳では石室内から遺物が全く出土せず、調査区内においても須恵器の破片が1点出土したのみであった。そのため、築造時期や追葬時期を確定することはできないが、水掛渡D古墳群の例や周囲の事例から判断すると、坂口千頭ヶ谷古墳は7世紀代のものと推測される。

B地点の確認調査では千頭ヶ谷古墳の周囲や、隣接する丘陵支脈上に古墳は発見できなかった。ただし、地元の方の話からはこの周囲に古墳が存在していたことが推測される。周辺遺跡の事例を見ると、古墳群を形成することが一般的であることから坂口千頭ヶ谷古墳も本来的には群を成していたものと考えられる。そのほとんど全てが開墾等により削平され消滅したが、坂口千頭ヶ谷古墳は茶畑と斜面を区画する石垣の近辺に所在したため破壊を免れたのであろう。

表12　坂口千頭ヶ谷古墳計測表

古墳名	墳形	墳丘規模		主体部						主体部の出土遺物	周溝・墓道の出土遺物
		南北(m)	東西(m)	石室形態	主軸方位	全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	最大幅(m)		
坂口千頭ヶ谷	－	－	－	無袖式	N－30°－W	3.2	－	0.8	1.0	－	－

表13　坂口千頭ヶ谷古墳遺物観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	器径(cm)	備考	写真図版
108	250	表土	須恵器	坏	7.5Y 6/1(灰色)	－	(2.9)	－	口縁部のみ残存	－
	251	確認トレンチ	須恵器	坏蓋	N 7/0(灰白色)	(8.2)	(2.4)	(10.4)	1/4残存	－

御陣場古墳遠景（北西から）

D地点確認調査の状況

第６章　御陣場古墳・権現様御陣場遺跡

第１節　概要

御陣場古墳・権現様御陣場遺跡は空港関連遺跡のＤ地点にあたる。権現様御陣場遺跡は島田市と榛原郡榛原町双方にまたがる遺跡である。権現様御陣場遺跡の榛原町側の一角に御陣場古墳が所在する。Ｄ地点の確認調査は平成11年度から平成13年度まで行った。平成11年度と12年度の確認調査では、土坑等を発見したが、更なる遺構の広がりは認められなかった。平成13年度の確認調査範囲には御陣場古墳が含まれていた。調査の結果古墳の残存が明らかとなったため、同年度に本調査を実施した。

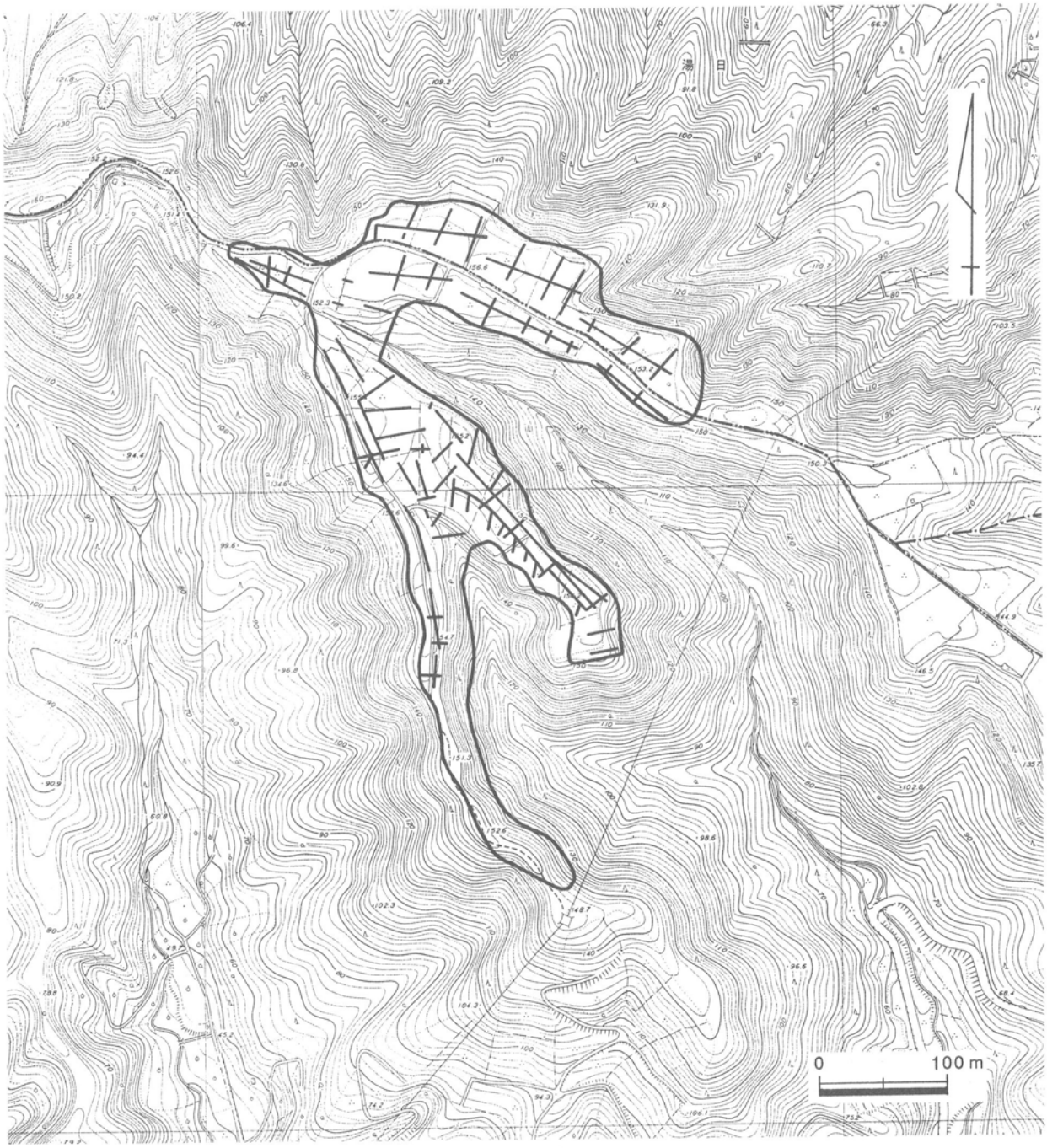


図109　Ｄ地点確認トレンチ配置図

本調査の結果、御陣場古墳は直径約８ｍの円墳で、横穴式石室を主体部に持つ古墳であることが明らかとなった。ただし、上部の削平が著しく、石室のいたる所に撹乱を受けていた。このような残存状況であるにもかかわらず、古墳からは７世紀後半代の須恵器や大刀、刀子等が出土した。また、古墳の周囲では表土除去中にも須恵器の破片が多数出土した。

権現様御陣場遺跡は調査以前、中世城郭である可能性が指摘されていた。しかし、これに関連する遺構･遺物は残念ながら発見されなかった[1]。開墾に伴う地形の改変が著しいため、中世城郭の存在の有無をうかがうこともできなかった。

権現様御陣場遺跡の調査では陥穴を３基検出し、炉穴も５基検出したが、遺物は石鏃が１点出土したのみである。これらの遺構・遺物は縄文時代のものと考えられる。

調査成果の詳細は次節以下に御陣場古墳と権現様御陣場遺跡に分けて記載する。

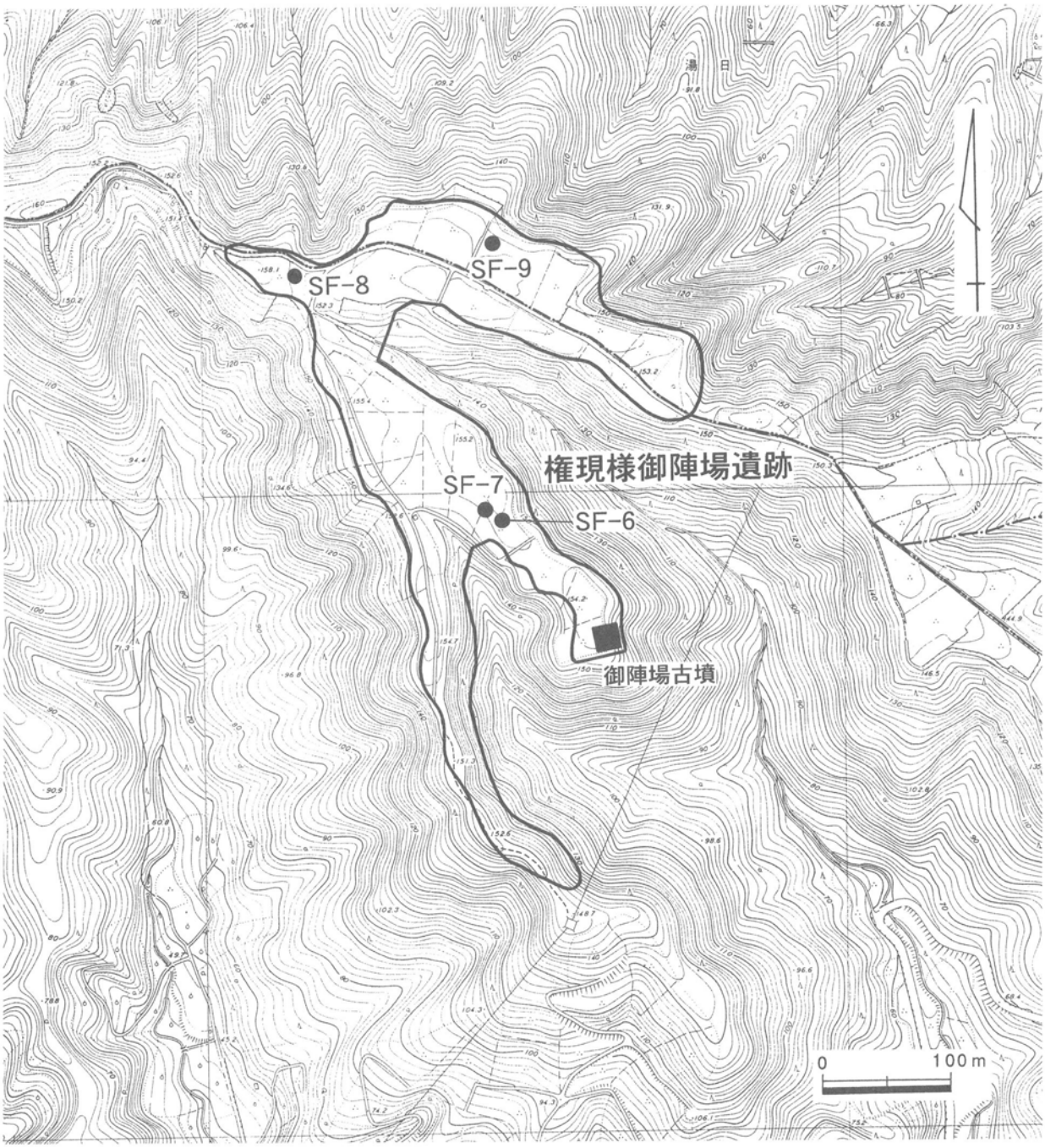


図110　御陣場古墳・権現様御陣場遺跡地形図

第２節　御陣場古墳

１．古墳の位置

御陣場古墳は榛原郡榛原町坂口字千頭ヶ谷に所在する古墳である。平成13年度に実施した確認調査の結果、遺跡が残存することが明らかになり、平成13年９月25日から11月18日まで本調査を実施した。古墳は丘陵尾根頂部の先端付近に立地し、古墳の北側と東側、南側には谷が入り込み急斜面となっている。この谷を伝うと、坂口谷川の沖積平野に至ることができる。ただし、沖積平野の間には同一丘陵の別尾根が横たわって視界を遮っているため、古墳からは平野を見下ろす事はできない。なお、御陣場古墳の周囲には炉穴と考えられる土坑が８基存在した。これらの土坑については、次節で記す。

残存状況は墳丘上部の削平が著しいものであった。周溝はかろうじて残存していたため、墳形とその規模をうかがうことはできた。埋葬施設に採用されていたのは横穴式石室であったが、これも削平を受けており、基底石と床石の一部の遺存に留まった。

２．墳丘と外部施設

墳丘は削平が著しく盛り土の様子等は不明であるが、遺存した周溝の様子から円墳であることが判明した。墳丘規模は南北約8.0m、東西6.3mである。周溝はほぼ全周し、その最大幅は1.6m、遺構検出面からの深さは0.5mである[2]。墓道は長さ3.4mに渡って検出できた。その幅は0.9mであった。

３．主体部

残存状況と形状　主体部は南側に開口する横穴式石室である。石材の抜き取りが著しく、撹乱も床面にまで達し、残存状況は悪かった。奥壁付近は南北2.0m、東西1.8m程の撹乱が深く入り、その様子をうかがう術はなかった。側壁も西側壁は全て消失しており、東側壁の基底石の一部が残存した程度である。このような残存状況であるため、石室の形状と規模を詳細に把握することはできなかった。わずかに残る側壁と掘り方から勘案すると、石室は無袖式で玄室は長方形の平面形をなしていた可能性が高い。なお、主軸方位はN－13°－Wである。

規模　石室の残存長は4.5m、最大幅は1.3mであった。おそらく、本来的には全長５m前後の石室であったのであろう。

床面の状態　床面は南北2.9m、東西1.0mの範囲に敷石が施されていることが確認できた。敷石には最大幅30～40cm、厚さ10cm前後の偏平な円礫と直径５cm程度の円礫と角礫が併用される。なお、大きめの石材は左側壁寄りに並べられている。

閉塞状況　石室開口部付近には長さ1.1m、幅0.7mの範囲に渡って最大径20～40cm程度の８個の円礫が存在した。これらは閉塞石の一部であると考えられる。おそらく、同程度の大きさの石材を積み上げて閉塞となしていたのであろう。

石材と用法　石室を構成する石材は全て自然石であった。奥壁についてはその痕跡が一切無く、どの様な石材が使用されていたか不明である。ただし、調査地点の傍らにはこの石室から抜き取ったとされる最大幅0.8m程度の石材があり、これが奥壁の一部であった可能性がある。この石材が奥壁であるならば、同様の石材を数個積み上げて奥壁としていたのであろう。なお、この石材は自然石である。側壁をみると、残存する石材は最大幅40cm前後、厚さ20～30cm程度のやや偏平な円礫である。側壁の基底石は広口横積みされている様子が確認できた。床面の敷石と閉塞石については先述した通りである。

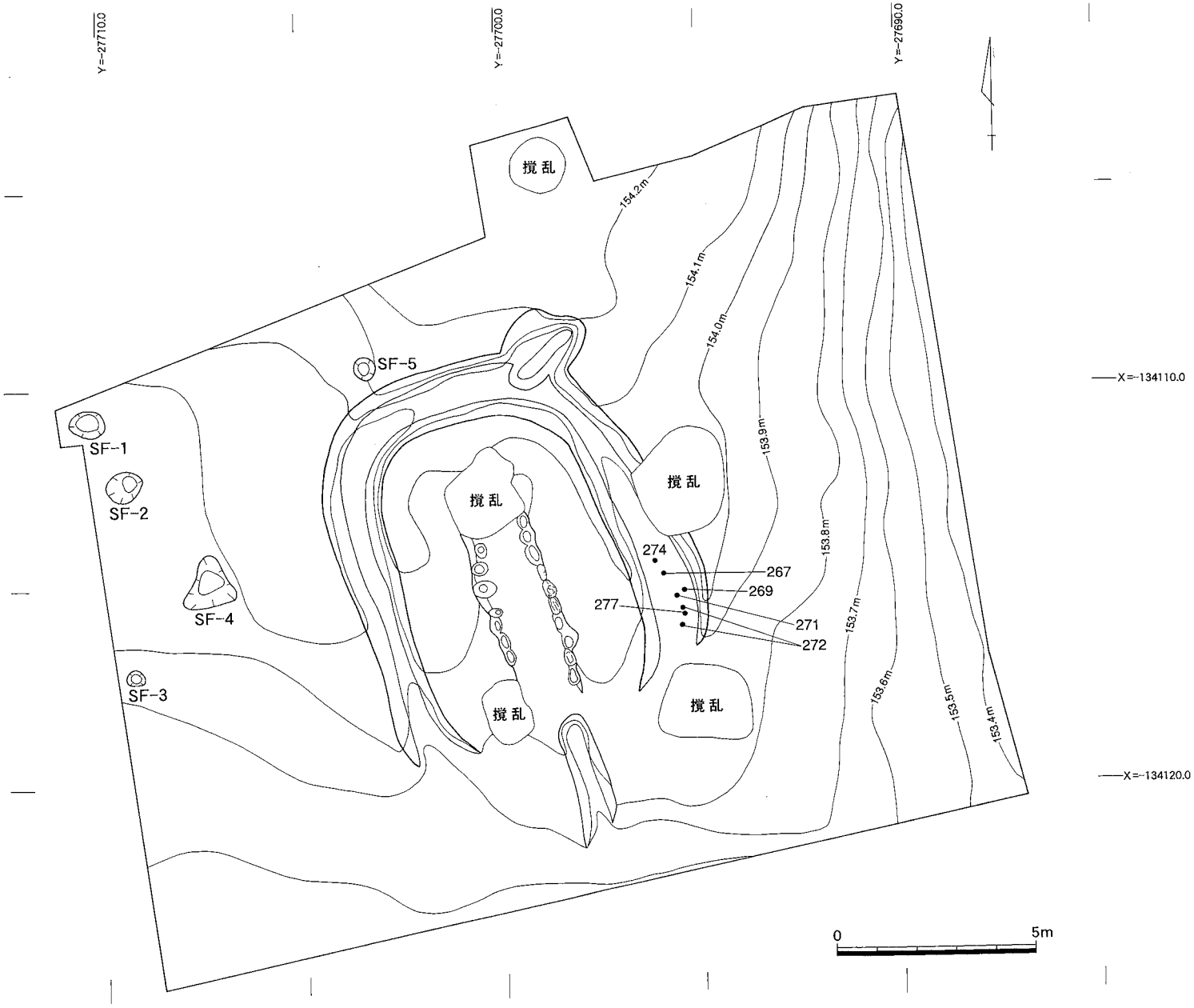


図111　御陣場古墳墳丘図

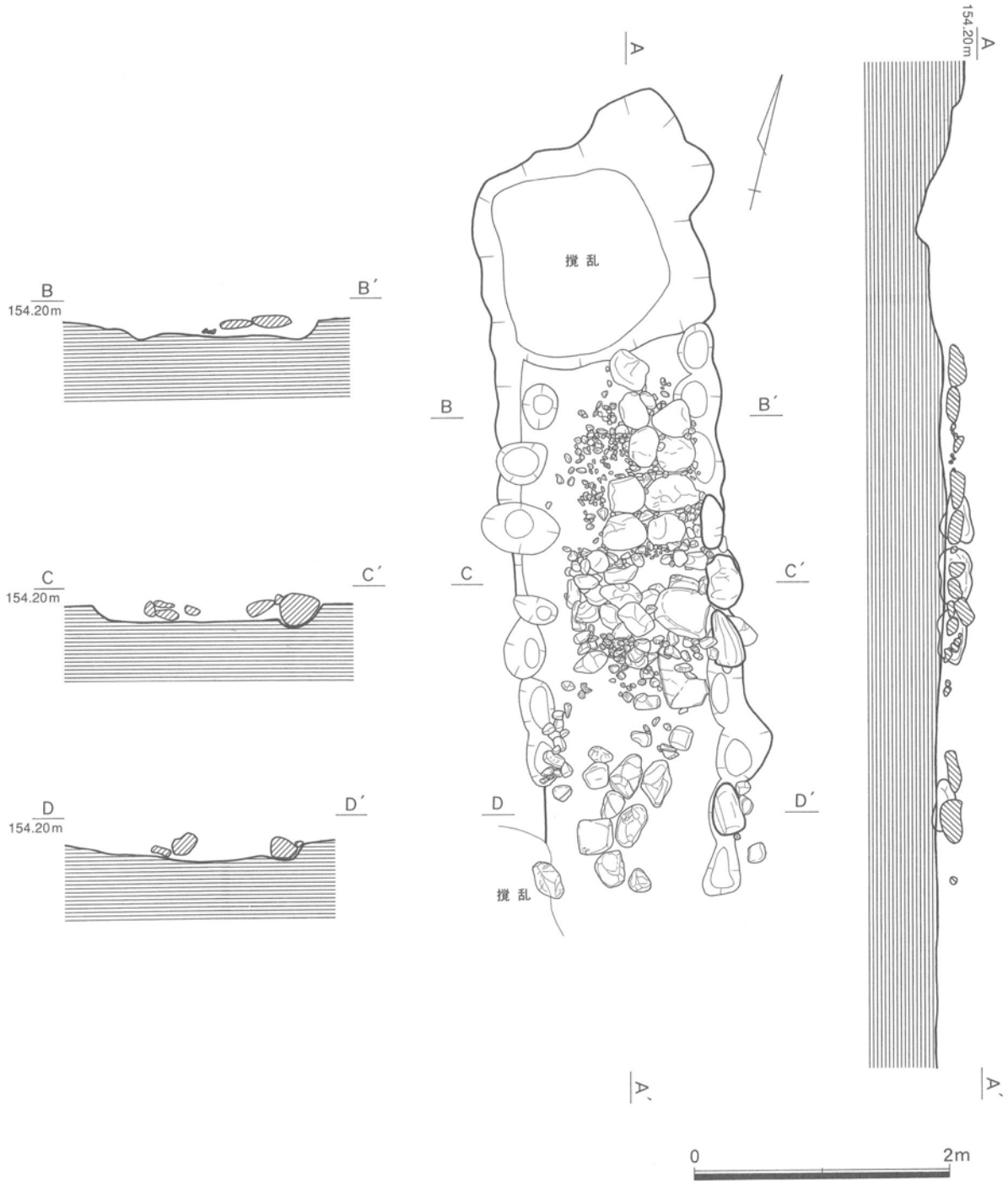


図112　御陣場古墳石室展開図

掘り方　掘り方の規模は残存長4.5m、最大幅2.0mである。削平と撹乱が著しく、全容を明らかにはできないが、全長は5.0～5.5m程度であったと考えられる。

4．遺物

(1)　遺物の出土状況（図114）

御陣場古墳では石室内と周溝および墓道の覆土から遺物が出土した。石室内から出土したのは須恵器と鉄器であり、周溝と墓道から出土したのは須恵器である。まず、石室内の遺物出土状況を見ると、石室内開口部に近い、敷石が施されない部分から須恵器が集中して出土したことが特徴的である。これら

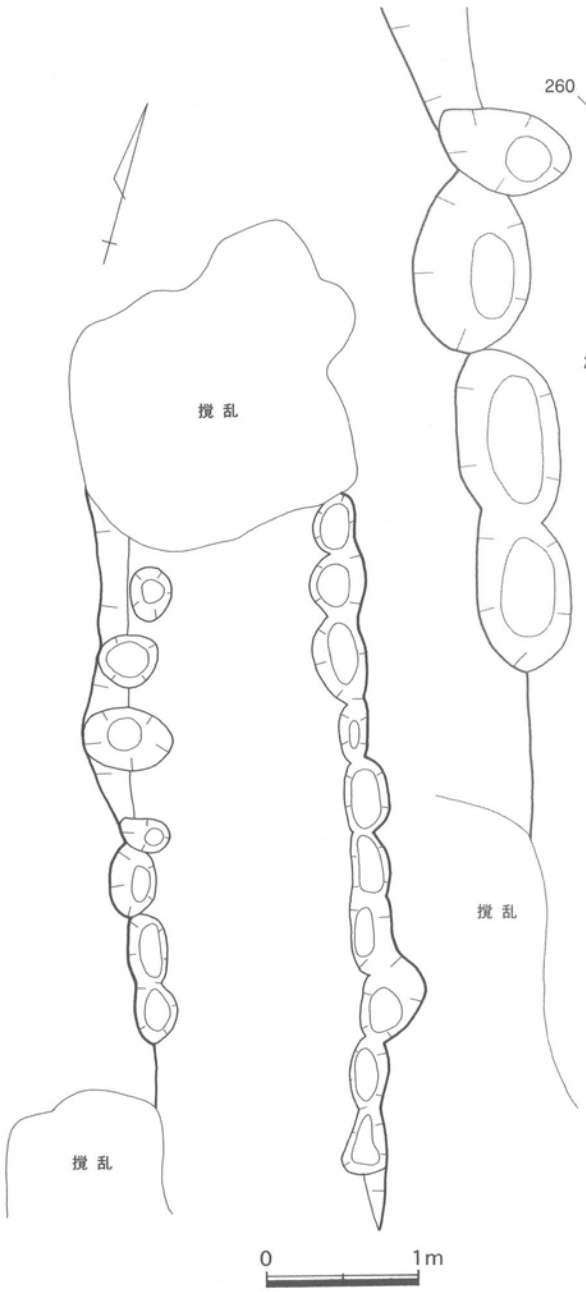


図113　御陣場古墳石室掘り方

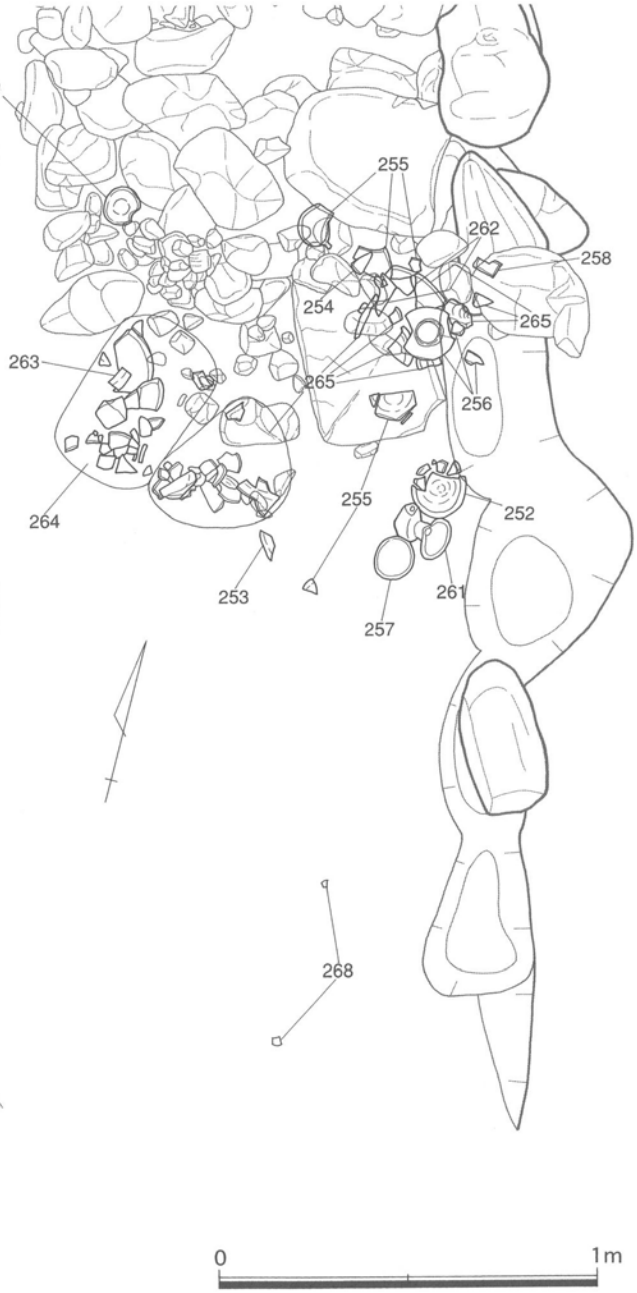


図114　御陣場古墳石室内遺物出土状況

は底面からの出土であった。出土したのはいずれも須恵器で（図115）、坏蓋が２点、坏身が６点、蓋が１点、瓿が１点、長頸瓶が２点、盤が１点、脚付盤が１点である。この中には、石室内外の撹乱土から出土した破片と接合するものもあり、耕作等の影響を免れることができなかったものもあるが、おおよその元位置は留めているようである。

石室の覆土からは鉄器も出土したが、残存状況も悪く全容が把握できるものはなかった。鉄刀が１点、刀子が３点、鉄鏃が１点、両頭金具が１点存在したことを知るのみである（図116）。

遺物は周溝や墓道からも出土した。出土したのは全て須恵器である（図116）。周溝は西側、北側では遺物の出土はほとんど無かったが、東側からは集中した。ここから出土したのは267の坏蓋、269と271・272の坏身、274の小型短頸壷、277の長頸瓶である。これらの遺物は覆土と表土の境からの出土であり、２次的な移動を受けているものであった。墓道から出土したのは266と268の坏蓋と275の瓿、276の長頸瓶である。これらも元位置を留めるものではなかった。

(2) 出土遺物

石室内出土の須恵器　石室内から出土した須恵器は図115に図示した14点である。252と253は返りと摘みを持つ坏蓋で、床面から出土した。252は口径12.0cm、器径14.8cm、器高3.7cmである。253は口径11.5cm、器径14.9cm、器高3.1cmである。共に口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形に近い状態であった。焼成は良好で灰白色を呈する。252は外面全体に薄く自然釉が付着する。

254～259の６点は坏身である。254～257は高台を有するタイプである。254は全体の３/４程度の残存で、他の３点はほぼ完形に復原できた。４点とも焼成は良好で灰白色を呈し、口縁部内面には一条の沈線が巡っていた。調整はいずれも外面底部には丁寧な回転ヘラケズリが行われ、それ以外は横ナデであった。高台は貼り付けられた後に横ナデが行われている。高台を見ると若干の差異がある。254と255は他の２点に比べ高台が高く、その長さは1.2cmである。254や255は一般的にみられる須恵器の高台を有する坏身とは異なった印象を受ける形状で、金属器模倣のものである可能性もある[3]。なお、257は底部が高台より突き出ている。大きさも254と255がやや大きく、254が口径14.0cm、器高5.6cm、255が口径13.9cm、器高5.3cmである。256は口径12.7cm、器高4.6cm、257は口径11.8cm、器高4.4cmである。

258は高台や受部を持たない坏身で、口縁部の１/３程度が欠損していた。口径11.8cm、器高4.5cmである。焼成はやや悪く、灰白色を呈する。調整は内面と外面体部は横ナデが行われる。回転ヘラケズリが行われるのは底部と体部の境だけで、底部はヘラ調整が行われるのみである。

259は受部を有する坏身であるが、受部の立ち上がりは非常に短いものであった。残存したのは全体の約１/３であるが、全容は把握できた。口径9.3cm、器高2.7cmである。焼成はやや悪く、灰白色を呈する。調整は内面と外面の体部を横ナデし、底部は回転ヘラケズリであるが、底部中央はヘラ切り未調整である。なお、蓋の可能性も考えられる土器である。

260はほぼ完形の状態で出土した蓋である。口径9.2cm、器高3.9cmで、頂部には径1.7cmの摘みを持つ。焼成は良好で灰白色を呈する。調整は外面体部と内面、摘みが横ナデであり、外面天井部は同芯円の回転ヘラケズリが行われている。

261の甕は完形品であった。焼成は良好で灰白色を呈する。全体に自然釉が付着し、特に口縁部内面と体部外面には厚く付着する。体部中央には沈線と櫛描き列点文が見られる。器高11.8cmである。調整は外面底部が回転ヘラケズリされる以外は横ナデである。

262と263は同一個体であると考えられるフラスコ形長頸瓶である。残存は共に一部のみであり、両者を接合することはできなかった。焼成は良好で灰白色を呈し、全体に自然釉が付着していた。

264は盤である。底部を欠き、残存したのは全体の約２/３である。口径27.0cm、残存高4.8cmである。調整は内面と外面の体部は横ナデ、外面底部は回転ヘラケズリが行われる。焼成は良好で灰白色を呈する。

265は脚付盤で、全体の３/４が残存した。口径25.7cm、器高9.9cmである。脚部には長方形の透かし孔を６箇所に持つことが明らかであり、その配置状況をみると、元来は７箇所に透かしを有していたと考えられる。調整は内外面全て、横ナデが行われている。内面底部には擦痕が見られる。

石室外出土の須恵器　御陣場古墳では周溝や墓道、表土除去時にも須恵器が出土した（図116）。266～268は坏蓋である。266は墓道から出土した返りを持つ坏蓋で、全体の３/４程度が残存した。器径14.0cm、口径11.2cm、器高4.0cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。

267は周溝上から出土した坏蓋である。残存したのは全体の１/３程度であり、図上で復原を行った。受部を有し、口径は13.4cmと推定される。調整は外面頂部が回転ヘラケズリ、その他は横ナデである。外面には全体的に自然釉が付着する。

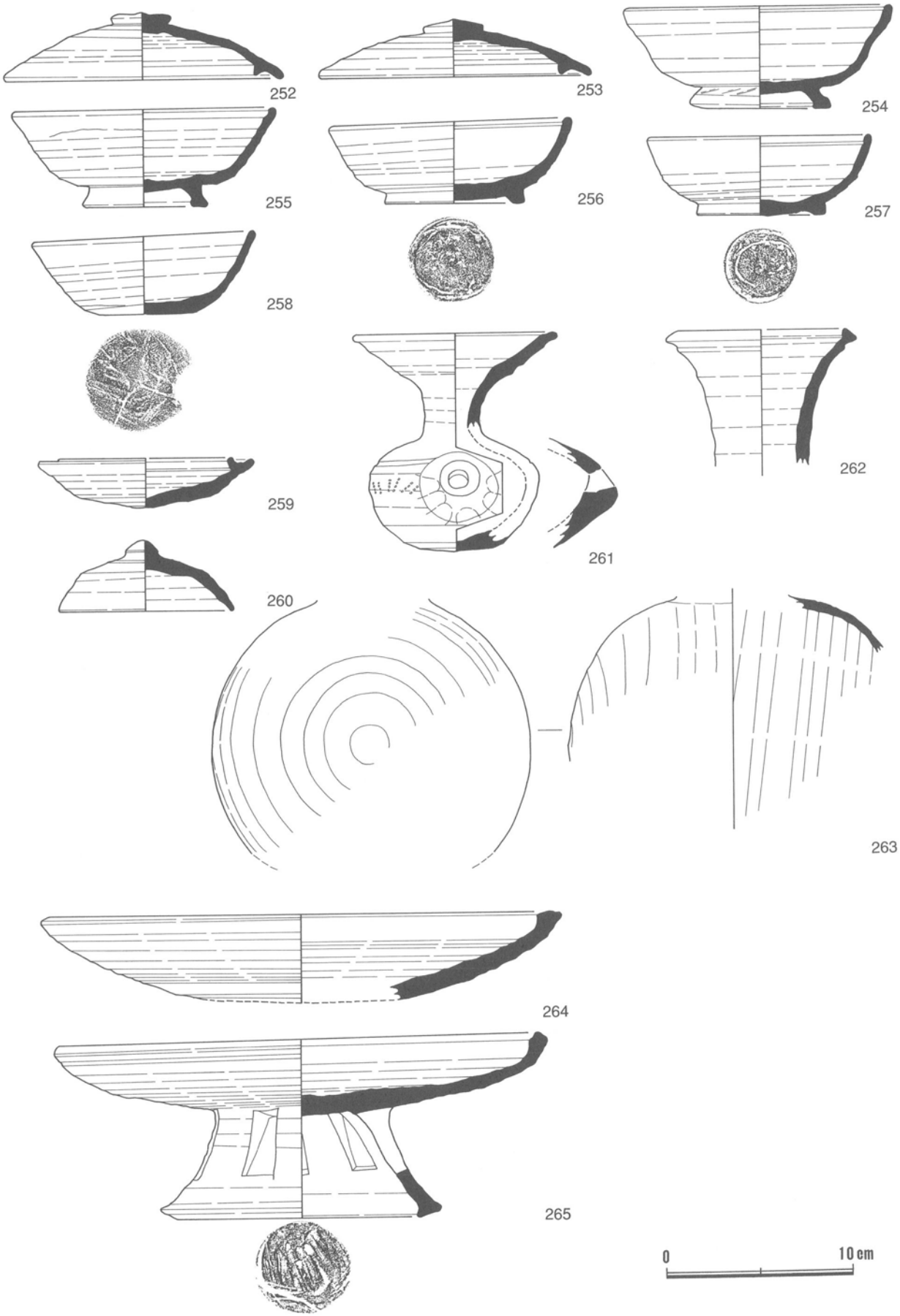


図115　御陣場古墳出土遺物１

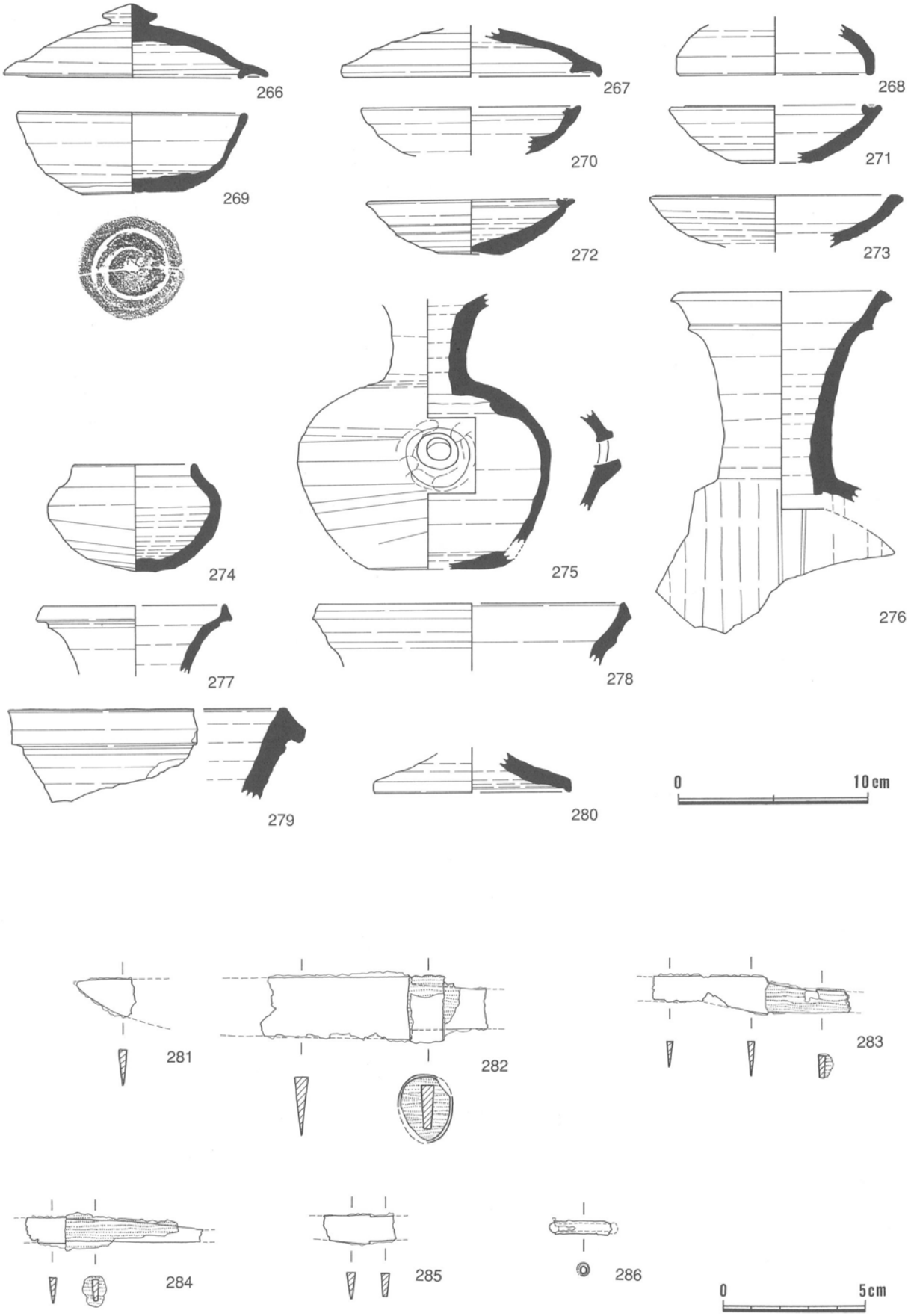


図116　御陣場古墳出土遺物２

268は墓道から出土した坏蓋である。体部から口縁部の一部の残存に留まり、図上で復原を行った。口径10.0cmと推定される。焼成は良好で、暗青灰色を呈する。横ナデによる調整が行われている。なお、ここでは蓋として扱ったが、身である可能性も否定できない。

269～272は坏身である。269は周溝上から出土した。残存状況は口縁部の一部を欠損するのみであった。口径11.8cm、器高4.4cm、焼成は良好で黄灰色を呈する外面体部と内面は横ナデにより調整が行われ、外面の体部と底部の境のみ回転ヘラケズリが行われる。なお、底部中央は未調整である。

270～272は受部を有する坏身で、いずれも周溝の覆土と表土の境から出土した。受部の立ち上がりは短く、著しく内傾する。焼成は３点とも悪いものであった。

270は口縁部の一部が残存したのみで、口径9.9cm、器径11.6cmと推定される。灰色を呈し、残存箇所の調整は横ナデが行われていることが確認できる。

271は全体の１/２程度の残存で、口径9.4cm、器径11.2cm、残存高3.0cmである。外面体部と内面は横ナデによる調整が行われ、外面底部は回転ヘラケズリが行われる。内面が灰黄色、外面が灰色である。

272はほぼ完形に復原でき、内面が灰白色で外面が灰色を呈する。口径9.2cm、器径11.0cm、器高2.8cmである。調整は外面体部から内面が横ナデ、底部が回転ヘラケズリ、底部の中央は未調整である。

273は撹乱から出土した高坏の坏部で、脚部は残存しなかった。口径12.3cm、坏部の残存高は2.7cmである。焼成はやや悪く、内面が灰黄色、外面が灰色を呈する。残存箇所では横ナデによる調整が全面に行われている。

274は周溝上から出土した小型短頸壷である。欠損は見られず、完形品である。焼成は良好で灰白色を呈する。口径6.2cm、器高5.6cm、体部最大径は9.1cmである。外面底部を回転ヘラケズリ、底部中央は未調整である以外は横ナデによる調整が行われている。

275は墓道付近の撹乱から出土した甕である。口縁部が欠損し、体部の約２/３が残存した。残存高は14.6cm、胴部の最大径は14.0cmである。調整は体部の下半を回転ヘラケズリ、上部から頸部が横ナデである。また、注口の先端部はヘラにより、削られている。底部は残存が悪いため、調整について知る事はできないが、ヘラケズリはされていないようである。焼成は悪く、灰黄色を呈す。

276は墓道から出土したフラスコ形長頸瓶で、口縁部と体部の一部が残存した。口径は10.5cmで、口縁部の内面と体部の外面には自然釉が付着する。調整は頸部から口縁部にかけては内外面共に横ナデが行われる。焼成は良好で灰白色を呈する。

277は周溝覆土と表土の境から出土した長頸瓶の口縁部の破片である。口径は9.5cmで、内外面に自然釉が付着する。調整は残存する部位では横ナデが行われている。焼成は良好で、灰白色を呈する。

278は短頸壷と考えられ、表土除去中に出土した。口縁部が一部残存した程度であるが、口径は16.1cmと推定される。調整は横ナデが行われており、焼成は良好で灰白色を呈する。内外面には自然釉が付着する。

279は甕の口縁部と考えられ、推定される口径は36cmである。焼成は良好で灰白色を呈する。この土器は表土除去中に出土したもので、表土からはこの他にも甕の胴部の細片が多数出土した。279を含めて同一個体の甕であると考えられるが、欠損する部位も多く復原することはできなかった。

280は高坏の脚部の裾と考えられる。表土除去時に出土したものである。焼成は良好で黄灰色を呈する。残存箇所には横ナデが行われていることが確認できる。

石室内出土の鉄器　石室内からは大刀や刀子、両頭金具も出土した。281と282は大刀の破片である。281と282は同一個体の可能性もあるが、確証を得ることはできないのでその可能性を指摘するに留めたい。なお、282には鉏が残存し、鉏と茎の一部には木質が付着する。

283～285は刀子の破片である。283は残存長6.3cmで、この内刀身部が1.5cm、茎が4.8cmである。284は残存長7.1cm、この内刀身部が4.1cm、茎が3.0cmである。283と284は茎に木質が残存した。285は残存長2.6cmである。刀身部は1.7cm、茎が0.9cmの残存である。

286は両頭金具である。残存は悪く、頭部は一方だけの残存である。残存長は2.2cm、筒金の径は0.5cmである。筒金の端部には花弁が４葉存在した痕跡が残る。

５．小結

御陣場古墳は削平が著しく、撹乱も至る所に存在したが、おおよその内容を把握することはできた。墳丘は南北にやや長い円墳で長径8.0mの規模である。埋葬施設は横穴式石室で、残存長4.5m、最大幅1.3mである。遺物は石室内からは須恵器や大刀、刀子が出土した。須恵器はＴＫ48形式併行期に位置づけられる。また、遺物は石室外からも出土したが、これらの大半が耕作時の撹乱により石室内の遺物がかき出され、二次的に移動したものと考えられる。石室外から出土したのは須恵器で、ＴＫ46～ＴＫ48形式併行期に位置づけられる。出土遺物から御陣場古墳は７世紀後半に埋葬行為が行われていることが言える。ただし、これが初葬のものか追葬に伴うものであるのかは不明である。なお、開墾の際に多数の遺物が出土した事が伝えられており、本来的にはより多くの副葬品を有していたことがうかがえる。

註

1　加藤理文氏・溝口彰啓氏に現地指導して頂いた。
2　古墳の計測方法については第４章第２節と同様である。また、須恵器についても同様である。
3　後藤健一氏の御教示による。なお、御陣場古墳出土の須恵器はいずれも湖西産であることを合わせて御教示頂いた。

表14　御陣場古墳古墳計測表

古墳名	墳形	墳丘規模		主体部						主体部の出土遺物	周溝・墓道の出土遺物
		南北(m)	東西(m)	石室形態	主軸方位	全長(m)	玄室長(m)	奥壁幅(m)	最大幅(m)		
御陣場古墳	円墳	8.0	6.3	(無袖式)	N－13°－W	(4.5)	－	－	(1.3)	須恵器(坏蓋２・坏身６・蓋１・甕１・長頸瓶２・盤１・脚付盤１)・大刀１・刀子３・両頭金具１	須恵器(坏蓋３・坏身４・高坏２・甕１・小型短頸壷１・長頸瓶２・短頸壷１・甕１)

表15　御陣場古墳出土鉄器観察表

両頭金具観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ(cm)		径(cm)			備考	写真図版
			残存	心棒	頸部	心棒	筒金		
116	286	石室覆土	2.2	1.8	0.35	0.25	0.45	－	－

大刀・刀子観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ(cm)		最大巾(cm)		備考	写真図版
			残存長	刀身部	刀身部	茎		
116	281	石室覆土	2.1	2.1	1.3	－	－	－
	282	石室覆土	8.1	2.7	2.2	1.6	錆残存、木質付着	48
	283	石室覆土	7.1	4.1	1.3	1.0	木質付着	48
	284	石室覆土	6.2	1.5	0.9	0.8	木質付着	48
	285	石室覆土	2.5	0.7	1.0	0.9	－	48

表16　御陣場古墳出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種別	器種	色調	口径(cm)	器高(cm)	器径(cm)	備考	写真図版
115	252	石室内	須恵器	坏蓋	5Y7/1(灰白色)	12.0	3.7	14.8	7/8残存、摘み部径3.2cm、自然釉付着	49
	253	石室内	須恵器	坏蓋	2.5Y7/1(灰白色)	11.5	3.1	14.9	3/5残存、摘み部径3.3cm	50
	254	石室内	須恵器	坏身	5Y7/1(灰白色)	14.0	5.6	14.0	3/4残存、高台部径6.6cm	49
	255	石室内	須恵器	坏身	5Y7/1(灰白色)	13.9	5.3	13.9	ほぼ完形品、台部径6.3cm	49
	256	石室内	須恵器	坏身	7.5Y7/1(灰白色)	12.7	4.6	12.7	3/4残存、台部径7.3cm	49
	257	石室内	須恵器	坏身	5Y7/1(灰白色)	11.8	4.4	11.8	完形品、高台部径6.7cm	49
	258	石室内	須恵器	坏身	5Y6/1(灰色) 底部外面：5Y8/1(灰白色)	11.8	4.5	11.8	2/3残存、底径5.2cm	49
	259	石室内	須恵器	坏身	5Y7/1(灰白色)	(9.3)	(2.7)	(11.6)	2/3残存	49
	260	石室内	須恵器	蓋	5Y7/1(灰白色)	9.2	3.9	9.2	ほぼ完形品、摘み部径1.7cm、自然釉付着	50
	261	石室内	須恵器	甕	5Y7/1(灰白色)	10.6	11.8	10.6	完形品、自然釉が厚く付着	49
	262	石室内	須恵器	長頸瓶	5Y7/1(灰白色)	(8.9)	(7.3)	－	頸部と口縁部の1/4残存、263と同一個体	－
	263	石室内	須恵器	長頸瓶	2.5Y7/1(灰白色)	－	(13.6)	－	胴部の一部のみ残存	48
	264	石室内	須恵器	盤	5Y6/1(灰色)	27.0	(4.8)	27.0	体部と口縁部の2/3残存	49
	265	石室内	須恵器	脚付盤	5Y7/1(灰白色)	25.7	9.9	25.7	3/4残存	49
116	266	墓道	須恵器	坏蓋	7.5Y7/1(灰白色)	11.2	4.0	14.0	2/3残存、摘み部径2.9cm	50
	267	周溝覆土上	須恵器	坏蓋	5Y8/1(灰白色)	(13.4)	(2.5)	(13.5)	1/3残存	－
	268	墓道	須恵器	坏蓋	5B7/1(明青灰色)	(10.0)	(2.7)	(10.0)	1/5残存	－
	269	周溝覆土上	須恵器	坏身	2.5Y6/1(黄灰色) 底部外面：10Y8/1(灰白色)	11.8	(4.4)	11.8	7/8残存、底径5.2cm	50
	270	周溝覆土上	須恵器	坏身	N4/0(灰色)	(9.9)	(2.5)	(11.6)	1/8残存	－
	271	周溝覆土上	須恵器	坏身	外面：N5/Y(黄味の灰色) 内面：2.5Y7/2(灰黄色)	(9.4)	(3.0)	(11.2)	1/2残存	50
	272	周溝覆土上	須恵器	坏身	外面：5Y6/1(灰色) 内面：2.5Y7/1(灰白色)	(9.2)	(2.8)	(11.0)	3/4残存	50
	273	撹乱	須恵器	高坏	外面：5Y6/1(灰色) 内面：2.5Y6/2(灰黄色)	12.3	(2.7)	－	坏部の1/2残存	－
	274	周溝覆土上	須恵器	小型短頸壺	5Y7/1(灰白色)	6.2	5.6	9.1	完形品	50
	275	撹乱	須恵器	甕	2.5Y7/2(灰黄色)	－	(14.6)	13.3	2/3残存、頸部径3.8cm	50
	276	墓道	須恵器	長頸壺	N7/(Y)(黄味の灰白色)	(10.5)	(18.1)	－	1/3残存、沈線状	50
	277	周溝覆土上	須恵器	長頸瓶	7.5Y7/1(灰白色)	(9.5)	(3.6)	－	1/4残存	－
	278	表土	須恵器	短頸壺	外面：7.5Y7/1(灰白色) 内面：7.5Y8/1(灰白色)	(16.1)	(3.3)	－	口縁部の1/6残存	－
	279	表土	須恵器	甕	5Y7/1(灰白色)	－	－	－	口縁部のみ残存	－
	280	表土	須恵器	高坏	2.5Y6/1(黄灰色)	－	(2.1)	10.2	脚部の1/6残存	－

第３節　権現様御陣場遺跡

権現様御陣場遺跡では９基の土坑が検出された。この内、ＳＦ－１～５の５基は御陣場古墳の本調査に伴い検出したものである。残る４基は平成11年度と平成12年度の確認調査の際に検出したものである。ところで、権現様御陣場遺跡は丘陵尾根上の遺跡であるが、東側から深い谷が入り組む地形である。この谷により遺跡の立地する丘陵は遺跡西端部を軸として、北側の尾根、中央の尾根、南側の尾根の三つに分岐している。ＳＦ－１～ＳＦ－７は中央の尾根、ＳＦ－８は三つの尾根の結合部、ＳＦ－９は北側の尾根上に所在する。

１．ＳＦ－１（図117）

ＳＦ－１は御陣場古墳の本調査時に検出した土坑で、御陣場古墳の北西約6.5mに所在する。不正形な円形の平面形を呈し、東西0.8m、南北0.7m、深さは0.15mの規模である。覆土には炭化物と焼土が混ざり、壁面は焼成を受けていた。遺物は全く出土していないため、時期を特定することはできない。

２．ＳＦ－２（図117）

ＳＦ－２も御陣場古墳の本調査時に検出した土坑である。位置は御陣場古墳の約4.5m西、ＳＦ－１の約1.0m南である。規模は東西0.9m、南北0.8mで東西方向にわずかに長い楕円形の平面形である。検出面からの深さは0.35mであるが、底面は東側に寄っており、西側の立ち上がりは他の三方にくらべ緩やかである。覆土には焼土と炭化物が多く混ざり、壁面は焼成を受けていた。この土坑も出土遺物が無かった。

３．ＳＦ－３（図117）

ＳＦ－３も御陣場古墳の本調査に伴い検出した土坑である。ＳＦ－３の位置は御陣場古墳の西方約5.5mで、北方約4.2mにはＳＦ－２が所在する。ほぼ円形の平面形を呈し、直径は0.4mである。深さは検出面から測り0.15mと浅いものであった。覆土には焼土と炭化物が混ざり、壁面にはわずかであるが火を受けた痕跡がみられた。出土遺物は一切無かった。

４．ＳＦ－４（図117）

ＳＦ－４も先に記した３基の土坑と同様に御陣場古墳の本調査時に併せて調査した遺構である。検出した位置は、御陣場古墳の約2.6m西である。この遺構の北西約2.3mにはＳＦ－２が、南西約2.0mにはＳＦ－３が所在する。ＳＦ－４は不正形な平面形で、規模は南北1.3m、東西1.4mである。深さは検出面から測り0.28mである。壁面の立ち上がりは北側に比べて南側が急である。覆土には焼土が含まれ、炭化物も多く混ざる。壁面には焼成を受けた痕跡が見られる。この遺構も他の土坑と同様に遺物がなにも無かった。

５．ＳＦ－５（図117）

ＳＦ－５もＳＦ－１～４と同じく、御陣場古墳の本調査時に検出した遺構である。この土坑は御陣場古墳の周溝の0.3m北側で検出した。約6.9m西にＳＦ－１が所在する。ＳＦ－５はほぼ円形の平面形を呈し、直径は0.6mである。深さは検出面から測り、0.22mである。覆土には焼土の粒子が多く混ざり、炭化物も含まれていた。出土遺物はなかった。

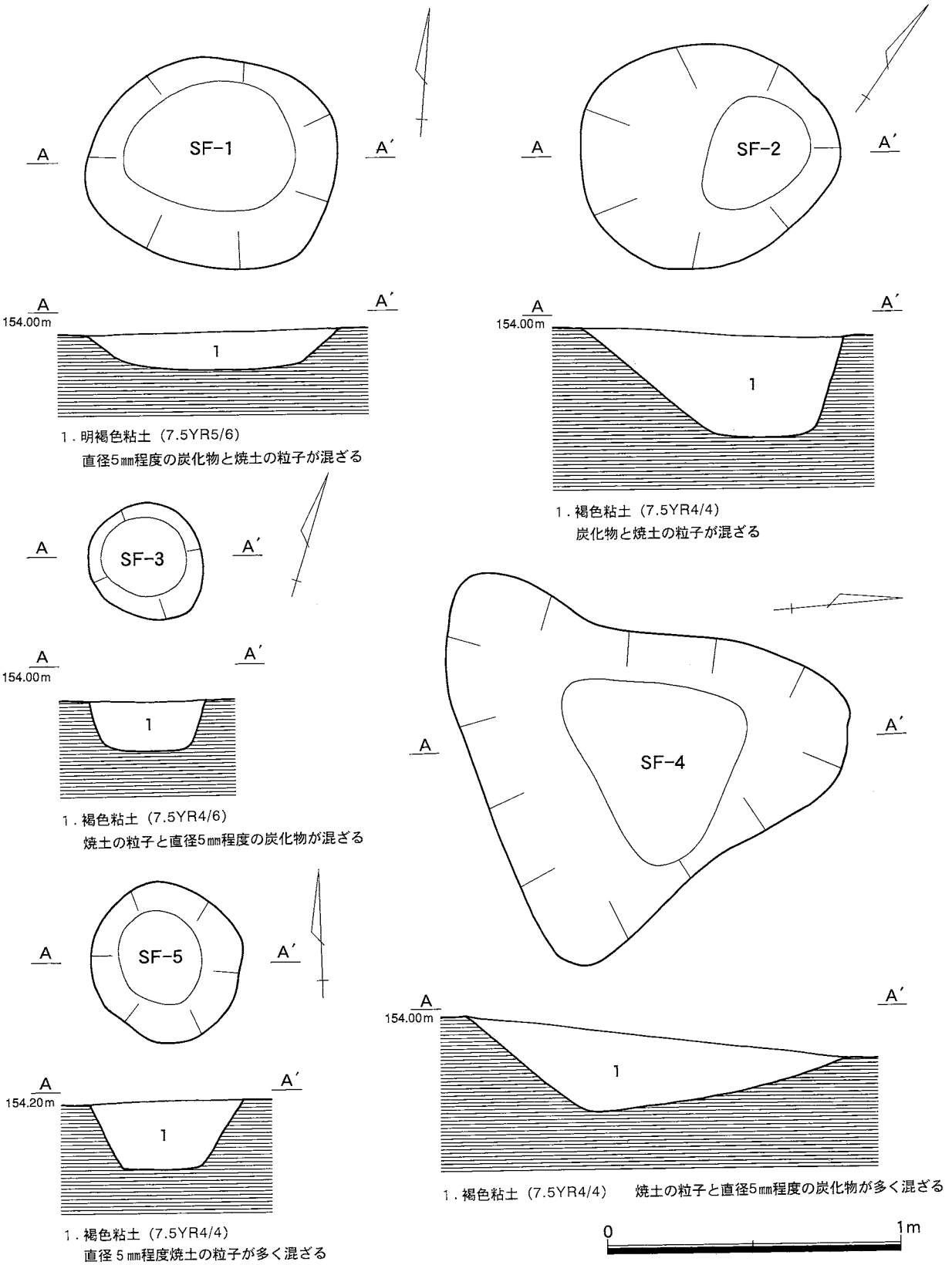
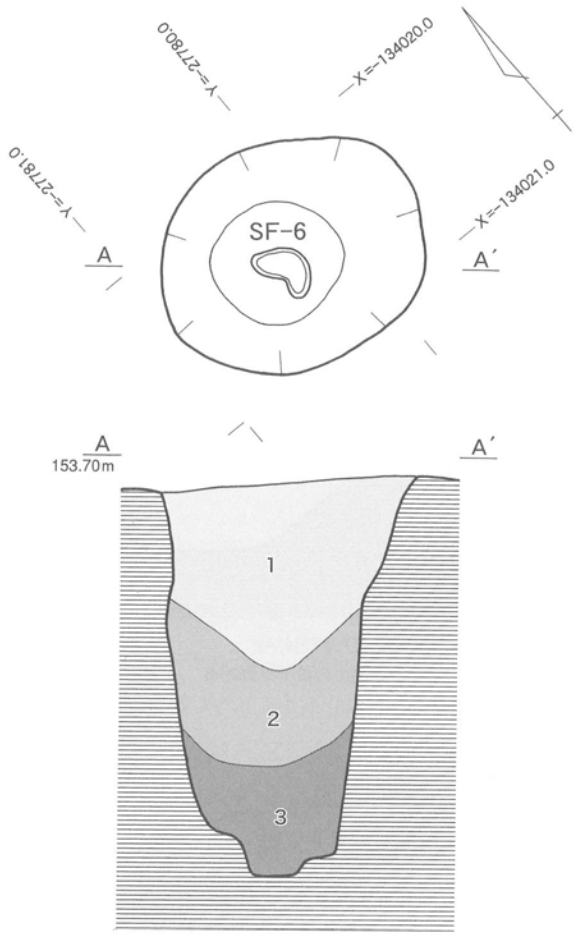
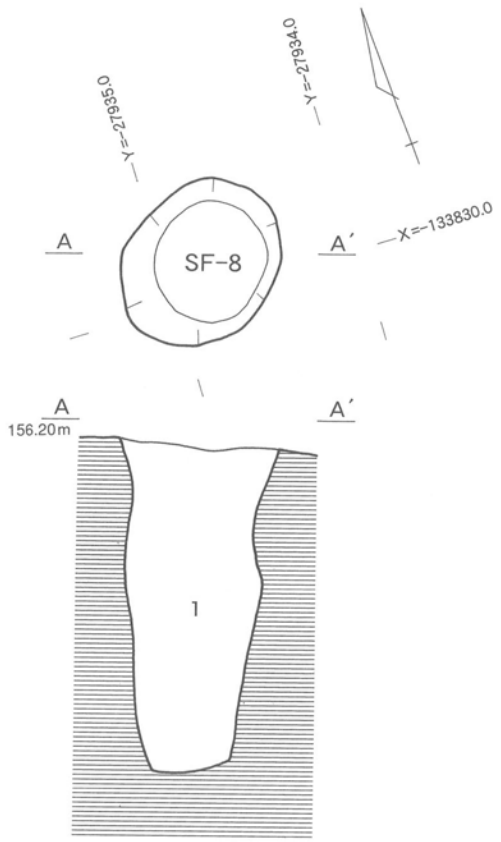
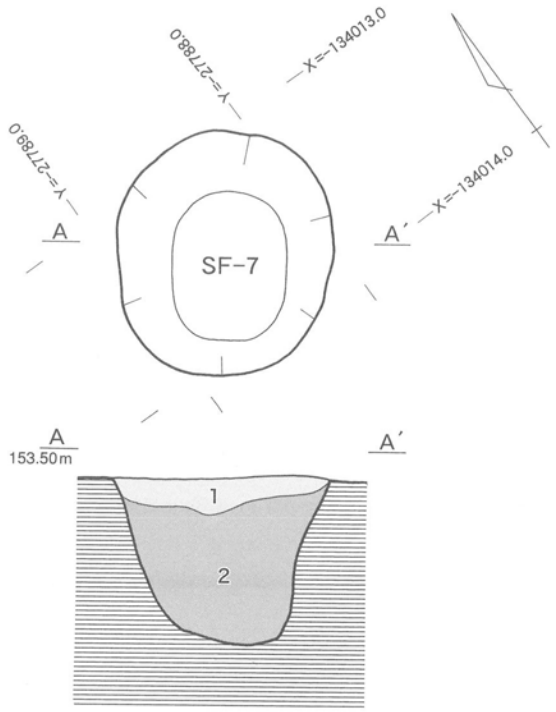


図117　ＳＦ－１～５実測図

ＳＦ－１～ＳＦ－５は炉穴の可能性が考えられる遺構である。炉穴であるならば時期を縄文時代早期に求めることができる。なお、ＳＦ－１～５の覆土は明らかに古墳の覆土とは異なるものであった。







SF-6

1. 暗褐色粘土　20～30cm程度の礫が多く混ざる
2. 黄褐色粘土　20～30cm程度の礫がわずかに混ざる
3. 黄褐色粘土　20～30cm程度の礫と炭化物がわずかに混ざる

SF-7

1. 暗褐色粘土　1～10cm程度の礫が混ざる
2. 黄褐色粘土　1～10cm程度の礫が多く混ざり、
　　1よりしまりが強い

SF-8

1. 黄褐色粘土　粘性高く、しまりやや悪い
　　1～10cm程度の礫が多く混ざる

0　2m

図118　ＳＦ－６～８実測図

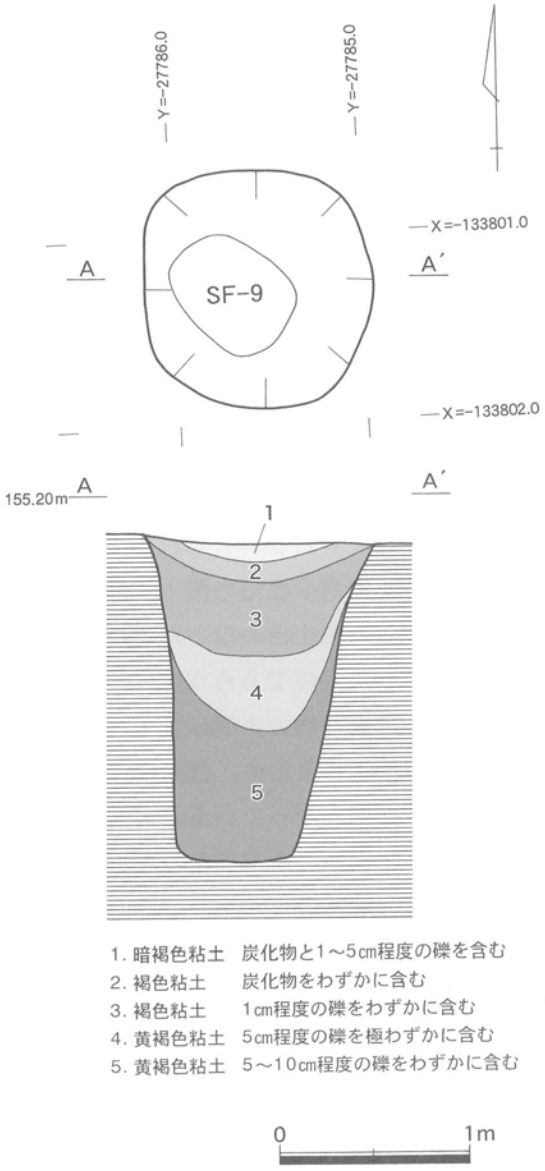


図119　ＳＦ－９実測図

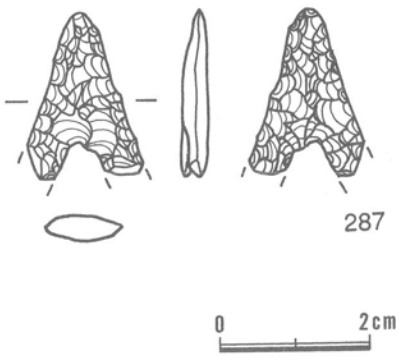


図120　御陣場古墳出土遺物

6．ＳＦ－６（図118）

ＳＦ－６は平成12年度の確認調査時に検出した遺構である。中央の尾根上に所在し、南東約110mに御陣場古墳が存在する。この遺構は陥穴と考えられる遺構で、底面には逆茂木を据えたとみられるピットを有する。その規模は東西0.9m、南北0.8m、底面までの深さは2.0mである。出土遺物は無かった。時期を特定する手がかりは無いが、覆土の様子から縄文時代以前の遺構と考えられる。

7．ＳＦ－７（図118）

ＳＦ－７はＳＦ－１の約10m北西に所在する遺構である。楕円形の平面形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.6m。深さは0.9mである。出土遺物も無く時期を判別できないが、これも縄文時代以前のものと考えられる。

8．ＳＦ－８（図118）

ＳＦ－８は権現様御陣場遺跡の最も西側で検出した遺構で、ＳＦ－７の北西約220mに所在する。楕円形の平面形を呈し、長径1.0m、短径0.8m、深さ1.8mの規模である。この遺構は陥穴と考えられる。出土遺物は無かったが、覆土の様子から縄文時代以前の遺構であろう。

9．ＳＦ－９（図119）

ＳＦ－９は陥穴と考えられる遺構で、北側の尾根の中央部付近で検出した。規模は東西1.2m、南北1.3m、深さは1.7mである。出土遺物はなかったが、縄文時代以前の遺構と考えられる。

10．権現様御陣場遺跡の出土遺物（図120）

権現様御陣場遺跡では石鏃が１点出土したのみである（287）。この石鏃は南側の尾根の確認トレンチ掘削中に表土から出土した。黒曜石製の凹基無茎鏃で、長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量は0.78ｇである。

第４節　御陣場古墳・権現様御陣場遺跡のまとめ

御陣場古墳は調査の結果、円墳で横穴式石室を埋葬施設として持つことが明らかとなった。ただし、残存状況は悪く、上部の大半が削平されていた。遺物は横穴式石室の内外から出土した。石室内からは須恵器と鉄器が、石室外からは須恵器が出土した。石室出土の須恵器は上述したような残存状況にもかかわらず、元位置を留めると考えられるものが見られた。その様子から、須恵器は石室内でも閉塞石に近い部分に置かれていたことがうかがえる。石室内の須恵器は時期を７世紀後半に求めることができるので、この時期に埋葬行為が行われていたことが言える。ただし、これが初葬に伴うものであるのか、追葬に伴うものであるのかは不明である。石室内から出土した鉄器は大刀と刀子の破片と両頭金具である。大刀の破片は２点出土したが、同一個体の可能性も考えられる。刀子は刃部と茎部が遺存する破片が３点出土した。少なくとも、御陣場古墳は大刀が１点、刀子が３点副葬されていたことは明らかである。１点のみであるが、両頭金具が出土したことから、弓も副葬されていたと考えられる。石室外では周溝や墓道の近辺から須恵器が出土した。ただし、これらはいずれも周溝や墓道の覆土ではなく、覆土と表土の境や撹乱からの出土であった。そのため、石室外から出土した須恵器のほとんどが元位置を留める物ではないと言える。おそらく、耕作時に石室内からかき出されたものであろう。

さて、御陣場古墳は舌状に張り出した尾根先端の頂部に所在し、周囲に他の古墳は見られなかった。単独立地の可能性もあるが、この時期の古墳は群を成すことが一般的であるため、御陣場古墳も本来的には群を成していたと考えられる。ただし、御陣場古墳の三方は急斜面となっているが、この斜面には古墳が存在しない。また、御陣場古墳の所在する尾根頂部は狭い平坦面がある程度なので、御陣場古墳以外に古墳が存在しても、せいぜい１～２基であったと考えられる。地元の方の話からは、御陣場古墳に隣接してもう一基の古墳が存在した可能性をうかがえ、耕作時に相当数の須恵器等の遺物が出土したようである。なお、Ｄ地点の調査対象範囲内では、御陣場古墳以外に須恵器を出土した所は無い。御陣場古墳周辺以外には、古墳は存在しなかったようである。

権現様御陣場遺跡は城郭の可能性も調査以前には指摘されていた。この度の調査では、これに関わると考えられる遺構・遺物は残念ながら発見できなかった。この種の遺構や遺物がもともと存在していたことも十分に想定できるが、後世の地形改変が著しい箇所が多々見られ、地形が旧状を留めていないこともあり、その痕跡すらうかがうこともできなかった。

権現様御陣場遺跡で検出できたのは９基の土坑である。これらの土坑は出土遺物も無いため時期を確定し難いが、覆土の様子は吉峠遺跡や水掛渡Ｄ古墳群で検出した縄文時代の遺構と似るため、縄文時代早期以前の遺構と考えられる。御陣場古墳で検出した９基の土坑の内、５基は御陣場古墳本調査の際に併せて調査を行った土坑である。この５基は壁面や底面に焼成を受けた痕跡があり、炉穴の可能性が考えられる。残る４基の内、３基は陥穴と考えられる土坑である。残る１基については性格を明らかにできなかった。御陣場古墳は三つの尾根に分岐する丘陵上の遺跡であるが、陥穴を検出したのはこの内の北側の尾根と中央の尾根である。陥落穴はいずれも稜線上にある。遺物は縄文時代の石鏃が中央の尾根から１点出土したのみである。これと、遺構の関わりについては不明であるが、縄文時代にこの丘陵で、地形を利用した狩猟が行われていたようである。

第7章　まとめ

1．縄文時代

前章まで各遺跡別に調査成果を記したが、ここでは時代別にその成果をまとめる。まず、縄文時代の遺構・遺物は吉峠遺跡と水掛渡Ｄ古墳群、御陣場古墳において検出できた。これらのなかで、主体を占めていたのは縄文時代早期のものである。主な遺構としては炉穴と竪穴住居跡、陥穴があげられる。このうち、炉穴と考えられる遺構は吉峠遺跡と御陣場遺跡で検出された。竪穴住居跡は吉峠遺跡と水掛渡Ｄ古墳群で検出した。もっとも、吉峠遺跡の場合は遺構に伴う遺物は無く、周囲の状況からの推測であるため、確実視することはできない。水掛渡Ｄ古墳群においても、１軒が検出したのみである。この住居跡内とその周辺では細片であるが、縄文土器を採取できた。特に、１号墳においては、覆土に縄文土器片や剥片が多数混入した他、焼土のブロックも含まれていたことから、この古墳は縄文時代の遺構を破壊して築かれた可能性が考えられる。水掛渡Ｄ古墳群においてはＳＢ－１の周辺に数軒の住居が存在したと推測される。なお、縄文時代早期の竪穴住居跡は、島田市内では大鳥遺跡と屋敷原遺跡でそれぞれ２軒検出されているのみで、榛原町では未だ見つかっていない[1]。

遺物は縄文土器や石器が出土した。ただし、土器は風化が進む細片であった。かろうじて型式を判別できた数点の土器の中には、鵜ヶ島台式や粕畑式、神ノ木台式と考えられるものがあった。そのため、時期は縄文時代早期後葉～末葉に位置づけられる。なお、他の細片も胎土等がこれらと類似するものである。石器は石鏃が最も多かった。石鏃の素材としては流紋岩が多く、ついで黒曜石である。

さて、これまでの大井川右岸の丘陵一帯では、縄文時代中期における集落は多数見つかっていたが、早期に遡る遺構は数が少ない。特に、空港関連遺跡の所在する丘陵では竹林寺遺跡で縄文時代早期の遺物が出土している程度で、遺構が調査されたのは今回が初めてである。数少ない縄文時代早期の事例に新たな資料を加えることができたとともに、この丘陵で人々が生活を営んだことが明らかとなったことは大きな成果と言えよう。ただし、長期的な生活は営まれていないようである。また、この地で炉穴が検出できたことも特筆すべきことであろう。炉穴は県内では愛鷹山周辺で調査例が多いが（図121）、県中西部では点在的で、空港関連遺跡周辺では初例である。

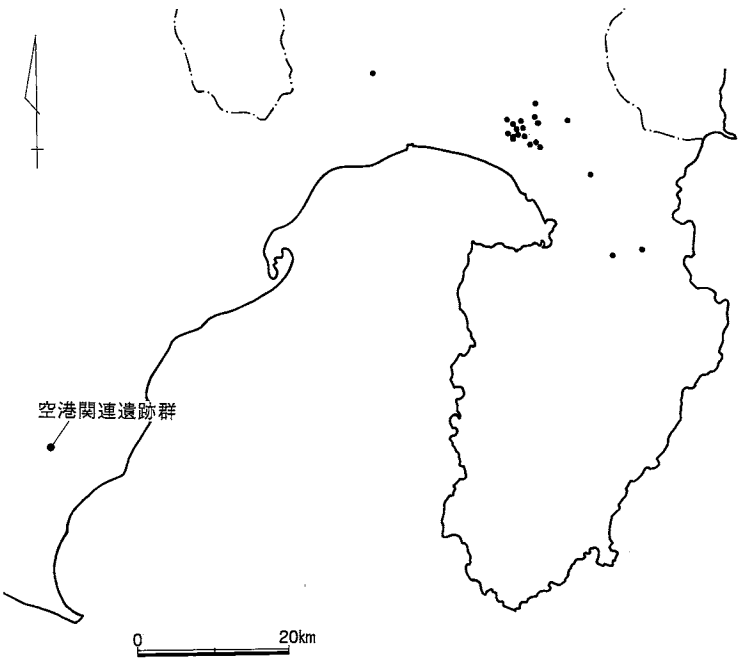


図121　主な炉穴検出遺跡分布図

なお、水掛渡Ｄ古墳群では１点のみであるが北裏Ｃ式の土器が出土し、後期に位置づけられる石鏃が１点出土するなど中期や後期の遺物も出土している。縦型石匙は神津島産の黒曜石製で、北裏Ｃ式の土器に伴うものと考えられる。しかし、同時期の遺構を確認することはできなかった。また、陥穴が水掛渡Ｄ古墳群内において２基、御陣場

古墳で３基検出できた。御陣場古墳のものは時期不明であるが、水掛渡Ｄ古墳群のものは縄文時代早期以前のもので、この丘陵で狩猟が行われていたこともうかがえる。

２．古墳時代

本報告書で報告した古墳はいずれも古墳時代後期の古墳であり、横穴式石室を主体部として持つ古墳であった。また、墳形が判明したものはいずれも円墳である。中でも、水掛渡Ｄ古墳群はまとまった資料を得ることができた。水掛渡古墳群は過去にＡ群、Ｂ群、Ｃ群が調査されている。そこで、これらとの対比を行いたい。

(1) 水掛渡古墳群の概要

水掛渡古墳群は1964年に発掘調査が行われている[2]。この調査では、Ａ群15基、Ｂ群４基の合計19基が発掘された。また、1998年にはＣ群の３基が調査されている[3]。今回、調査を実施した14基を合わせると、水掛渡古墳群全体では合計36基の古墳が調査されたことになる。大井川右岸域では最も数多くの古墳が発掘調査された古墳群である。墳形が判明するものはいずれも円墳で、埋葬施設は全て横穴式石室である。ただし、同じ水掛渡古墳群として扱われる各支群の内容を見ると、それぞれ差異が見いだせる。そこで、各支群について概観したうえで、対比を行うことにする。

Ａ群について　Ａ群は標高約80m地点に所在し、15基の古墳で形成される。７世紀前葉～後葉に築造が行われ、築造のピークは７世紀中葉である。横穴式石室は６号墳、７号墳、９号墳、10号墳が擬似両袖式で、その他は無袖式である。玄室は胴張形の平面形態を採用する傾向にある。石室規模を見ると全長7.7mの３号墳が最大で、全長1.9mの４号墳が最小である。幅は最大の３号墳でも1.3mで、いずれも

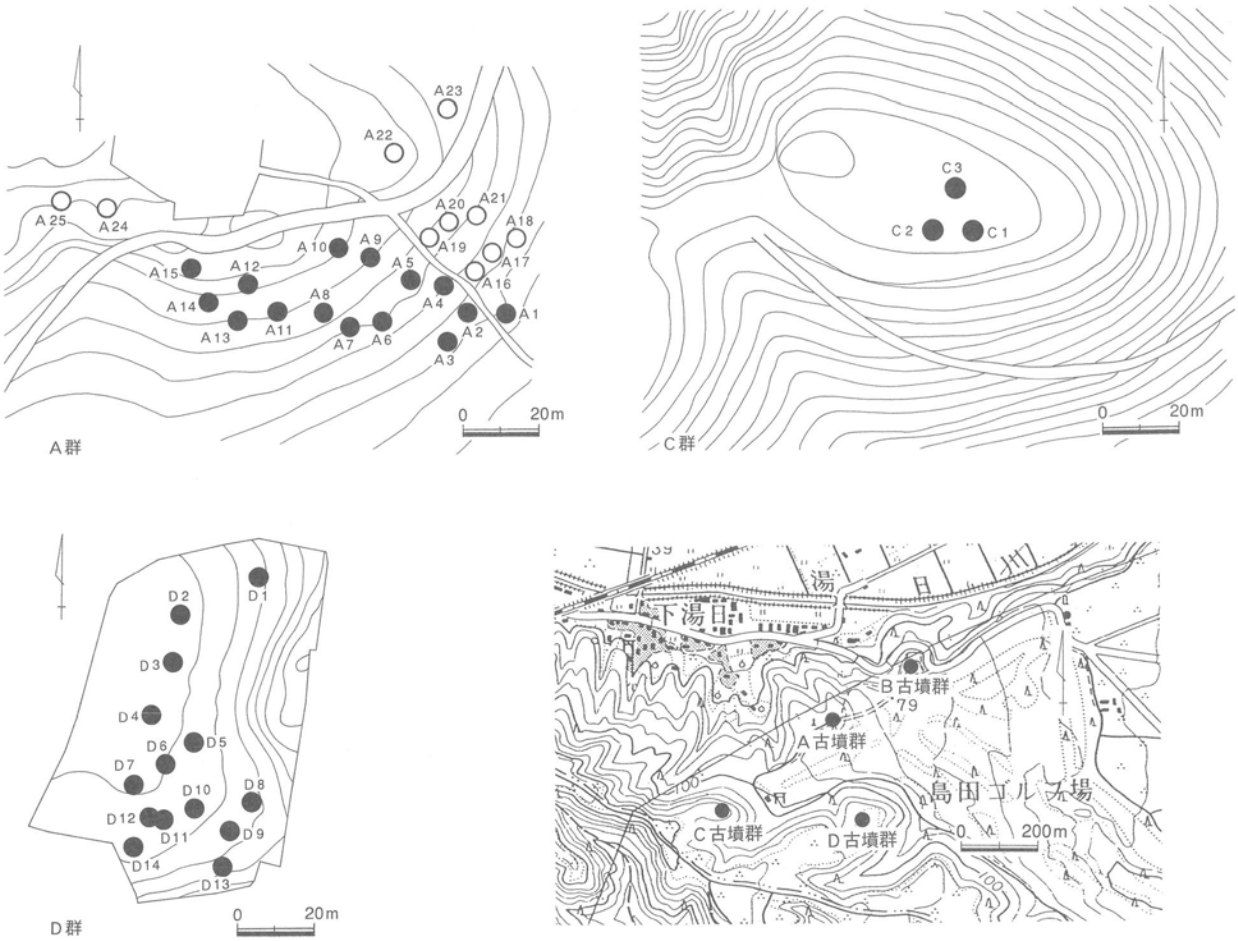


図122　水掛渡古墳群　古墳分布図

狭長な石室である。副葬品では２号墳、５号墳、９号墳、14号墳から大刀が出土している。中でも２号墳出土の大刀の一つに銀象眼を持つ鍔があることは注目できる。

Ｂ群について　Ｂ群はＡ群より200m程北東に位置し、その標高は70m前後である。４基の古墳で構成され、６世紀末に相次いで築造されたようである。横穴式石室は全て無袖式で、玄室はわずかに胴が張る平面形態である。石室規模は３号墳が全長6.3mと最も大きく、全長2.5mの２号墳が最小である。４基とも大刀や鉄鏃を出土している。

Ｃ群について　Ｃ群はＡ群やＢ群より一段高い位置にあり、その標高は約140mである。６世紀中葉～後葉に築造される円墳３基で構成される群である。遺物はＣ１号墳から鐶付足金物が出土している。３基とも墳丘には周溝が巡り、埋葬施設である横穴式石室の形態は無袖式であった。Ｃ１号墳とＣ２号墳は長方形の玄室、Ｃ３号墳は奥搾り形の玄室である。石室規模は１号墳が最大で全長7.5mである。最小規模のＣ３号墳は全長2.9mである。

Ｄ群について　本書で報告したのがＤ群である。まず、立地を見ると、Ｄ群は尾根先端部の標高125～130mに所在する。墳形が判明したものはいずれも円墳で周溝が巡っていた。横穴式石室の形態は無袖式が主体を占めるが、12号墳は疑似両袖式であった。また、７号墳は開口部に立柱石を持つタイプである。玄室の平面形態には胴張形と長方形、奥搾り形がある。石室規模を見ると、全長が判明する中では７号墳が最大で全長4.9m、最小は12号墳の2.7mである。Ｄ群は７世紀中葉～後葉にかけて築造が行われ、８世紀初頭まで追葬が行われているようである。副葬品として目立ったものは少なく、５号墳と14号墳で大刀が出土している程度である。

(2)　Ａ～Ｃ群とＤ群との比較

以上、水掛渡古墳群の各群の概要を述べたが、これを踏まえてＤ群とＡ～Ｃ群を比較したい。まず、丘陵尾根の先端部という立地状況や７世紀中葉～後葉の築造という点でＤ群はＣ群と共通する点を持つ。これに対し、Ｂ群は６世紀末葉の築造であり、やや時期が古い。Ａ群は築造のピークや終焉は共通するが築造が開始されるのは若干早い。外部施設についてはＡ群とＢ群では不明な点が多く対比はできないが、Ｃ群とＤ群は周溝が巡る円墳であるという一致点をみる。横穴式石室の形態については、Ａ～Ｄ群に共通する特徴が狭長であるという点である。Ａ群とＤ群では擬両袖式もみられるが、主流を占めるのは無袖式である。Ｂ群とＣ群では無袖式のみである。擬似両袖式と無袖式が混在するＡ群では擬似両袖式のものが有力墳の傾向にあるようであるが、Ｄ群では石室形態による階層の差は看取し難い。Ａ～Ｄ群の古墳はいずれも床面には敷石が施される。ただし、Ｂ群は床面全面に礫が敷設されるが、Ａ群とＣ群、Ｄ群では閉塞石との間に礫が敷設されない範囲を持つ古墳が見られる点が異なる。使用される石材はＢ群やＣ群で一部割石が用いられるが、自然石が主体である点はＡ～Ｄ群に共通している[4]。副葬品を見ると、Ｄ群が最も貧弱な感を持つ。ただし、これにはＤ群は削平が著しかったことも起因していると言える。

水掛渡古墳群において各支群にはそれぞれ差異が見いだせるが、きわだった差異は少ない。わずかな差異に注目すると、Ｄ群はＡ群あるいはＣ群と共通する部分を多く見いだせる。

(3)　水掛渡Ｄ古墳群における群構成

水掛渡古墳群ではＡ群について報告書の中で群構成のモデルが提示されている。ここでは、未調査の古墳も含めた25基が「９グループ５群」に分けられている。それぞれのグループは２～３基で構成され、そのグループが１～３基で１群を形成すると見なされている（図123左）。そして、各グループには「主座」となる古墳が存在し、その中には「群」を統括する「主座」ともなる古墳があることが提言されている。また、「群」の「主座」となる古墳は擬似両袖式で、大刀が副葬される傾向があることもあわせて指摘されている。

本書で扱ったD群は墓道と周溝のつながりから、幾つかの単位群に区分することができる（図123右）。まず、注目できるのが、墓道と周溝とで結ばれる６号墳、７号墳、11号墳、12号墳、14号墳である。この５基で構成される単位群を以下、単位群Ａと呼称する。この単位群は立地や主軸方位から、更に６号墳と７号墳、11号墳と12号墳並びに14号墳のグループに分節することもできる。

もう一つの単位群として考えられるのが、３号墳と４号墳である。この２基は南側に開口する石室を持つにもかかわらず、墓道は大きく東に弧を描き調査区の東側の谷に向けて下っていることが特徴的である。両者の墓道はつながるものと推測され、この単位群を単位群Ｂと呼称する。単位群Ｂには２号墳も含まれると考えられる。また、１号墳も同じく東側の谷に墓道がのびている。これは単位群Ｂに含め難いが、同一の小支群に属するものとしては捉えることができよう。そこで、単位群Ｂを含めて調査区の東側の谷に墓道が続く古墳のまとまりを北側小支群と捉えたい。なお、５号墳はこの小支群に含まれる可能性もある。

さて、上述した二つの単位群以外については、墓道や主軸方向等の要素から、明確な単位群と言うものを抽出することができない。ただし、５・８～10・13号墳は近接する立地状況から同一単位群の可能性を持つ。この４基は墓道が調査区南東の谷に向けてのびている。この谷には単位群Ａの墓道ものびている。そこで、調査区南東の谷に墓道がのびる５～14号墳を南側小支群と捉えることができる。

ところで、水掛渡Ｄ古墳群においては、副葬品からうかがえる時期差が少なく、比較的短期間に形成されたものと考えられるが、単位群Ａは立地状況から築造順序をうかがうことができる。まず、７号墳の墓道が11号墳・12号墳を避けるかの様相を呈すため、11号墳・12号墳は７号墳に先行すると考えられる[5]。６号墳の墓道は直線的にのびていたものが急角度で折れ曲がり７号墳の墓道と接続するため、６号墳は７号墳の後に築造されたと考えられる。そして、全ての墓道が周溝へとつながる14号墳がこの５基の中で最も早くに築造されたと考えられる。その築造の順を整理すると、14号墳→11号墳・12号墳→７号墳→６号墳である。なお、石室形態を見ると単位群Ａにのみ立柱石を使用するものがある。７号墳は開口部に立柱石を持ち、12号墳は疑似両袖式である。石室規模は６号墳より７号墳が、11号墳より12号墳が勝り、立柱石を持つ古墳の優位性がうかがえる。単位群Ａにおいては石室構造により階層の違いが表現されていた可能性がある。この観点に立つと、単位群Ａ形成の契機となり、最有力墳と考えられる14号墳の石室には立柱石が用いられていたと考えられる。

(4) 水掛渡古墳群のまとめ

以上に得られた知見をもとに水掛渡古墳群全体をまとめたい。水掛渡古墳群では６世紀後葉にＢ群から造営が開始され、その後、７世紀前葉にＡ群の築造が始められた。この時期にはＢ群の造営は終りを告げている。７世紀中葉になると、Ｃ群とＤ群の造営が開始された。Ｃ群は短期間で造営を終え、７世紀後葉まで築造が続けられるのはＡ群とＤ群である。時期的に若干の隔たりがあるＢ群を除外して、ほぼ同時期に築造されるＡ群、Ｃ群、Ｄ群について考えてみたい。立地状況を見ると、Ａ群に対しＣ群とＤ群は一段高い

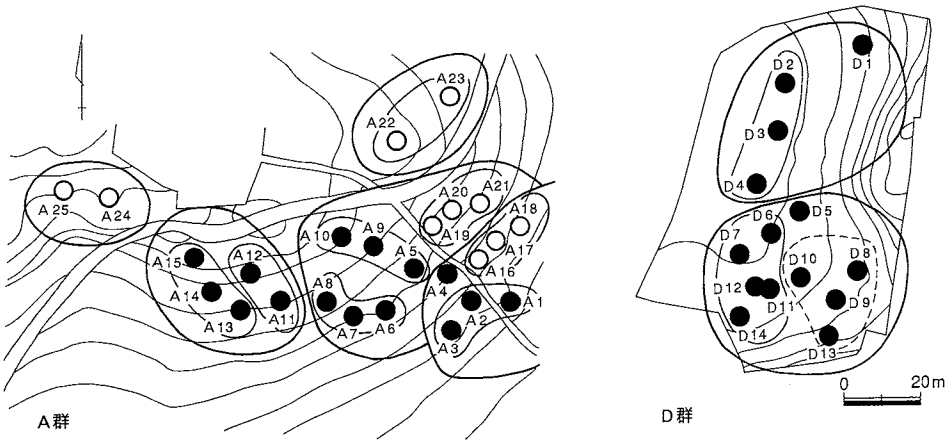


図123　Ａ群とＤ群の群構成

丘陵尾根先端部に所在する。前者と後２者は異なった印象を受けるが、Ｃ群の墓道がのびる斜面を下っていくと、Ａ群の近傍にたどり着く。一方で、Ｄ群は北小支群、南小支群共に、墓道の先にある斜面を下ると、Ａ群からは離れた位置にたどり着くという違いがある。この違いが、単に立地によるものであるのか、帰属集団の違いであるのかは明らかにすることはできない。ただし、石室構造等は著しく異なるものではなく、副葬品はＡ群に対しＣ群とＤ群はやや乏しい感があるものの、そこに階層の違いが読みとれるほどの差は見られない。これらの点から、各群の社会集団や階層などに著しい違いはなかったと考えられる。

(5) 御陣場古墳・坂口千頭ヶ谷古墳について

御陣場古墳と坂口千頭ヶ谷古墳は榛原町側に所在する古墳である。この２基の立地状況や古墳に至る通路を想定すると、被葬者の生活基盤は坂口川流域であったことが言えよう。ただし、この２基の立地する場所は坂口川の沖積平野からは直接見ることができない奥まった位置に所在することは特徴的である。その要因についてはこの調査で得られた資料から判断することはできないが、造営に関しての何らかの制約があった可能性も考えられる。現在の市町村区分でも丘陵稜線の南側を榛原町、北側を島田市としている。水掛渡古墳群は稜線の北側であり、湯日川や大井川周辺を生活基盤とした集団が被葬者としてうかがえる。一方、坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳は坂口谷川流域を基盤とした集団が想定でき、水掛渡古墳群とは被葬者の生活基盤が異なると考えられる。ただし、石室や墳丘規模からうかがうと、坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳の被葬者は水掛渡Ｄ古墳群の被葬者とは大きな階層差を見いだすことはできない。なお、牧ノ原台地以西の東遠江では横穴墓が盛行し、東遠江東部では横穴式石室が盛行する。このことから、東遠江東部は同じく横穴式石室が盛行する駿河西部と墓制の上では共通性を見出すことができる[6]。坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳でも横穴式石室を採用している。ただし、東遠江東部の円礫を用いる横穴式石室は地理的状況と同じく、牧ノ原台地以西の遠江と駿河西部の両者の影響を受けた中

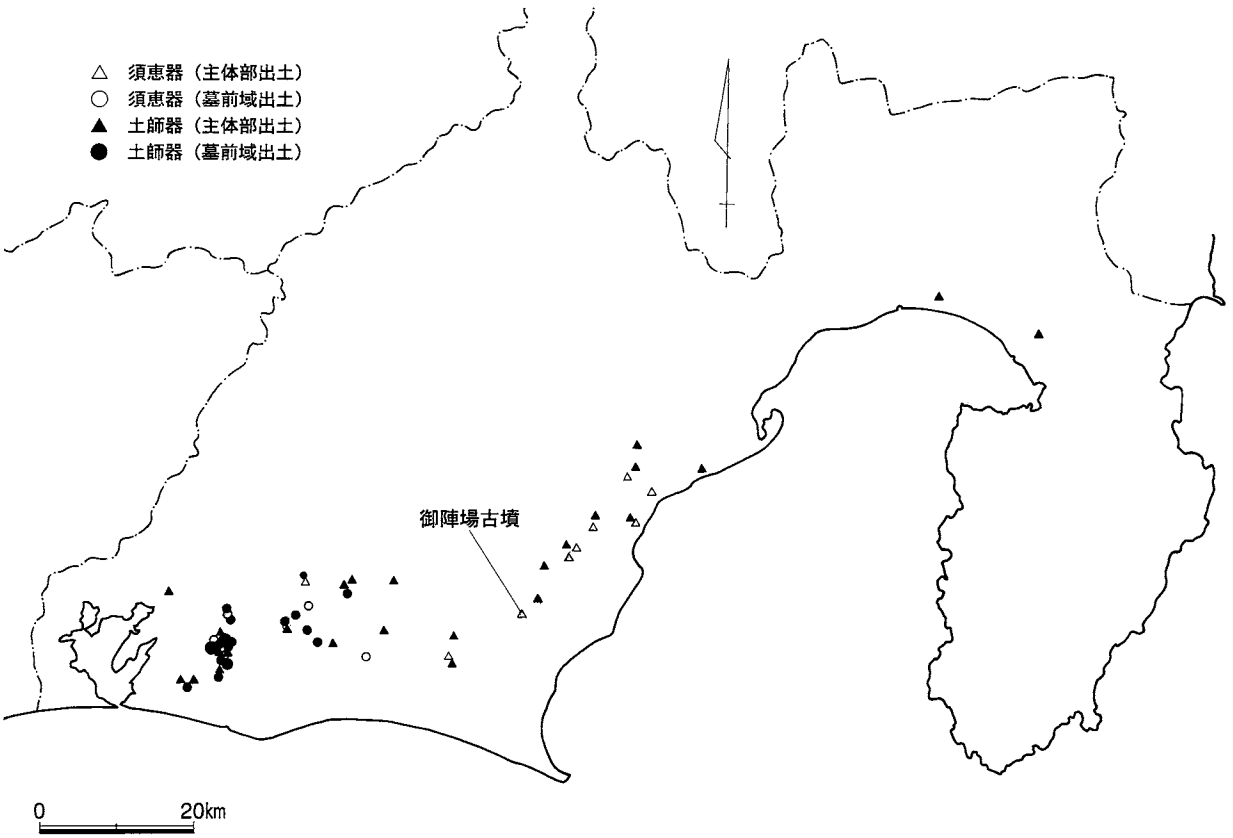


図124　盤・皿出土古墳分布図

間地帯であることも指摘されている[7]。その一例にあげられているのは水掛渡古墳群である。坂口千頭ヶ谷古墳と御陣場古墳は水掛渡古墳群で採用される横穴式石室と形態や用材の上で大きな違いを見いだせないため、水掛渡古墳群と同様に遠江と駿河の両者の影響を受けたものと解釈できる。

さて、坂口千頭ヶ谷古墳では遺物が出土しなかったが、御陣場古墳では鉄器や須恵器などの遺物が出土した。この中で、目を引くのは御陣場古墳から出土した須恵器の盤類である。図124は６世紀後半から７世紀における古墳出土の盤・皿類の分布状況である。駿河・遠江共に見られるが、遠江、特に三方原台地周辺での出土が多いと言える。全体的に土師器の盤・皿類が大勢を占める傾向にあり、須恵器の出土は稀と言える。土師器の盤・皿類と供出する須恵器はＴＫ43～ＭＴ21型式併行期のものであるが、特にＴＫ46～48型式併行期のものが多い。須恵器の盤・皿類はそのほとんどがＴＫ46～ＭＴ21型式併行期のものである。また、牧ノ原台地より西では墓前域からの出土が多い傾向にある。一方で、牧ノ原台地以東では主体部からのみ盤・皿類が出土する。この地域では選択的に盤・皿類を主体部内に持ち込んでいた可能性も考えられ、葬送儀礼用における盤・皿類の扱われ方に牧ノ原台地の東西では違いがあったのかもしれない。このような状況の中、御陣場古墳では横穴式石室から須恵器の盤が出土している。数少ない須恵器の盤を２点出土していることは注目できる[8]。また、主体部から盤･皿類が出土していることは、牧ノ原台地以東の傾向に沿ったものとして捉えることができる[9]。

３．結語

このたびの調査では、縄文時代早期と古墳時代後期を中心とした遺構・遺物について知見を得ることができた。特に、縄文時代早期については旧榛原群域では発見例も少なく、貴重な資料になるであろう。もっとも、残存状況は著しく悪く、多くを知ることは能わなかった。ただし、従来見過ごされていたこの丘陵で資料を得られたことから、同様の例が周囲に存在することも十分に考えられる。今後、更なる資料の増加を期待したい。

古墳時代後期については、水掛渡Ｄ古墳群で墓道と周溝のつながりから群構成を把握できたことが大きな成果であった。過去の調査で群構成のモデル提示がされていた水掛渡古墳群であるが、墓道のつながりなどは検出されていなかった。今回の調査で墓道のつながりから単位群に分節できることが明らかとなったことは、群集墳のあり方を考える好例となるであろう。おそらく、水掛渡Ａ古墳群も墓道や周溝で古墳同士が結びついていたと考えられる。

さて、遠江・駿河では６世紀後半から７世紀中葉までが古墳築造のピークである。７世紀後半には古墳築造が衰退に向かうものの、新たに形成される古墳群もある。本書で報告した水掛渡Ｄ古墳群、坂口千頭ヶ谷古墳、御陣場古墳はいずれも７世紀中葉～後葉のものであった。駿河・遠江において古墳造営が衰退に向かう時期に築造された古墳といえる。水掛渡Ｄ古墳群はこの時期に新たに形成される古墳群であるが、その成立の背景について明言することは今回の調査で得られた資料のみでは明らかにすることはできない[10]。ただし、前代から古墳群が形成され築造が続けられている水掛渡Ａ古墳群など周囲の古墳と比較しても、規模や副葬品等では差が見られず、墳形や石室形態にも差は見られない。このことから、水掛渡Ｄ古墳群の被葬者はそれらの古墳と階層や社会集団が大きく異なるものではないと考えられる。

以上が、今回の調査で得られた知見であるが、この成果が地域の歴史解明に寄与できれば幸いである。

註

1　屋敷原遺跡は報告書では前期初頭に位置づけられているが（島田市教育委員会1992）、その後大鳥遺跡の報告書では早期としている（島田市教育委員会1997）。ここでは、大鳥遺跡の記載を参照した。

2　静岡県文化財保存協会1965、なお、この時の調査ではやや離れた所に所在する９ＴＥＥ古墳と呼ばれる古墳１基もあわせて調査されている。

3　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1999

4　石材については、円礫の自然石、いわゆる河原石が採用されるが、この類の石材は古墳周辺の地山から採取可能である。牧ノ原台地の成り立ちが大井川の河川堆積が隆起したことに起因している。もっとも、全ての石材を地山から採取したとは考えがたく、周辺の河川から運搬したものもあったと考えられる。

5　11号墳と12号墳の選地が先に行われていたことも可能性としてはあり得る。

6　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所2002

7　大谷2003

8　御陣場古墳出土の盤２点は後藤建一氏から湖西産であることが指摘された。後藤氏の御教示によると、県内で出土している須恵器の盤・皿のほとんどが湖西産とのことである。また、御陣場古墳から出土したこの他の須恵器も全て湖西産であることもあわせて指摘を受けた。後藤氏は「高盤の存在期間は極めて短期間である。」ことを指摘している（後藤　1989）。御陣場古墳のものは湖西第Ⅲ期第３小期後に位置づけられる。これはＴＫ48型式と併行するものである。

9　全体的傾向としては土師器が多いが、現状では駿河西部（志太地域）では須恵器の盤・皿類を出土する古墳の割合が他の地域に比較すると幾分高いようである。この点を重視すれば、御陣場古墳は駿河西部に近い様相と捉えることもできる。

10　植松1992では群集墳の終焉について論じている。ここでは、終焉には７世紀中葉と８世紀前半の二つの画期があることを指摘し、その要因に社会的規制を求めている。更に、７世紀中葉の画期は遠江では顕著であるが、駿河・伊豆では顕著ではないことをあげている。水掛渡古墳群は遠江の範囲に含まれるが、Ａ群・Ｃ群・Ｄ群では７世紀中葉における画期を見出すことができず、この点からは駿河に近い様相がうかがえる。なお、植松1992では７世紀中葉における画期が駿河・伊豆で見られない背景を、「家父長層が依然として相対的な独自性を保持できる立場にあった」と解している。

参考文献

石川治夫　1985「Ⅵ．調査所見　１．縄文時代　(1)　炉穴と集石について」『寺林南遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会

植松章八　1992「遠江・駿河・伊豆における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集　国立歴史民俗博物館

大谷宏治　2003「大井川西岸域における横穴式石室の様相」『静岡県の横穴式石室』　静岡県考古学会

後藤建一　1989「湖西古窯跡群出土の須恵器と窯」『静岡県の窯業遺跡』　静岡県教育委員会

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998『水掛渡古墳群Ｃ群』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002『星久保古墳群』

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003『研究紀要』第10号

静岡県　1930『静岡縣史』第一巻

静岡県文化財保存協会　1965『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1992『屋敷原遺跡・御小屋原遺跡発掘調査報告書』

島田市教育委員会　1997『大鳥遺跡』　静岡県島田市埋蔵文化財調査報告第25集

鈴木道之介　1983「石鏃」『縄文文化の研究』７道具と技術　雄山閣出版株式会社

田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店

谷口康浩　1986「縄文時代「集石遺跡」に関する試論」『東京考古』４　東京考古談話会

山下峰司　1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

現地調査並びに報告書の作成にあたり、下記の方々には有益な御指導・御助言を賜った。文末ではあるが、記して感謝の意を表したい。(五十音順・敬称略)

後藤建一・坂巻隆一・櫻井典啓・篠ヶ谷路人・柴田稔・澁谷昌彦・島田市教育委員会・嶋野雄康・榛原町教育委員会

写 真 図 版

カラー図版２

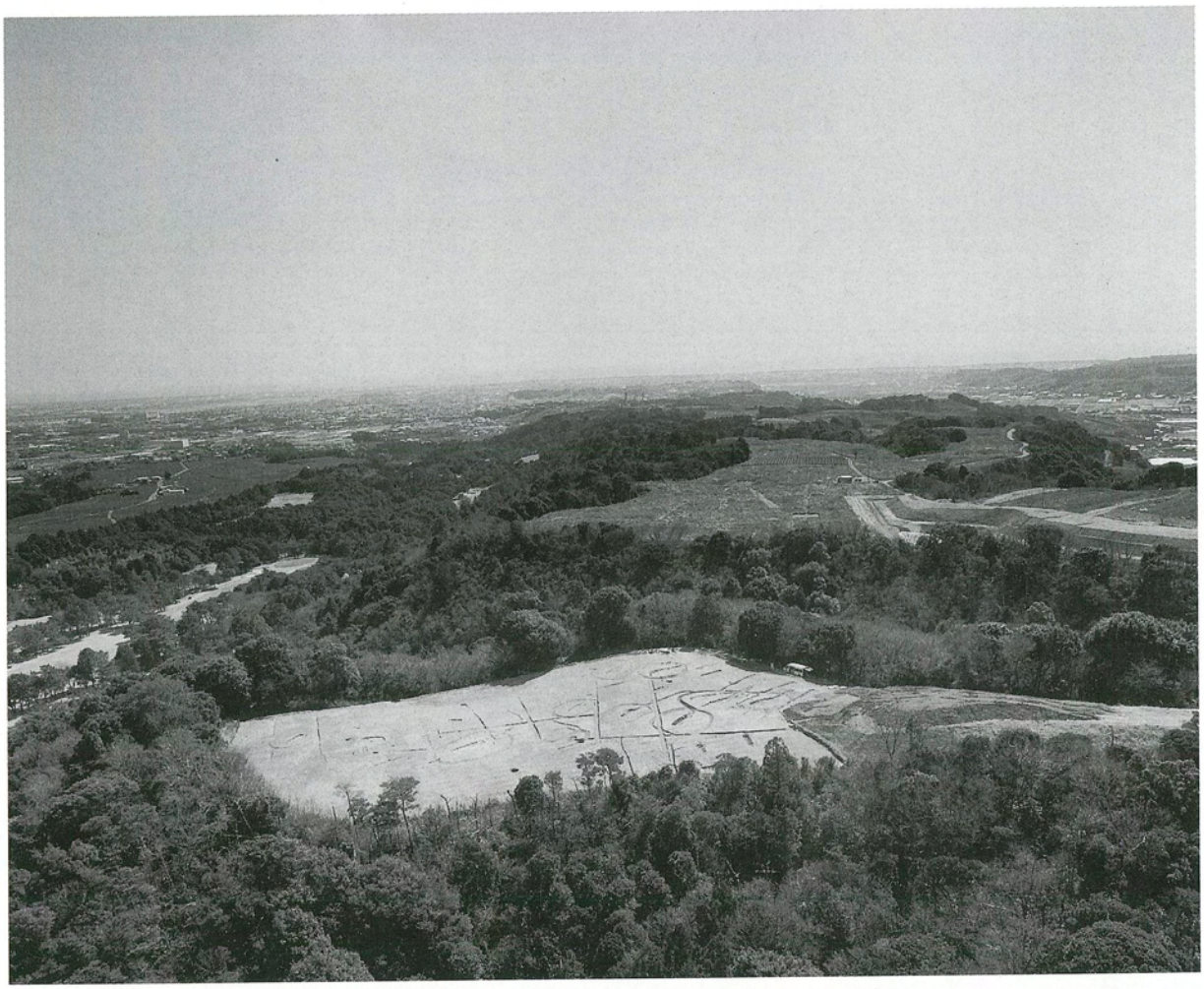
１．水掛渡Ｄ古墳群の立地状況

２．御陣場古墳の遺物出土状況

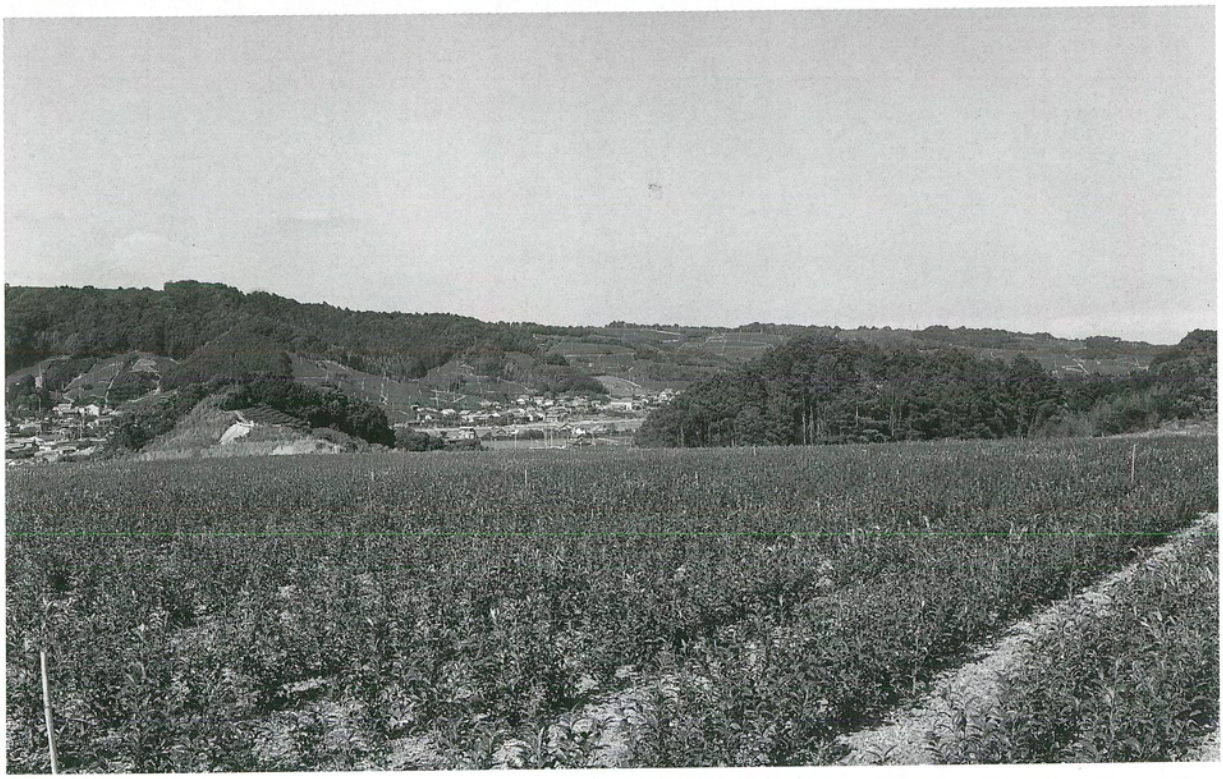
水掛渡Ｄ古墳群の主な出土遺物

図版１

遺跡の遠景



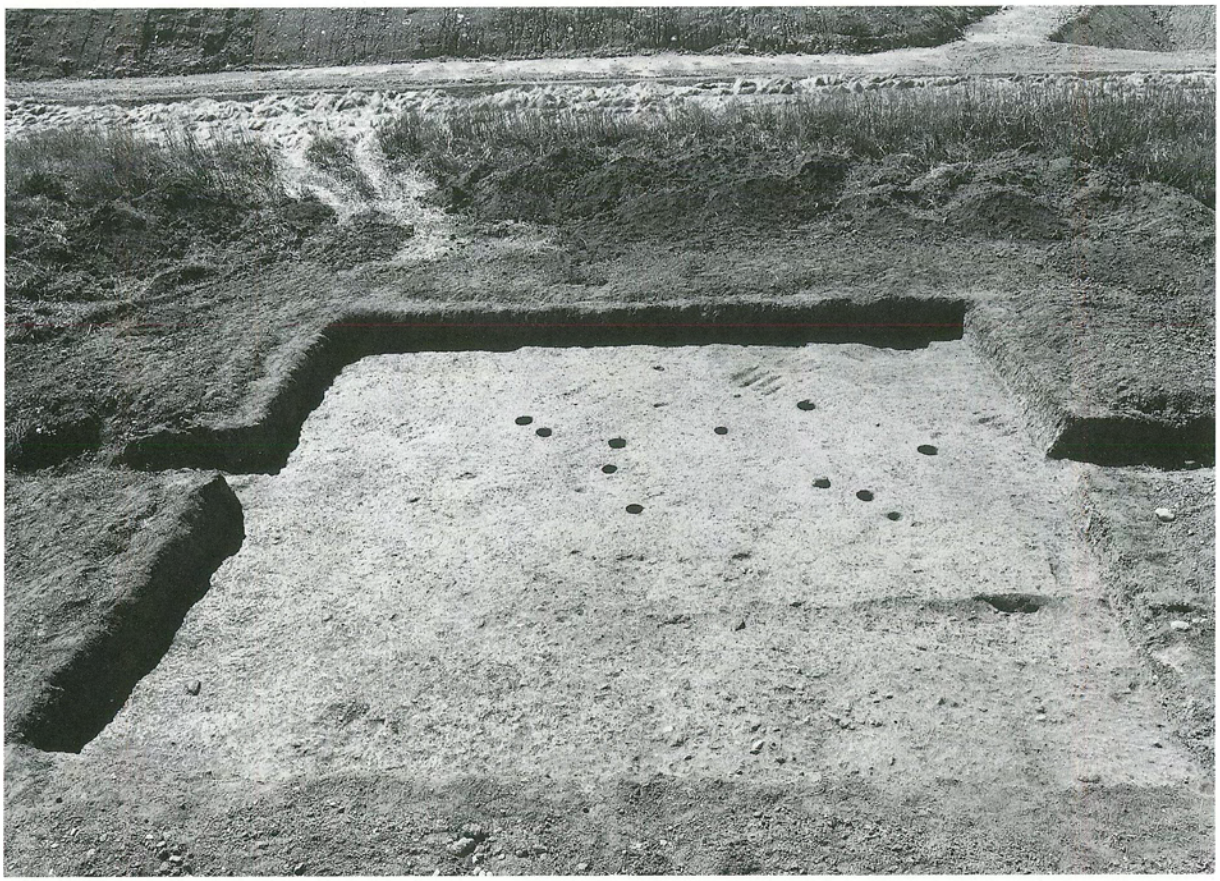
１．水掛渡Ｄ古墳群と吉峠遺跡遠景（北西から）



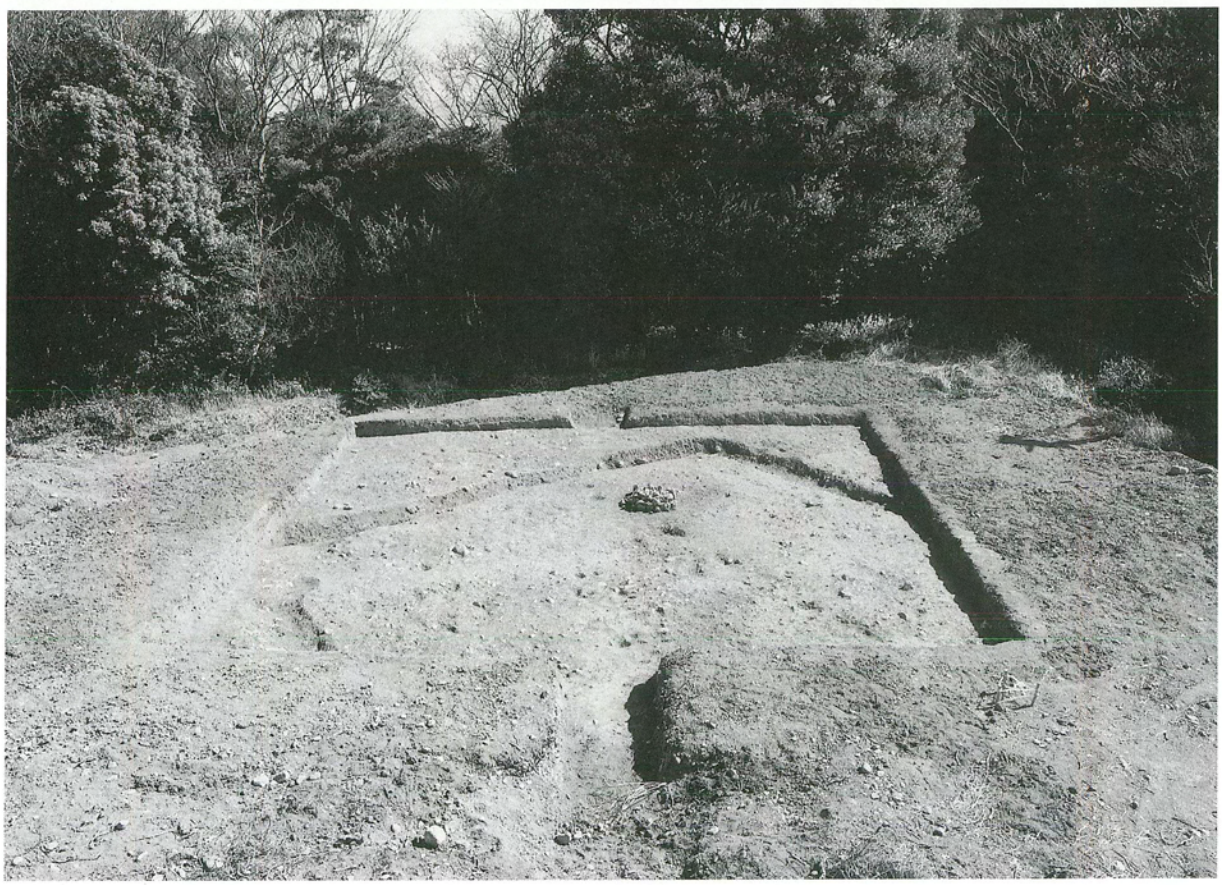
２．吉峠遺跡遠景（南から）

図版２

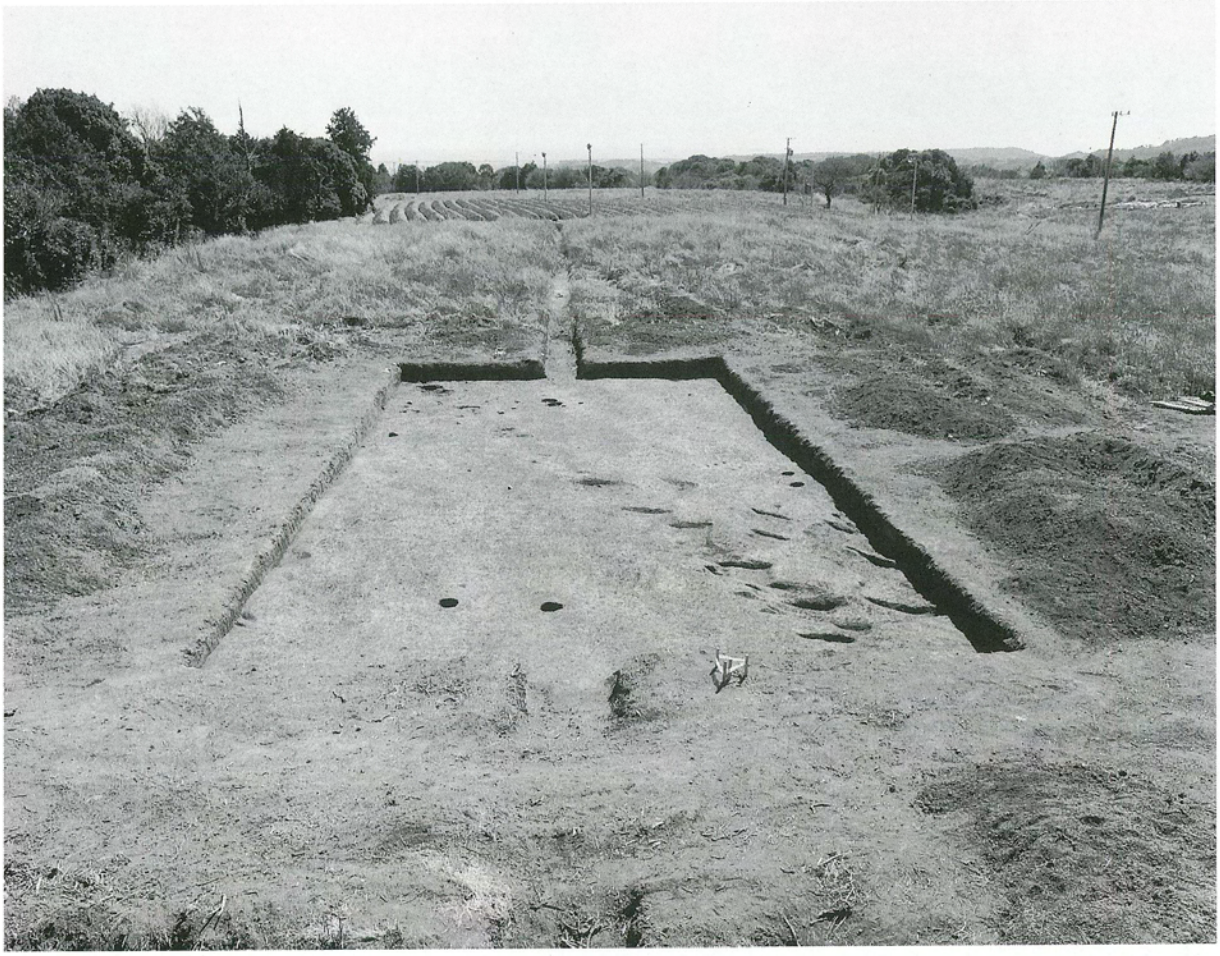
吉峠遺跡



１．１区　全景（北から）



２．２区　全景（南から）



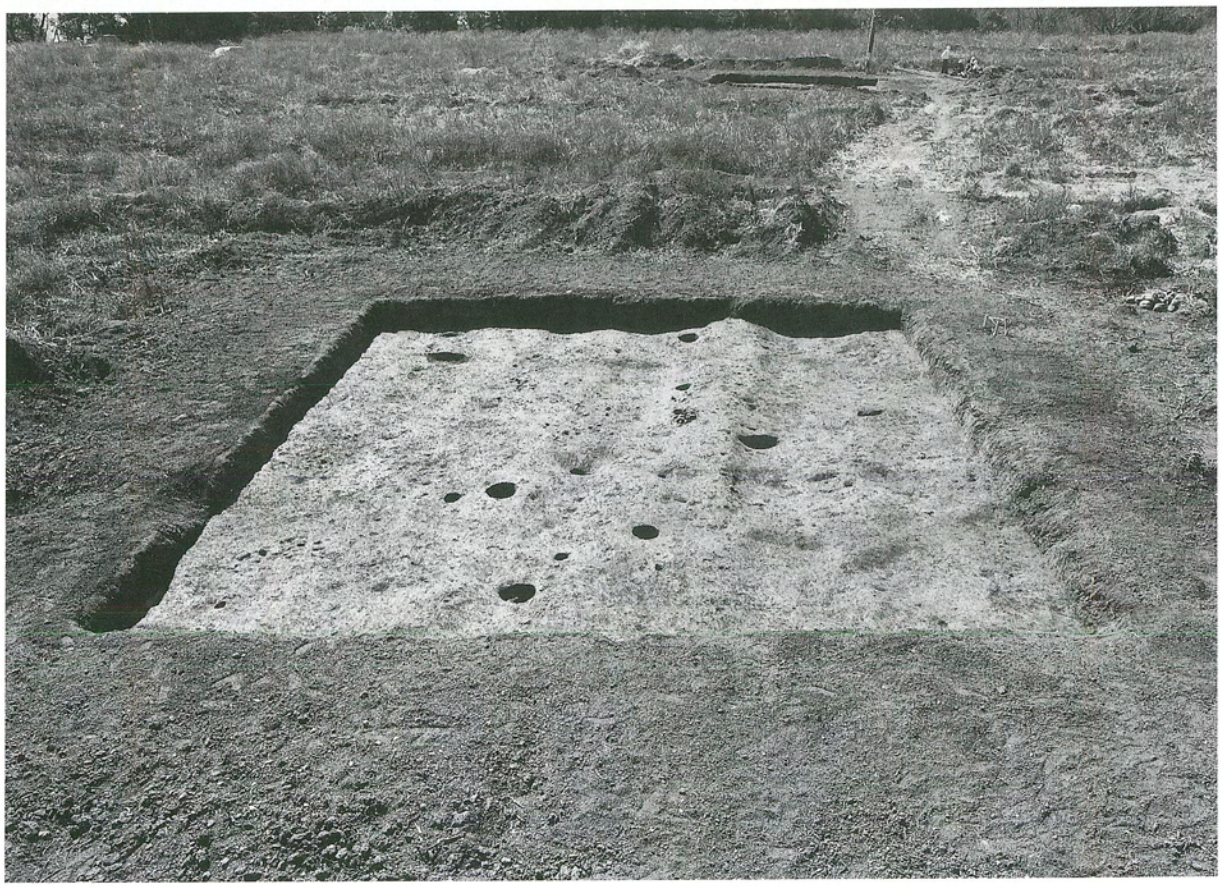
１．３区　全景（西から）

２．２区　ＳＦ－１（北から）

図版４

吉峠遺跡

１．４区　全景（北から）



２．５区　全景（北から）

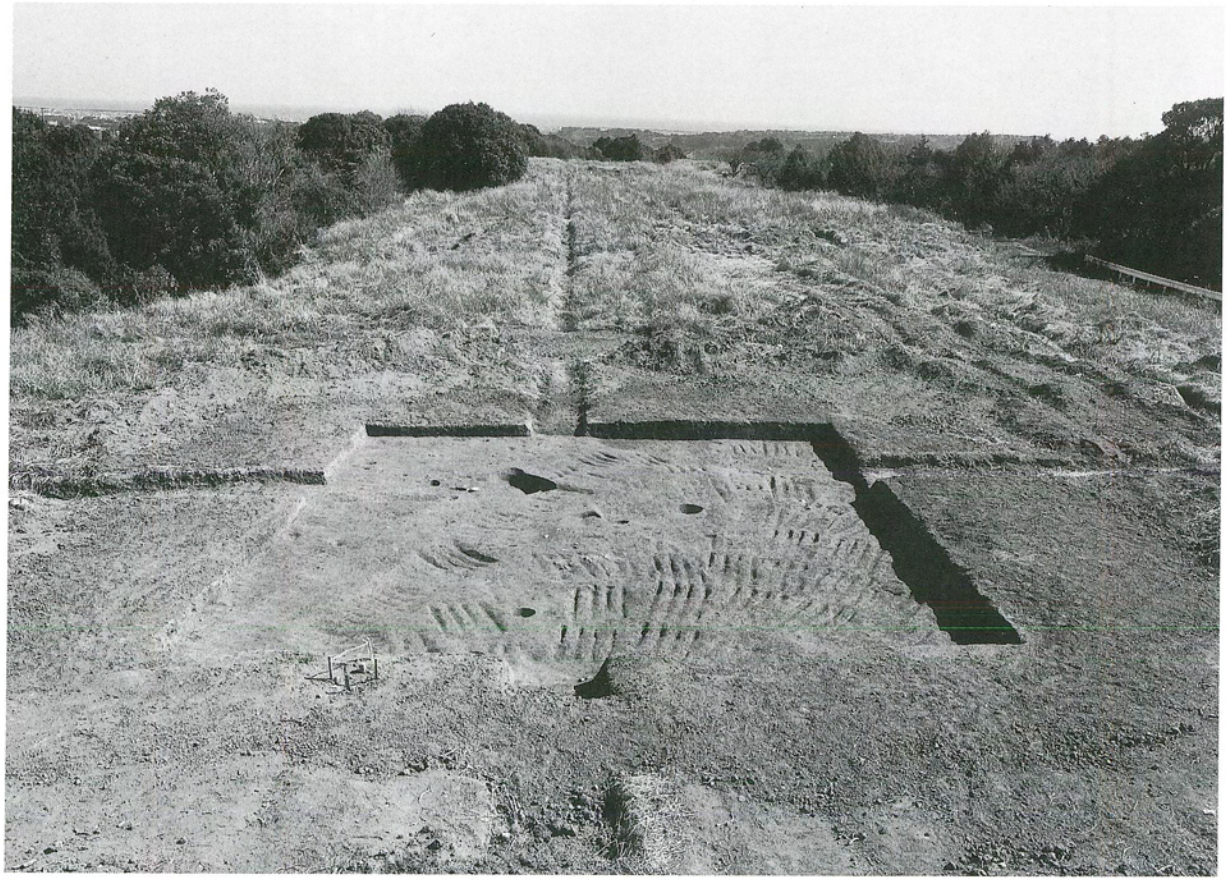
１．６区　全景（北から）

２．７区　全景（南から）

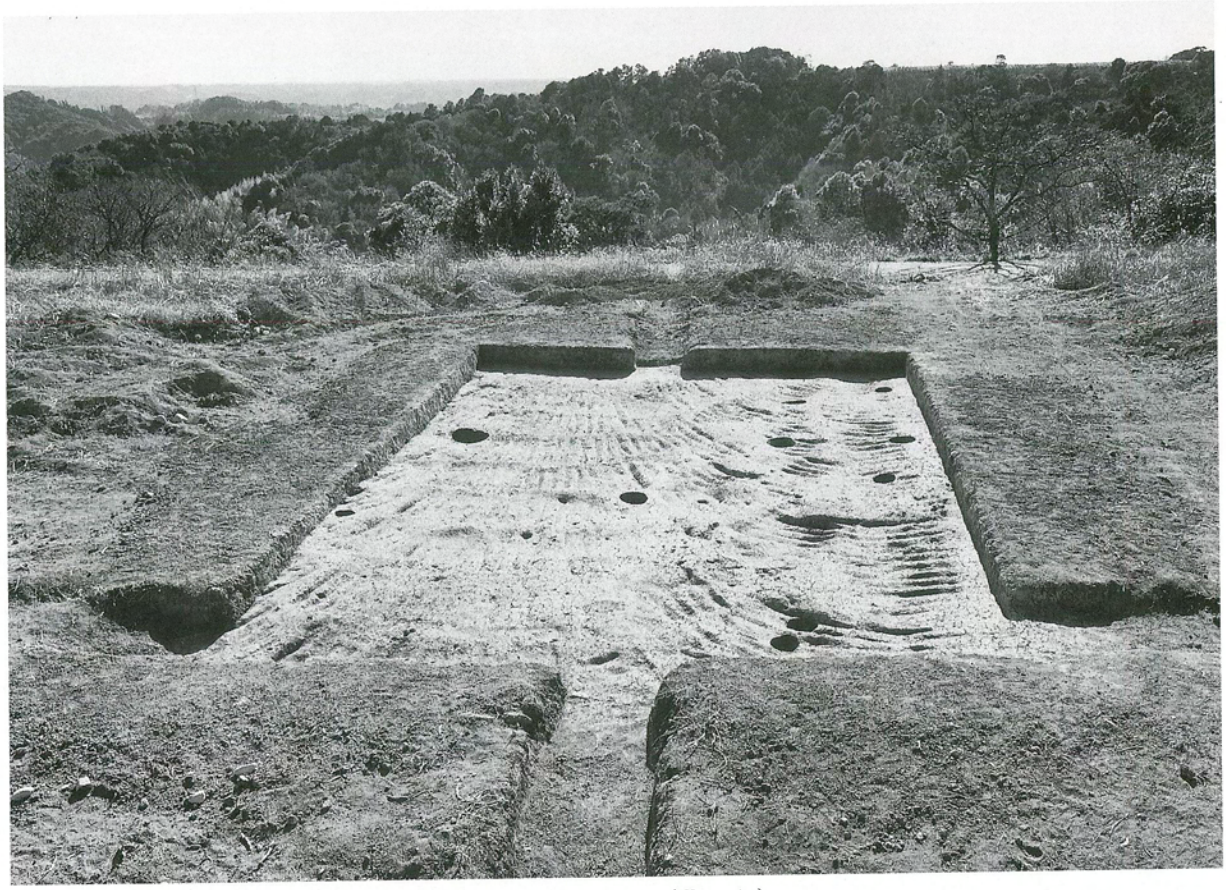
図版６

吉峠遺跡

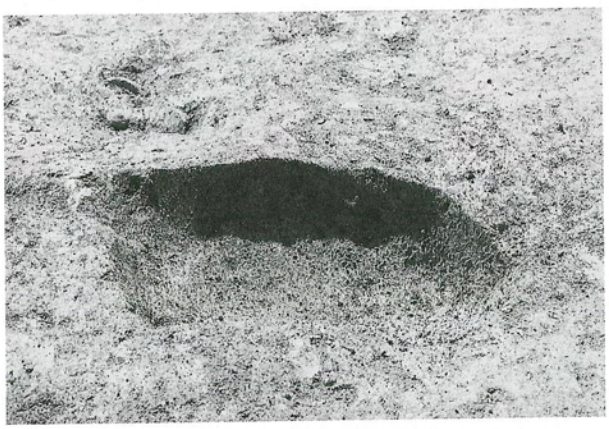
１．７区　ＳＢ－１（北から）



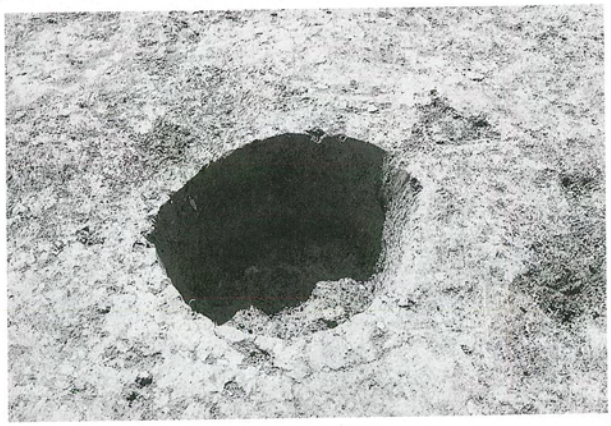
２．８区　全景（西から）



１．９区　全景（北から）

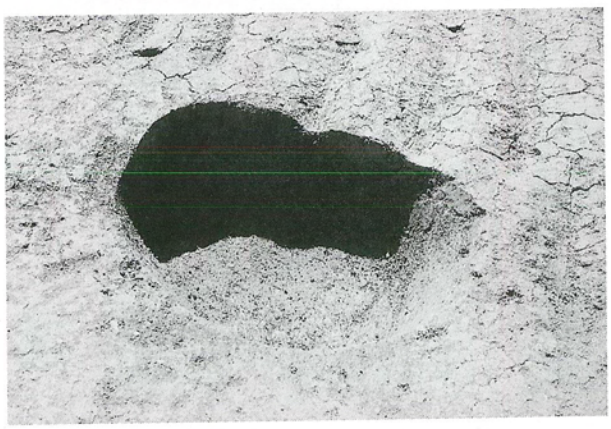


２．５区　ＳＦ－１（北から）



３．５区　ＳＦ－３（北から）

４．７区　ＳＢ－１内Ｐ－１（北から）



５．９区　ＳＦ－１（北から）

図版８

水掛渡Ｄ古墳群

１．遺跡の遠景（西から）

２．調査区全景（南から）

古墳群全景（俯瞰）

図版10

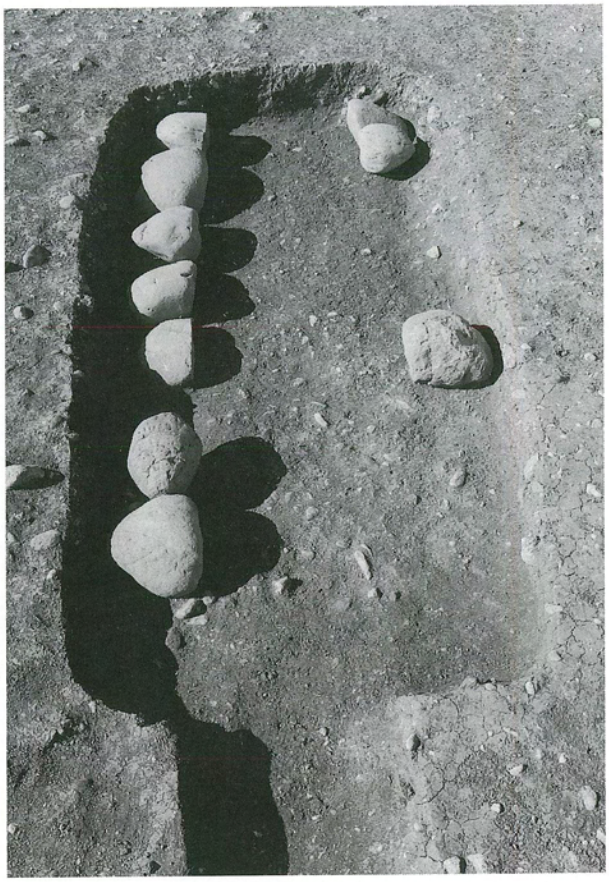
水掛渡Ｄ１号墳

１．１号墳　全景（南から）

２．石室閉塞石除去前（北から）

３．１号墳　全景（北から）

1．石室全景（南から）



2．石室基底石（南から）

3．石室掘り方（南から）

4．閉塞石の状況（北から）

5．石室内遺物出土状況（北東から）

図版12

水掛渡Ｄ２・３号墳

１．３号墳　全景（北から）

２．２号墳　石室全景（北から）

３．３号墳　石室全景（南から）

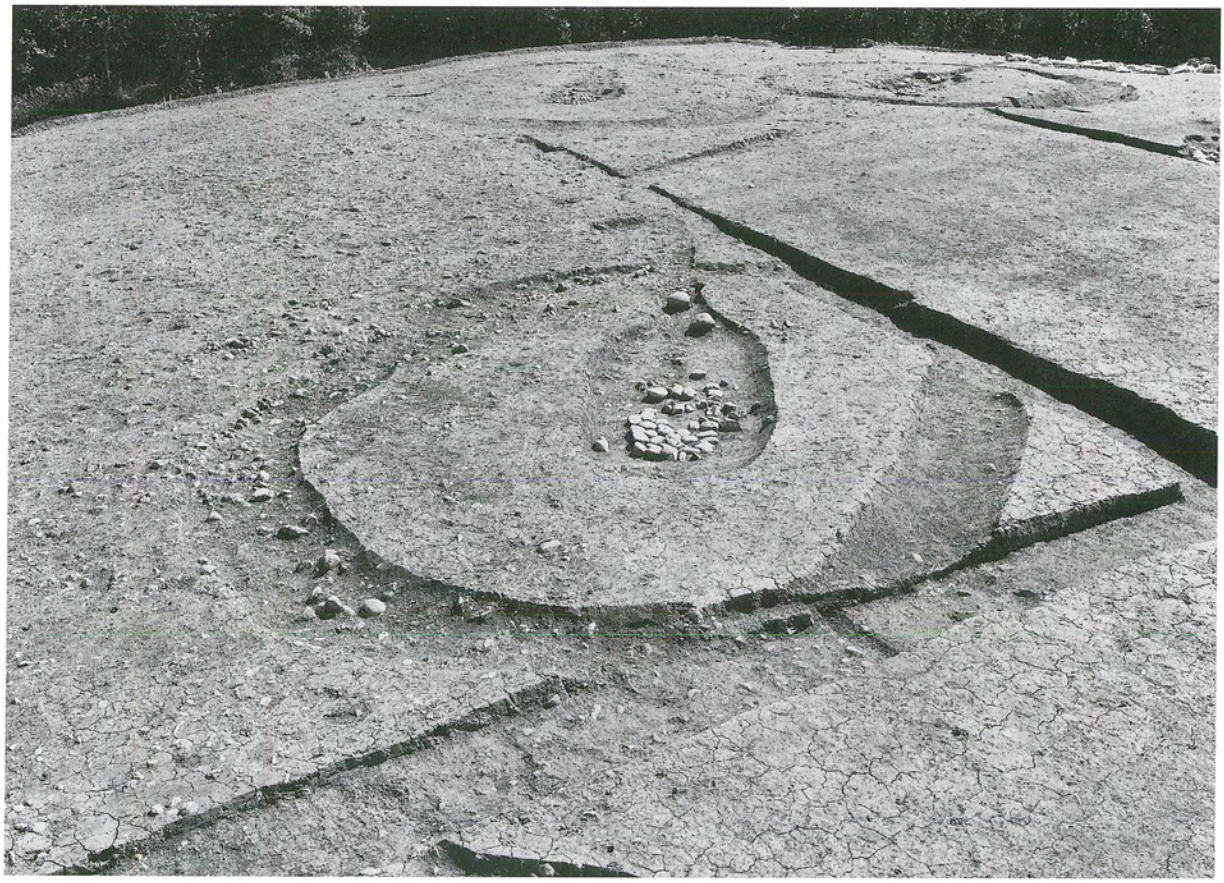
１．３号墳　石室内遺物出土状況（西から）

２．４号墳　全景（北西から）

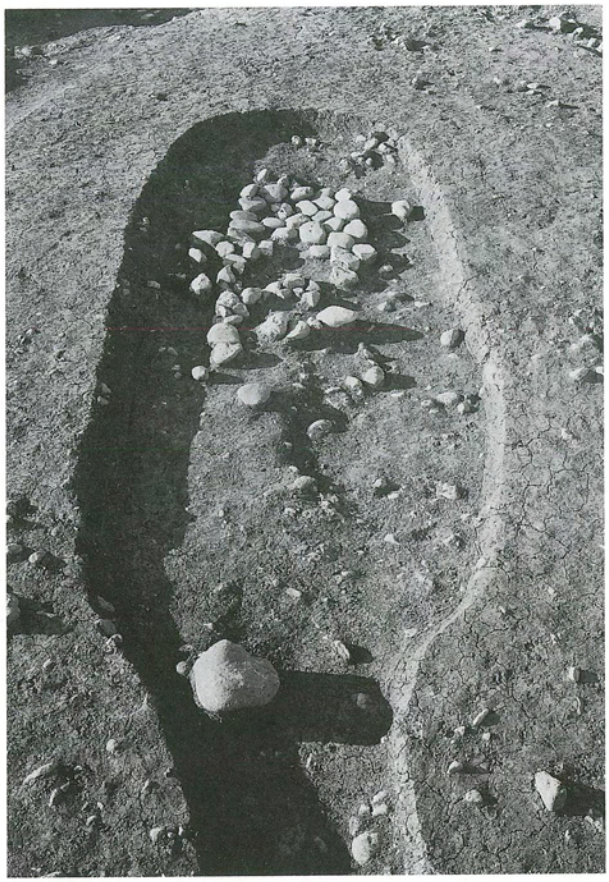
図版14

水掛渡Ｄ４・５号墳

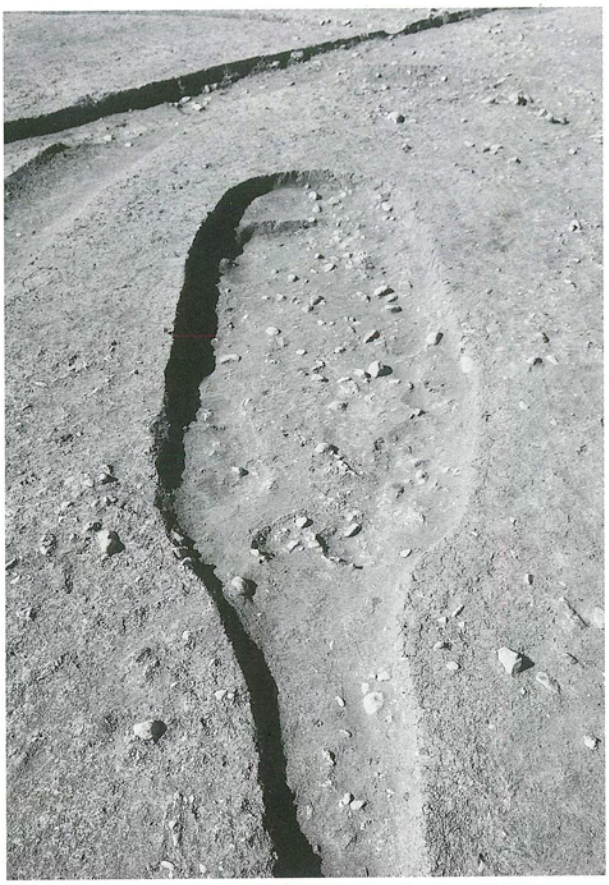
１．４号墳　周溝遺物出土状況（南東から）



２．５号墳　全景（北から）



１．５号墳　石室全景（南から）



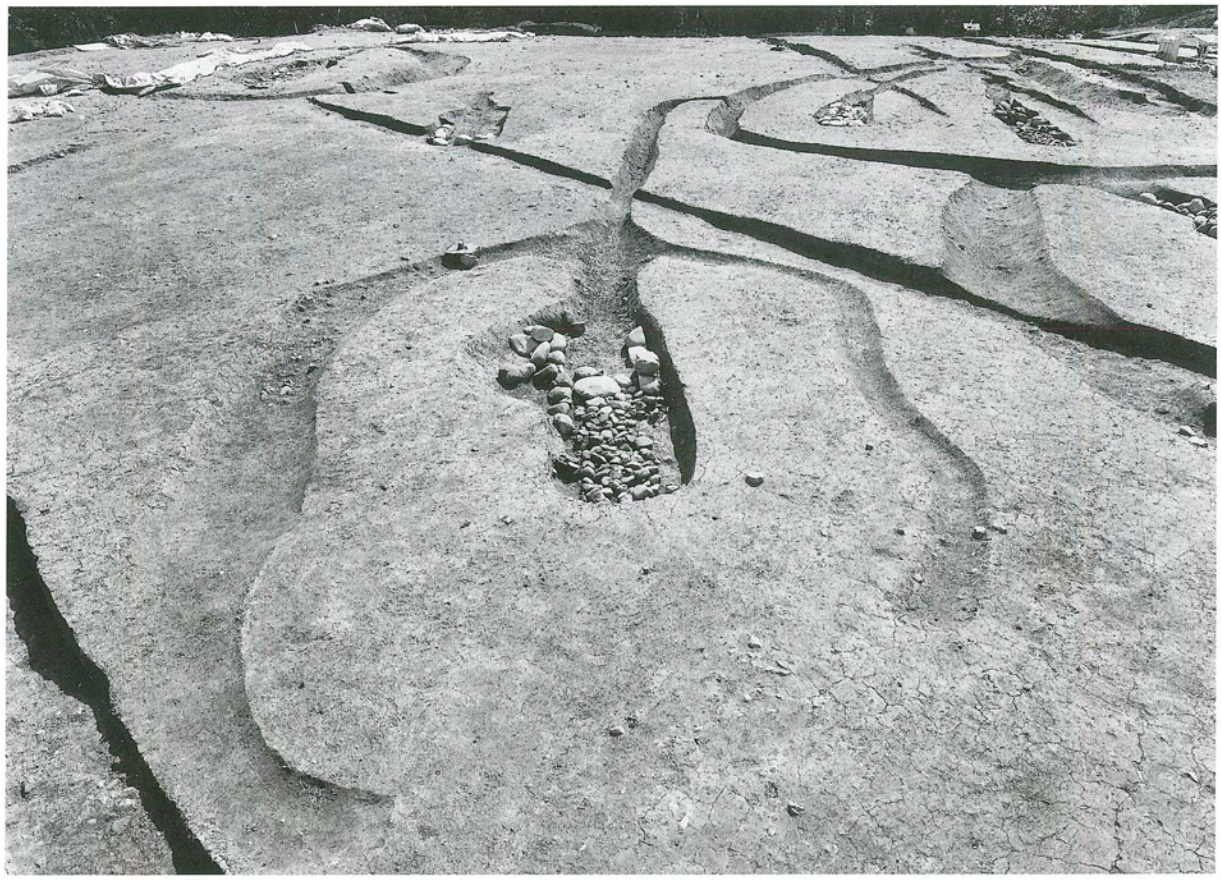
２．５号墳　掘り方（南から）

３．６号墳　石室全景（南から）

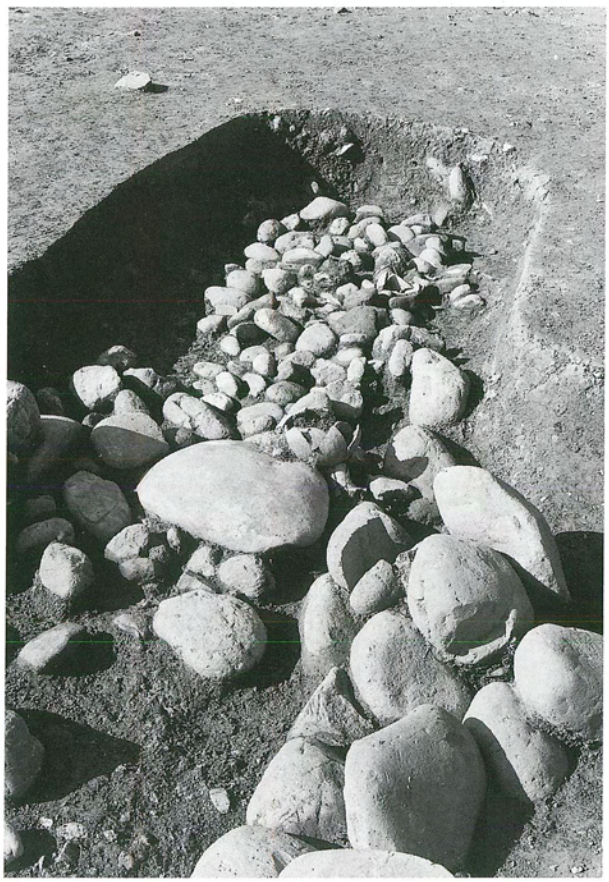
４．６号墳　石室基底石（南から）

図版16

水掛渡Ｄ６号墳



１．６号墳　全景（北から）

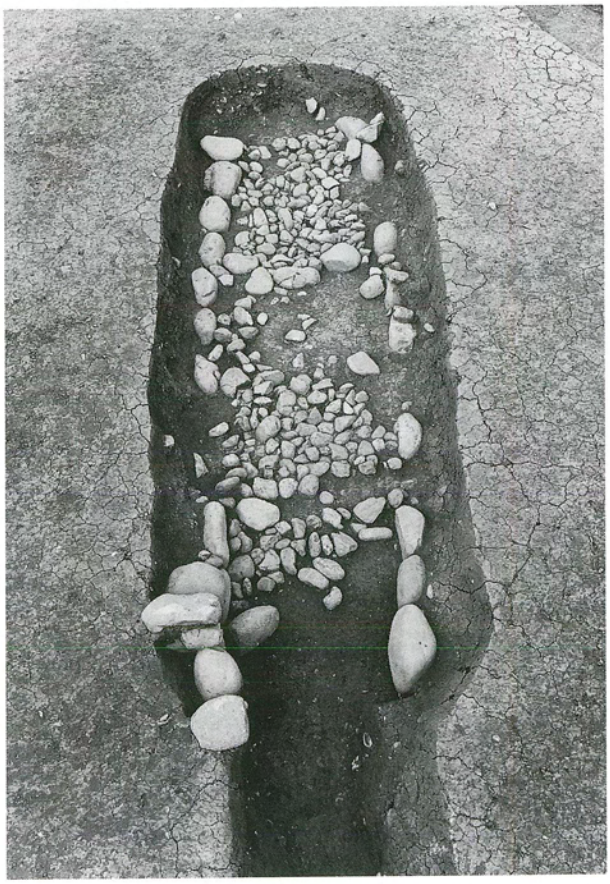


２．石室内遺物出土状況（南東から）

３．周溝遺物出土状況（南東から）

１．７号墳　全景（北から）

２．石室閉塞石除去前（南から）



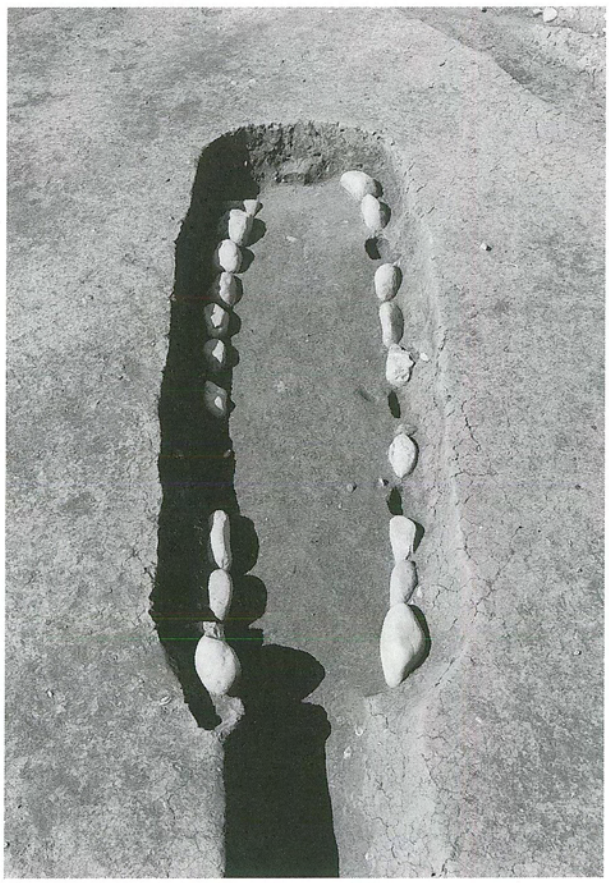
３．石室閉塞石除去後（南から）

図版18

水掛渡Ｄ７号墳

１．東側壁の状況（南西から）

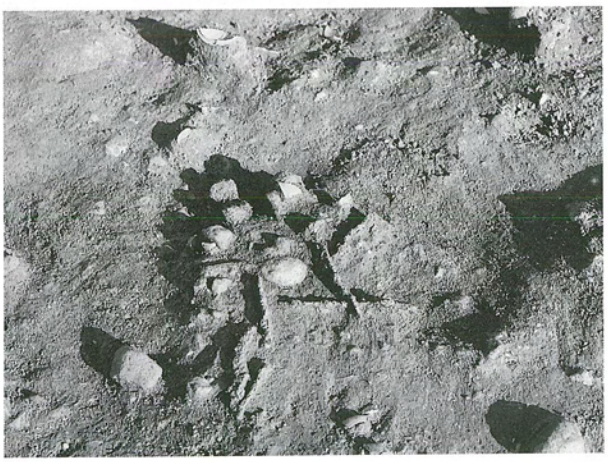
２．石室全景（南から）



３．石室基底石（南から）

１．７号墳　西側壁の状況（南東から）

２．７号墳　閉塞石（北から）



３．８号墳　鉄器出土状況（南から）

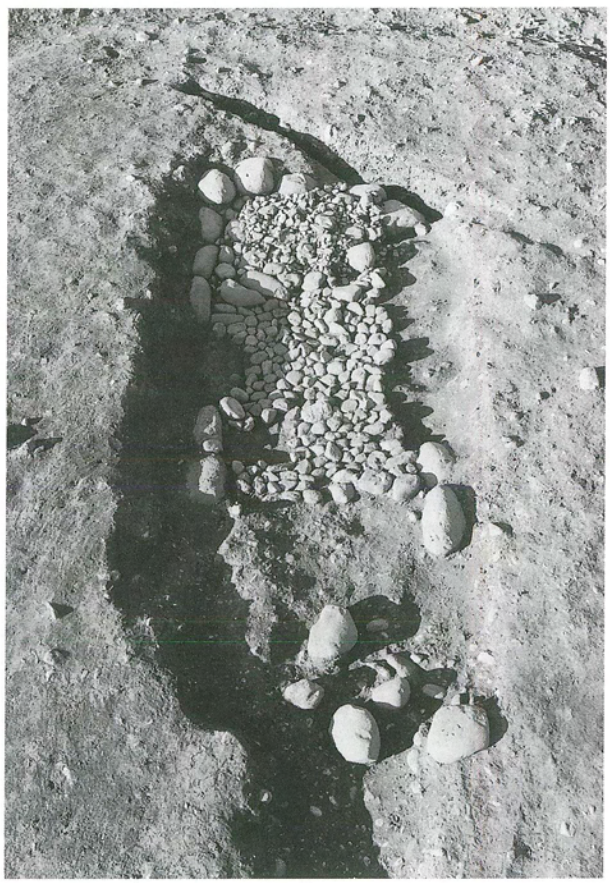
４．８号墳　石室全景（南から）

図版20

水掛渡Ｄ８・９号墳

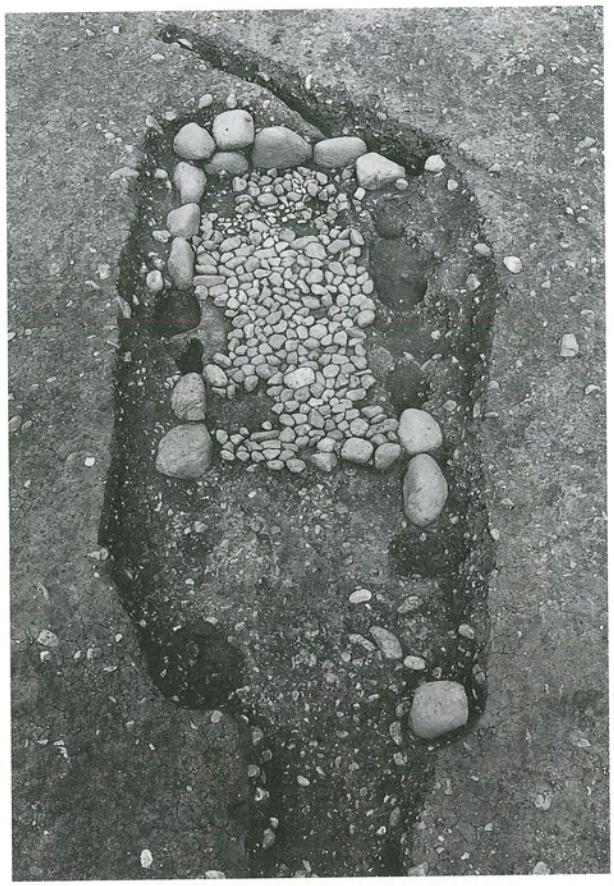
１．８号墳　全景（北から）

２．９号墳　全景（北から）



３．９号墳　石室全景　第１床面（南から）

1．石室全景　第２床面（南から）



2．石室全景　第３床面（南から）

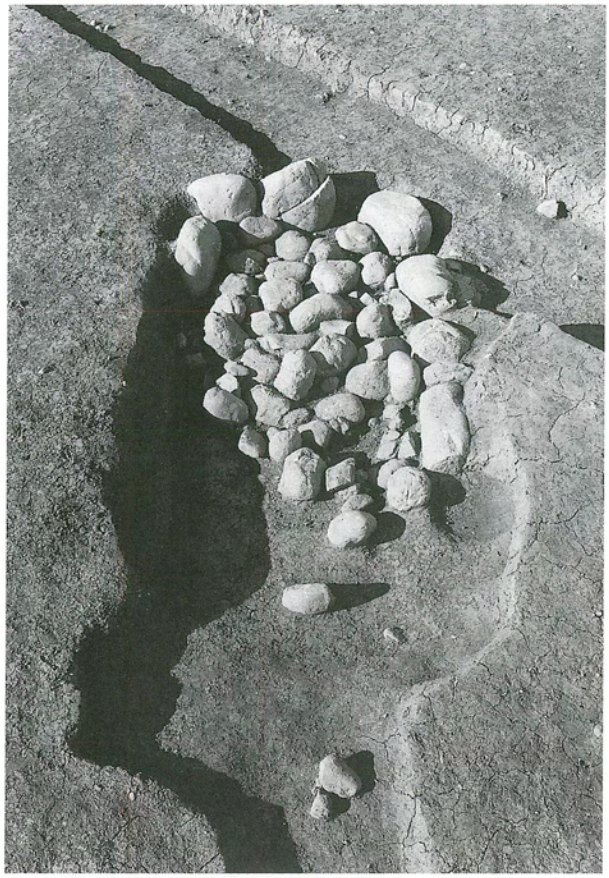
3．石室基底石（南から）

4．石室内須恵器出土状況（北西から）

5．石室内鉄器出土状況（南西から）

図版22

水掛渡D10・11号墳

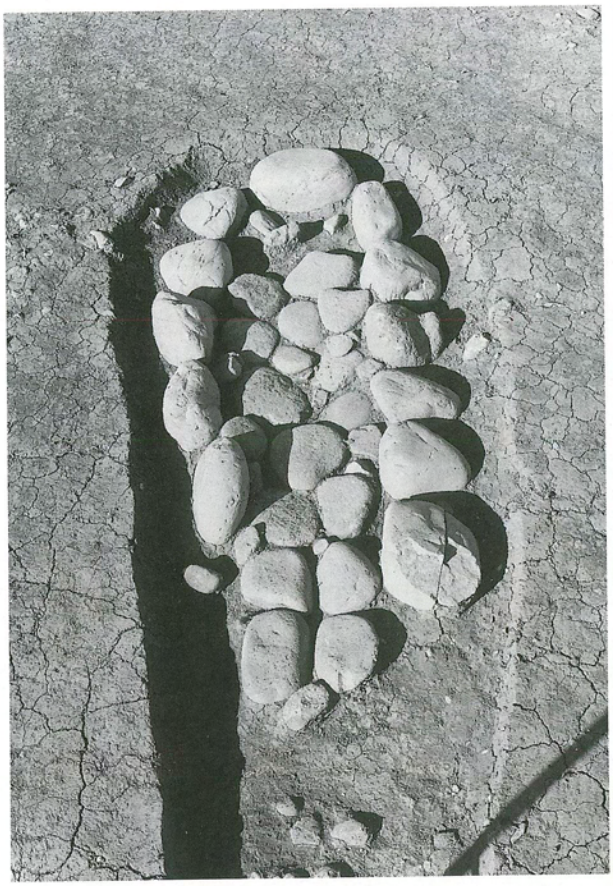


1．10号墳　石室全景（南から）

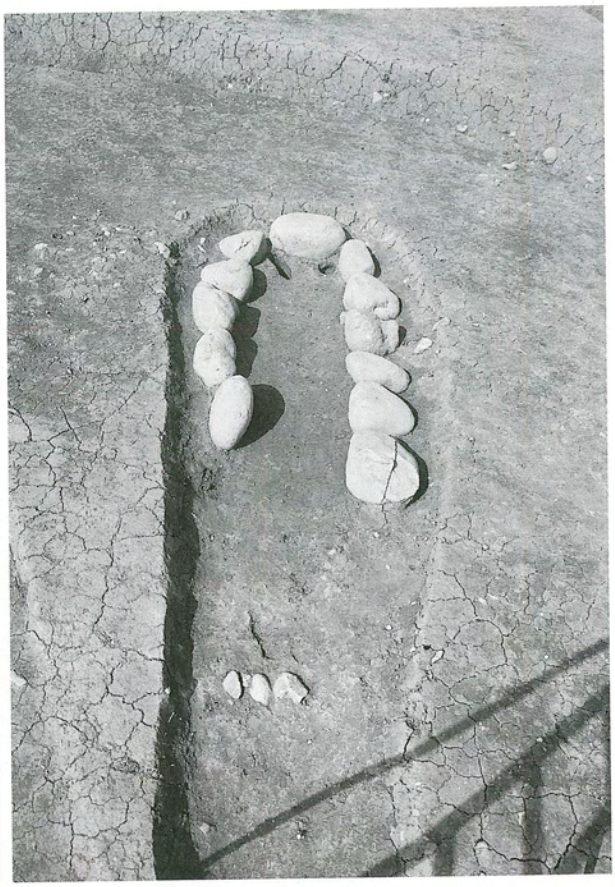
2．10号墳　石室基底石（南から）

3．11号墳　全景（北から）

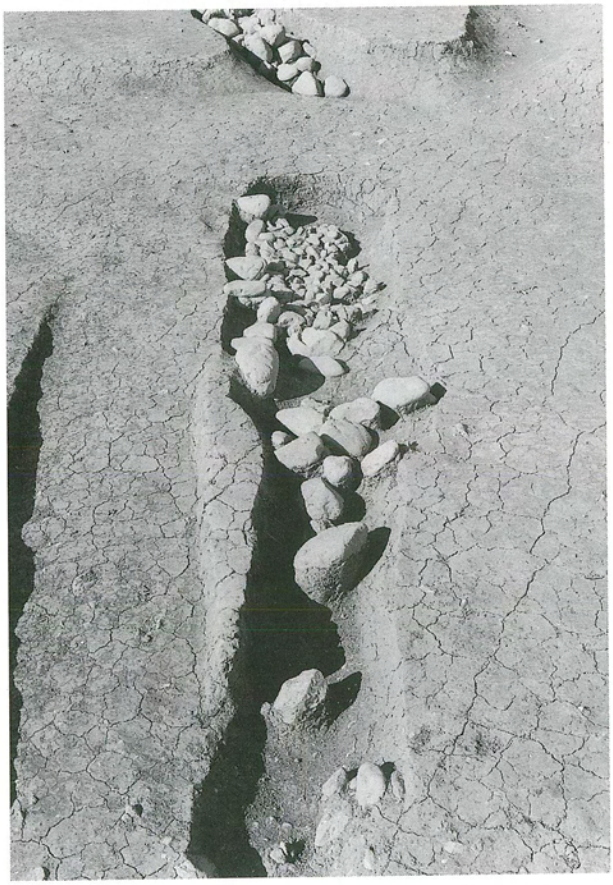
4．11号墳　石室閉塞石除去前（南から）



1．11号墳　石室閉塞石除去後（南から）



2．11号墳　石室基底石（南から）



3．12号墳　石室閉塞石除去前（南から）

4．12号墳　石室閉塞石除去後（南から）

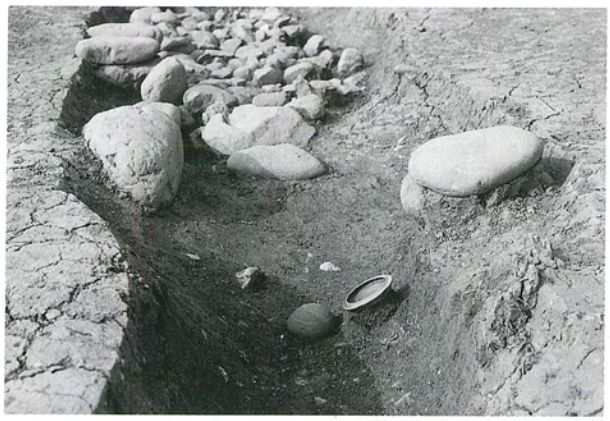
図版24

水掛渡D12・14号墳

1．12号墳　玉類の出土状況１（東から）

2．12号墳　西側壁の状況（東から）

3．12号墳　玉類の出土状況２（東から）



4．12号墳　閉塞部の遺物出土状況（南から）

5．14号墳　玉類の出土状況（北から）

1．13号墳　石室全景（南から）

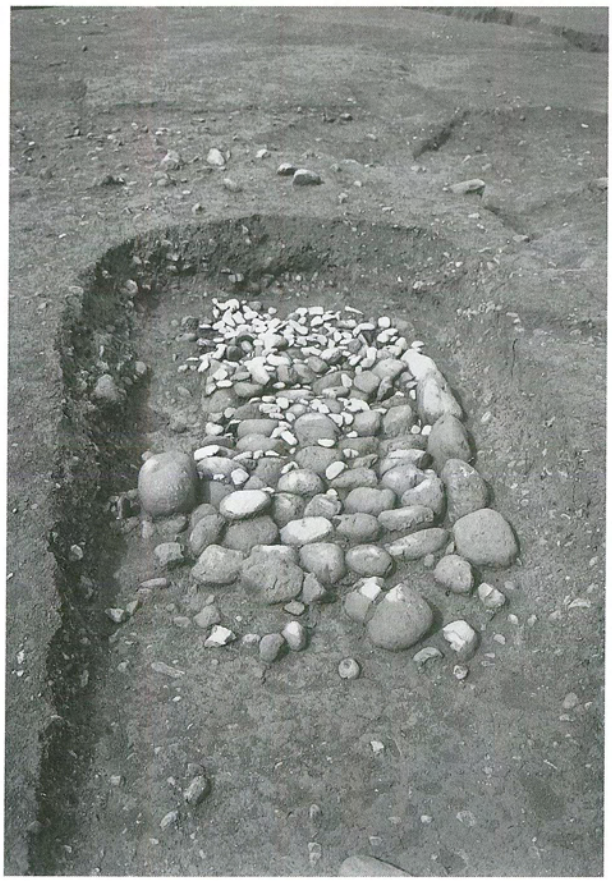
2．12号墳　石室基底石（南から）

3．13号墳　石室基底石（南から）

図版26

水掛渡D14号墳

1．鉄器の出土状況（東から）



2．石室全景（南から）

3．石室基底石（南から）

水掛渡D古墳群　ＳＢ－１・ＳＦ－１～７

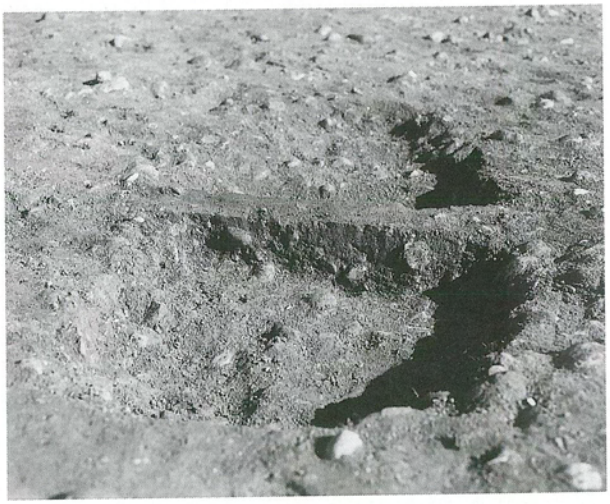
１．ＳＦ－５（北から）

２．ＳＦ－４（北から）

３．ＳＦ－２・３（北から）

４．ＳＦ－７（北から）

５．ＳＦ－６（西から）



６．ＳＦ－１（南から）

７．ＳＢ－１（西から）

図版28

坂口千頭ヶ谷古墳

1．遺跡の遠景（南西から）

2．石室全景（南から）

1．東側壁の状況（南西から）

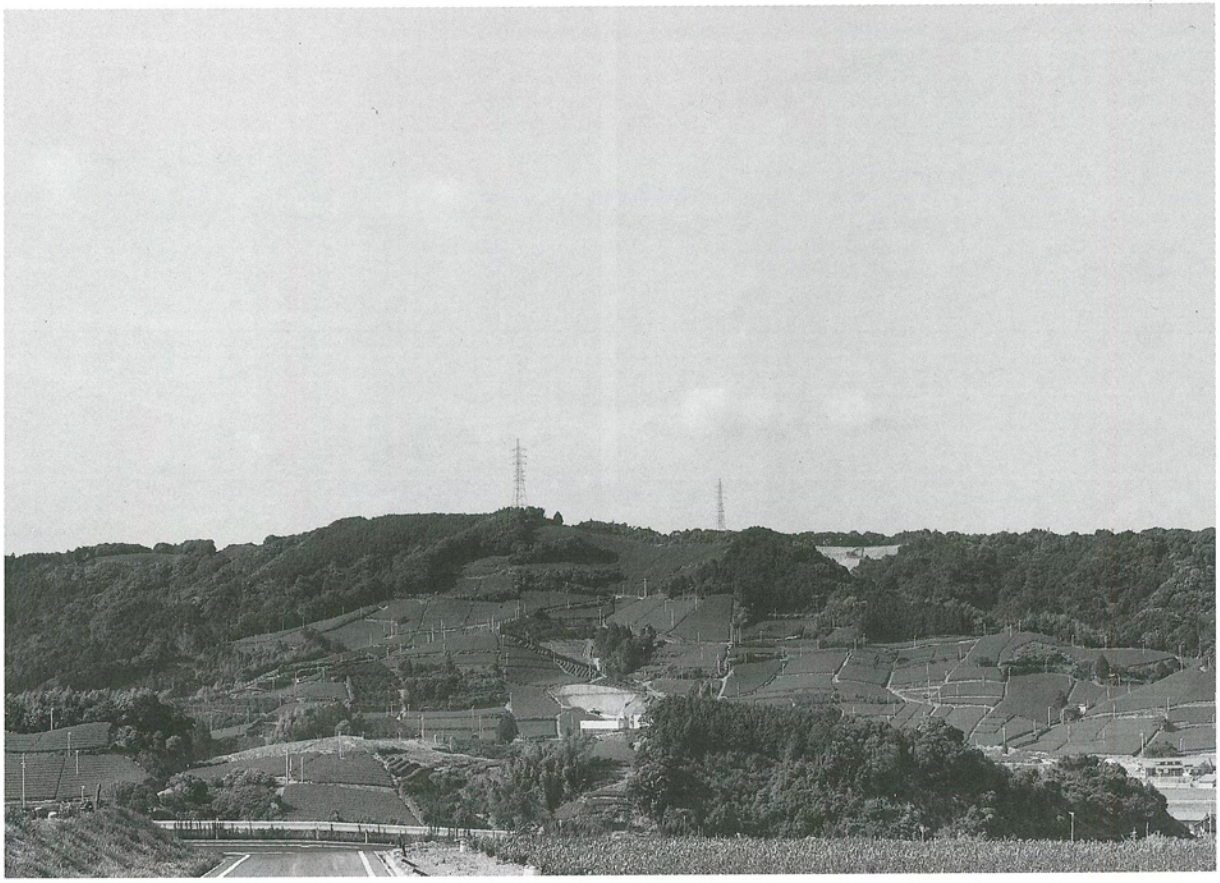
2．西側壁の状況（南東から）

図版30

坂口千頭ヶ谷古墳

1．石室基底石（南から）

2．石室掘り方（南から）



1．遺跡の遠景（南東から）

2．ＳＦ－６（南から）

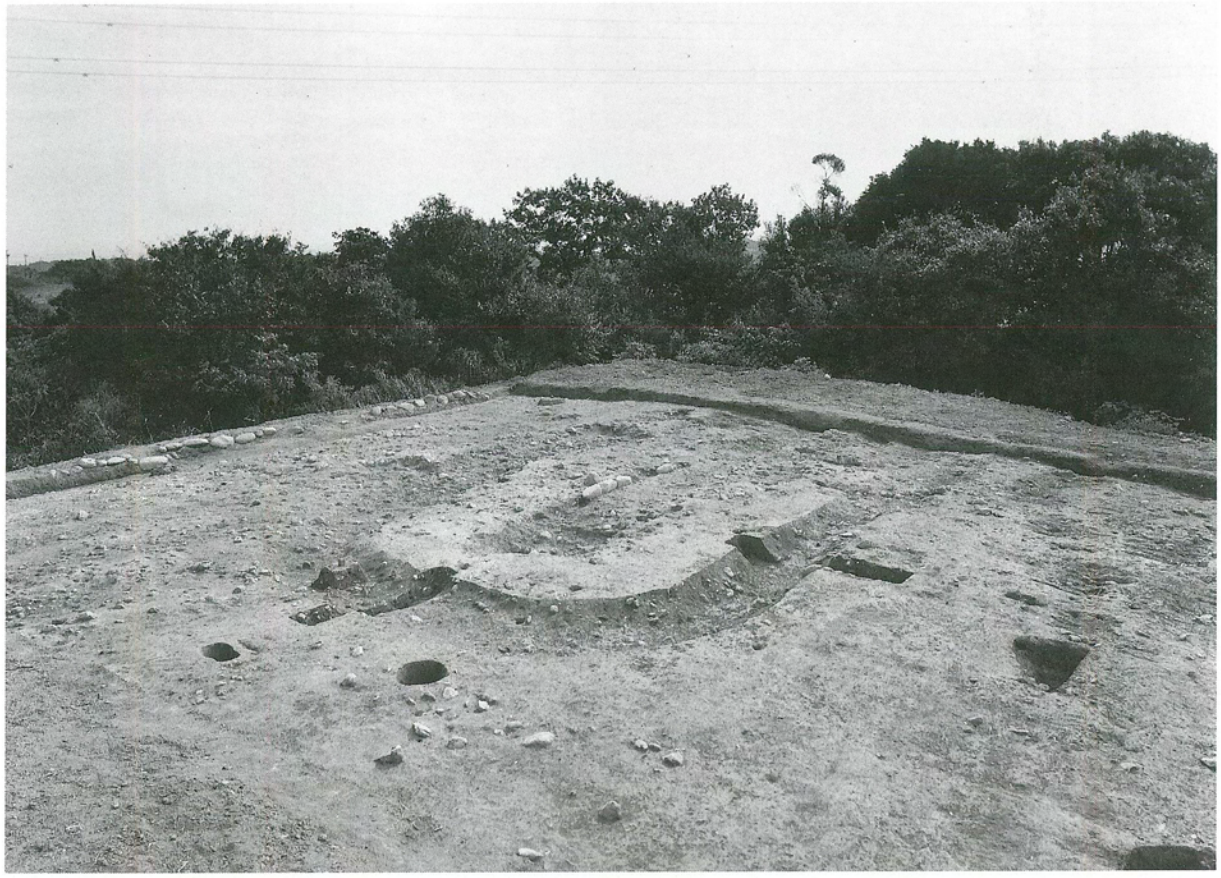
3．ＳＦ－７（南から）

4．ＳＦ－８（南から）

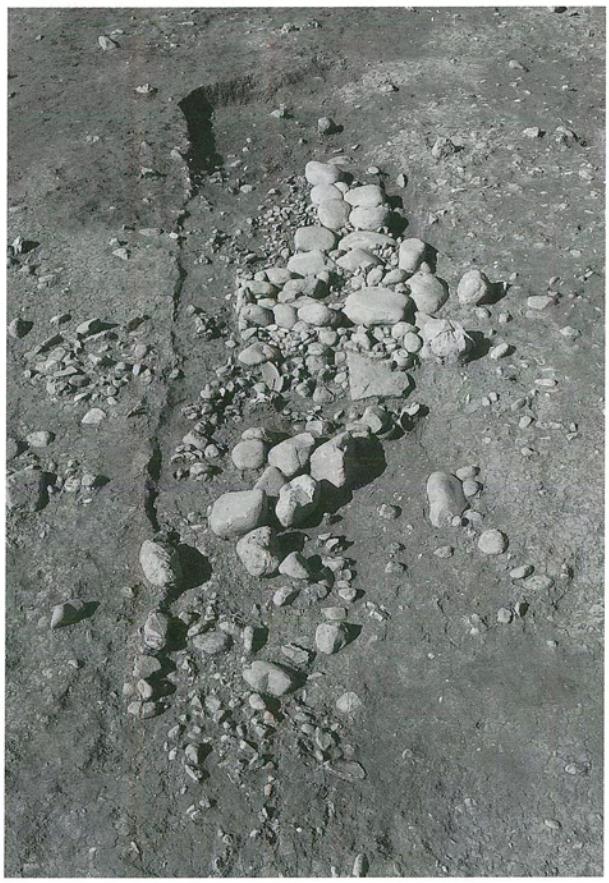
5．ＳＦ－９（南から）

図版32

御陣場古墳



1．古墳全景（北西から）



2．石室全景（南から）

3．石室基底石（南から）

1．石室内の遺物出土状況（北から）

2．石室開口部の遺物出土状況（北から）

3．周溝北側の土層断面（西から）

4．周溝西側の土層断面（南から）

図版34

吉峠遺跡の出土遺物

吉峠遺跡の主な出土遺物

2

4

5

吉峠遺跡の出土遺物

２号墳の主な出土遺物

１号墳（９）・２号墳（13・15）の出土遺物

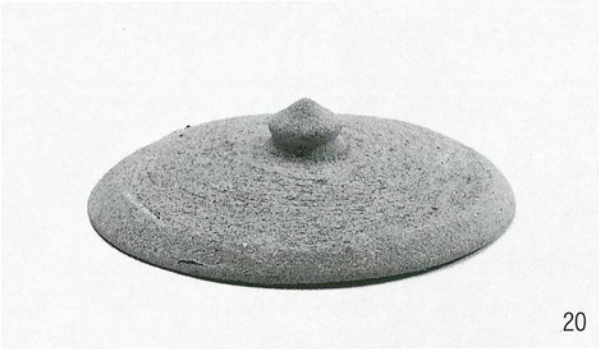
図版36

水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物２

３号墳の主な出土遺物

２号墳（16）・３号墳（18）の出土遺物

19


20

21

22

23

29

24

25

26

３号墳の出土遺物

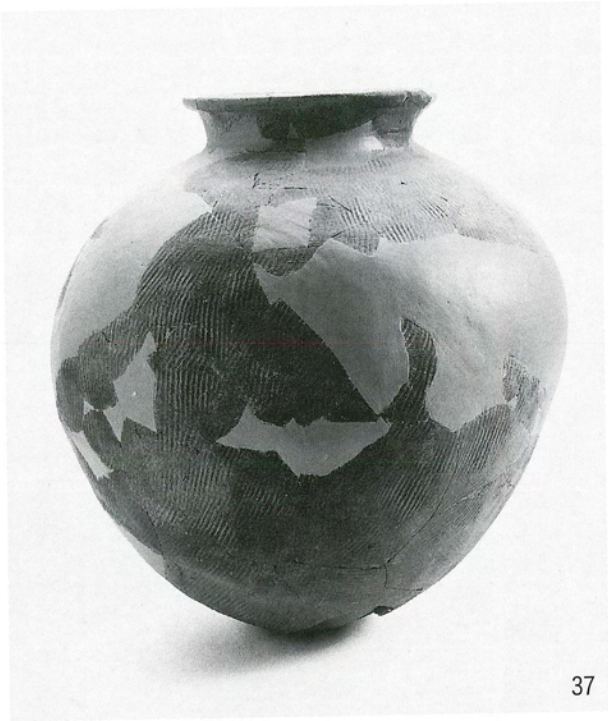
図版38

水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物４

４号墳の主な出土遺物

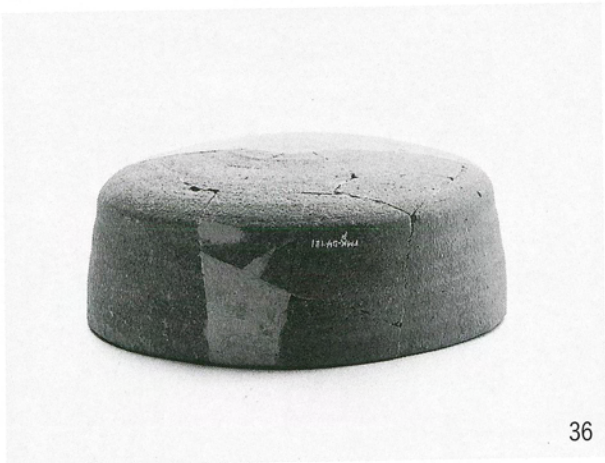
４号墳の出土遺物

35


37

39

38


36

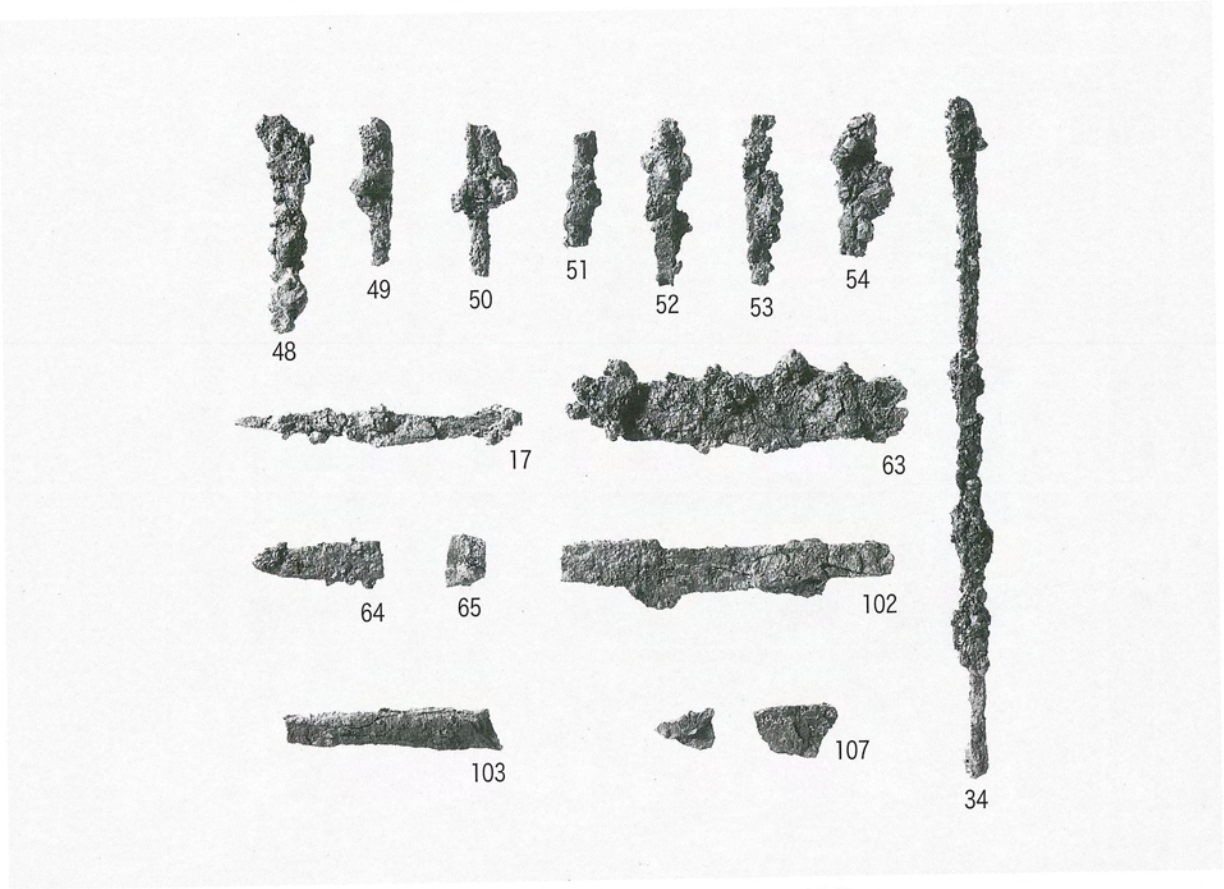
46

４号墳（35～39）・５号墳（46）の出土遺物

図版40

水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物６

６号墳の主な出土遺物

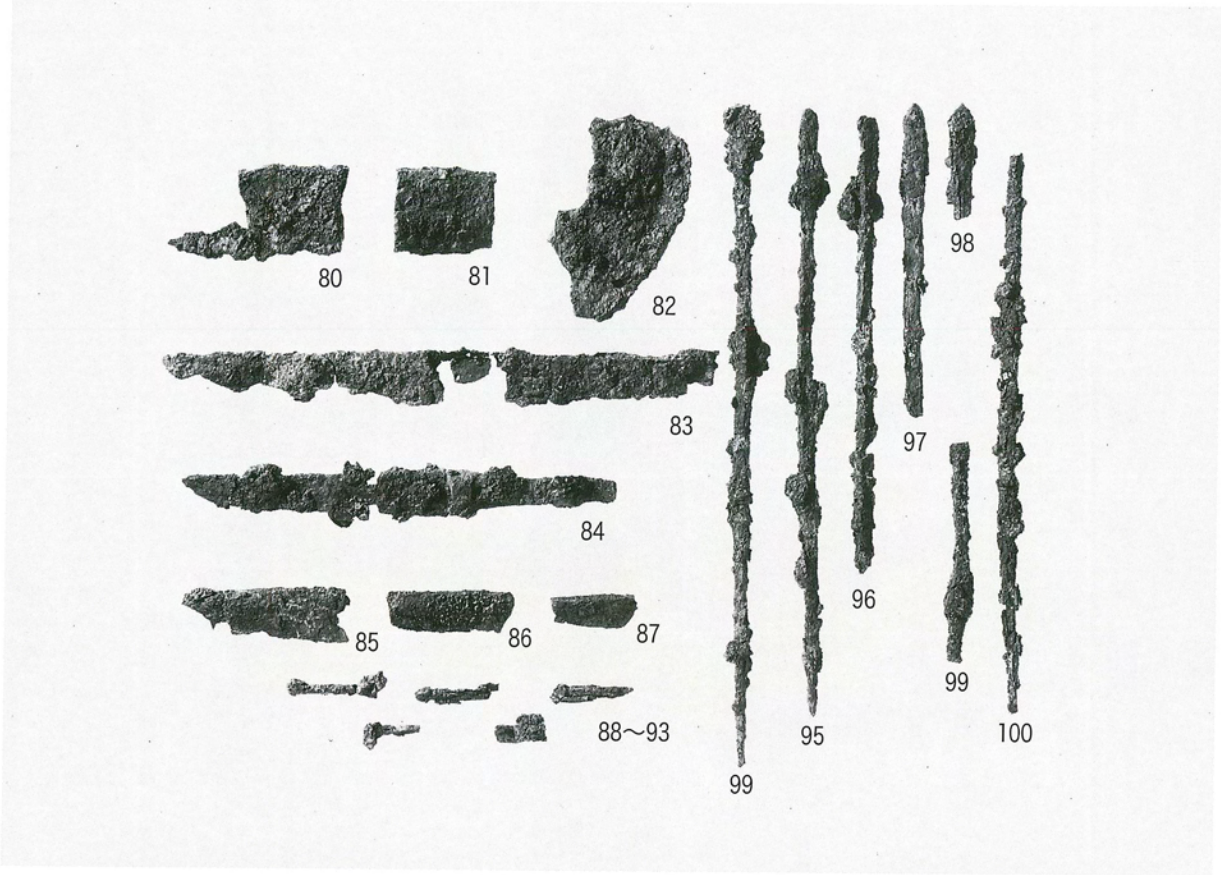


２・３・５・６・９・11号墳出土の鉄器

６号墳の出土遺物

図版42

水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物８



８号墳出土の鉄器

７号墳（70）・９号墳（101・104）・12号墳（109・110）の出土遺物

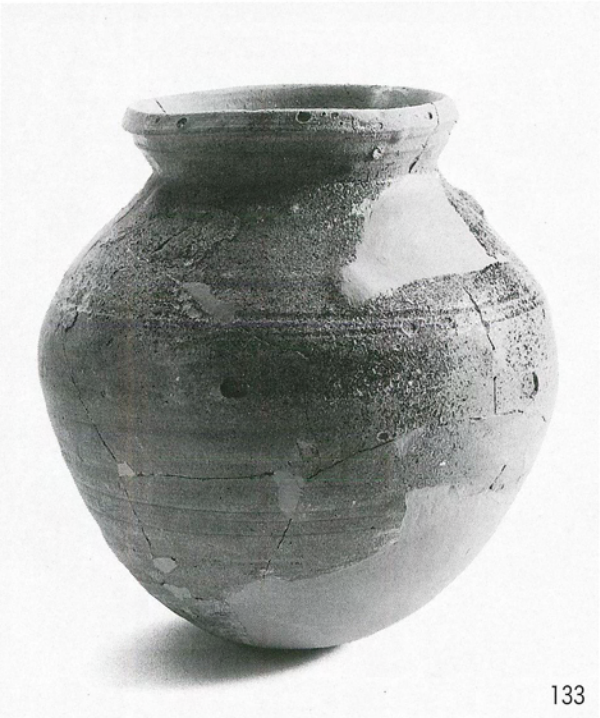
１．９号墳の主な出土遺物

２．12号墳出土の玉類

図版44

水掛渡Ｄ古墳群の出土遺物10

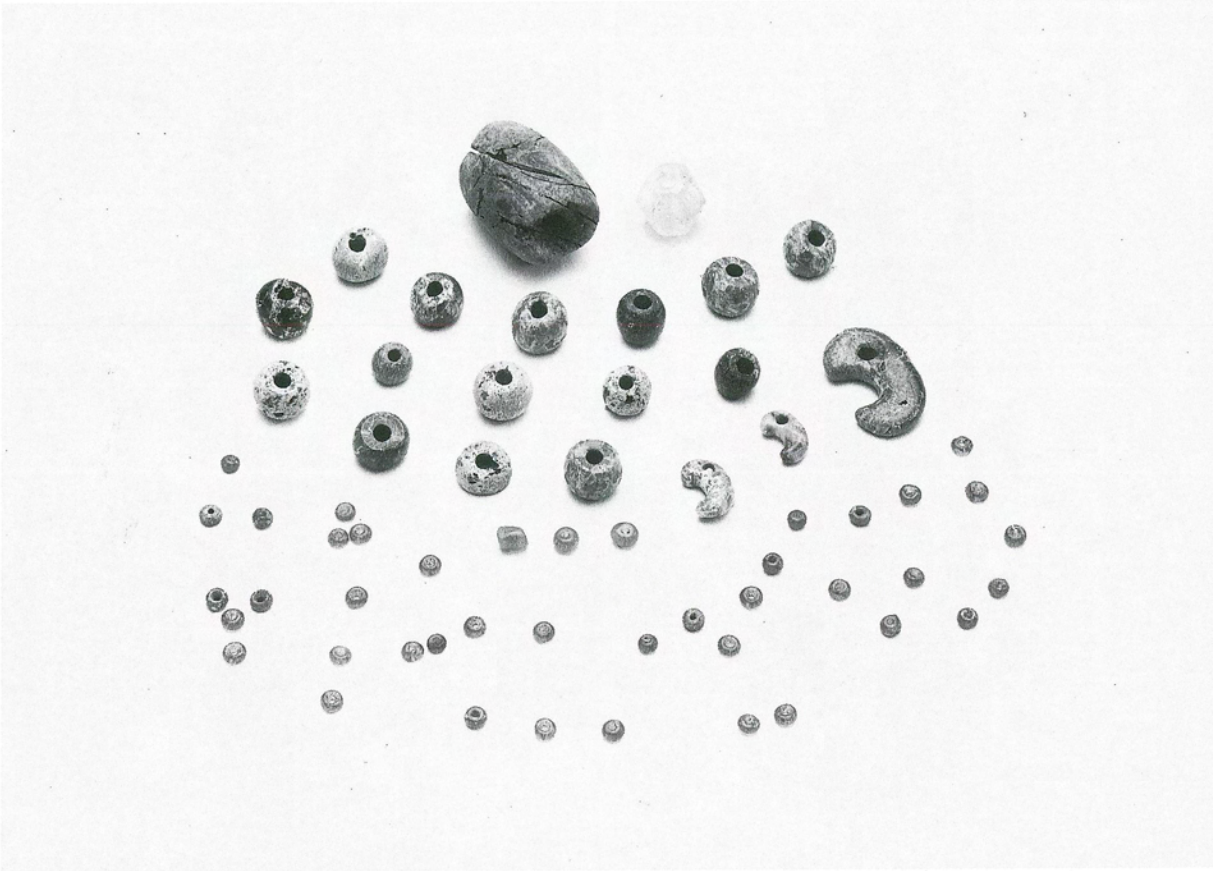
14号墳の主な出土遺物



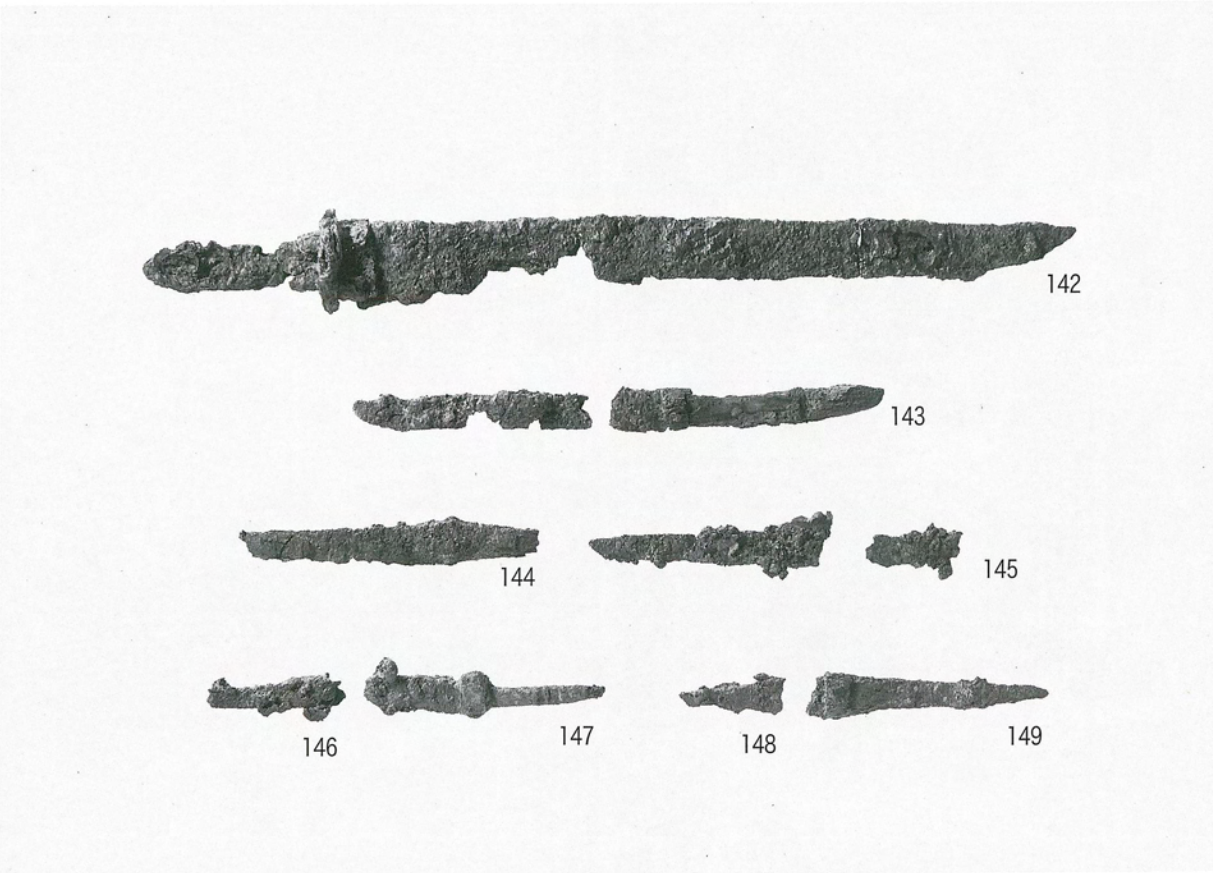
133

134

13号墳（133）・14号墳（134）の出土遺物



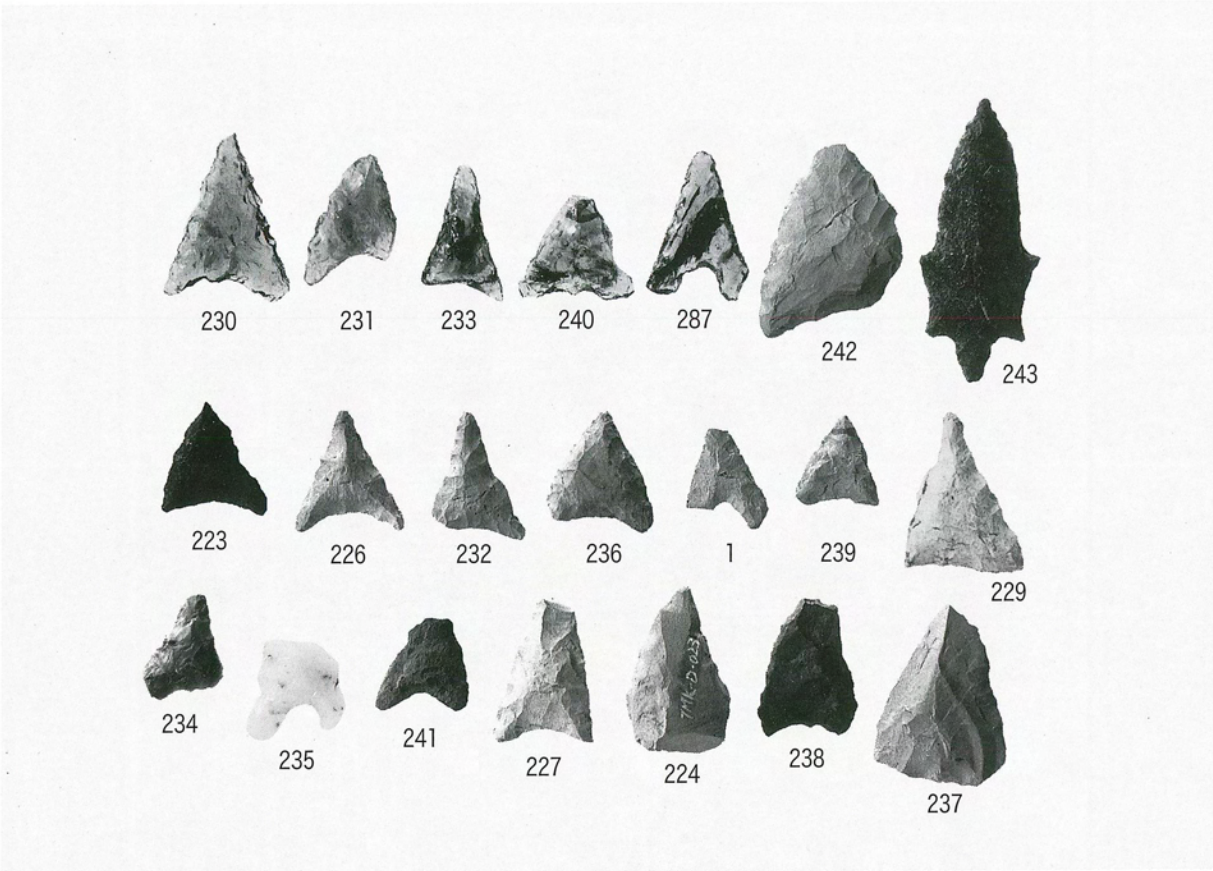
１．14号墳出土の玉類



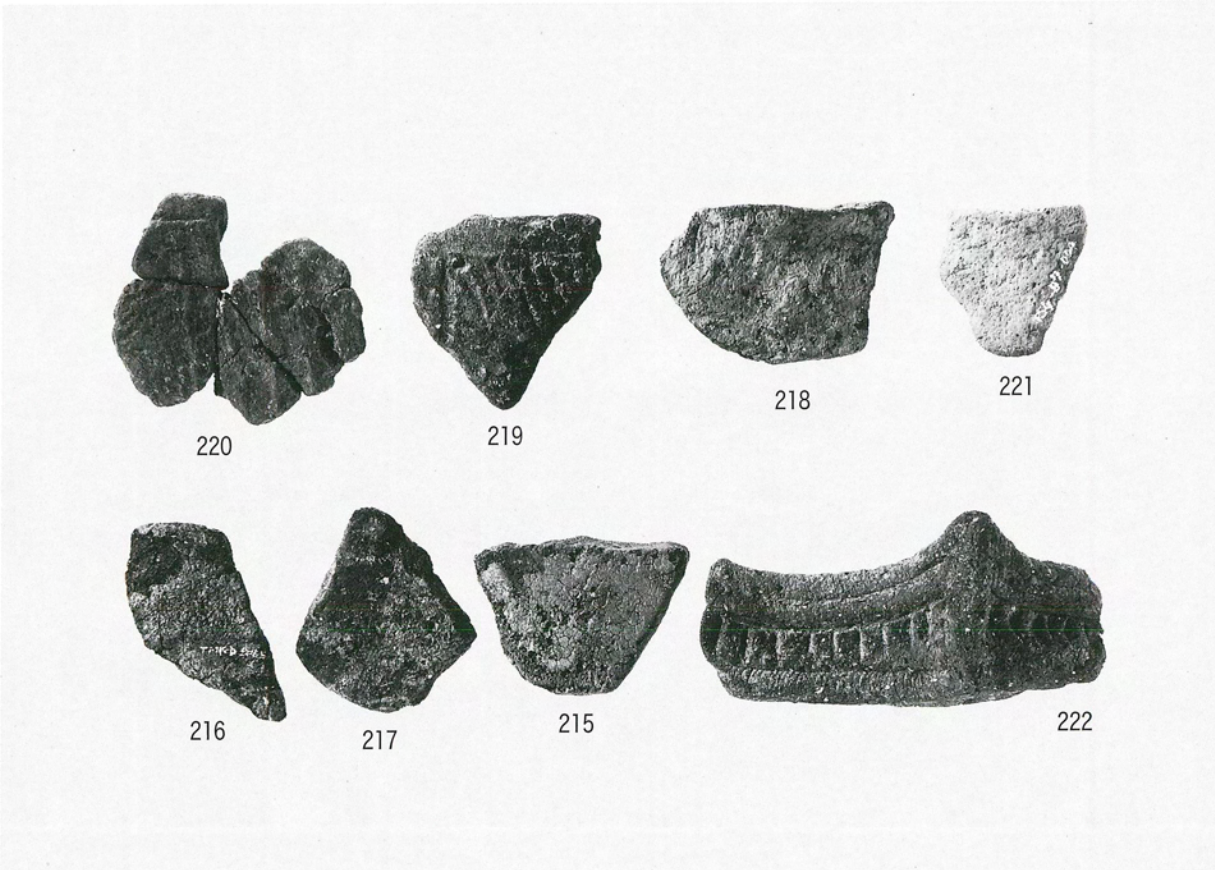
２．14号墳出土の鉄器

図版46

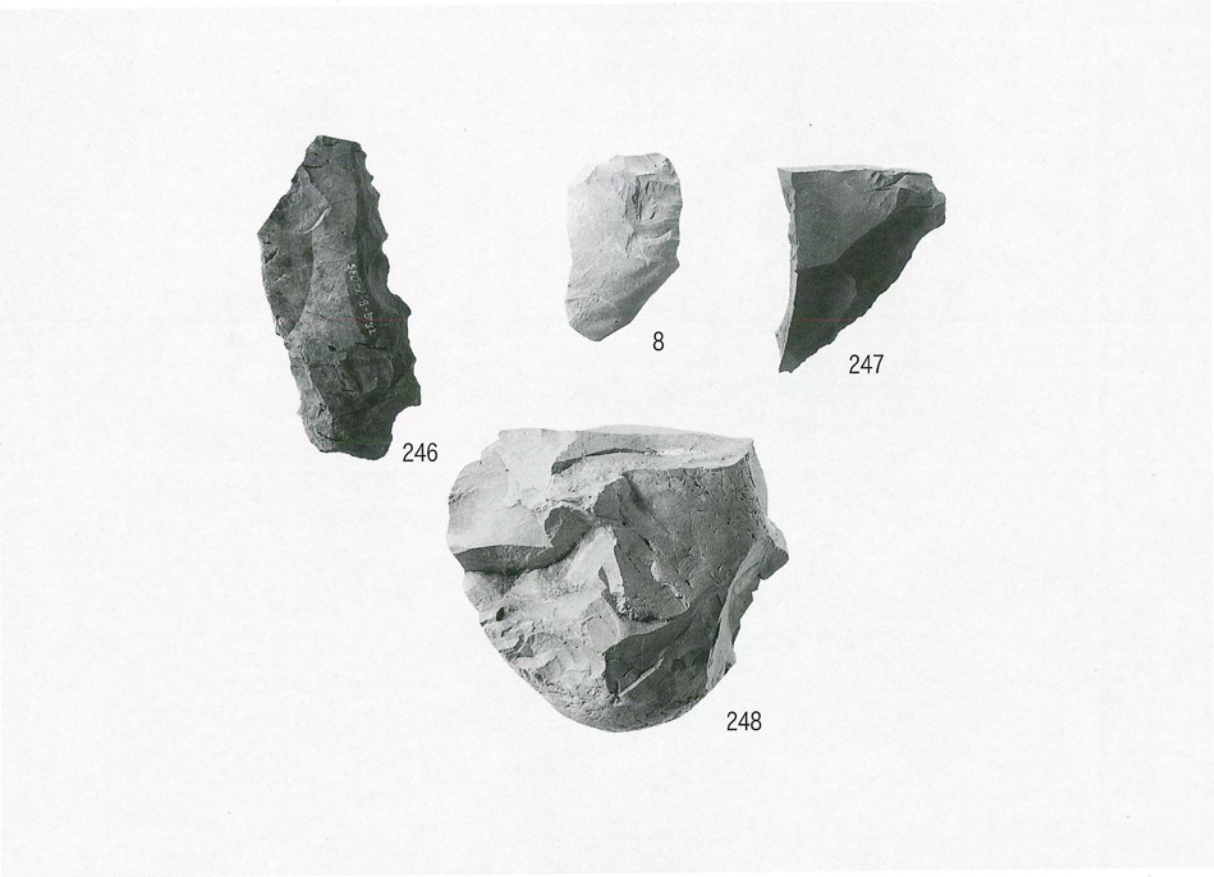
縄文時代の遺物１



１．石鏃（吉峠遺跡１・水掛渡Ｄ古墳群223、224、226、227、230～243・権現様御陣場遺跡287）



２．縄文土器（水掛渡Ｄ古墳群215～222）

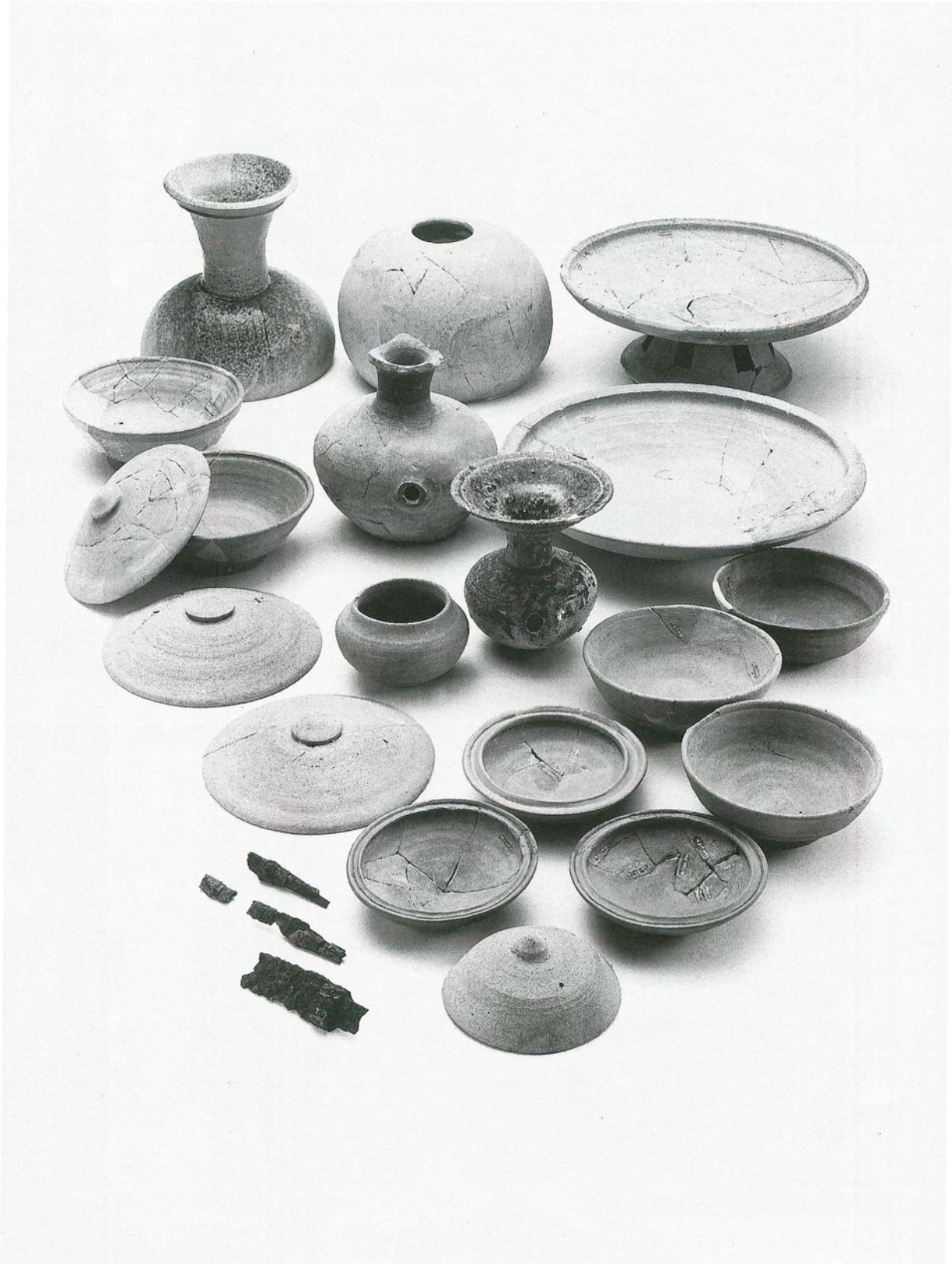


石器（吉峠遺跡８・水掛渡Ｄ古墳群246～248）

水掛渡Ｄ古墳群の出土石器

図版48

御陣場古墳の出土遺物１



御陣場古墳の主な出土遺物

265

261

264

252・255

254

258

256

257

259

御陣場古墳の出土遺物

図版50

御陣場古墳の出土遺物３

253

260

266

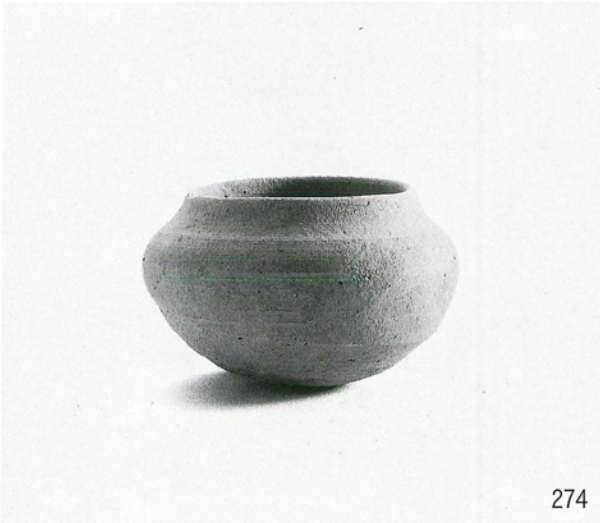
269

271

272

276

275


274

御陣場古墳の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よしとうげいせき・みずかけどでぃーこふんぐん・さかぐちせんずがやこふん・ごじんばこふん・ごんげんさまごじんばいせき（しずおかくうこうかんれんいせきえーちてん・びーちてん・でぃーちてん）
書名	吉峠遺跡・水掛渡D古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡（静岡空港関連遺跡A地点・B地点・D地点）
副書名	平成11～13年度静岡空港県単独空港整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第143集
編著者名	菊池吉修
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　TEL 054－262－4261㈹
発行年月日	西暦2003年12月26日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
吉峠遺跡（よしとうげいせき）	静岡県島田市（しずおかけんしまだし）船木字吉峠（ふなきあざよしとうげ）・榛原郡榛原町（はいばらぐんはいばらちょう）坂口字千頭ヶ谷（さかぐちあざせんずがや）	22209・22423		34度47分33秒	138度12分15秒	20020122～20020315	1,000	空港建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉峠遺跡	集落・散布地	縄文時代早期	竪穴住居跡1 炉穴6 集石土坑1 ピット61・土坑2	縄文土器片2・石鏃1・剥片1	
	古墳	古墳時代後期		須恵器（坏身・高坏・甕）	遺構は無い

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
水掛渡D古墳群（みずかけどでぃーこふんぐん）	静岡県島田市（しずおかけんしまだし）船木字吉峠（ふなきあざよしとうげ）	22209		34度47分41秒	138度12分9秒	20011022～20020322	5,606	空港建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水掛渡D古墳群	集落・散布地	縄文時代早期	陥穴2 竪穴住居跡1 土坑3	縄文土器（鵜ヶ島台式・粕畑式・神ノ木台式）石鏃5・剥片	陥穴は早期以前
		縄文時代中期		縄文土器(北裏C式)1・石匙1	
		縄文時代晩期		石鏃1	
		縄文時代		石鏃13	
	古墳	古墳時代後期	横穴式石室14	須恵器（坏・高坏・甕・甕）大刀2・刀子15＋・鉄鏃16＋・両頭金具5＋・勾玉7・管玉1・棗玉3・切子玉1・丸玉32・小玉43	14基からなる群集墳
		古代～中世	土坑1	灰釉陶器3	土坑は炭焼窯

（緯度・経度は世界測地系に基づく）

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
坂口千頭ヶ谷古墳（さかぐちせんずがやこふん）	榛原郡榛原町（はいばらぐんはいばらちょう）坂口字千頭ヶ谷（さかぐちあざせんずがや）	22423		34度47分31秒	138度12分2秒	20020122～20020322	150	空港建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂口千頭ヶ谷古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室１	須恵器２	小規模な古墳

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
御陣場古墳（ごじんばこふん）・権現様御陣場遺跡（ごんげんさまごじんばいせき）	静岡県島田市（しずおかけんしまだし）湯日字陣屋山（ゆいあざじんやま）・榛原郡榛原町（はいばらぐんはいばらちょう）坂口字ケカヤ（さかぐちあざ）	22209・22423		34度47分38秒	138度11分38秒	19990901～19991231 20000725～20001201 20010716～20010810 20010925～20011109	1,053 1,511 223 400	空港建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御陣場古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室１	須恵器（坏・瓿・脚付盤他）・大刀１・刀子３・両頭金具１	周溝が巡る円墳
権現様御陣場遺跡	散布地	縄文時代	陥穴３ 土坑１ 炉穴５	石鏃１	土坑は早期の可能性あり

（緯度・経度は世界測地系に基づく）

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第143集

吉峠遺跡・水掛渡D古墳群・坂口千頭ヶ谷古墳・御陣場古墳・権現様御陣場遺跡（静岡空港関連遺跡A・B・D地点）

平成11～13年度静岡空港県単独空港整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年12月26日発行

編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡市谷田23番20号
ＴＥＬ　(054) 262-4261㈹
ＦＡＸ　(054) 262-4266

印 刷 所　松本印刷株式会社
〒420-0054　静岡県静岡市南安倍１丁目１番18号
ＴＥＬ　(054) 255-4862㈹
ＦＡＸ　(054) 253-2309